

互先定石詳解 全

202  
375

202-375



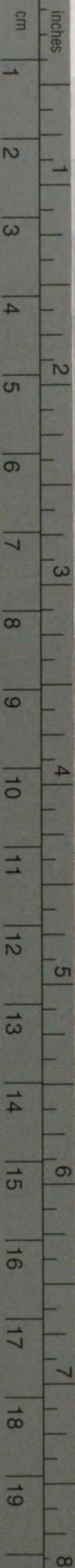
\*1200800037336\*

Kodak Gray Scale



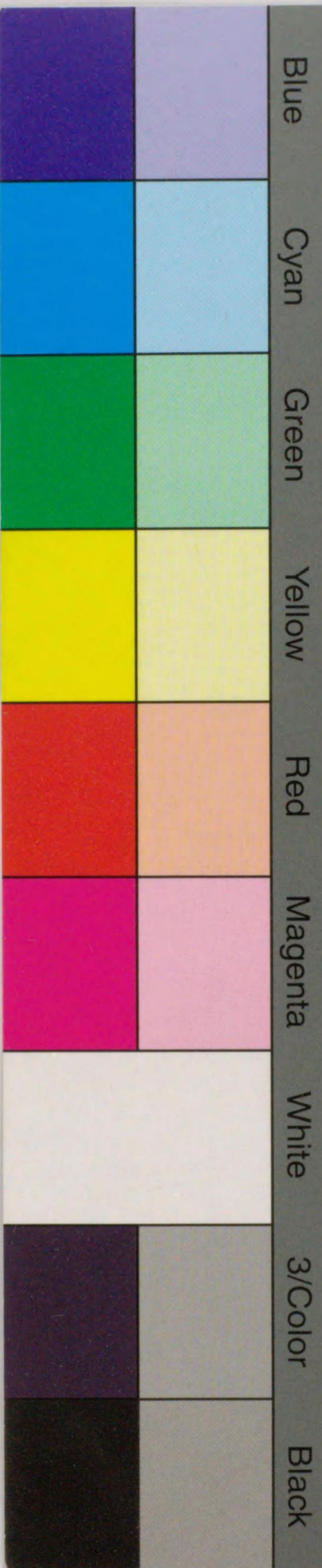
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

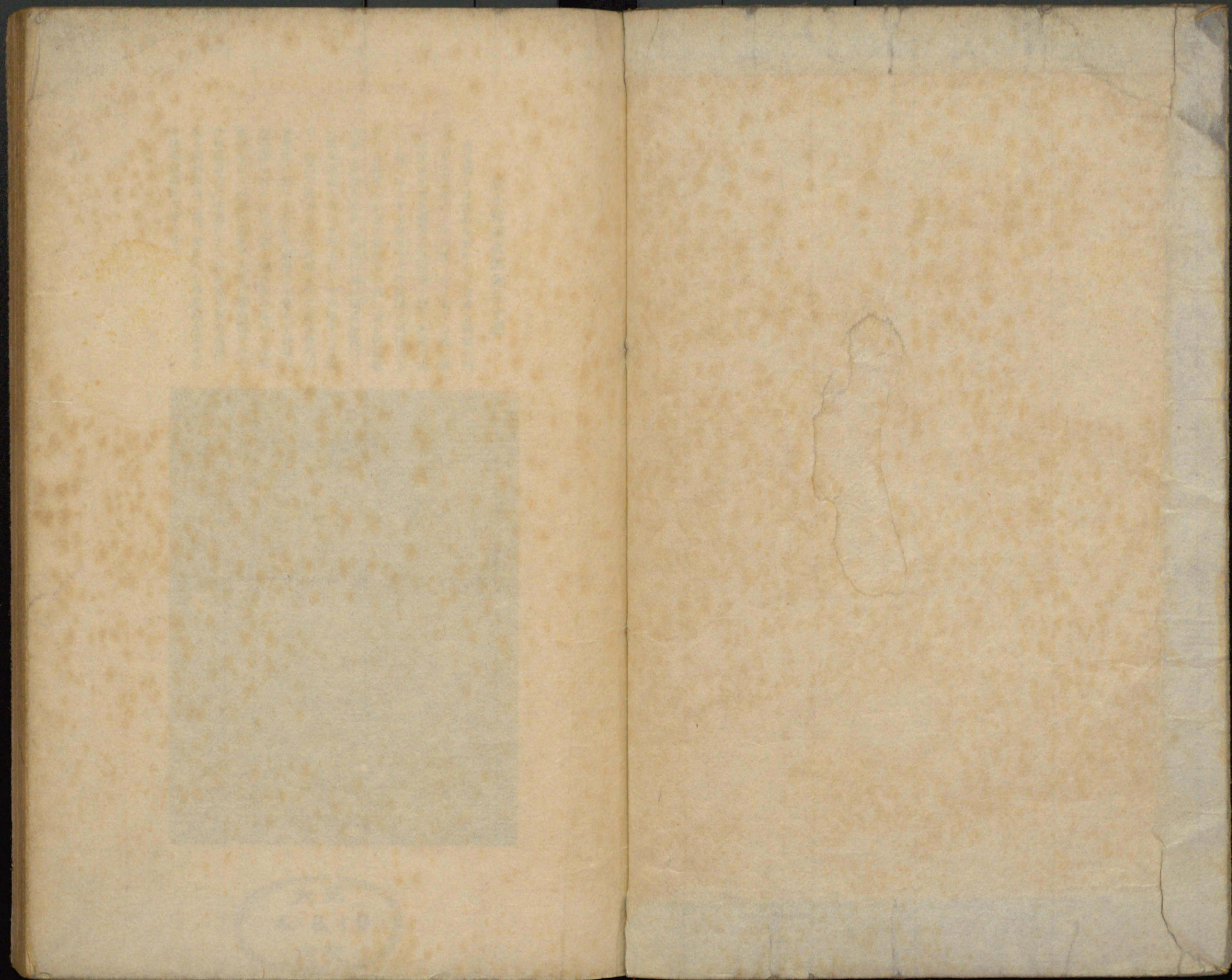


Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



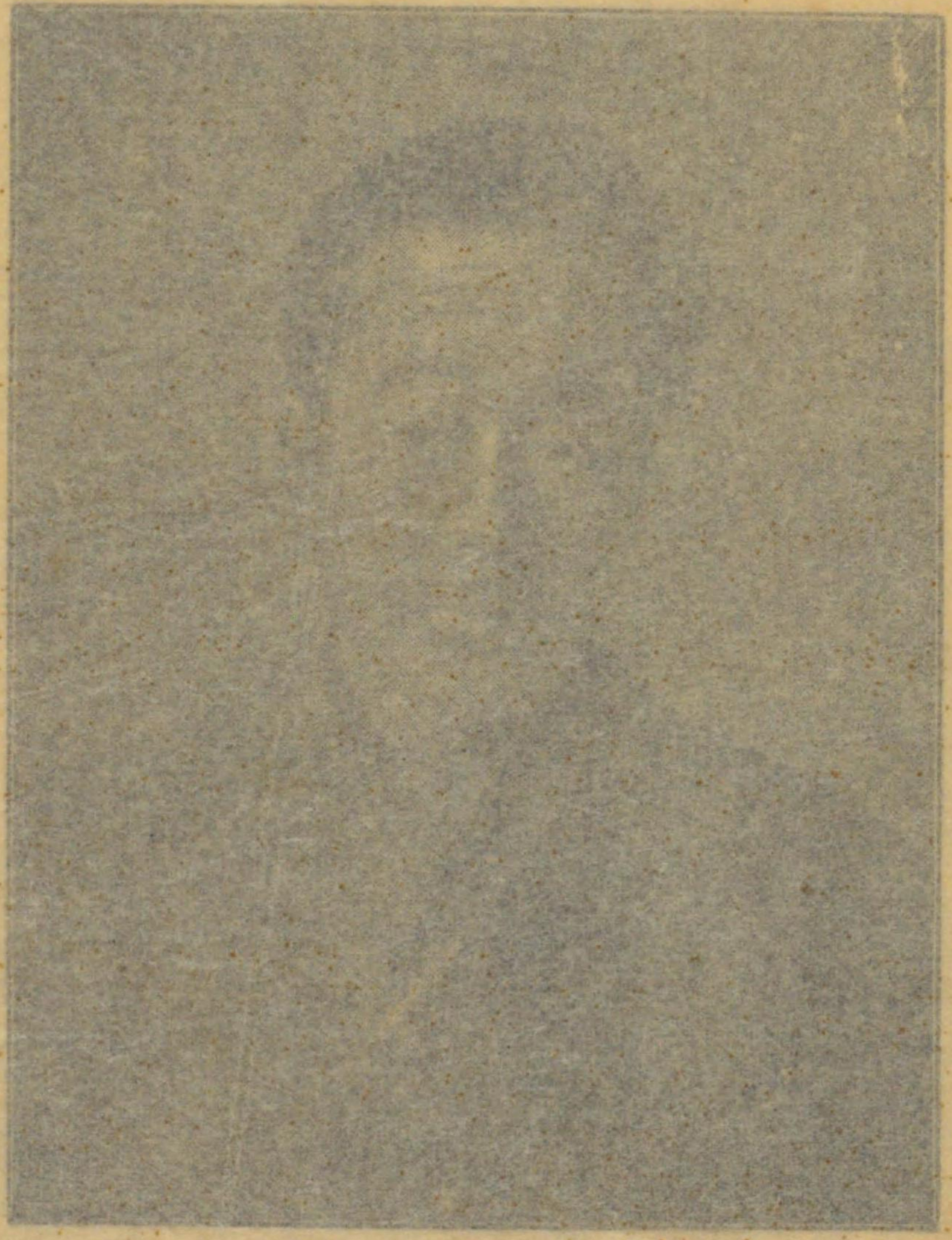






故小林鐵次郎先生小照

先生幼より園芸を好み十三世井上因碩の門に入り十三歳に於て初段となり次で二段に進み研究多年後藤野三段四段を経て五段に達せり時年二十六明治十三年村瀬中川兩氏と謀り方園社を創立す此年又六段に進む村瀬社長として中川氏社長となるに及び同氏を援けて社運の隆盛を謀れり然るに二十六年十一月假かに病んで逝去せらる年四十六先生天性温厚寡言色に形れず寡言深慮諸事を重んず甚道の傍餘語を好み小言と號し性又酒を嗜めり少壯甚道を以て四方に周遊す先生は幕府旗下の士小林藤吉氏の次男にして嘉永元年麻布廣尾に生る配杉山氏二男二女を生む長男鐵次郎氏當時園藝雜誌社主幹たり。



大正  
4. 8. 10  
内交



故小林鐵次郎先生小照

先生幼より圍碁を好み十三世井上因碩の門に入り十三歳にして初段となり次て二段に進み研究多年伎倆優秀三段四段と經て五段に陞れり時に年二十六明治十三年村瀬中川兩氏と謀り方圓社を創立す此年又六段に進む村瀬社長歿し中川氏社長となるに及び同氏を援けて社運の隆盛を謀れり然るに二十六年十一月俄かに病んで逝去せらる年四十六先生天性温厚喜怒色に形れず寡言深慮然諾を重んず碁道の傍俳諧を好み小哲と號し性又酒を嗜めり少壯碁道を以て四方に周遊す先生は幕府旗下の士小林藤吾氏の次男にして嘉永元年麻布廣尾に生る配杉山氏二男二女を生む長男鐵太郎氏當時圍碁雜誌社主幹たり。



大正  
4. 8. 10  
内交



## 自序

圍碁の技に優者たらんと欲する者は先以て定石を學ばざる可らず而して定石には置碁定石と互先定石との二あり後者を前者に比較するに其の戦法錯綜し研究頗難澁を極めたり。

然れども此の技に對する互先定石の價値に至りては甚、貴きものありて存す蓋、互先定石を研究して其の運用の巧なるに至らば未、之れを研究せずして平素之を等閑に付し去るものに對しては必、常に優勝者たること聊、疑を容れざる所なり。

然るに世間往々此の技に親しむ者にして圍碁の手段として最緊要なる定石の何ものたるを辨せざる者あり徒に技を闘はして快哉を叫けべるあり是れ余が最遺憾とする所にして實に斯道發展の爲めに深く憂慮すること久し。

偶、余が親友なる圍碁雜誌主幹小林健太郎氏を訪ふ同氏其の先人にして近世の泰斗たる小林鐵次郎先生の遺稿一本を示さる就て其の内容を通覽するに互先定石幾十百局を編集し先生の批評眼を以て定石の手段手順等を簡明に講述せられたるものなり顧ふに其の説明簡單なりと雖、圍碁の眞理を發揚して餘蘊なきに至つては後進を誘掖するの功蓋鮮少ならざる可し余本書を著述するに方つては先第一に



先生の功勞を推獎せざるを得ざるなり。

抑遺稿に於ける先生の講述は字義簡單なるものなれば其の道の巧者に非ざるよりは、或は之れが解釋に苦しまるゝもの多かる可きを遺憾とし余は自己の力を量らず又不遜の罪をも顧みず遺稿の意義を解釋し且、之を布衍して詳細説明を加へたり是れ偏に初學の士と雖、略其意義のある所を會得せしめんとの微衷より重複を顧みず反覆丁寧に其の意義を講述する所ありたり。

尙又定石の變化甚多端にして其説明する所多岐に渉るの嫌なきにあらずと雖、是亦研究資料たらしめんと愚案より定石中種々の變化を講述したれば學者其技に巧ならんと欲せば先本書に依りて其門戸を叩き更に堂奥に進まんことを庶幾と云爾。

大正四年七月下浣

著者識

### 凡例

- 一、卷首の肖像は故小林鐵次郎先生なり本編の材料として其遺稿を提供せられたれば其功績を彰表し且は敬意を盡さんが爲に特に卷首に掲げたるものなり。
- 一、本書は圖譜と説明と離隔せざらん爲に題目の下に第何圖と記入したれば一目して明瞭すべし。
- 一、題目は手段の中肝要なるものを撰擇して簡單に其の要を摘載したるものなり。
- 一、第四百十圖以下は都合に依り表題を省くこととせり。
- 一、變化の行路を示すに「い」「ろ」「は」或は片假名を使用したり且、成る可く手の運び方の順序は觀易からしめんが爲め、いろは、の順を逐ふて記したり。
- 一、説明文章中に口語體文章體の兩様あり聊、躰を失ひたれども遽に發刊することとなりたれば之れを訂正するの違なし讀者幸に諒せられよ。

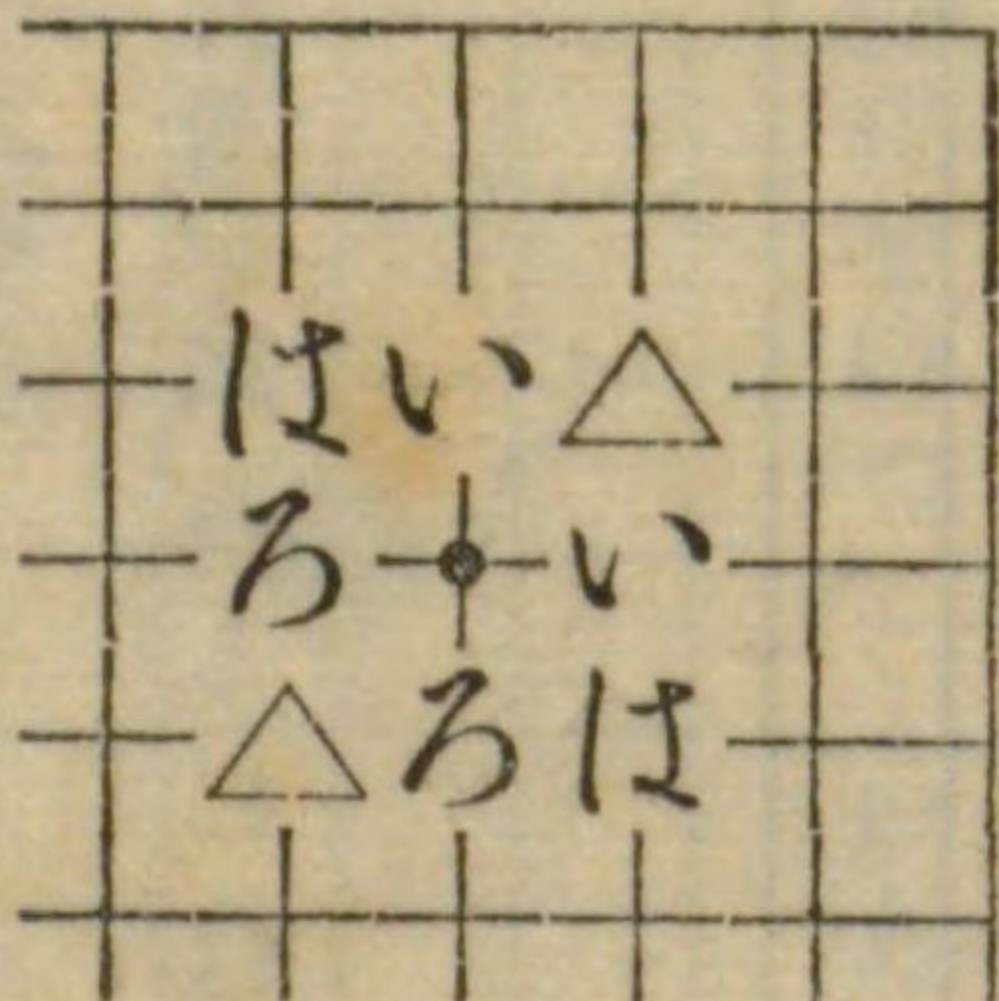


互先定石詳解全

六段 雁金準 一講述

發端

總べて圍碁最初の打ち始めは四隅からせねばならぬものである互先の碁では殊に隅が必要な事と心得られたい今圖に依つて示さうなら初發には「い」「ろ」「は」の三點を選べば宜しい然し黒が起手即ち第一に星の處に打つ事が極めて稀にはある又白を持つては折々二の手で星に打つことがある△印の處は黑白共に打ち進んだ碁勢に據つて特別の場合ならばいざ知らず最初打つことは普通なき手ときまつて居る此の圖はホンの一隅を擧げたのだが他の三隅も同じであるから一々掲げぬによつて類推されたい(以下倣之)



三點の名稱

今此の三點の名稱を言つてみれば「い」の處は小目(コモク)「ろ」の處は大目(オホモク)若しくは高目



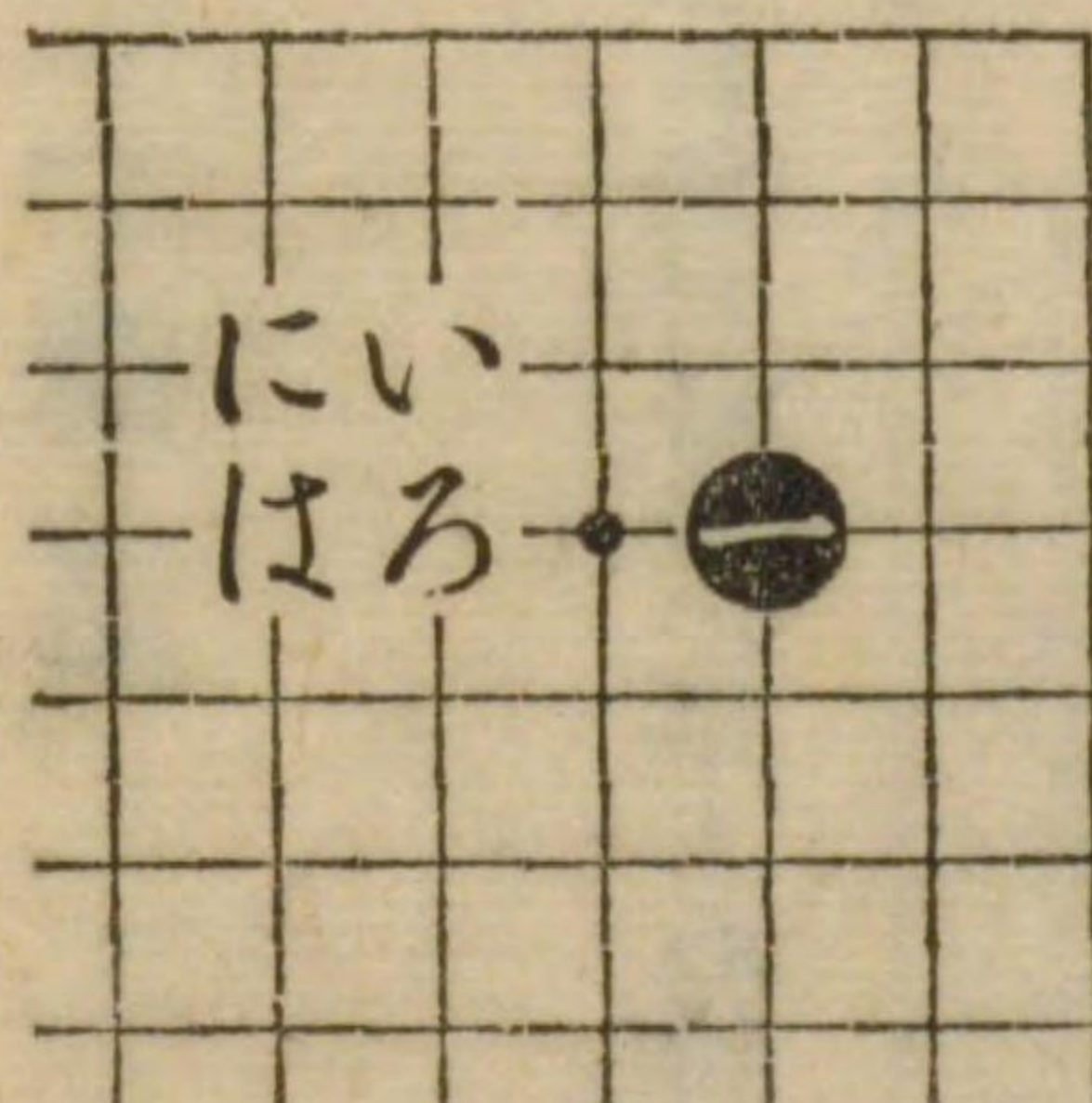
(タカモク)「は」の處は目外(モクハツシ)と稱するのであるそれで圖の通り何れも一隅に二ヶ所あるから四隅で八ヶ所あるわけだ

掛(カ、リ)の事

既に第一着の布置は説いたから次ぎに之に對抗する打ち方に就て今小目から述べてみやう  
是は圖の通り一と小目に打つのは最も普通の布置點であるからである此の小目に打着を試みるには  
「いろは」順に示す通り四ヶの打ち場がある之を名づけて掛りと云ふのである

掛りの名稱

「い」は最も多く用ふるカ、リで細かにいへば小桂馬掛(コゲイマガ、リ)次ぎ  
は「ろ」の一間高掛(イツケンカガ、リ)其次ぎは「は」の二間高掛(ニケンタカ  
ガ、リ)最後に「に」の大桂馬掛(オホゲイマガ、リ)である今是等の掛りの用  
ふる程度を數で示したら「い」は十中の八九、「ろ」「は」は十中の四五、「に」に  
至つては十中の一、ぐらゐの割合で用ふるのである



締(シマリ)の事

本定石説明の本旨は敵から掛られた碁勢のみに限る次第であるが今順序として布置の點を守るには何

處が善いかといふ所謂守備の仕方を述べてみやうこれは圖に示す通り「い」「ろ」

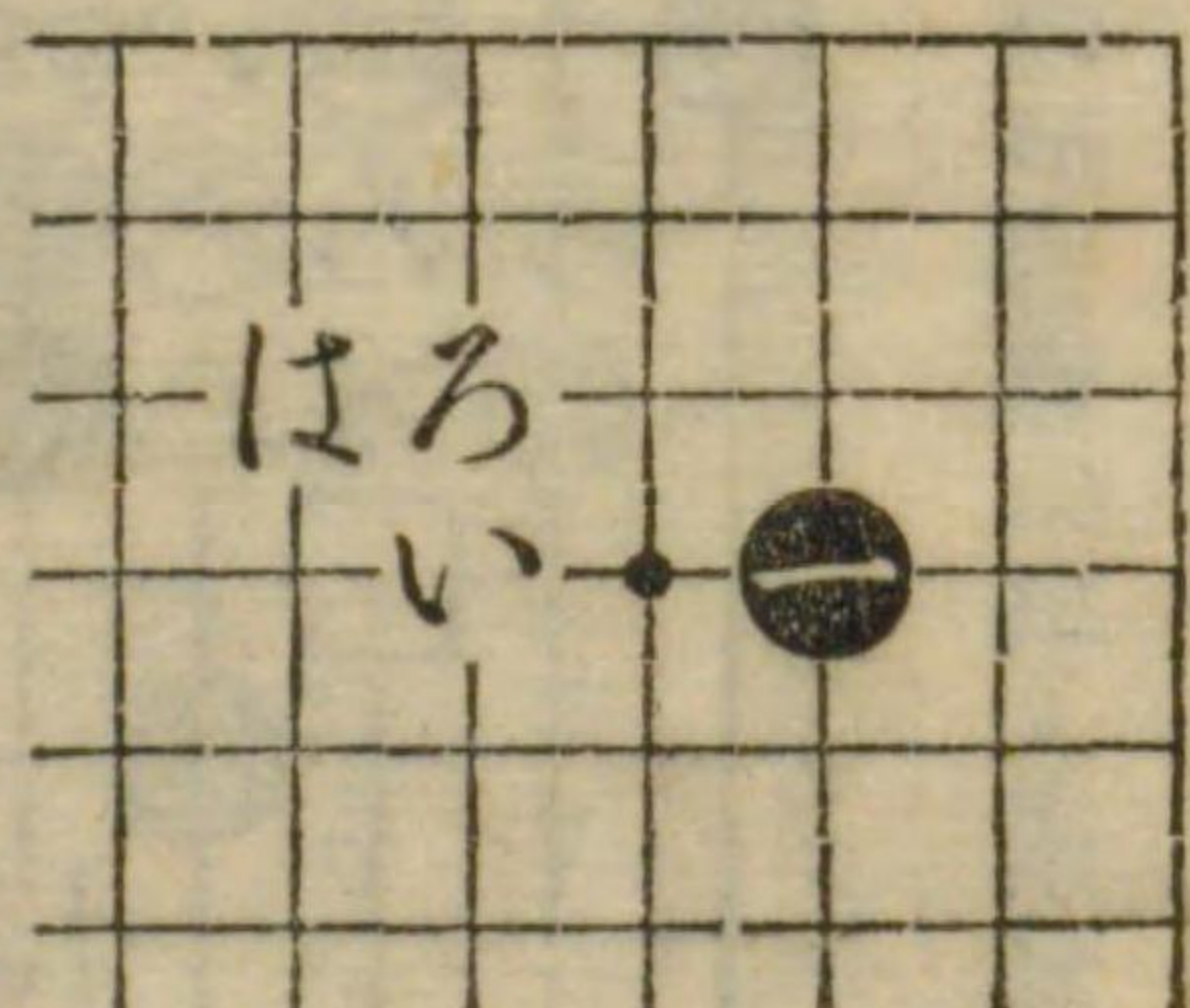
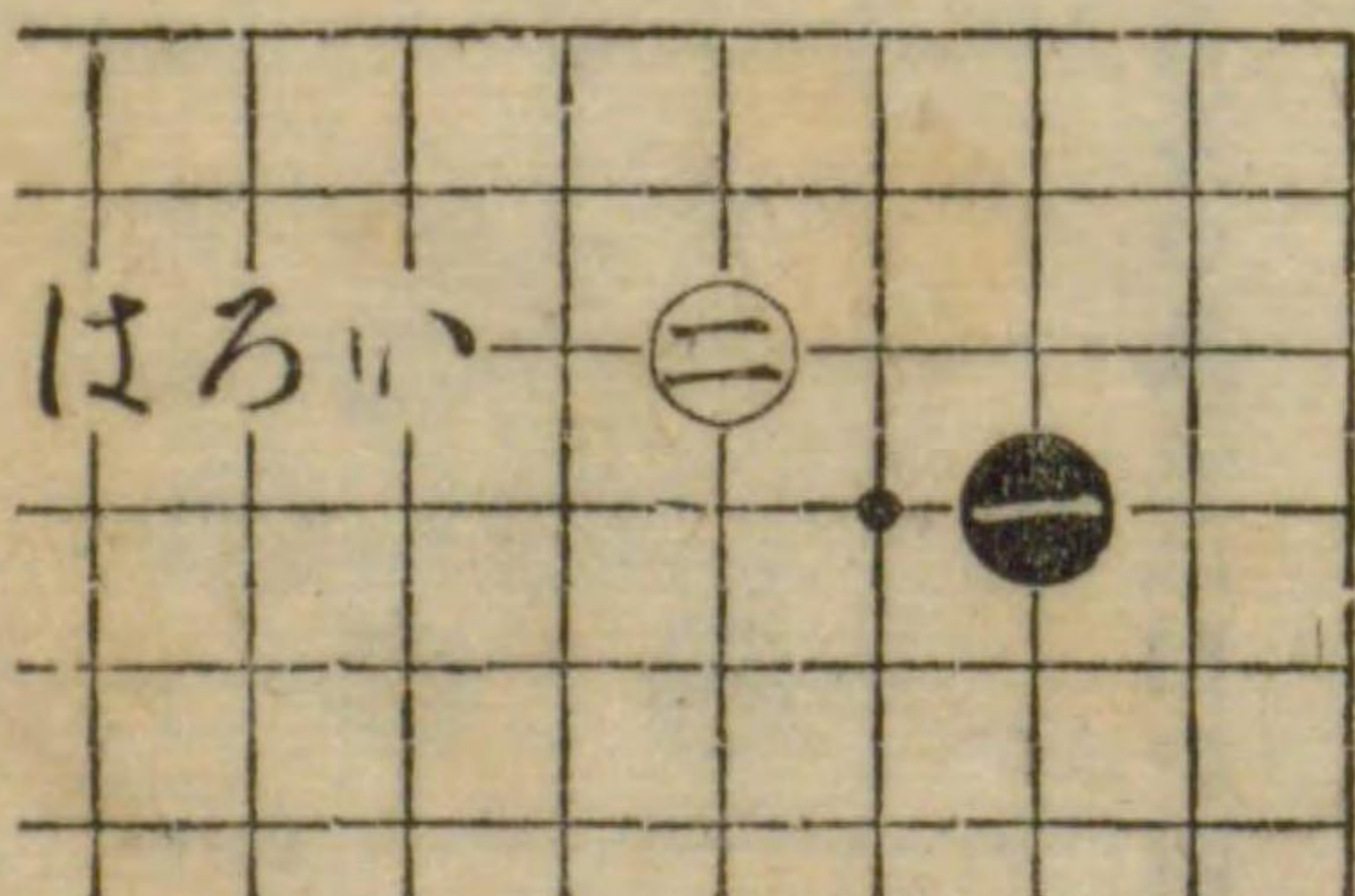
「は」の三點に限るをして斯く守備する事を締(シマル)といふのである今其名稱  
をいへば「い」は一間高締(イツケンタカジマリ)或は略して單に高締(タカジマ  
リ)「ろ」は小桂馬締(コゲイマジマリ)或は略して小締(コジマリ)「は」は大桂馬  
締(オホゲイマジマリ)といふのである今是等の締り方に就て用ふる程度を數で  
示したら高締(い印)と小締(ろ)は十中の八九で大桂馬締(は)は黒を持ちては較  
々不確實であるため「い」「ろ」の兩種に比べては用ふる場合が少ないが白としては變化を待つことがあ  
るので黒よりは用ふる機會が多い

夾(ハサミ)の事

夾(ハサミ)とは讀んで字の通り夾撃の意味である本圖で黒が「い」「ろ」「は」の  
三點に打つとしたらこれは何れも白二を夾み撃つ状態である

名稱

「い」に夾むのを一間夾(イツケンバサミ)「ろ」に夾むのを二間夾(ニケンバサミ)  
「は」に夾むのを三間夾(サンケンバサミ)といつて皆二の白から距離に應じて名





づけたものである

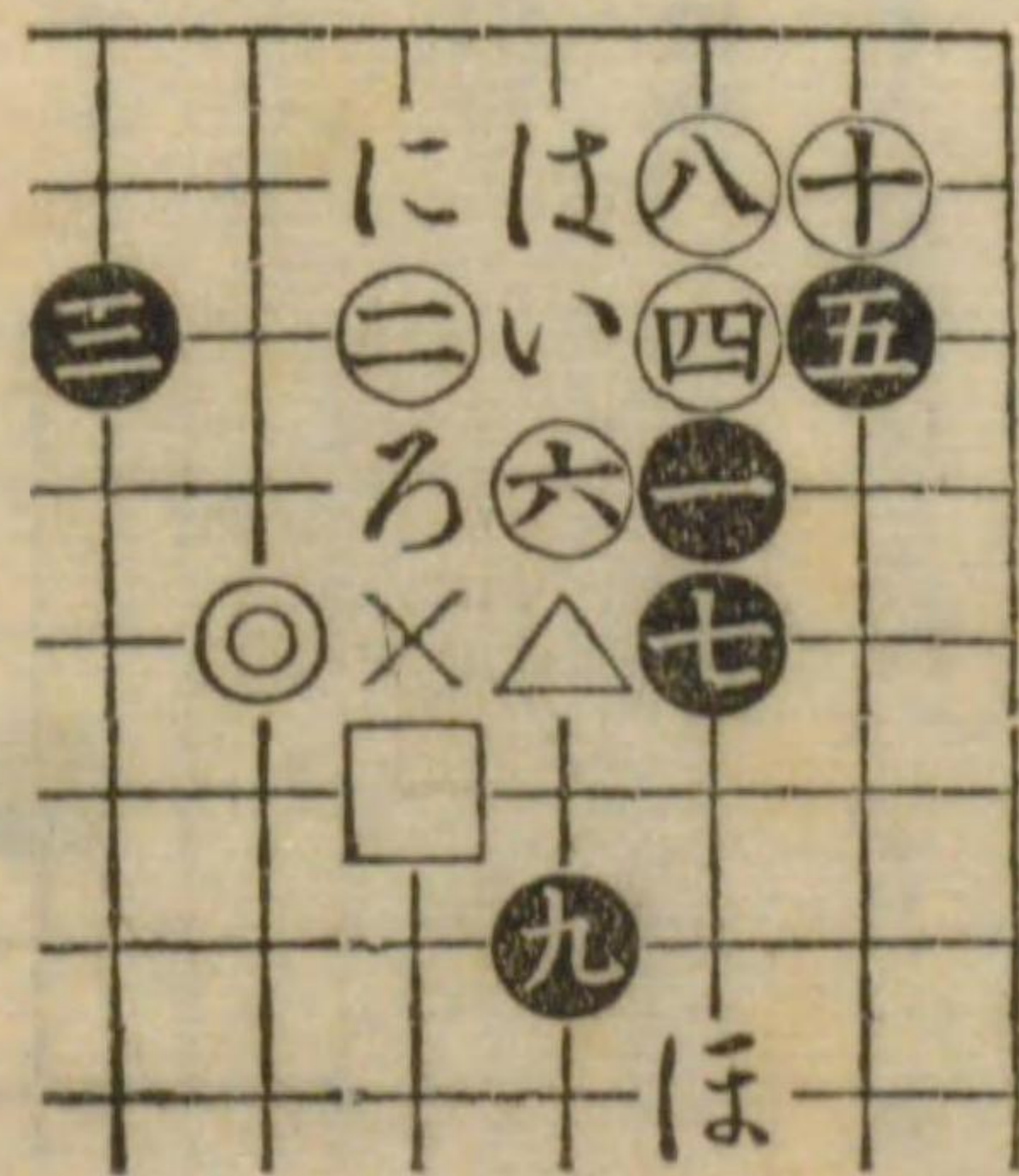
以下順を追つて一間夾みからの定石を説き示さう

### 一間夾の部

○白四は早く治むる趣向なり(第一圖)

白四のツケは早く己れの石を治むる趣向であつて圖の如くなるのは普通の形勢である●黒五は白が四とツケてきたのに對抗した手である手を抜いてみると白から六に繰ねられて甚だ悪いから之に對抗したのである尤此の手で六に伸び白が「い」に續たとき「ろ」に約へて打つのも場合によつてはある然しかうなつて黒に形勢を得らるるときは白が「い」にツガないで「ろ」に押し黒「い」白「は」黒八白「に」と打つて變化する手段もある斯く述ぶる手は總べて碁勢によつて出来る應答であつて此の隅に就いて直ちに善悪を論じる沙汰ではないそれであるから此の理合によつて圖の通り五と繰ねるのが普通の事と承知されたい○白六の繰ねは眼形を備へてゐる善い手である然るに黒から八に繰ねらるゝのを嫌つて「い」

第一圖



又は八に打つのは却つて宜しくない●黒七の手で八に繰ねたならば白は七に繰ね返すのである(第二圖に説明す)●黒九の手は「ほ」に二間拆(ニケンヒラキ)くこともあるが三の一子が一間夾にあり且つ十と約へ込んで白を攻める便もあるから斯く桂馬に打たなければならぬこともある形勢の釣合を見定めて打つべき事である○白十の曲りはすぐに打つにも及ばないたい手を抜くと黒から此の處に攻めらるゝ事と又は外部から攻められて此處に手を引かねばならぬ事とがあるし好點であるから事の起らぬ前に打つて置いて急に備へるのも宜い

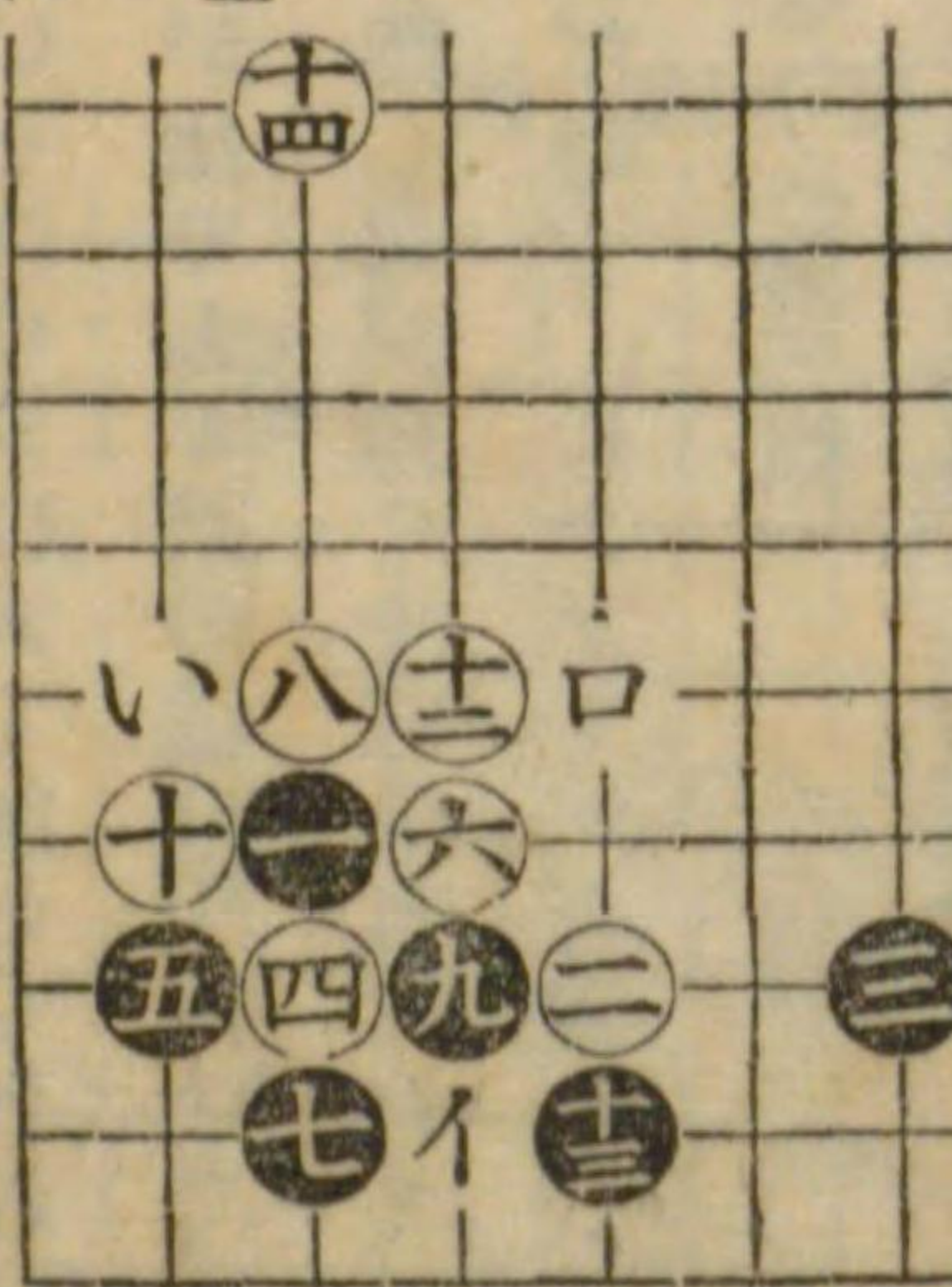
●黒九を△印に曲るは場合に據る(第一圖)

黒九の手で△印に曲ると白は×印に繰ね黒も○印に繰ね白は◎印に伸びとなるのである然し此の場合黒三が白の堅い處に近くある爲めに大抵よろしくないたい三の黒が二間夾の時か三間夾の時には碁勢上打つことがなくもない

●黒七の繰ねは恐るべき手にあらず(第二圖)

○白六の手で黒から七に繰ねらるゝのを嫌つて圖の様に六に打たないで七や九に打つのは初學に多い此の事は前にもいつたが此處では其理由を述べやう七に下ると黒から六の處に伸びられて眼形を失ふし九に

第二圖





ツゲば黒から「い」にカケツガレテ形が重い姿となつて甚だよろしくないそれゆゑに六と緯ねなければならぬことになる●黒七の緯ねは悪い第一圖の様に八に伸びるのが法である譜の様に十四までの振り換りとなつては白が優勢である是れは黒七の悪手によつてである然し白が黒に十三と打たれて三の黒と連絡されては不得策の場合には十の手で「イ」にアテ黒が四に粘だ時「ロ」にカケツグが善い。

○白四は漠然たる手なれとも敵を治まらしめ趣向なり(第三圖)

○白が二と掛つて黒に三と夾まれた場合に早く治まるには「イ」にツケルのが近道だと前に説いておいたが「ロ」にカケても又は「ハ」に頂「ツケ」しても矢張形勢を固定する事は出来るのである然し是等の手は己れを堅めるかわりに敵も固めるといふ理屈で何うも面白くない、さればとて手を抜けば「い」にツケられて悪いといふ斯ふいふ場合に斯くボンヤリ飛んで敵の様子を探り次ぎに△印の邊に側面から攻勢をとる意味を含むのが白四の手の本旨である之に對して黒は五と受けるのが普通で偶には▲印に二間拆(ニケンヒラキ)くこともある、そこで白は何の目的もなく「ニ」に押すことは宜しくない。なせなれば押せば押す程損であるからである白が六の手で「ホ」にカケたら黒は

(圖三第)



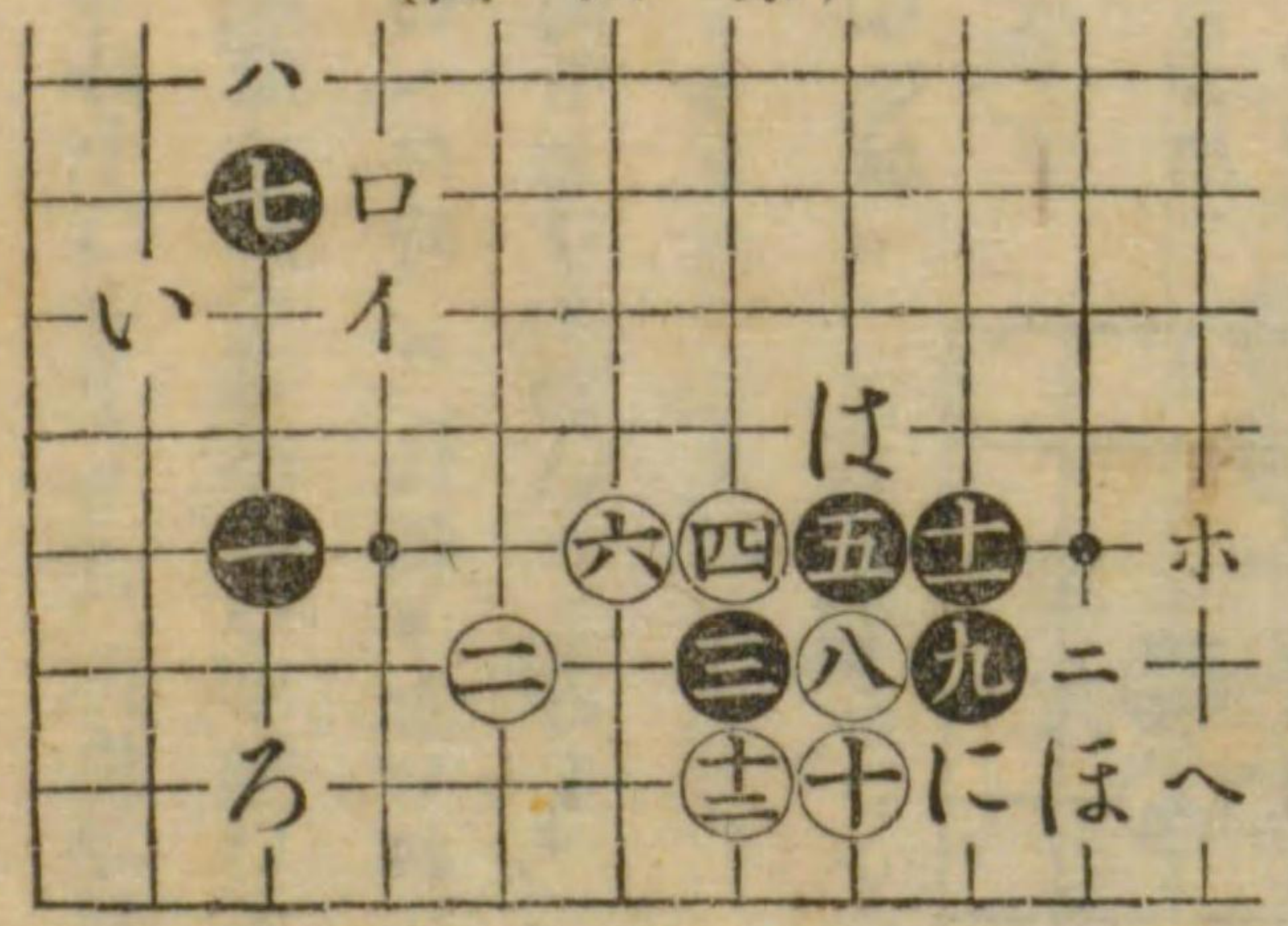
「ろ」にコスミツケて黒の方が優勢である又こゝに注意すべきことは多くの場合此碁勢にはならぬこと  
で従つて此の四の手は稀に用ふることゝ心得られたい。

○白四、六のツゲヒキは早く己れを治め且つ上部に出づる手段なり(第四圖)

標題の通り白四とツゲ六とヒク手は早く己れを治め且つ上部に出づる趣向である●黒七と手を轉して二間に拆くのは普通で空に見過してしまへば何でもないやうだが活氣に満ちた手だ總べて碁は斯くの如く打ち廻したいものである。そこで白が八、十、十二と三の黒を切り取るので細かに調べて見ると此定石は白を持つた時などは堅過ぎて少し凝り形の氣味があるが黒を持つた時殊に二三目置いた時などには洵に分り易くて善いのである。

それだから白と黒とが反對になつておつた場合には白が七に二間に拆かないで九にカケツイデ此の三の一目を切り取らせない手段をとることがあるが黒としては穩かでない然し若黒七の手で九にカケツイだら白「イ」若くは「ロ」に打つも宜し今白「イ」に斜走せば黒「い」白「ハ」黒

(圖四第)



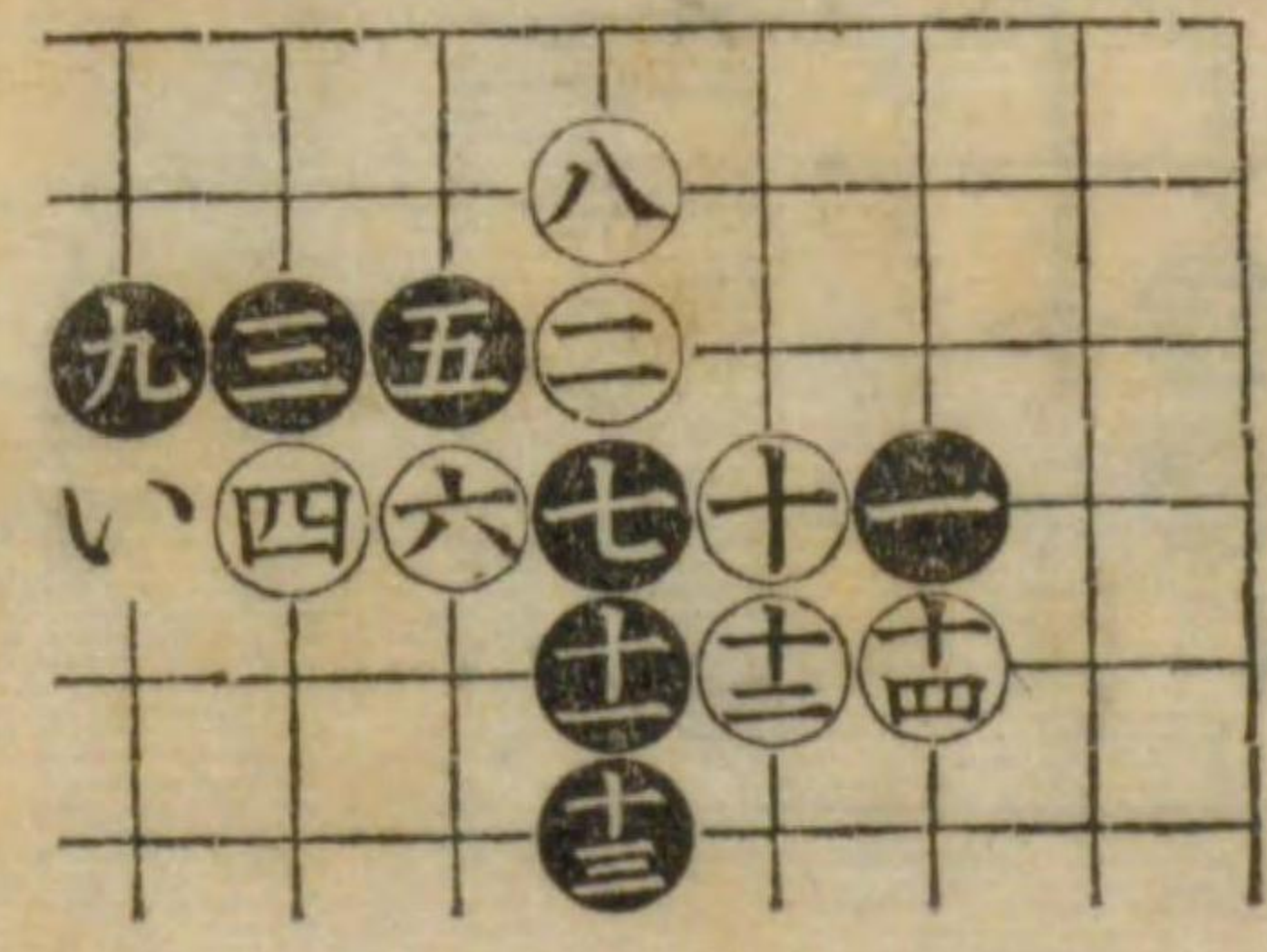
「ろ」となる位のものである又黒が七の手で「は」に伸びるのも宜しくないし十一の手で斯く肩を續くの忘れて「に」約へるのも後に十一の處



に切が残つて引け手となるから悪いこれは殊に初學の爲めに言つて置く。白十二の手も「に」に出で黒に「ほ」に約へられて十二に手を引くより斯く初めから戻る方が後に「ほ」に飛び出す手が残つて善い尤「に」に切つてて征(シチャウ)にかけられない場合には「に」に出でて白が約へた時「に」に切りをいれて黒を「へ」に引かして十二に戻れば黒は「ホ」に門(アシダ)の手が要るから先手となり善いのである。

●黒五、七の趣向は無理なり(第五圖)

○白が四とツケた時黒が五と突き當つて七と切つてくる手は無理に相違ないが然し白が受け損じると随分黒に無理を徹さるるかも知れない此の時白が八と下る手が良い。過つて十に綽ね込んだりすると大變實に注意すべきことである黒九の手で「い」に綽ねて來たら白は九の處に切れれば差支ない圖のやうになつては黒が非常の不利であるこれは定石と稱すべき形ではない。ただ初學心得の爲に附記したに過ぎないのである



(第五圖)

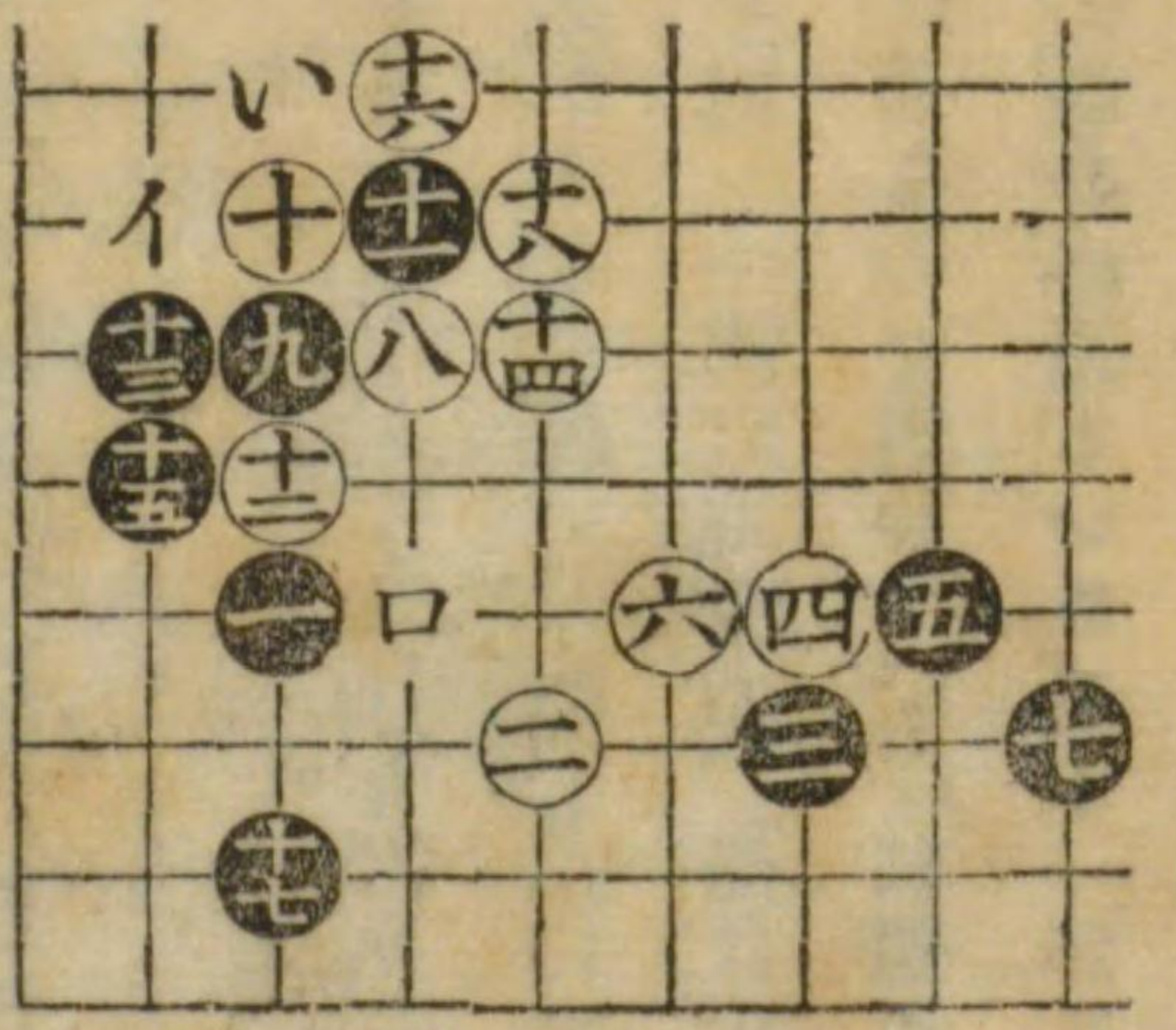
●黒七の不穩なる例を示す(第六圖)

○白が八と桂馬に掛けて來た場合に好ましくはないが黒は十三と受ければ普通だが(第四圖の説明を参照せよ)斯く九とツケて十一と切るのも一つの趣向である。然し之は餘り面白いとはいへない○白

十二と綽ね込みを打つてから十四と伸びるのは手順である若し此綽ね込みを打たずにただ十四と伸びると黒から「い」に捲り「イ」に下つた時十三の處に約へられて低い處を這ひまはらねばならぬことゝなる●黒十五は「い」に綽ねて白が十五と突き出した時「イ」に提つて振り替りと打つこともある其時白は「ロ」に手を入れるのが本手である僭斯様に振り替つた形勢も本圖の形勢も共に黒の方が宜しくないこれは最初黒七の手が穩でないからである。

○白六の手は白を持ちし時などには面白きことあり(第七圖)

○白六と上部に伸びる趣向は棋勢が廣くなるによつて白をとつた時などには宜い。言ふまでもなく白は棋勢の廣からんを要し黒は棋勢の狭からんを要するのが手段の法である●黒七の時重い手だが「い」に續くこともある此時は白は「イ」に一間飛び黒は「ろ」に二間飛ぶのが定石である○白八の手で「ロ」にカケる手もある(次に述べべし)



(第六圖)

●黒九の桂馬は良い此の手で「ろ」に二間拆く事もあるが位が低いので面白くない又此手で「は」に打つたら白に九の處にカケられて悪い○白十は黒から△印に突出を防いだ手である事は一目して明か



ある●黒十一の手で「ロ」に引いて白を「イ」に續かして「は」の好點を占めたら如何にといふに白に十一及「ハ」と二段縛ねさるゝ手順となるから面白くない然らば此の二段縛ねをされぬやう十一に伸びるとすれば寧ろ「ロ」と「イ」の交換はない方が優しである○白十二は常用の手筋であるこれは黒の姿勢を崩す好點であるから心得て置くことを望む●黒十三で十五にコスメば白に利かないによつて形は面白くなくとも斯く十三と押し十五と曲る次第である。

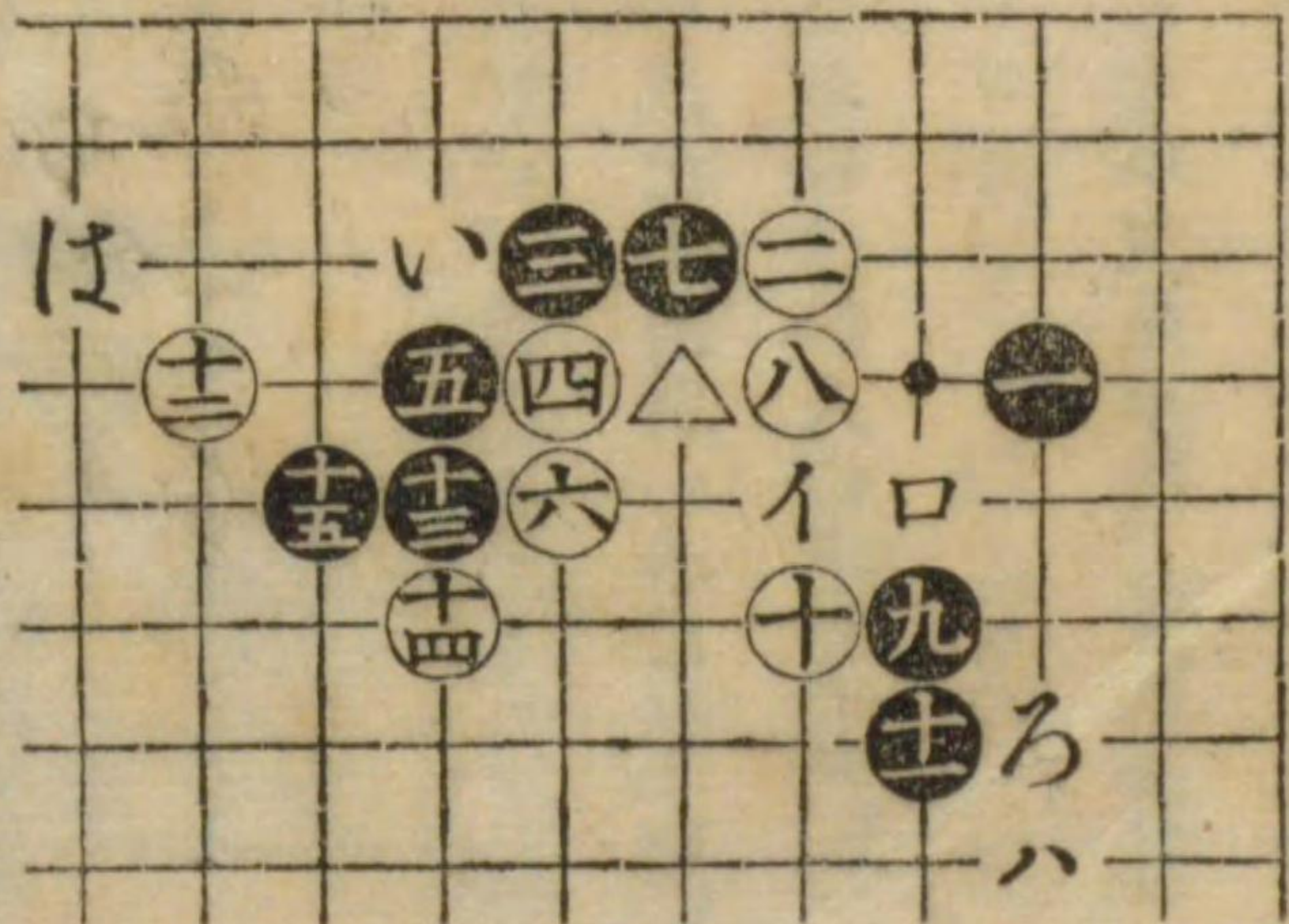
●黒九は先手を持ちて十七に拆かんとずる趣向なり

(第八圖)

第七圖には九の手で▲印に斜走又は十一に二拆することを説いたが此

處では斯く一間に飛んで△印の突き出しを覗ひ先手をとつて十七の要點を占めやうとする打ち方を示したのである○白十のカケは面白い手である然し此の手で「イ」に覗いて黒が十七に拆いた時「ロ」に突き出し黒が「い」に受け白が「ハ」に切り黒が「ろ」に續いた時「ニ」に一の黒を抱へて隅に地を得、黒は十五の邊に拆きとなるのも定石である此の定石で注意すべきとは白が「ハ」に切るのを過つて「ろ」に切つてはならぬことである「ろ」に切ると黒に「は」と打つて白を提られて多くの場合必悪るい●黒十一から

(圖七第)



十五まで三本這ふのが調度である尤も碁勢にもよるけれど餘り這ひ過ぎるのは勿論宜しくないし、さりとて二三本でやめれば白から十三か十五に約へられて又形が悪るく後手となるかも知れぬからである

○白八は形宜しく且場合により變化を試る手なり(第九圖)

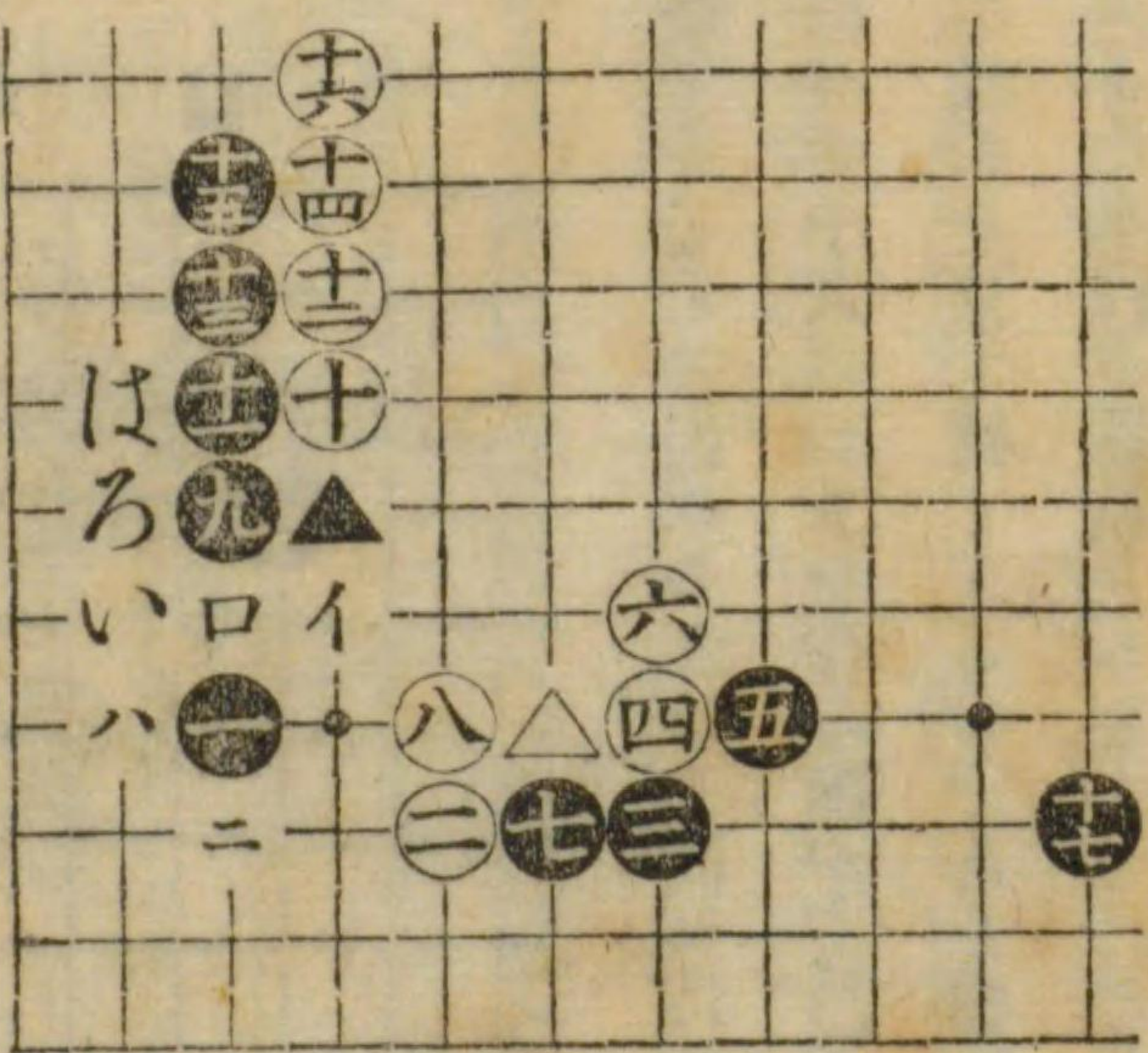
○白が十と伸びた時此場合では黒が十一と押すのが善い若し普通の様「い」に飛んでは悪るい、なせかなればそれだと白が十一に出で黒「ろ」白「イ」黒「は」白十五、黒「に」となつた時

に白「ロ」に下り黒が「は」にカケツゲば白「ハ」に切り黒「と」に提り白「ニ」黒「ち」白「ホ」黒「り」白「ト」黒

十七、白「チ」黒「ぬ」白「ヌ」黒「る」白「ト」の處にウチカキ黒が「チ」の處に提つた時白から「ヲ」に約へら

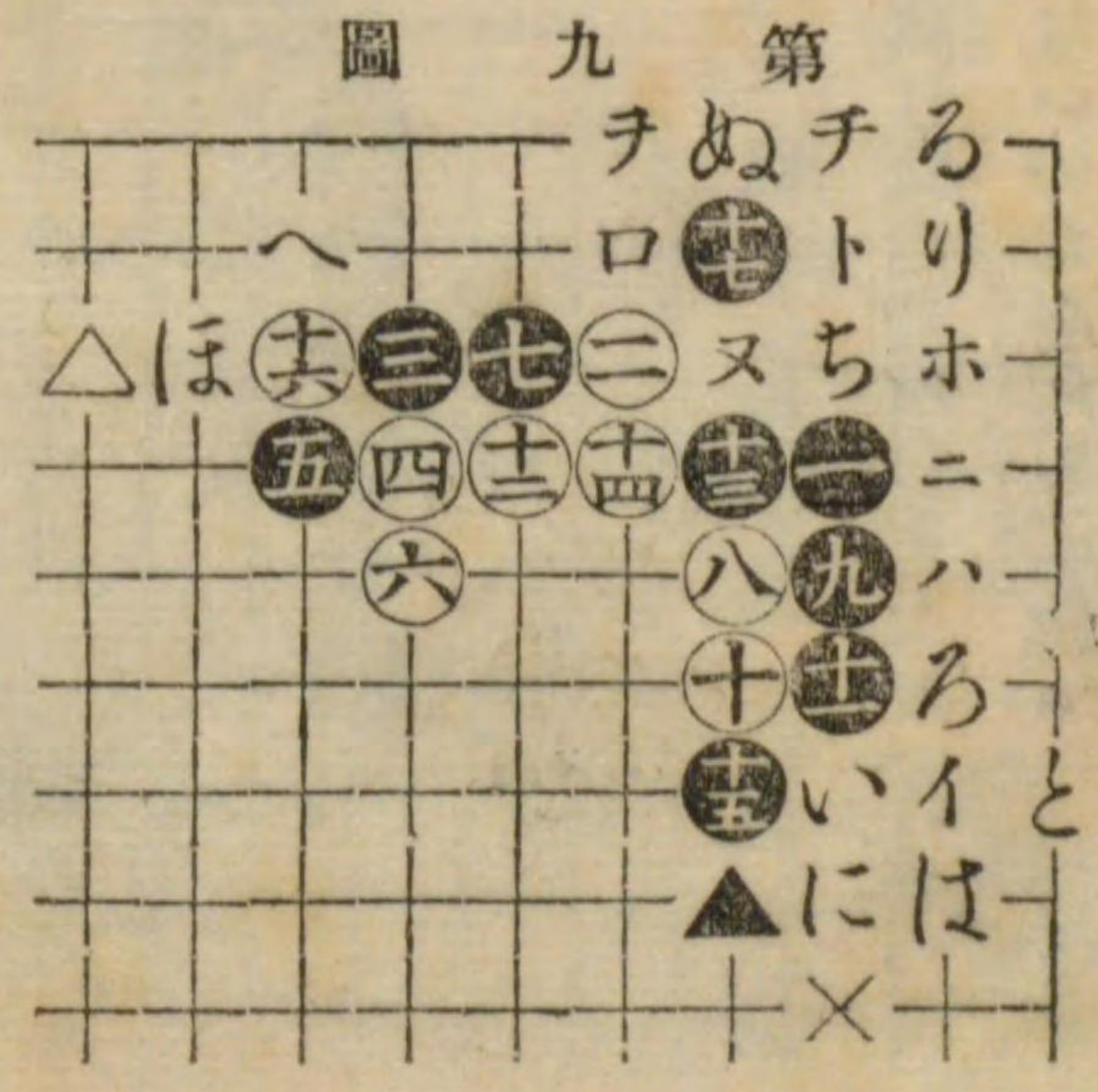
れて隅の數子を擒にせらるゝからである通常の場合ではこんな手はないのだが此處では「ロ」と下りが利くため斯様な次第となるのである、尤白が「ロ」に下つた時黒が「ト」に守つたら隅の黒を取られるとはないが白から十六に切られ三と七との二目を取られるによつて白の方が善い又説明が前に戻つて白が

圖八第



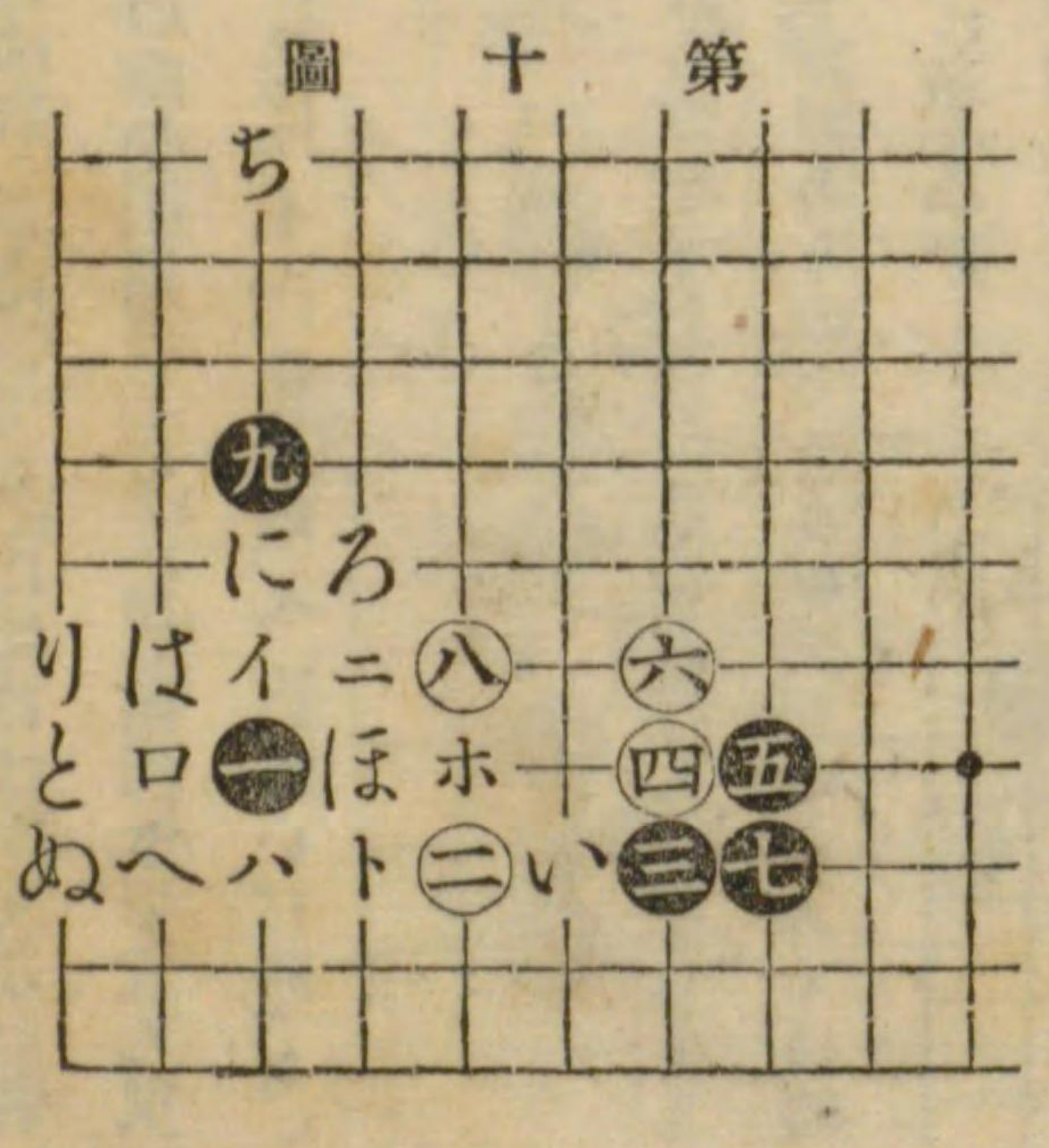


十一に出で黒「ろ」白「イ」黒「は」白十五と押しした時黒が「に」に粘がないで「と」に提つたなら白は「に」にアテ、黒が「イ」に粘いだ時白が×印に伸びて宜しい又黒が「イ」に粘がないで×印に縋ねて来たら白は一應劫を提り若し劫に負けたら▲印に粘いで仔細ない然しこの打ち方では白が「ロ」に下つて隅か又は三、七の二子を取る手にはならないが「に」にアテツケてあるため黒の地位を低くするによつて矢張白の割合が善い斯くの如く何れにしても黒が十一の手で「い」に飛ぶと結果が悪るいによつて此形勢では黒が十一にヂット押さねばならぬ必要が生ずるのである○白十二の手は十五に伸びるのが普通であるけれど黒に「に」と飛ばれて此場合白は割が悪るい其譯は白の四、六と黒の五、七の交換があつて白が凝り形となつて其働きが鈍いによつて此交換がなくつて白が次ぎに△印の邊に夾撃することの出来る碁形と同一に論ずることの出来るのは多言を要せずして明であるそれ故に十二と約へて十六の切りを含み黒が「ほ」とカケツイで此切りを防いだら「に」に詰めて黒を「ち」の處に引かせて趣向を立て様とするのである勿論斯くなるのも在來の定石ではあるけれどそふなると最初白が八とカケた手段を貫徹さるることになる



のである此白の十二に對して黒か「ほ」にカケツガないで十三と出で三、七の二子を捨て、打つといふことは白の趣向を挫く手で面白い次ぎに●黒十七が妙味津々たる手である白が「ロ」に受ければ後に「ほ」及び△印の二點から利かすとが出来やうし又白が「へ」に下れば左側の方面からは利かないが十七の黒への響き白が「ロ」に受くるほどなく黒は隅地を利得してをる次第で割合が善い一口に評してみれば三、七の二子を巧みに捨てたものといふのである尙蛇足ではあるが黒十三の手で「ロ」に縋ねて見たいやうだがこれは甚悪手と承知せられたい又黒十五の縋ね捲りは良手である。

●黒七のツギ重き手なり(第十圖)  
●黒七のツギは重い(碁の俗言)手である普通前に示した通り「い」にツキアタらなければならぬ○白八の間飛びは手筋が善い此手で「い」に突き當りなぞすると黒から八の筋に打つてこられて悪るい●黒九の二間拆きは白四、六と黒の五、七と表裏に交換してあつて白が堅き形勢であるから可成敵の堅を避くる碁法に従つて「ろ」に打たず斯くは扣へた譯である



「注意」此形勢で白が「イ」にツケて来たら黒「は」白「ロ」黒「に」

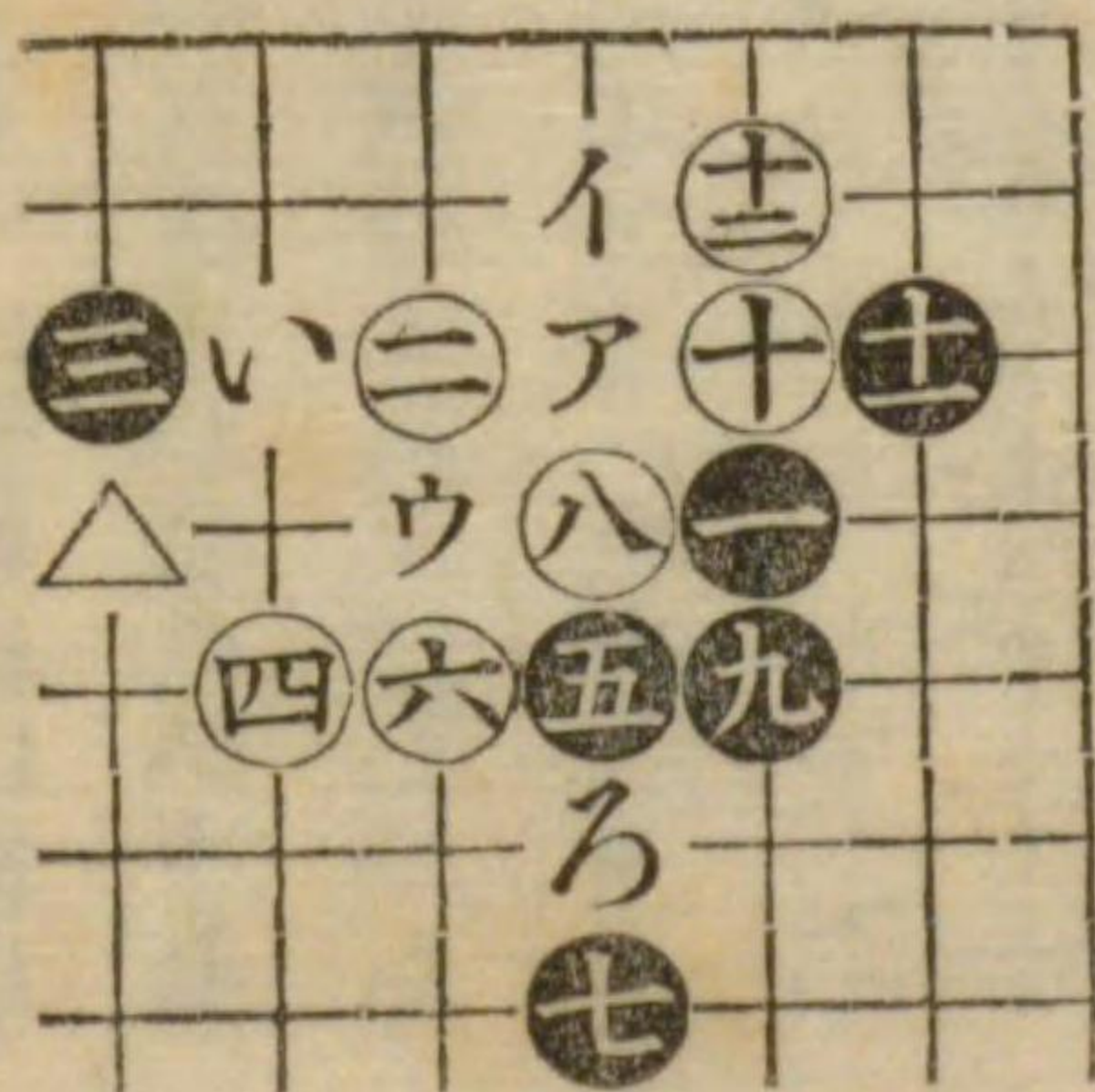


白「ハ」黒「ほ」白「ニ」黒「へ」白「ホ」黒「ト」となつたら二目は捨て、黒は「ち」に拆けば差支ない若し白が「ホ」の手で「ト」に下つたら黒「リ」白「ホ」黒「ぬ」白「ト」の時矢張黒は「ち」に二間拆きで宜し又黒が「ほ」に行びる手で「ニ」に提るのも一策である白「ほ」にアテれば「イ」に粘ぎ白「へ」に續いた時「ち」に二間拆きをして仔細ない。

○白四は軽く二の白を捌く手なり(第十一圖)

前圖には白四の手で十又は△印にツケたり或は六の處に飛ぶ打ち方を示したが是等の打ち方をしても又手を抜いても面白くないときは此圖のやうに四と桂馬の打ち方があるのである●黒五のコスミは時として打つ場合もあれど普通は外に尙良手(此良手は第十三圖に示す)があるのである○白六は切りを防ぎ且つ黒に響きを與へる受け方である若し過つて「い」に突き當つたなら切を防ぐ事は出来るが大失着となるのである即ち黒に△印に立たれ白六黒七と譜のやうになつて白が甚宜しくない。それは「い」の白と△印の黒との交換が白にとつて極めて不利であるからである●黒七の飛びは必要の手である此手を抜くと白から「ろ」に縛ねられて黒が悪るい然し中央部に白を厚くしても差支ない時は「ア」にコスミックルこともある之は直

第十圖

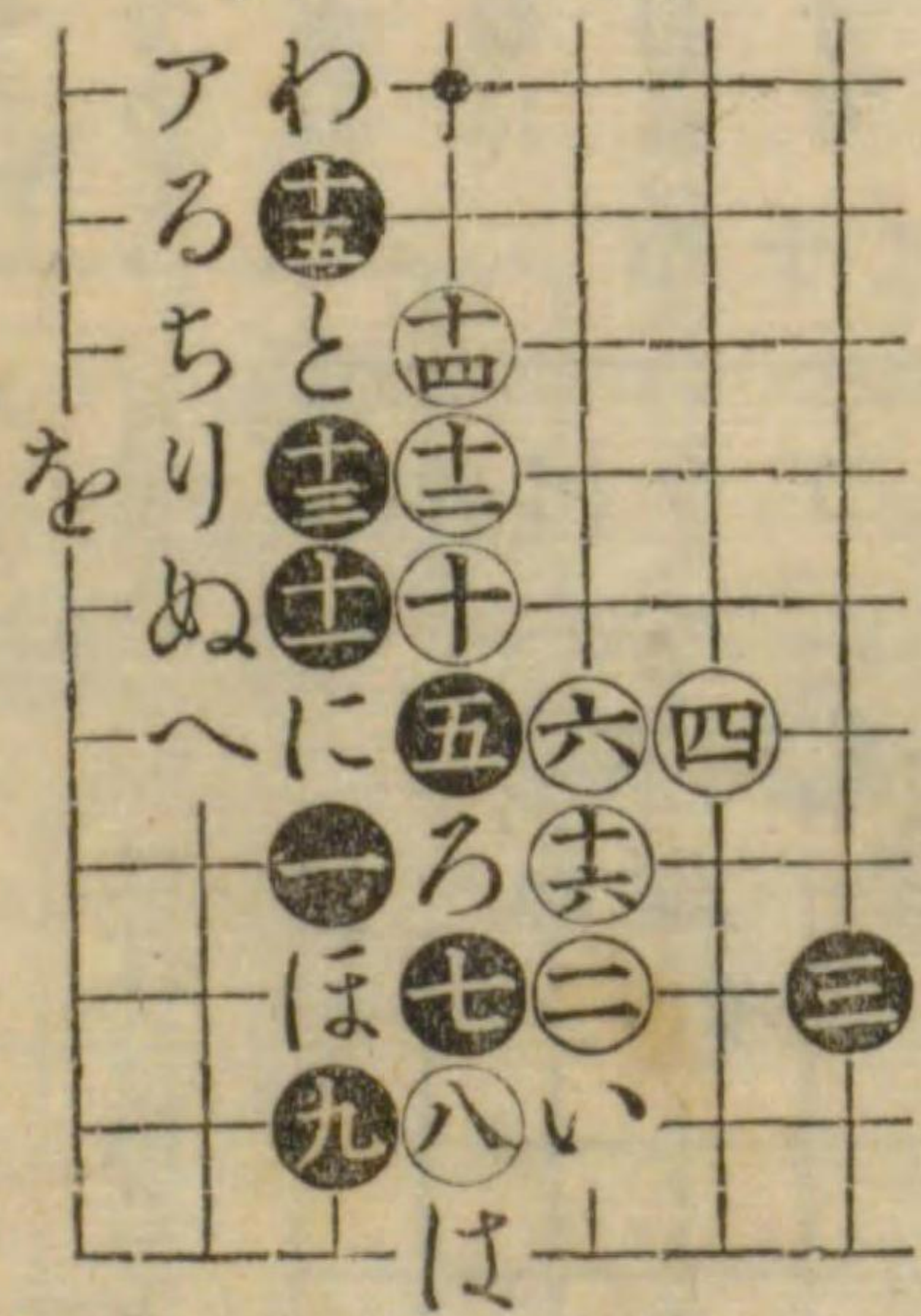


ちに次ぎに説き示さう○白八は此白を治めるに缺くべからざる手順である若し此手で十にツケれば黒から「ア」に縛ね込まれ白「イ」黒八白「い」黒十二の切となつて白の損は夥しいこととなる●黒九の手では「ア」に當てて見たい様な氣がするが白「ウ」に粘ぎ黒九と肩を續いた時に白に十と「ア」の黒を切り提られて此圖の形よりも白を堅くすることとなるから有害無益の手である

○白十六のツギに對して黒は應手に窮す(等十二圖)

●黒七の手は十二に飛ぶのが定法である斯くコスミックル手は時によると只今述べた通り三の黒は孤立するし且つ位は低くなるにより特別の場合の外は打つ手ではない○白八と縛ねて十と捲る手順が善い又白十六のツギは殊に面白い之に對して黒は應手に窮するのである即ち黒「い」に切らば白「ろ」にアテ黒は「は」に提れば白「に」に提りこみ黒の地形を破摧すると同時に十一、十三、十五の三子を薄弱に陥らすことになる。それ故に黒は「ほ」に粘ぐ外なく其時白は矢張「に」に提り黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」白「る」黒「を」白「わ」と縛ね捲るのである。そこで黒は未だ三の石と全く連絡することもできず外勢全く白に歸すといふわけであるから黒の悪るいことは云ふ迄もない乍序

第十二圖





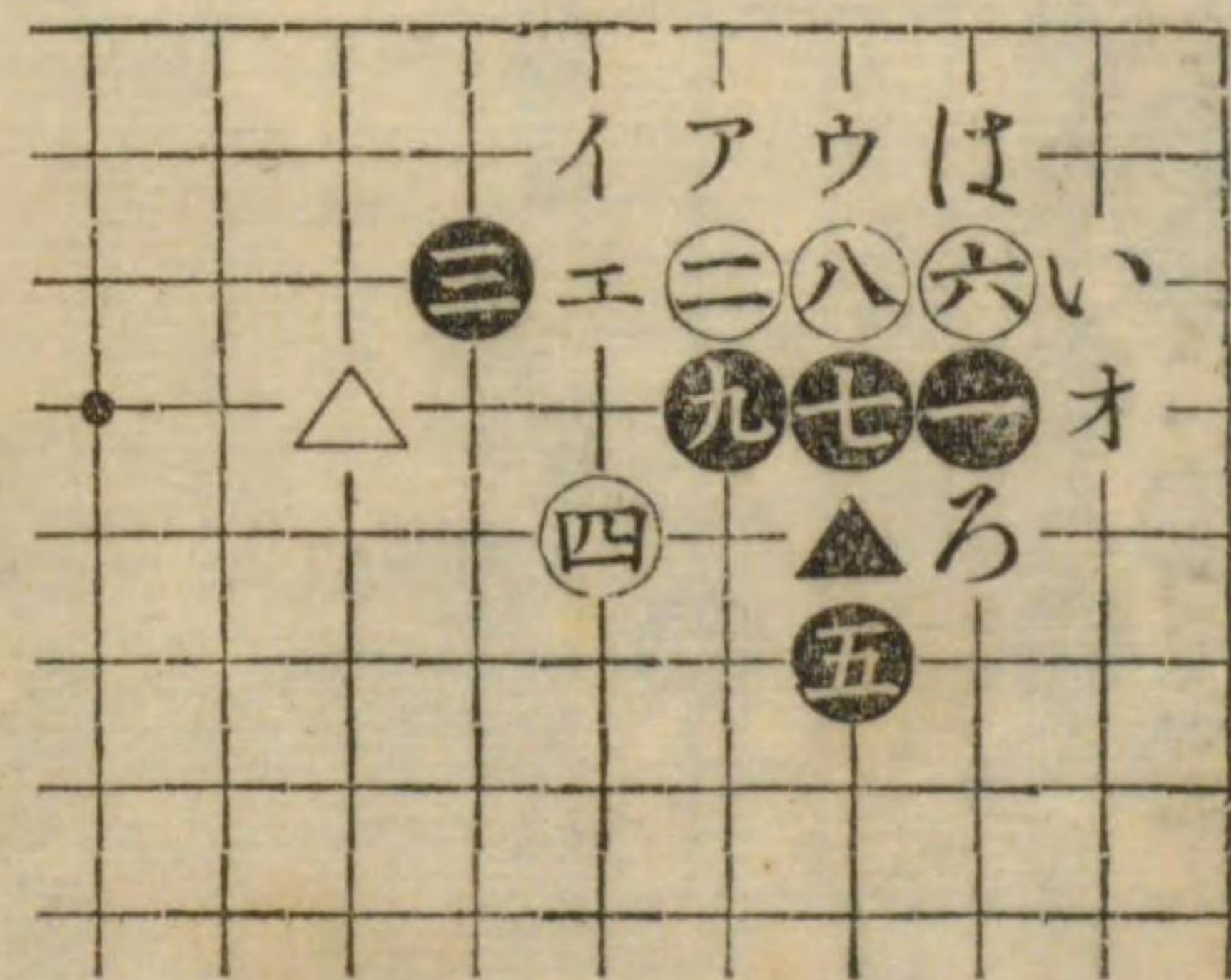
白「り」と切る手は一體單に「る」に切るのが手順であるが然し兎もすると黒から「ア」に抱へて十一、十三の二子を捨てらるるおそれがある因つて分りよく斯くは「り」から切つた形勢を説いたわけである。

●黒五の斜走は白の四に對する最良の應手なり(第十三圖)

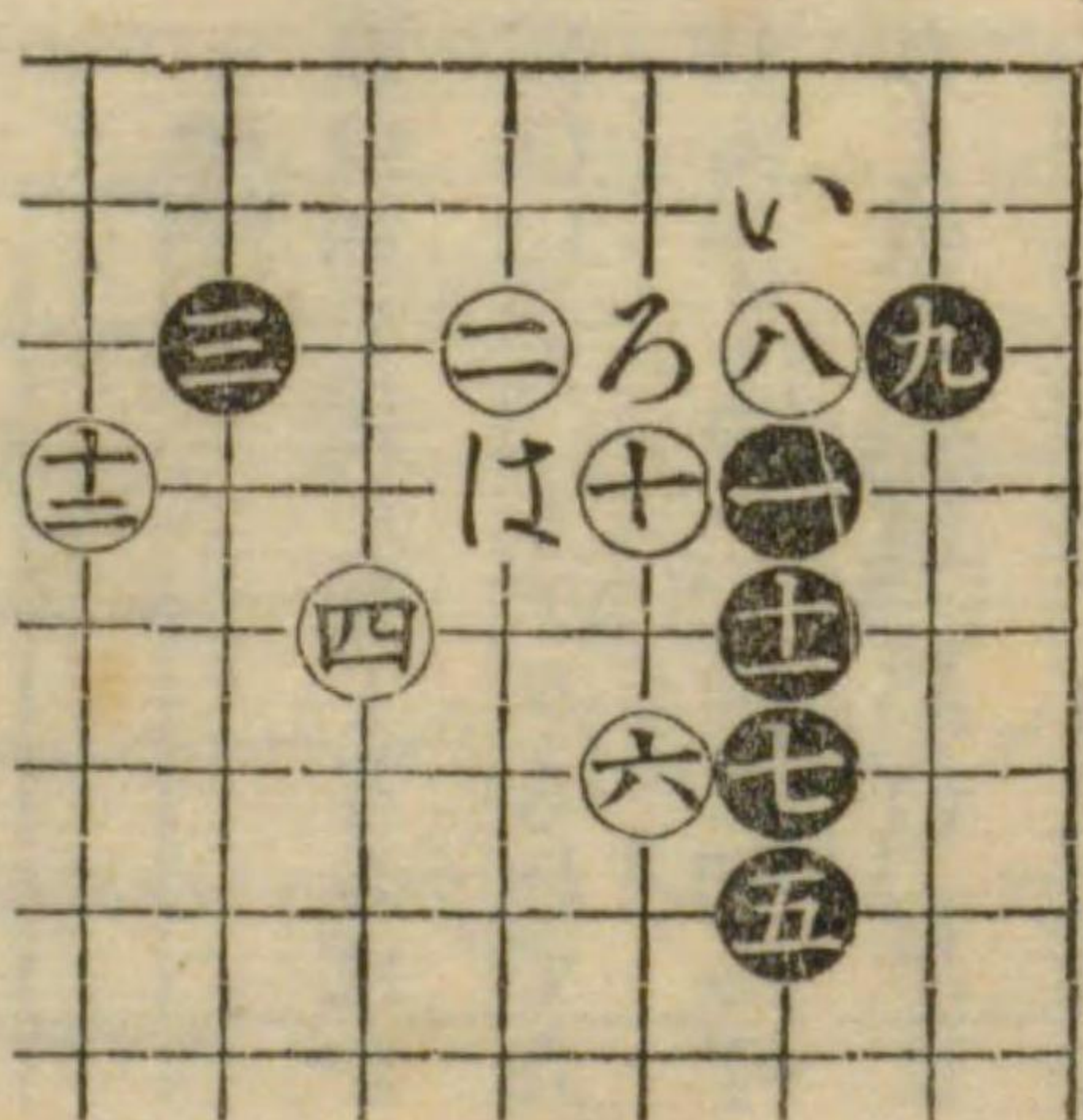
●黒五と桂馬の手は前に示した▲印にコスム手より進んだ受け方である。○白六のツケは打ち損じてはならぬ若し此手を打たずに直に△印にカケルと黒八にコスミツケ白九に立ち黒「ア」に縛ね白「イ」に約へ黒「ウ」に續き白も「エ」に續かねばならぬこととなり夥しき損である。●黒七の手で「い」に縛ねたら白は七に縛ね黒「ろ」と引き白は△印に轉するのである(次圖に示す)一寸考へると△印に轉せず「は」に下る方が通常らしく思はるるが「は」に下るのは重い手であるから打たないのである又白が七と縛ねたとき黒が「は」に捲つたなら白は「ろ」に縛ね返へし黒八に提り白「ウ」か「オ」の何れにかアテ黒が六に粘いた時▲印に續ぎとなつて白の方が頗優勢である因つて黒が「は」に縛ね返へす手は無理と心得てよい次に黒五の應手の變化を示さう。

●黒五の二間拆きも往々用ひらるゝ受け手なり

圖三十第



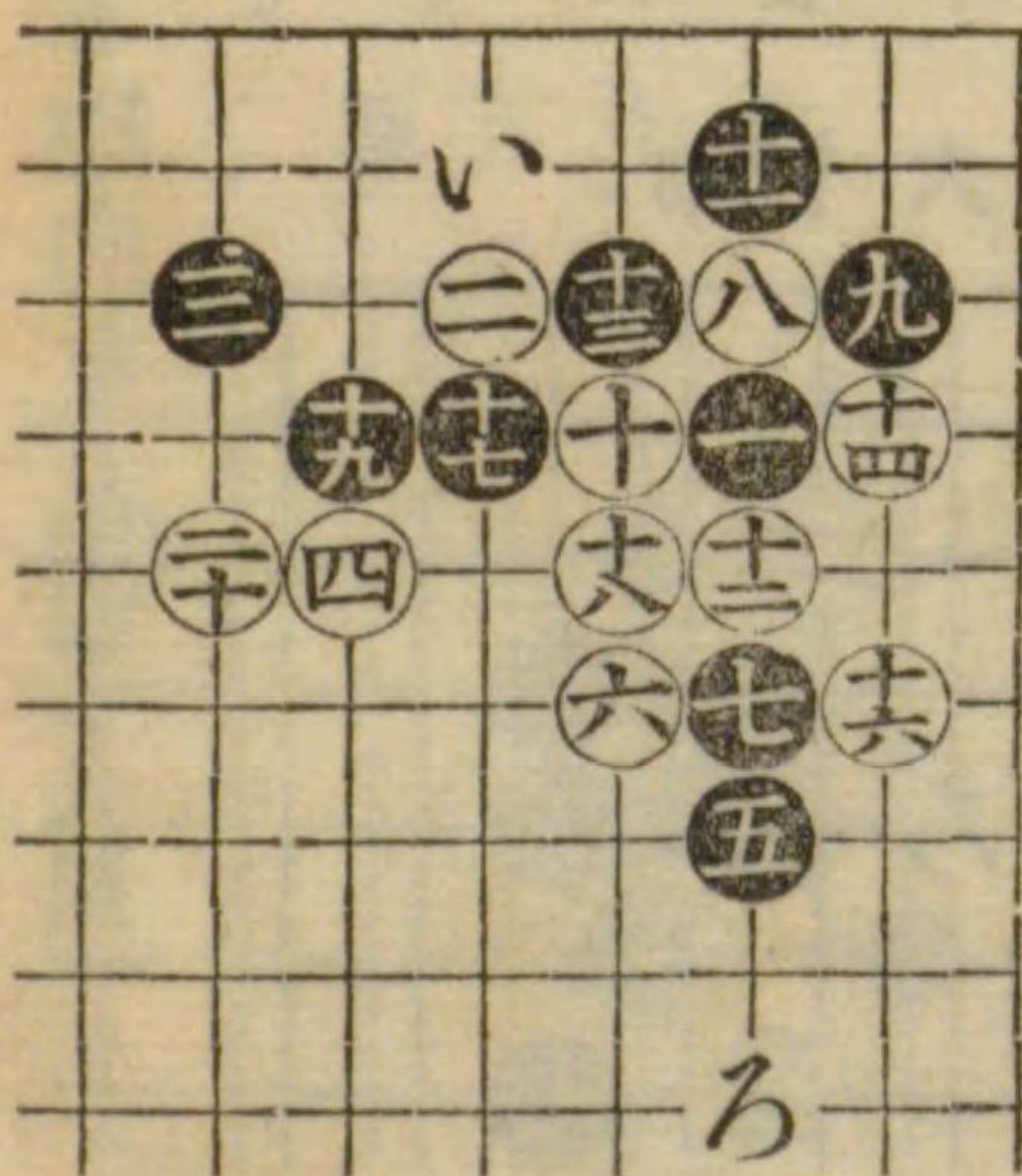
圖四十第



只今述べたのは黒五の手で六に斜走する最普通の定石であるが時として此手を斯く二間に拆くことがあるこれは全局の釣り合ひにもよるが重に下邊との釣り合ひによつて打つ手で最普通なる六に斜走する手と比べて四分六位に用ひらるる手である○白六と五の肩を衝く手は黒を七に受けさせ打ち徳である例へば白が十と縛ねた時黒が十一の手で「い」に捲り返へし變化を試みる時にも又は圖の如く黒が十一に續ぎとなつても共に必要である○白八の手は前にも述べた通り直ちに十二に掛けたなら黒から「ろ」とコスミツケられて甚損である●黒九の手で第十三圖のやうに十の處に伸び白「ろ」黒「は」となつた形勢と該圖の形勢とは比較上黒が少しく劣つてをる●黒十一の手で「い」に縛ねて變化を試みたら如何なる姿となるであらうか次圖に示さう。

○白六は打ち徳の手なり(第十五圖) ●十五八の處粘

圖五十第



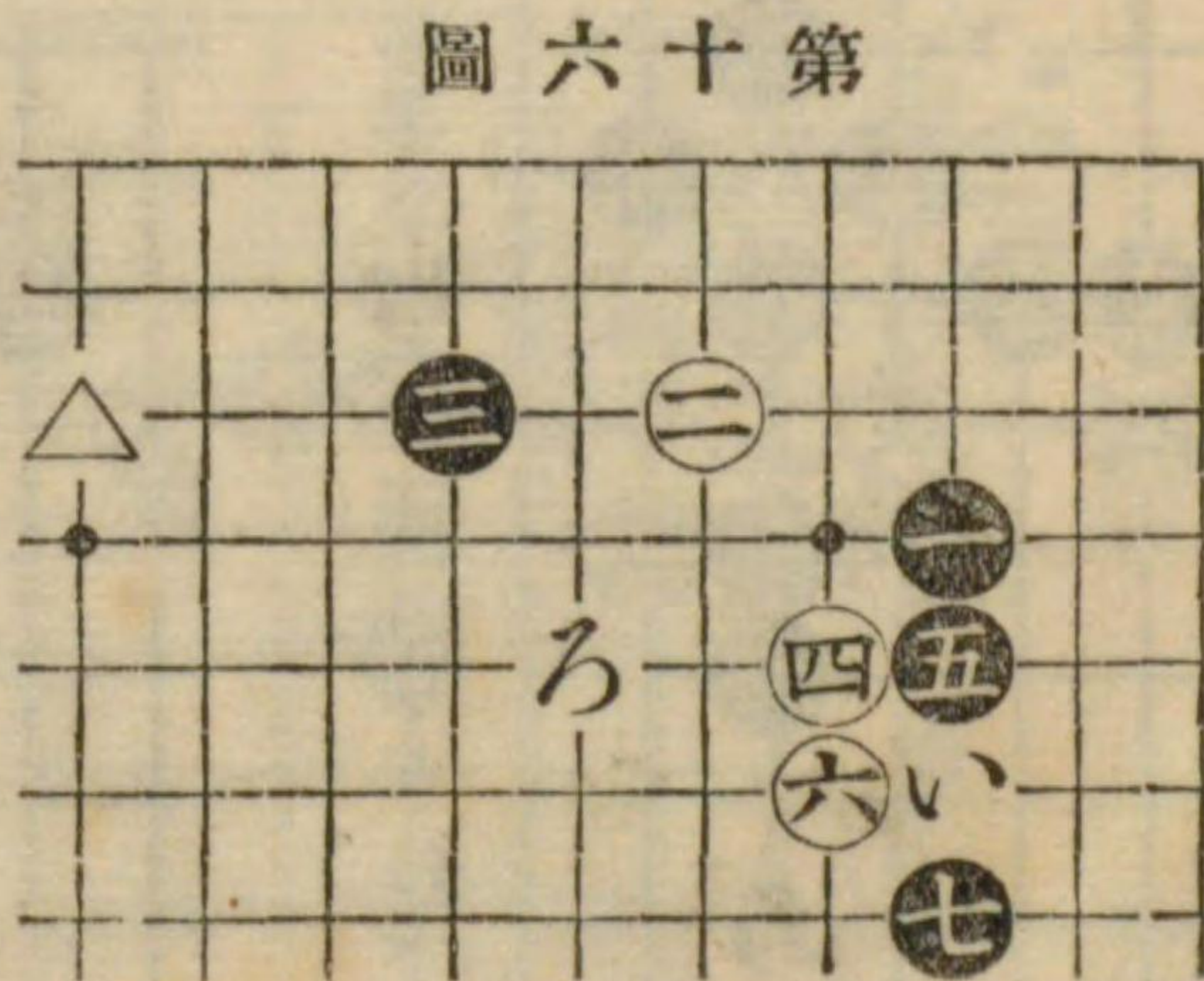
此圖は前圖黒十一からの變化である●黒十九の手で「い」に打つたら白は「ろ」に詰むるが善い○白二十の伸びは場合に依て打つ手である。



○白四のカケは外勢を張り且△印邊に三の黒を夾撃する趣向なり(第十六圖)  
 ○白四のカケは他の手を打つても面白くない時外側に十分手を打たうとするやうな場合又は三の黒を夾んで攻めたてるやうな趣向に用ふる手である●黒五は星に出切(「ろ」の筋)を狙ふなど緊要の受け方である「い」に飛ぶのは甚悪るいこれは詳しく次圖で示す筈である黒七の手で「い」に順々這ふは特別の趣向の外は常例でない五と這うたら次ぎには七と飛ぶのが通形である一體白が四とカケて打つ趣向は損を先きにする次第ではあるが後々其損を挽回することが碁勢によりて出来る

●黒五の飛びは大悪手なり(第十七圖)

●黒五と打つは定石を知らぬ人に多い然るに此手は甚悪るい、なせなれば圖の如く位が低くなるばかりでなく八の處に突出する味がなくなるからである黒九を「い」にカケツゲば白に「ろ」とアテられて九に粘がねばならぬから格別本形と變りがない又「ろ」に伸びれば白から九に切る手もあり「は」に切る手もある此の切り方は(征の關係等碁勢によることと知るべし)今「は」に切つたと假定し黒「に」白「は」に曲り黒「へ」白十二黒「と」白「は」に劫を提りこみ又黒より提り返へして白「ち」に粘ぎと見て白の形勢甚

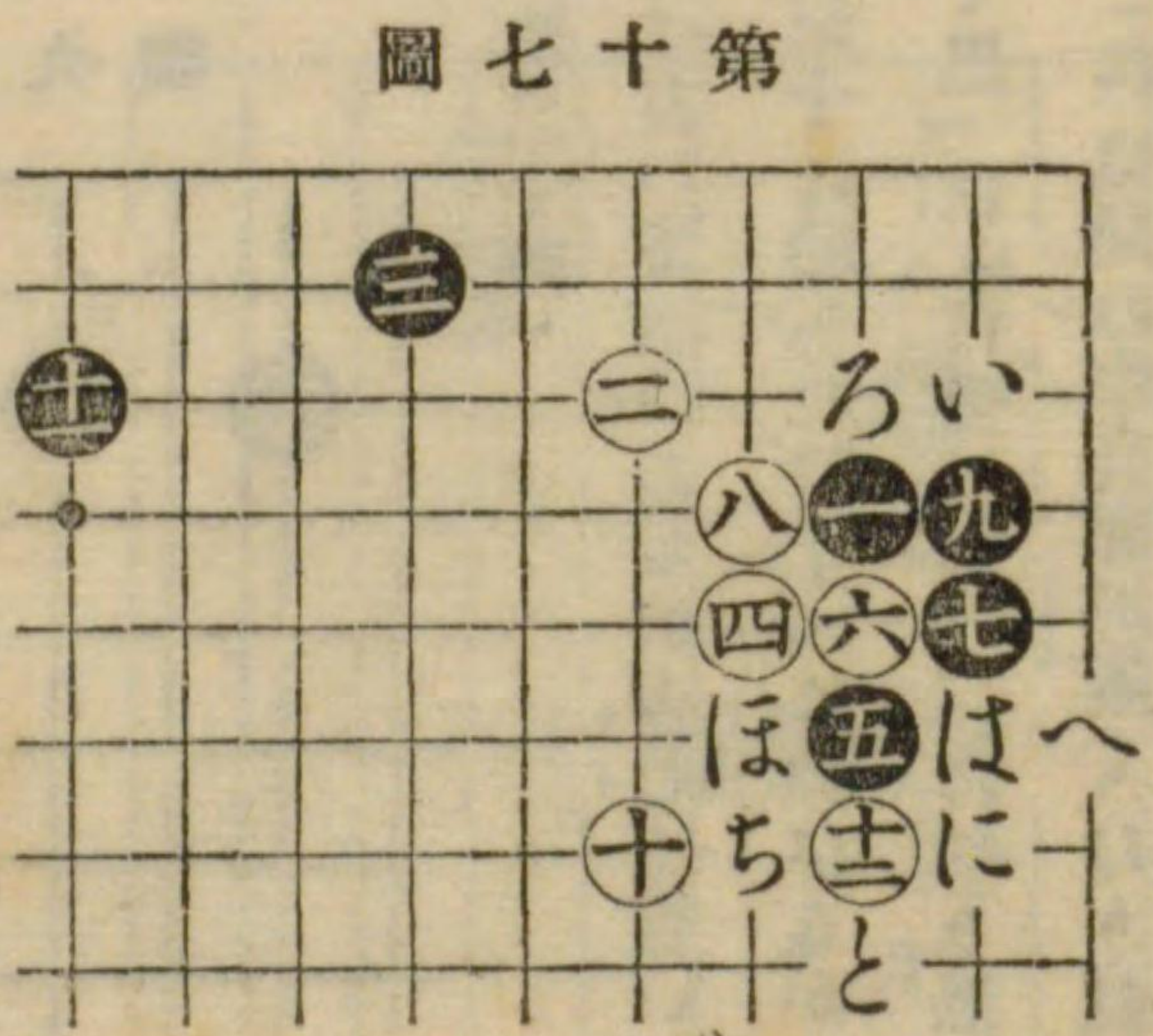


圖六十第

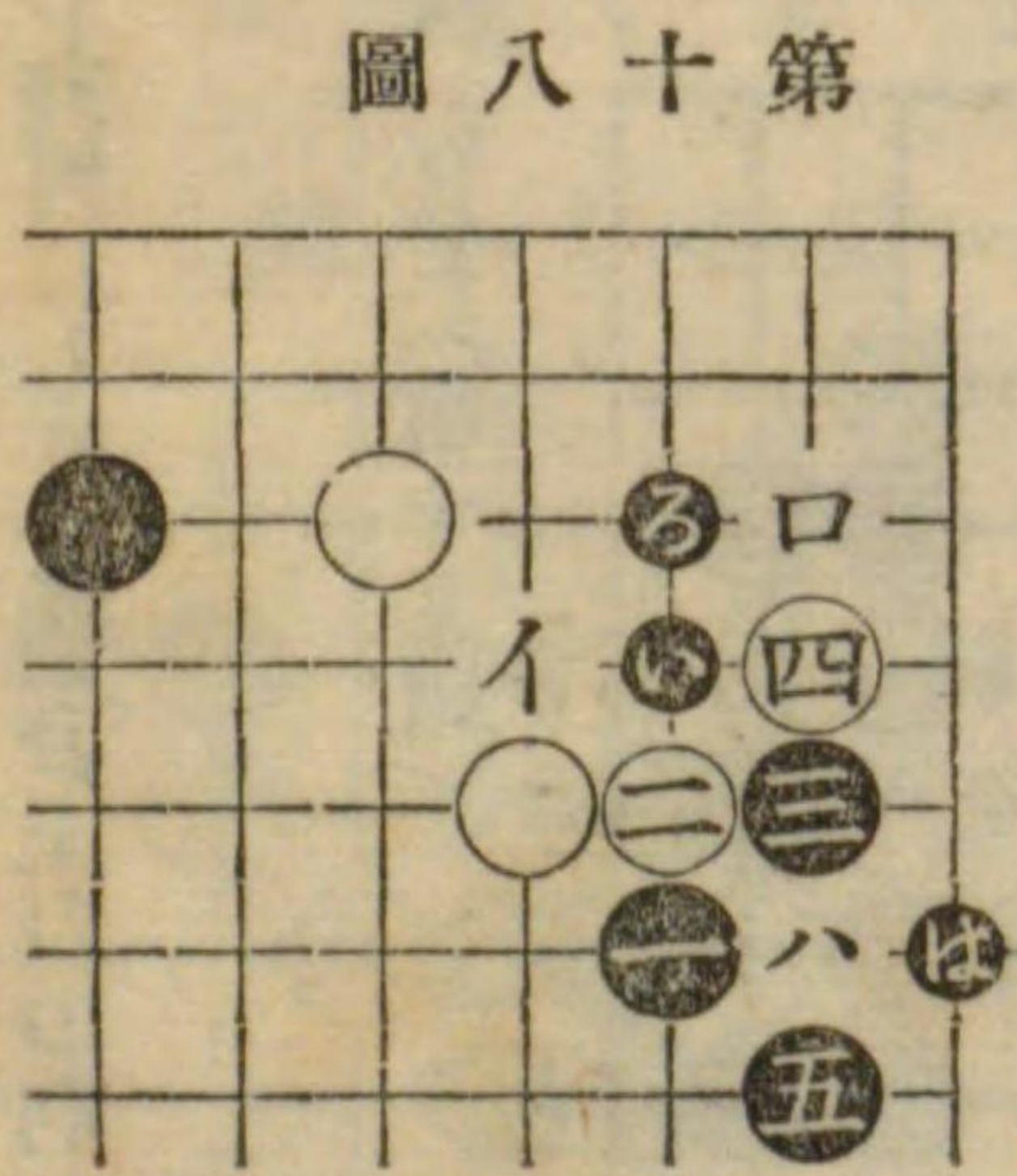
厚壯となるではないか又場合によりては白が「ほ」に曲らないで直ちに九に切り黒が「へ」に提つた時「い」に打つて隅の二つの黒を獲ても割合が善い其手割は第十八圖の如きものである黒十一と二間に拆いた手は十二にナラバねばならぬ然し白から三の黒を夾まることはなる。

○第十八圖は前圖説明中の一部を割合上より觀察して黒の不利なるを示す

第十七圖説明の一部を参照して考へて見るも第十八圖は恰白が斯く廣く裾あきの締りをした處に黒が一と打ち(普通なれば直ちに三の處に打つなり)白に二と約へられ三、五とハネツギ大きな隅地を白に與へた割合で大體が黒の不利と見ることが出来る而して實際は此の形の上に持つてきて「ろ」「い」に黒があり「イ」「ロ」「ハ」に白があるので平假名印の黒と片假名印即ち白と交換した姿である白が「ハ」に抛り込んで黒に「ち」と提られたのは甚しき損であるが黒の「ち」「ち」も持ち込



圖七十第



圖八十第



んで取られた次第であるとして黒の一間夾みは白の堅に近接はしてをるし如何にしても割合上白の利にして黒の損なることは明である

○白八、十の出切りは古來よりの定石なれども濫用すべからず(第十九圖)

○白八から十までは手筋には違ひないが餘りに黒を固め過ぎ打ちきつてしまつた姿であるそれ故に濫用してはならぬ、ただ此の手筋の意味を含んで三の黒を夾撃する等他の趣向を廻らして欲しい然し八の手で單に十六の處にツケル打ち方はあるこれは次ぎに述べやう黒十三の手で十五に提るのは白より十三にアテられて位が低くなるから宜しくない。

○白八のツケは二、四、六の三子を治めんとする手なり(第二十圖)

○白八の手は二、四、六の我石を治める手である此時黒が「い」に續くのは古い定石にあるが少しく重い氣味があり白に「ろ」に續かれて面白くないのである今では九と押し白が十に約へた時十一に伸びるか「は」に飛ぶことゝなつた又黒十一の手で「に」に縛ねたら白「い」に出で黒「ほ」に受け白「へ」に切り黒「と」に續き白十一に縛ね黒「ち」に飛び白「り」に三の黒の夾撃となるこれは局の中央部が廣くなり且

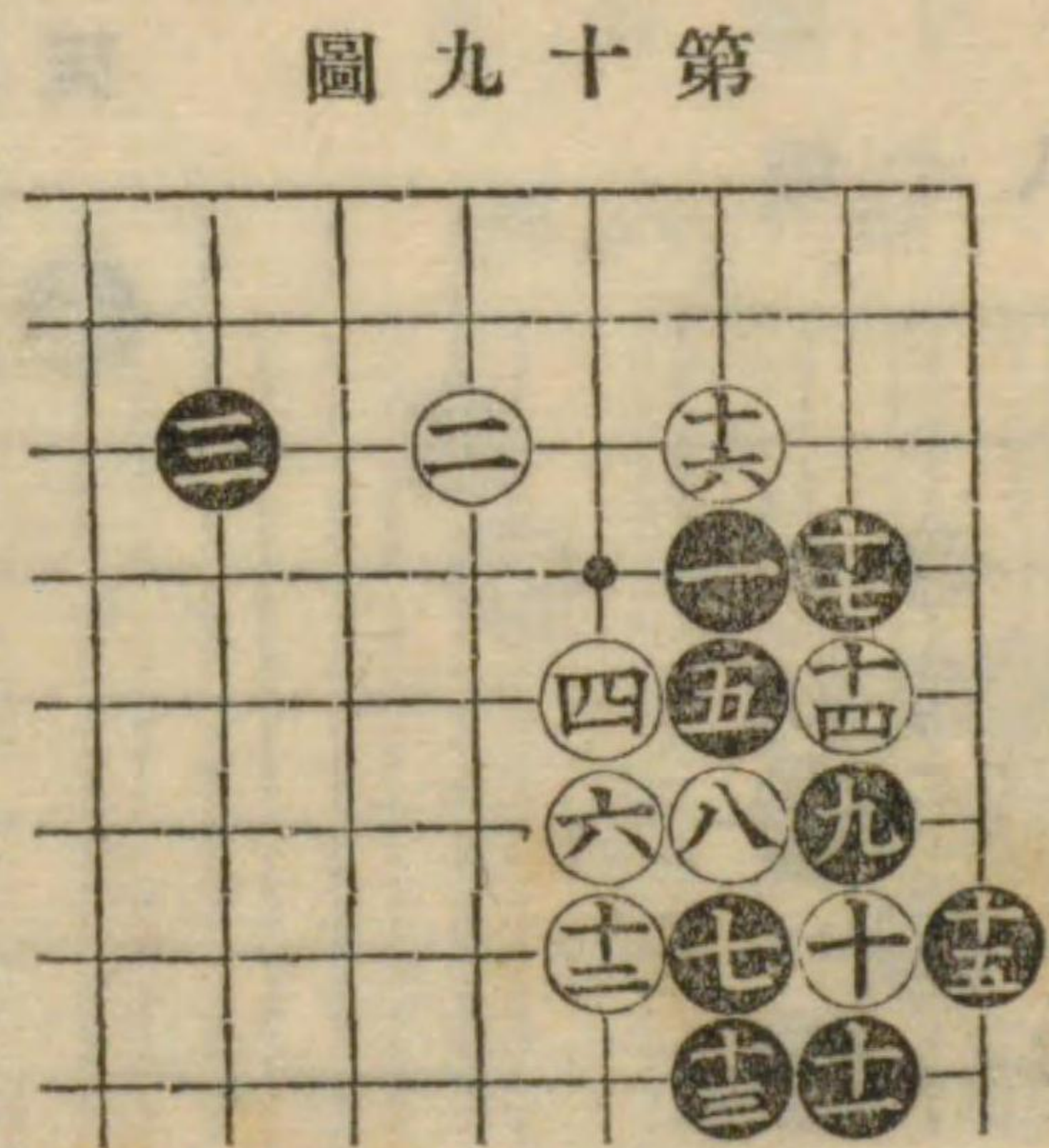


圖 九 十 第

「ぬ」には白のツケる手筋が残るので黒が悪るいそれ故に黒が直ちに「に」と縛ぬる手は良くない必ず十一か「は」に打つた後にすべきである此譜で白が「い」に出でたら黒は「ほ」に受け白が「に」に下つたら手を抜くし又「と」か「へ」の何れに切つても其切つた白を抱へて打つことゝ心得られよ。

●黒五、七の出切りは「い」に這つて悪しき場合に用ふる手段なり(第二十一圖)

●黒五と出で七と切る手段は普通の様「い」に這つて居られぬ場合に用ふるのである然し斯く振替つては折角の出切の趣意を損すさればとて黒が十一の手で三の一子を十二に引き出すと白から「ろ」に打たるる手がある(次圖に説示す)又白が八の時に只十にツケれば黒から八に伸びられて白が十二に三の黒を抱へた時黒に十一と縛ねられて之は白が甚だ不利の形勢となるのである此の八の手で「い」に押したり十一に伸びることも場合によりて打つことがあるがこれは後に示すことにする。

圖 十 二 第

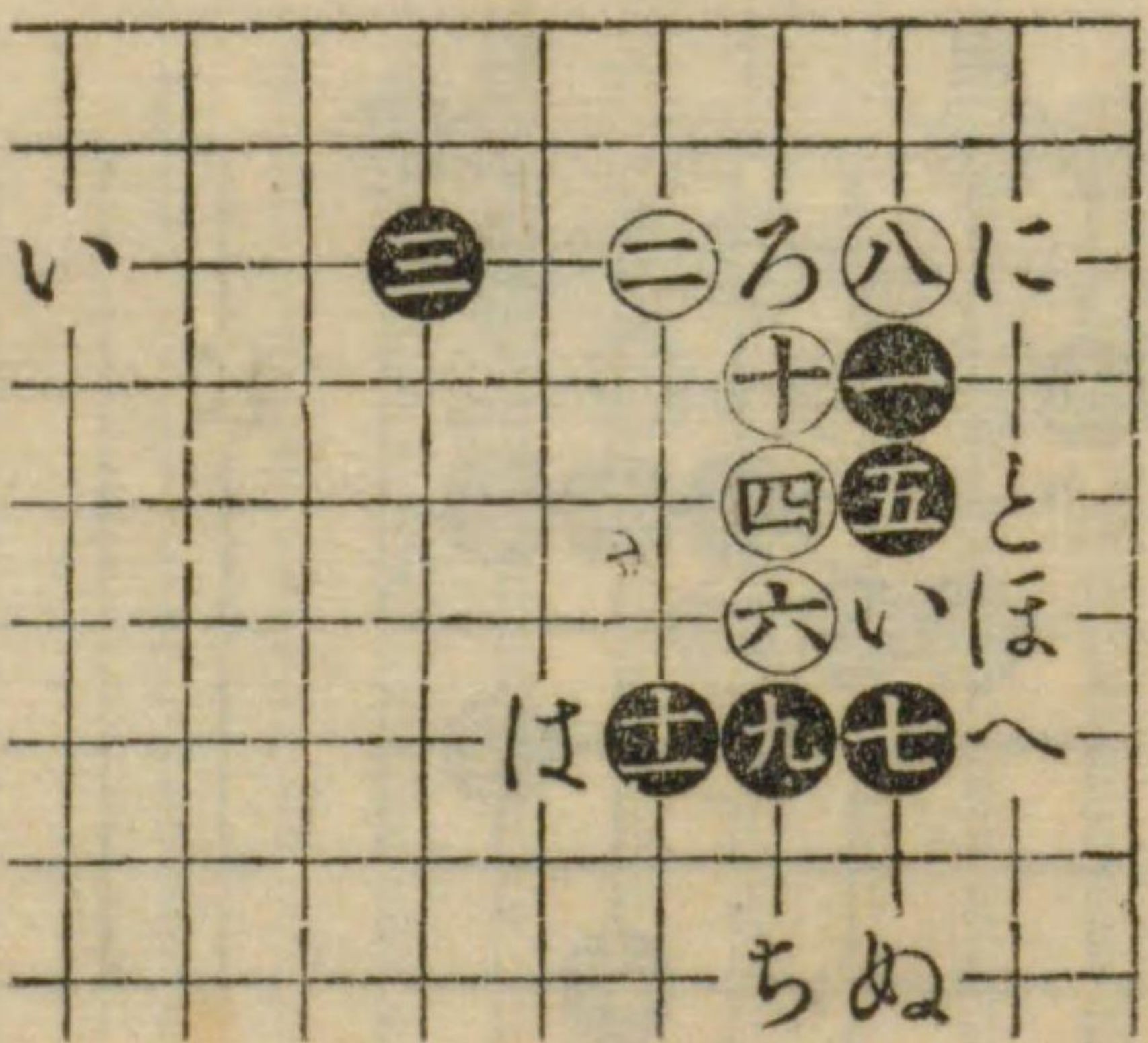
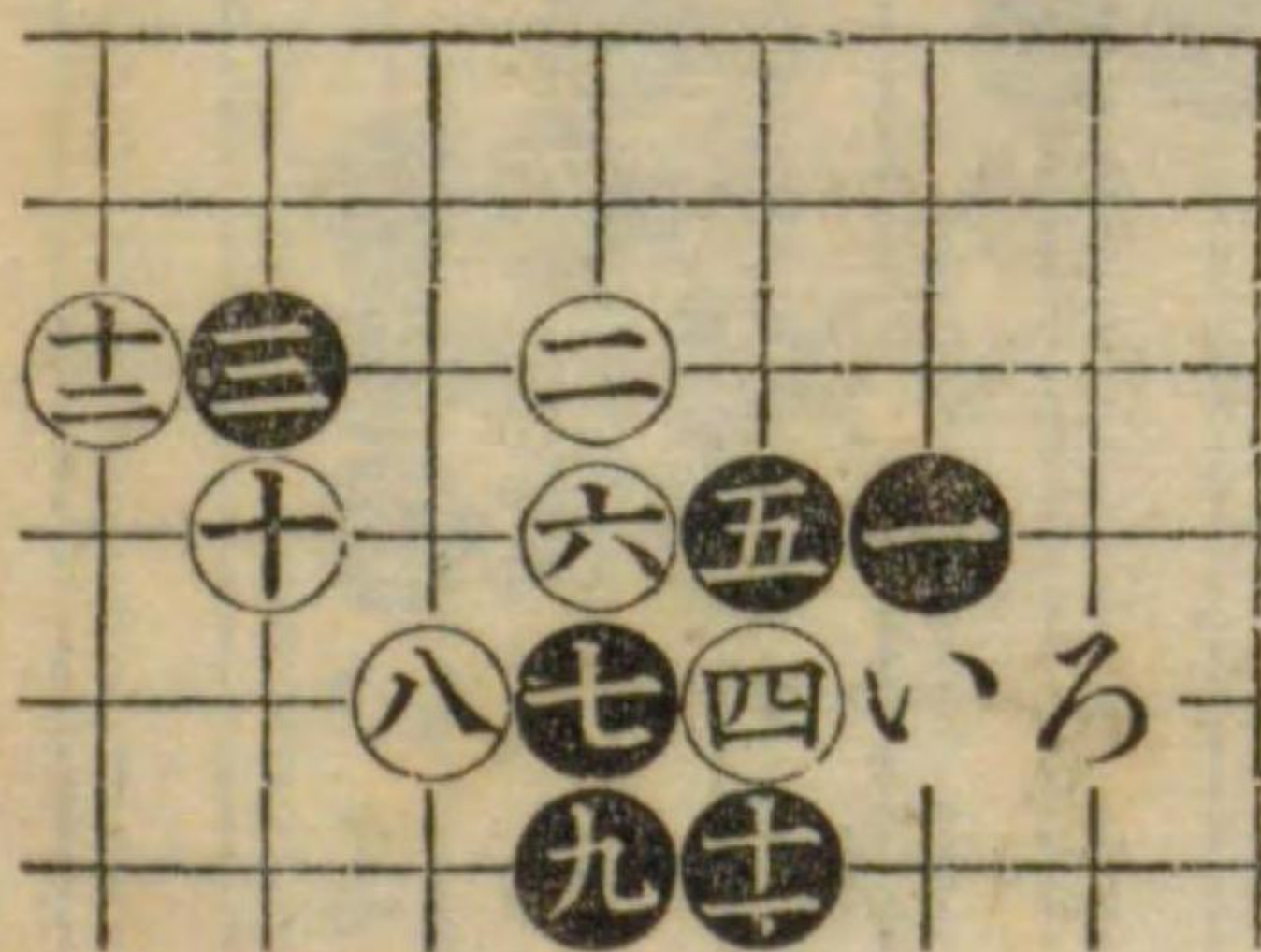


圖 一 十 二 第





○白十二は面白き手なり(第二十二圖)

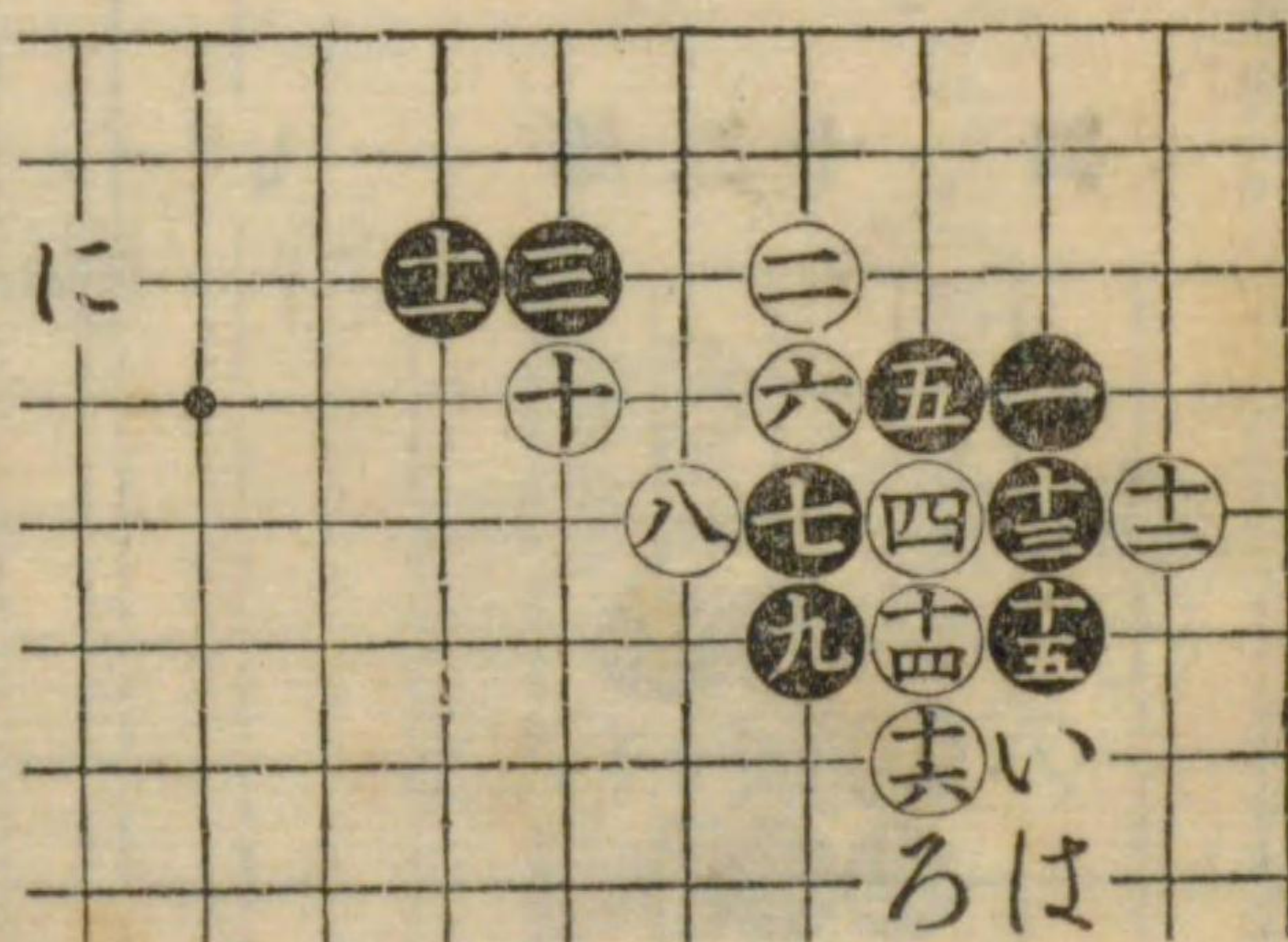
●黒十一は五、七と出切の趣向を貫徹するために打つのだが少しく重い手である○白十二一寸離れた手で面白い若し此の手で十三か十四に打つたら黒に十二か十六に捲られて悪い事は言ふまでもないそれ故に斯く角(カドと稱す)に打つて黒が十三、十五と出づるにつれて十四、十六と伸びるといつた風に打つたなら黒の七、九の二子は自然と遊離して死物同様になり同時に白は中央の形勢が厚壯になるを以て黒が右側の這ひを止めれば白は「は」に曲げ込む手がキビシクなり上方には「に」の要點が残るによりて此の結果は白の有利に歸する事疑ない。

○白八の伸び無理なり(第二十三圖)

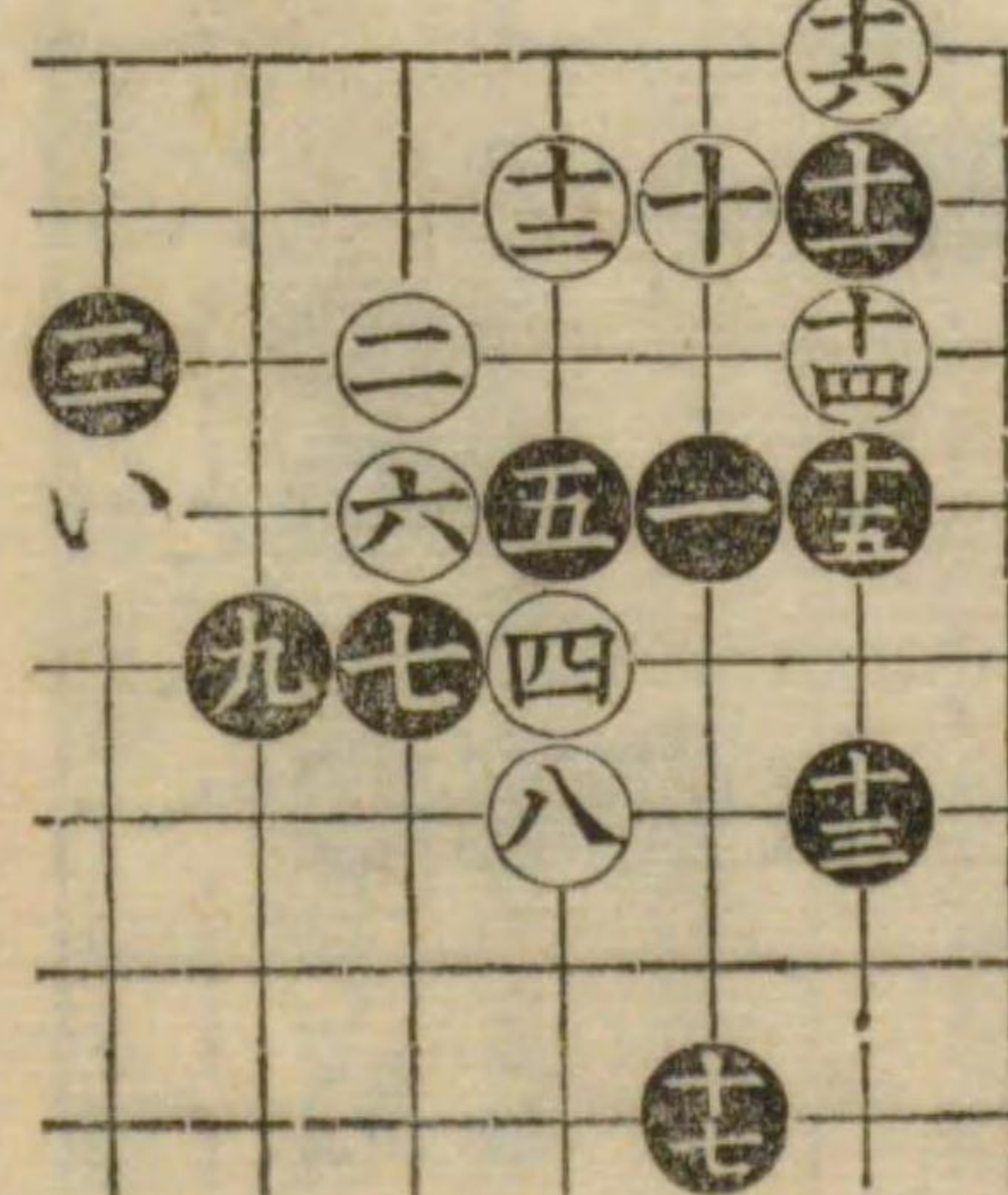
○白八の手は「い」にツケコス意味でもあれば格別普通無理である此圖は單に心得の爲に掲げたのである●黒十一とツケを打ちて十三と斜走し後に十七と連絡した姿形に注意せられたい

○白八の抑へ悪し(第二十四圖)

第二十二圖



第二十三圖



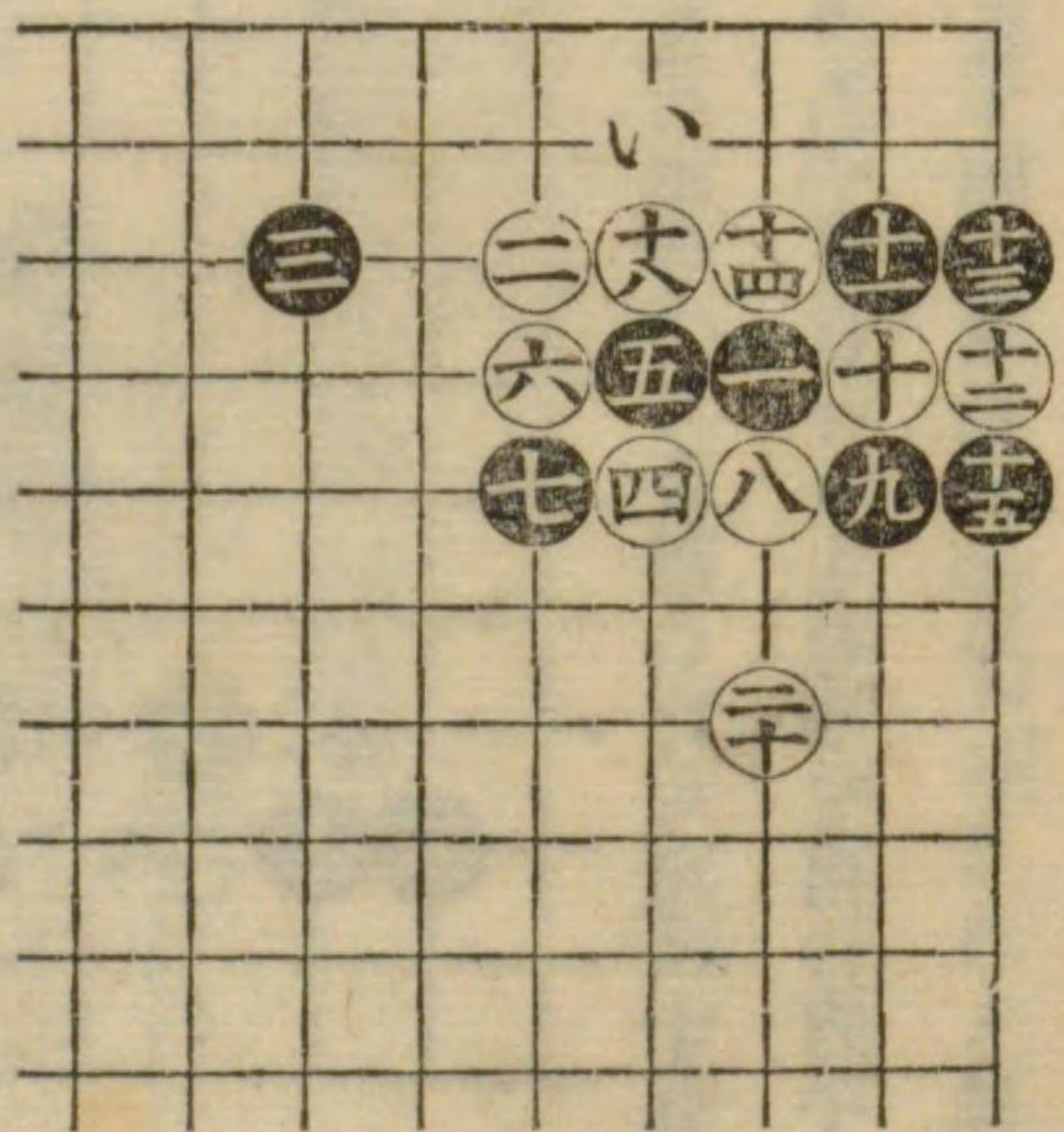
○白十の切りは常用の手筋で少しく碁を學んだ人には自然に打てる●黒十三は白の趣向に乗る手で甚だ危険だ斯かる場合にはいつも注意すべきことである「い」に外してしまへば白が黒より七と切られた左右の石を凌ぎ切れないこれは最初八の手が悪いからだ。

十六の處刺

十七の處提

十九二目粘

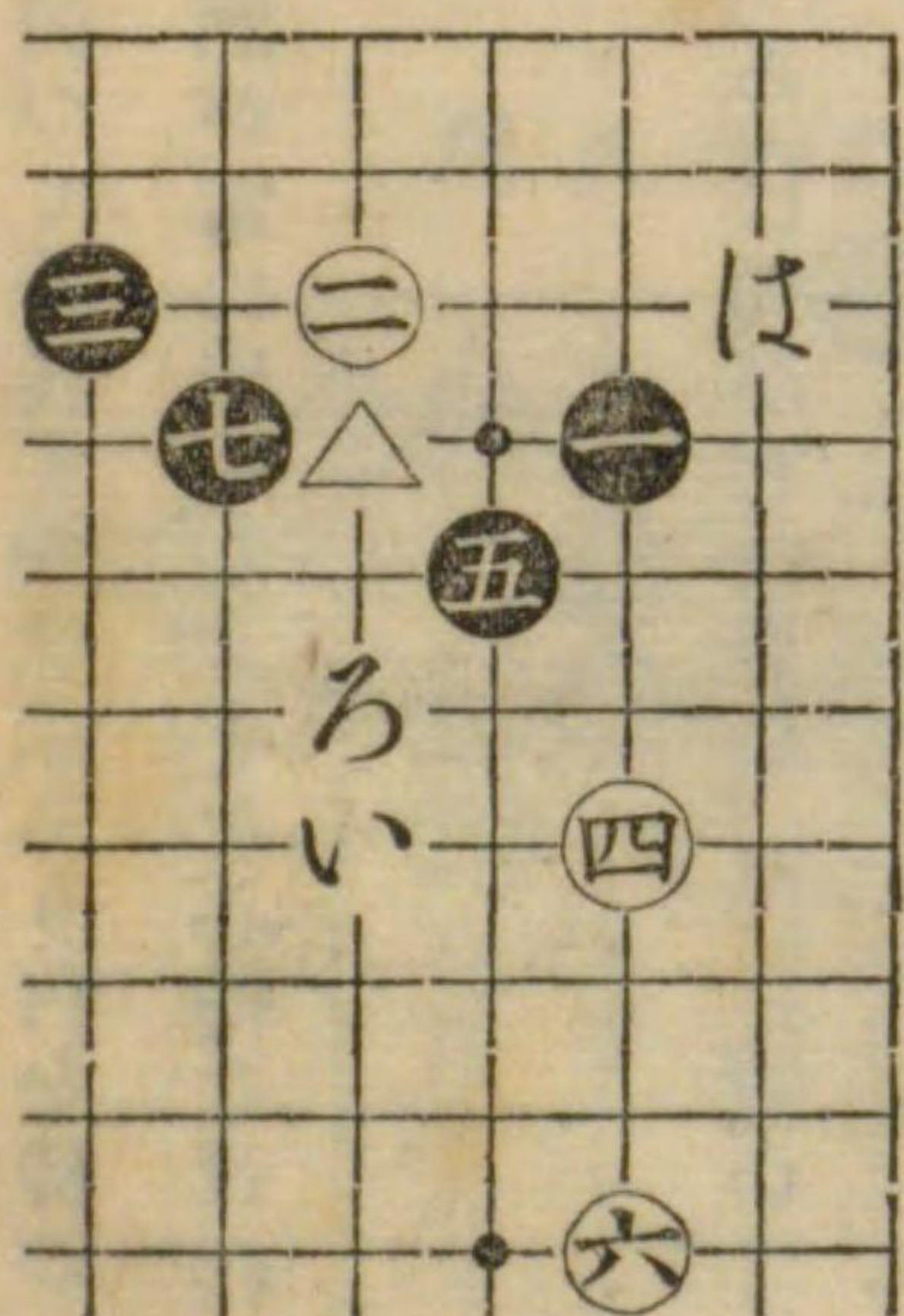
第二十四圖



○白四は二一の白を捨つる趣向の手なり(第二十五圖)

○白四は夾み返へしといふ手で二の白を捌くに工合の悪い時に此白を捨てる趣向の手だが其四と着手する側面の釣り合ひをも見ての事である○白六の手は若し黒三の夾みがない場合には趣向によつて「い」に飛ぶこともある●黒七は確かにこの白を取る場合には差支ない然し全局の釣合上此手は後れる氣味があるし又割合上凝(重複)の姿もあるそれ故に斯かる形

第二十五圖





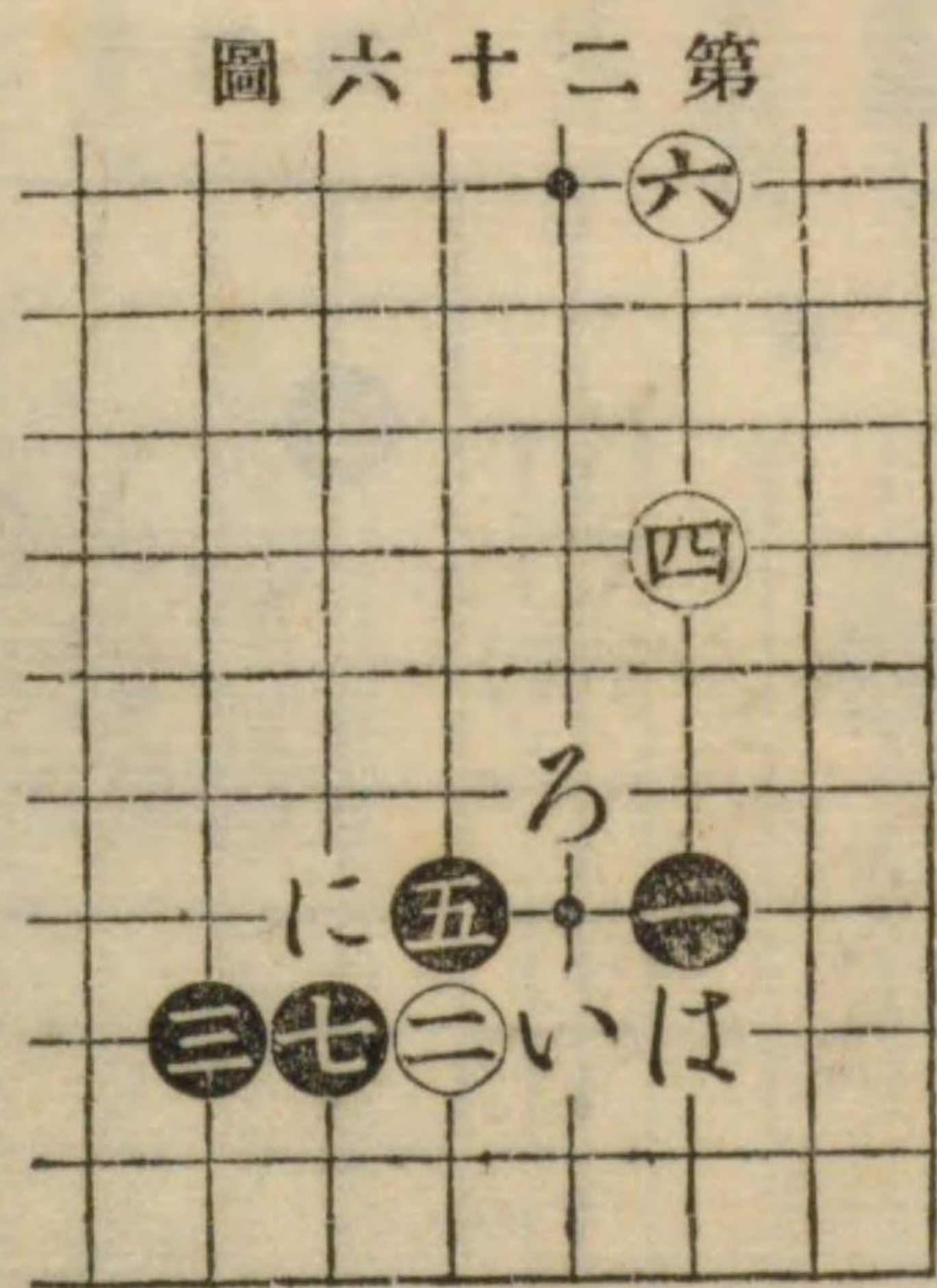
勢の時には「ろ」に尖むが宜い此の「ろ」に打つ手は圍ひの様で上部に向つて發展する意味あり白を持つた時などには無論「ろ」に尖まざるべからず然し白から「は」にオク筋が常に出来ることを心得なければならぬ

●黒五は征を見計ひて打つ手なり(第二十六圖)

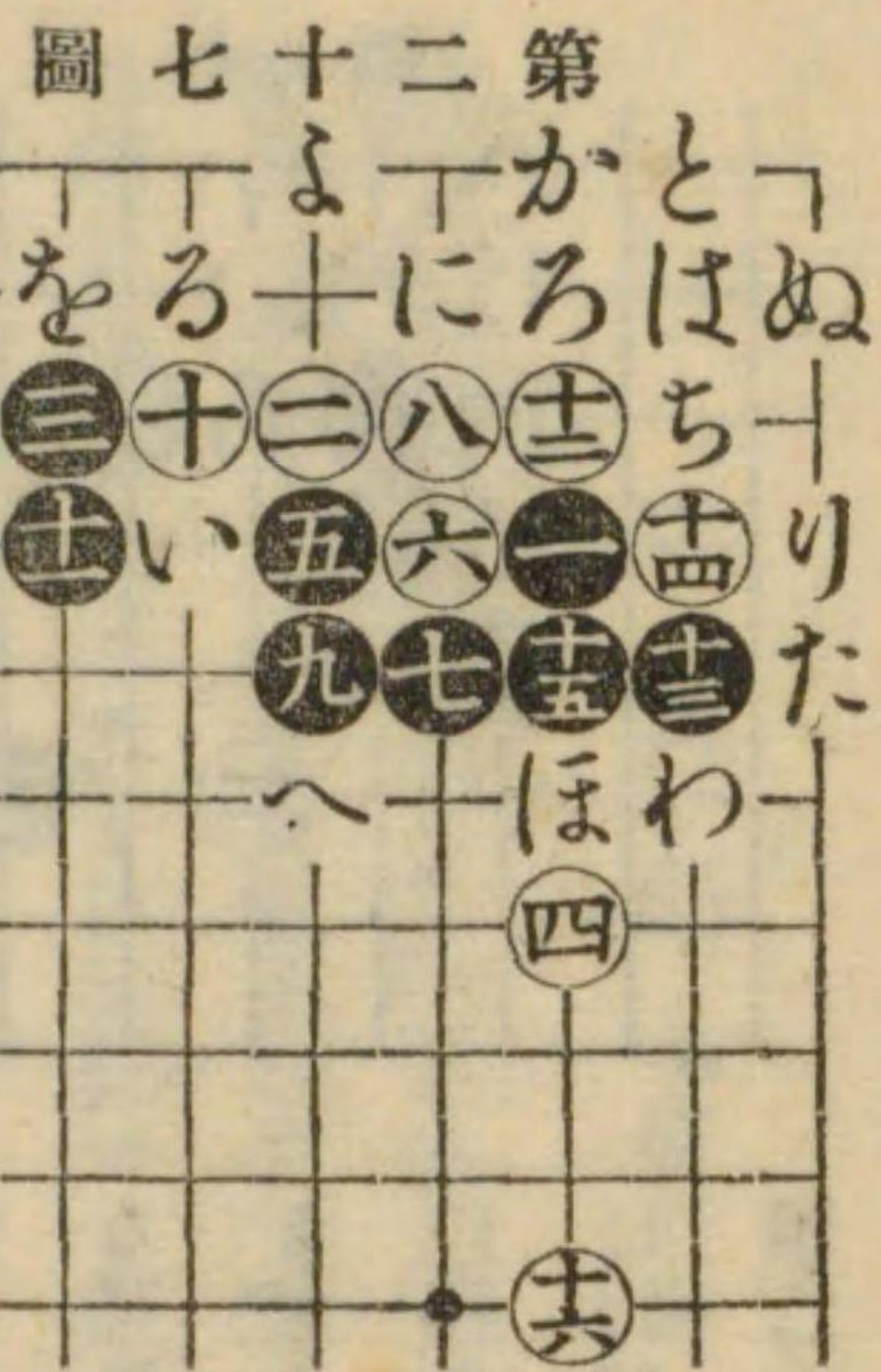
●黒五とツケル手は白から星に刎ね込まれても黒が「い」に切り白が「ろ」に伸びた時黒が「は」に續いて五の一子を「に」と征(シテウ)にかけられぬ時に打つ手である  
それ故に征に取られる場合には黒は「ろ」にコスムが善い此圖のやうに白が星に刎ね込む手がないとして斯く六と二間拆きをし黒に打たるゝわけでは白の方が割合上宜しくない。

○白六も征を見計ひて打つ手なり(第二十七圖)

此圖は征のアタリがない時に白から六と刎ね込まれた形である圖のやうに十六までの運びとなつては黒が少しく不利である●黒九の手で「い」に引いたら白に十五と切られ黒十二白「ろ」黒「は」白「に」黒十三白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」にオキとなつて白の方手數善く勝となる若し今述べた手順の内黒が「ち」にツガないで「ぬ」に下つたら白が「る」にコスミ黒



第二十圖



「を」に抑へ白も「わ」に約へ黒十四に續きし時白「か」にツギ黒「よ」にオキ白が「た」に縛ねて一手勝である次ぎに前に述べた黒十三に縛ねる手で單に「と」に下つたら何うなるか圖を以て示さう。

本圖は前圖説明中の變化なり(第二十八圖)

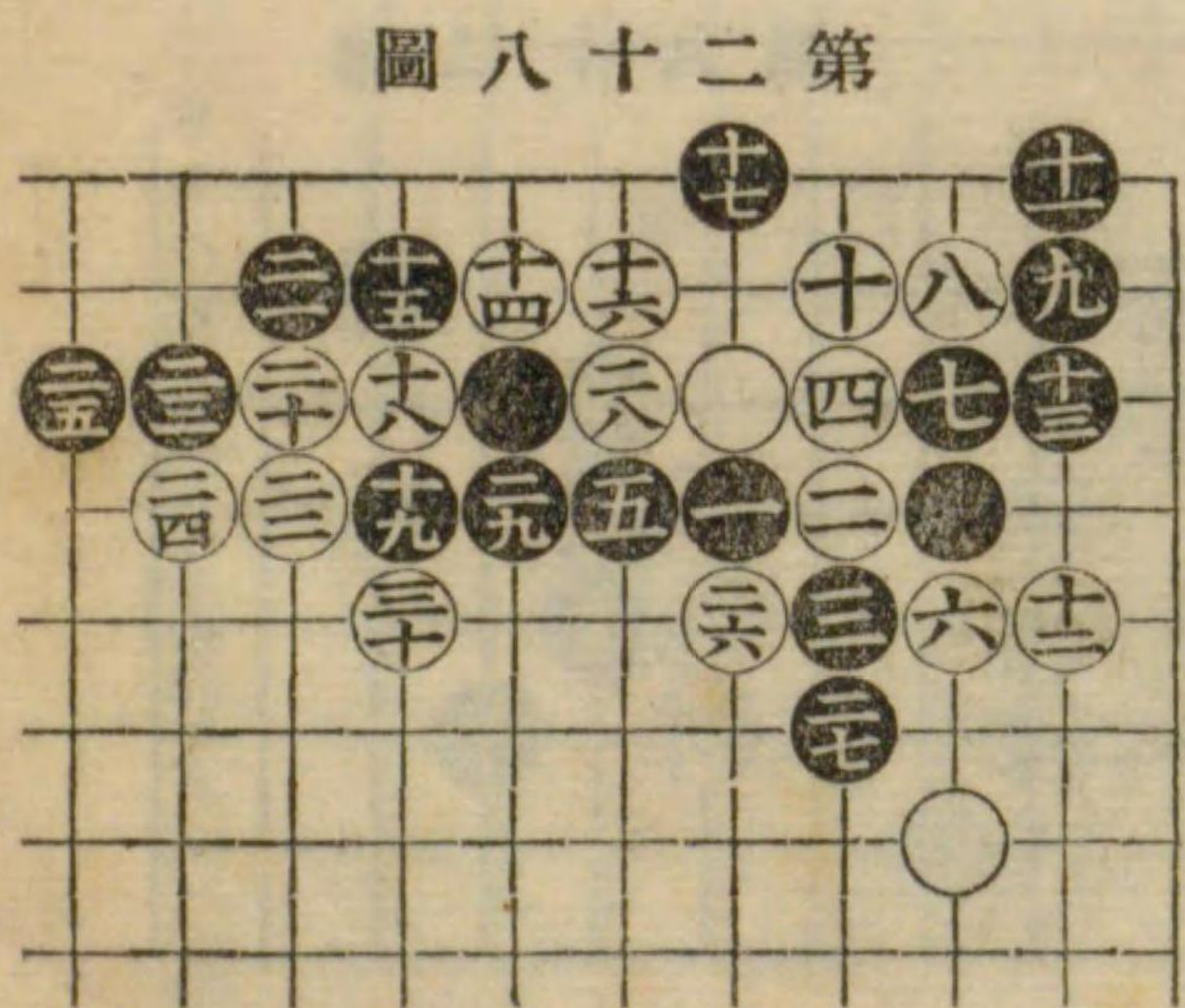
●黒十一の手から前圖の

説明から變化した打ち方で

斯くの如くなつては黒の不利甚しく黒五の手を二六に續かぬと白から六に切られて面白くないことを示したのである

○白四は左側を經營せんとする手段なれども急に過ぐる傾あり(第二十九圖)

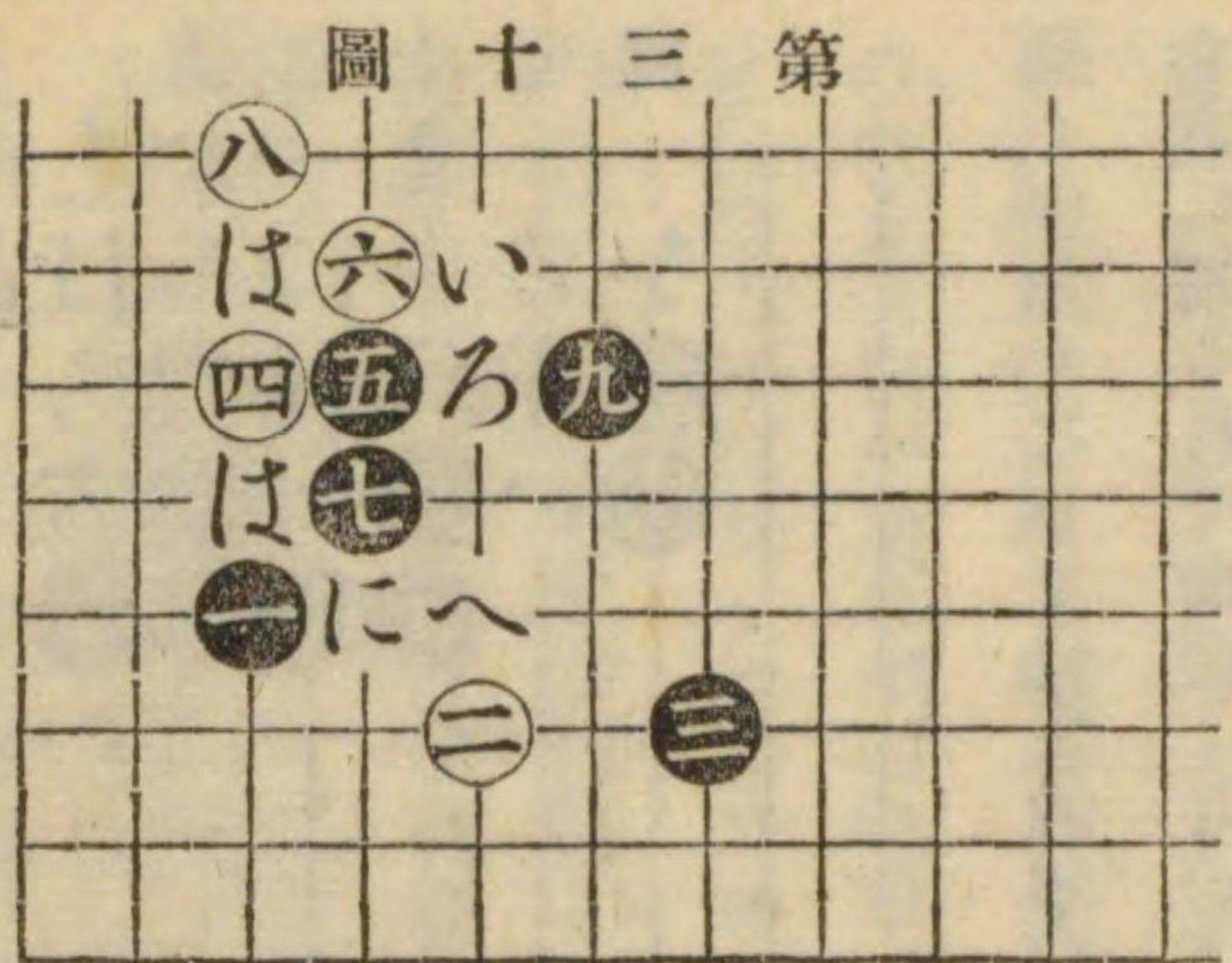
○白四と一間に夾み返へした手は二の白を捨て、左側を經營しやうとする様な場合に多く用ふる手段ではあるけれど何分にも三と黒が一間夾に(三間夾の時には用ふることも多し)あつては急促に過ぎるこ



第二十八圖



とがあるによつて其用法を慎まねばならぬ●黒五のコスミは普通ではあるが善い手で以下十までは尋常の應接である圖の如くなつては白は三の石を放棄したわけで此一隅だけの割合を考へてみるも白が少しく損であるそれ故前に述べた通り左側に趣向のある時は格別漫然打つのは悪るい

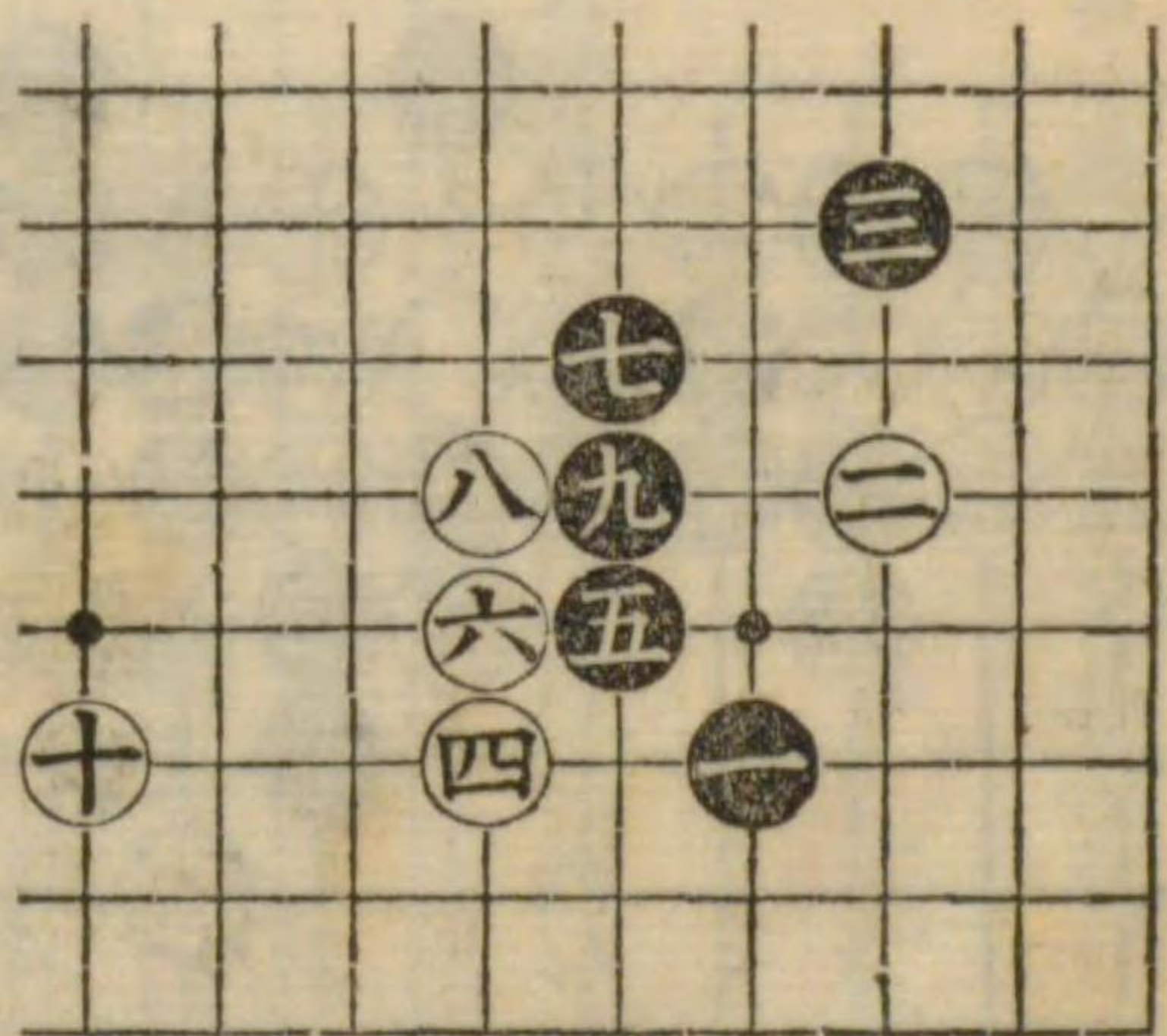


●黒五のツケは上部の場合に因りて用ふべし(第三十圖)

●黒五の手は前圖の様に七に尖んで

は白から五に押されて上邊の都合が面白くない時などに用ふる手である又黒九の一間飛は善い手で「い」に縛るなぞ初學に見受けることがあるがそれは宜しくない單に圖の如く打つが善い●黒七と引く手で「ろ」に行る事もある是も亦一策である其時白が「は」に突き當つたら黒「に」に行びて差支ない又白が「は」に突き當る手で「ほ」に續いたら黒は「へ」に頂(ツケ)て善い。次ぎに一間夾まれて手抜きした後の打ち方を示さう

圖九十二第

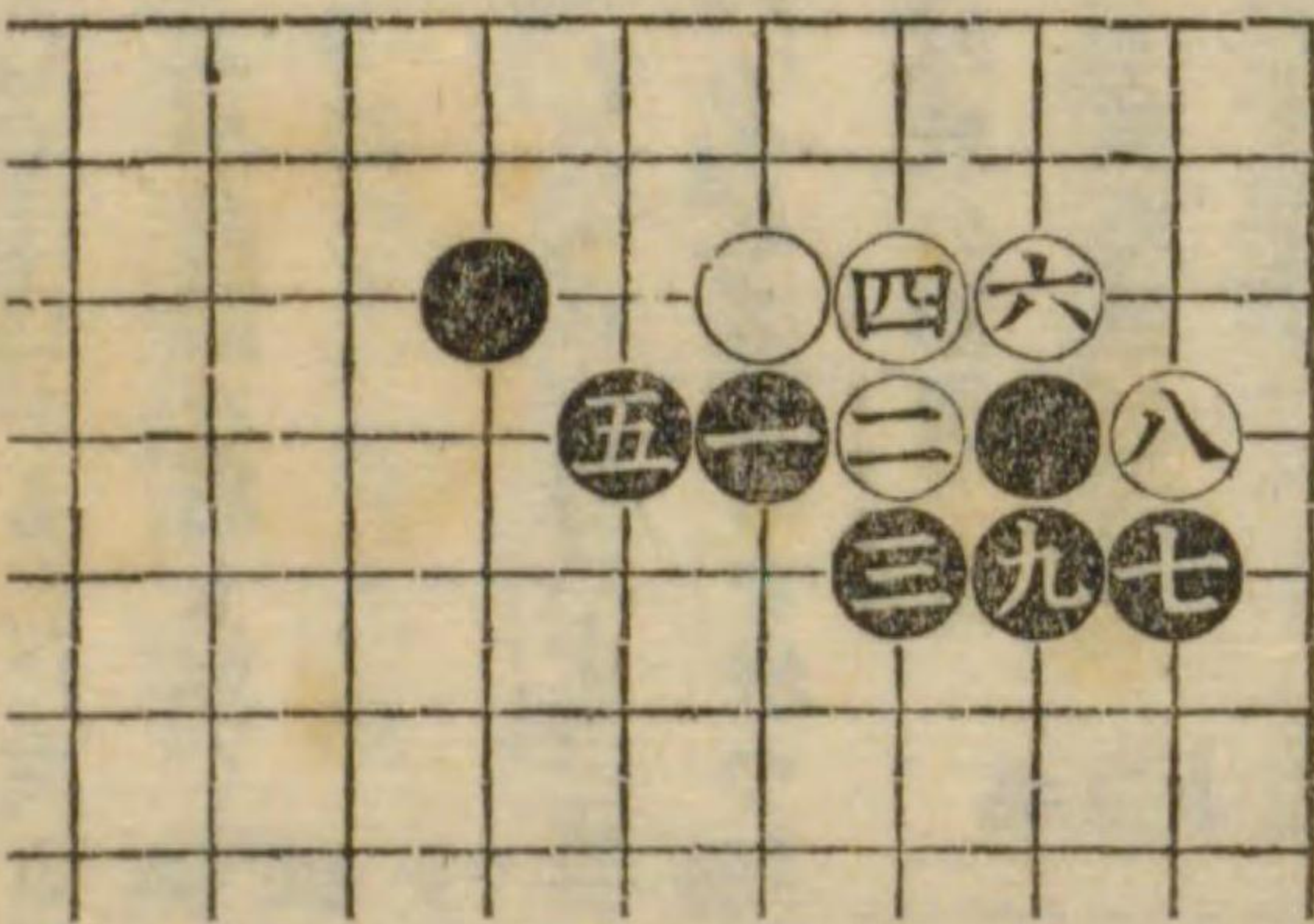


一間夾 手抜の部

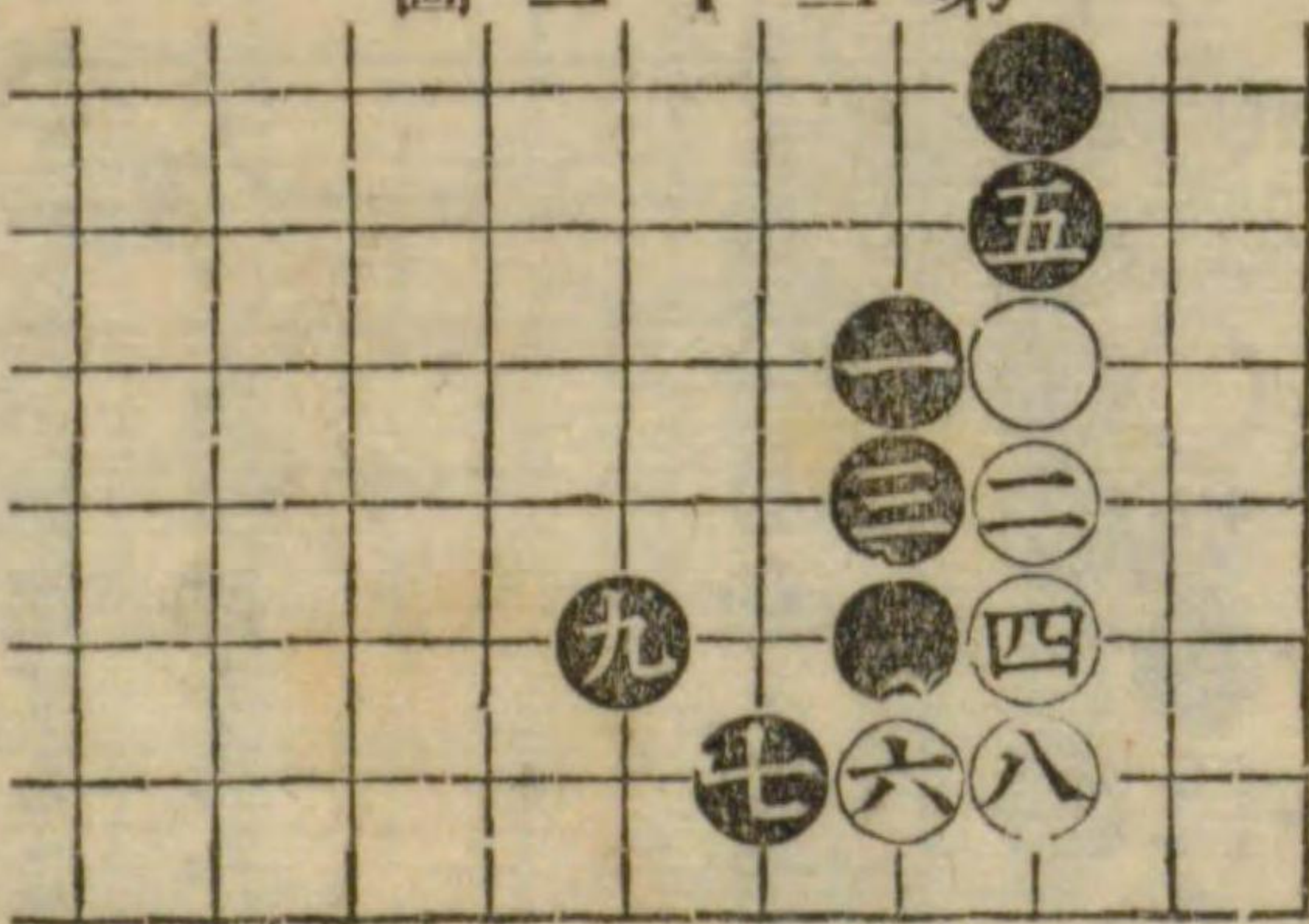
敵より一間に夾まれて手を抜くは全局の權衡を見てのことなり(第三十一圖)

●黒一の手は外部を封鎖する手で敵が手抜きした場合に此の隅を定めるのに最普通の手である○白二の勿ね込みは征の當りを見計つて打つべき手である其時黒が三の手で四から切り白三黒六となつて白が五に縛ねて一の黒を追つてもアタリがあつて黒が征にならぬ場合には此の二の勿ね込みが大悪手となるので必ずアタリのない時に限つて二と打つべきである右の次第ゆる白二の手の利く場合には圖の如く黒は上部より三と打つ外ない以下六まで運んだ時黒七は良手である八又は九に受けるなどは宜しくない如此處は斯くカケツグのが本形と心得られたい○白八は先手をとる趣向の手である

圖一十三第



圖二十三第





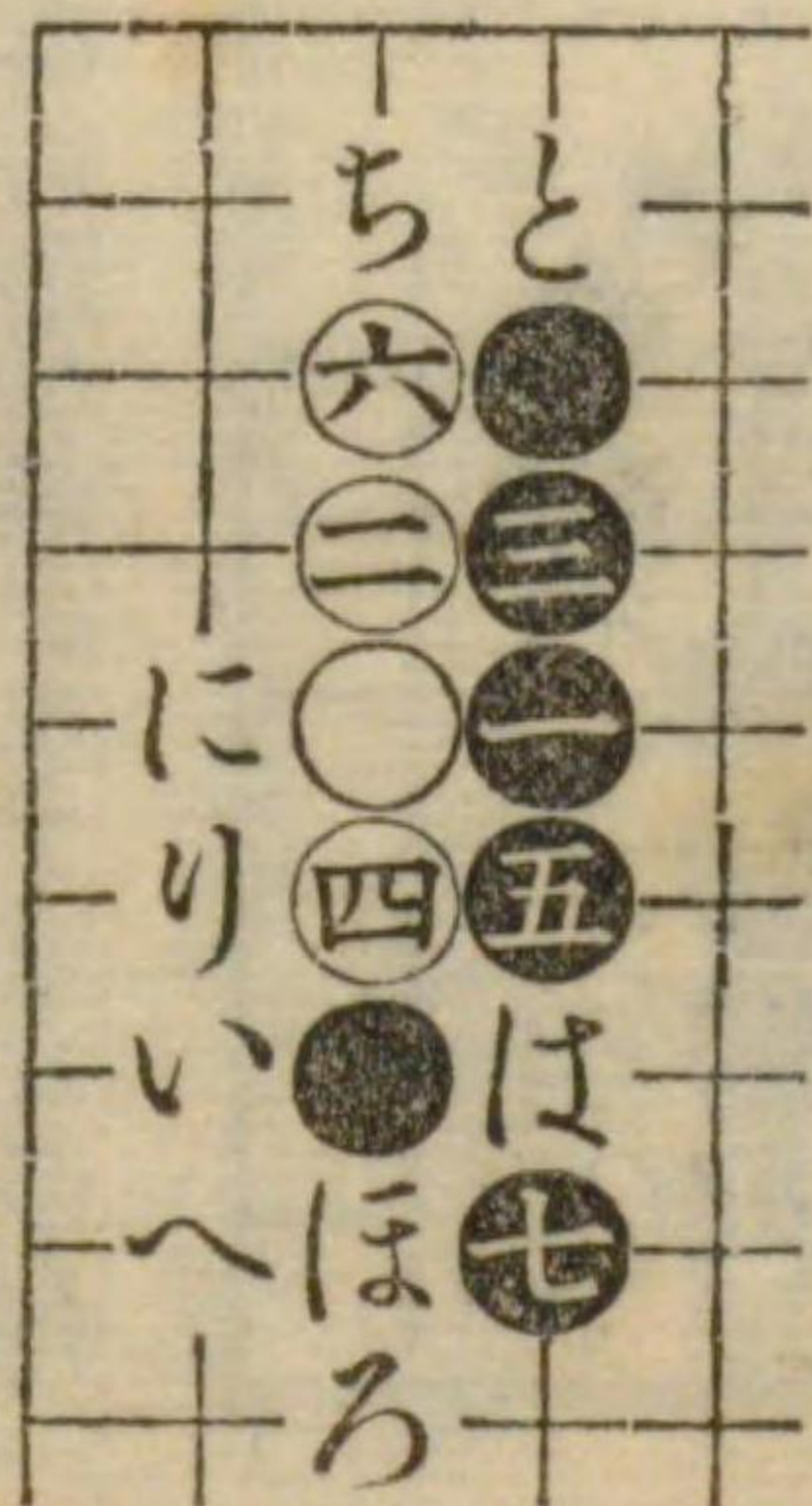
○白二は征悪しき時の手なり(第三十二圖)

○白二と行びるのは三に刎ね込めば黒から二に切られる手ある時に斯様に打つて活きる策なのである  
●黒三は斯く續く外はない此の手を四に抑へたりしては白から三に突き出されて形勢が破壊することは言ふまでもない●黒五は直ぐに打たぬこともあるが此隅を極り善くするには九まで運び置くのか確である。

○白四は黒より此處に打たるゝを嫌ひしなり(第三十三圖)

○白四は六の處に約へ黒から四の處に打たれ「と」にハネツグのを嫌つたのである借本圖の如くなつては最早此儘で白は生形があるが外部は黒が極めて厚壯の形勢となるに因つて白六の手で「い」に縛れるのも一策である其時黒が六に曲つて來たら白は「ろ」に斜走するのが手筋である其時黒が「は」に續いたら白は「に」應じて面白い尤白を外部に出して不利な場合には黒は六に曲る手で「ほ」に行び白が「へ」に這へば黒は又「ろ」に行びて打つこともある其時つまり白は六に約へなければならぬのである又説明が前に戻つて黒が五に約へる手で「は」に行びることがある其時白六に抑へ黒「と」白「ち」黒「い」白「ろ」となるのは通形である斯くなつて後黒は五の處の穴を塞いで

第三十三圖



おいても善く又右側に拆いておいて遠く五の穴の出切りを補ふ手段もある何れも全局の模様によつて撰ぶのである

一間夾の部終

二間夾の部

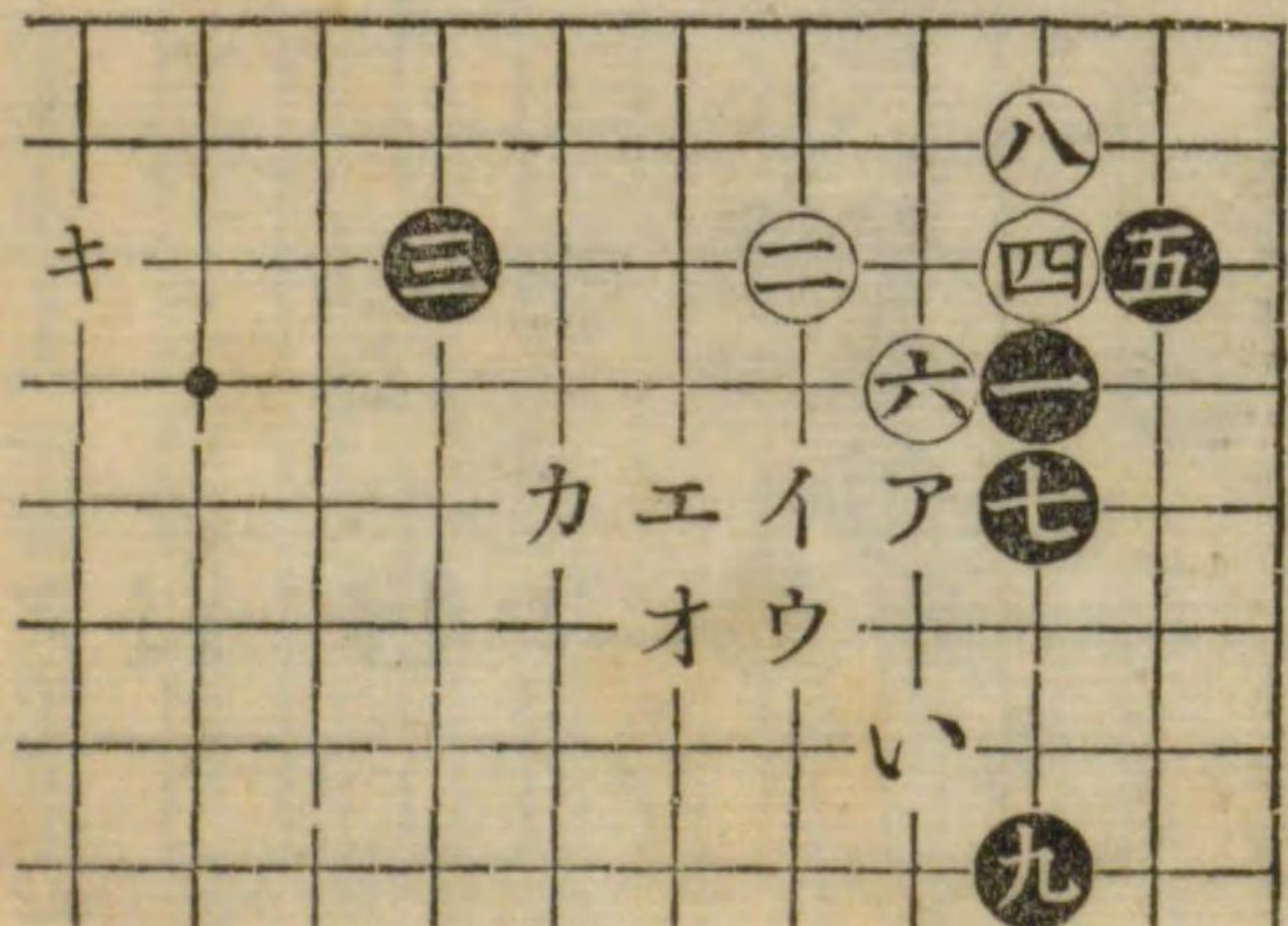
○白四のツケは自から守るの手なり(第三十四圖)

●黒三の手は白二と二路の距りがあるので二間夾と稱へるのである  
二間夾みでも白か四とツケル手は堅くて守る手である  
其理は一間夾で述べてきたときと大同小異であるから略する

●黒九の手大勢上尙詳しくいへば下邊と中腹の碁勢によりて「い」に斜走することもあるし又は此の手で「ア」に曲げ白「イ」黒「ウ」白「エ」黒「オ」白「カ」となつてから「キ」に二間に拆く手もある尤「オ」の押しは下邊の形勢によりては打たないで直ちに「キ」に拆くこともある

○白六の飛びほ場合によりて往々用ふる手なり

第三十四圖



(第三十五圖)



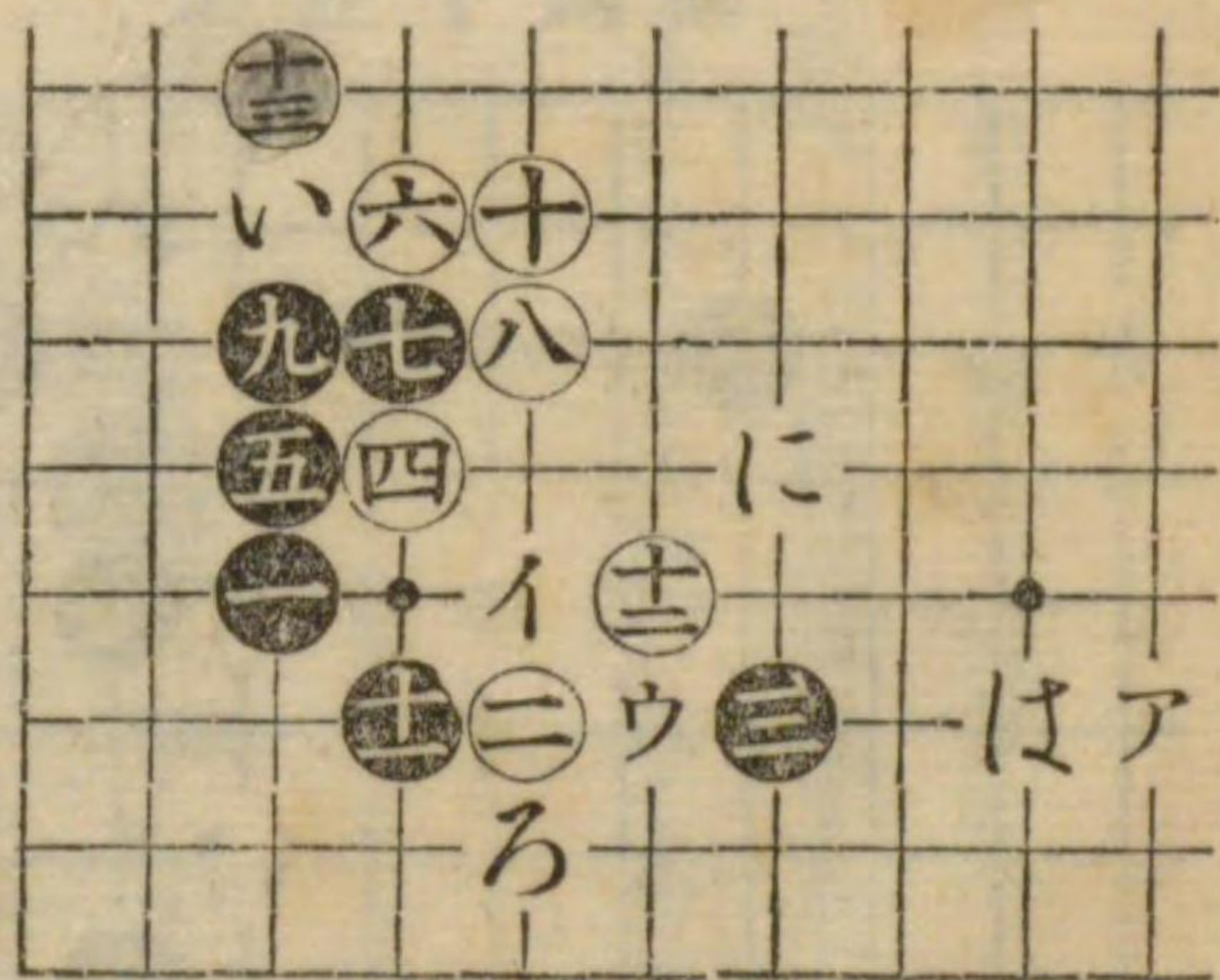
○白四のカケは二間夾の時でも差支ない○白六と飛ぶ手は趣向として往々用ふることがある●黒十三までは双方通常の打ち方である尤白六を七に伸びるのは一間夾の時にもあつたが黒は「い」に飛んで常體である●黒十一は單に十三に打つこともある其理は黒が白から「い」に約へられては不利で何うしても十三に飛ばなければならぬ時は十一にコスミツケて白を十二に打たすも次に白から「ア」の邊に夾まれる手順となる時に三の黒が窮屈を感じるによつてであるそれ故に十一とコスミツケる時は黒が十三の手で「ア」に拆く方が宜しい又

白が十二の手で「ろ」に下つたら黒は十三に飛ぶことが甚必要で手を抜くことは出来ぬなせなれば白が「は」にツメて來ても「に」に飛んで置けば「イ」綽ね白十二の時「ウ」に切る味が残るによつて三の一子は格別恐るゝに足らないが「い」に約へらるゝ事は如何にも嚴しいからである

○白四は二の白を軽く捌く手なり(第三十六圖)

○白四と二間に飛ぶのは「い」にツケても「ろ」にカケても又は手を抜いても悉工合の悪い時打つ手で黑白互に二間飛となる此圖の形勢は割合上白が少しく損ではあるが漠然としておつて黒から急に打つ

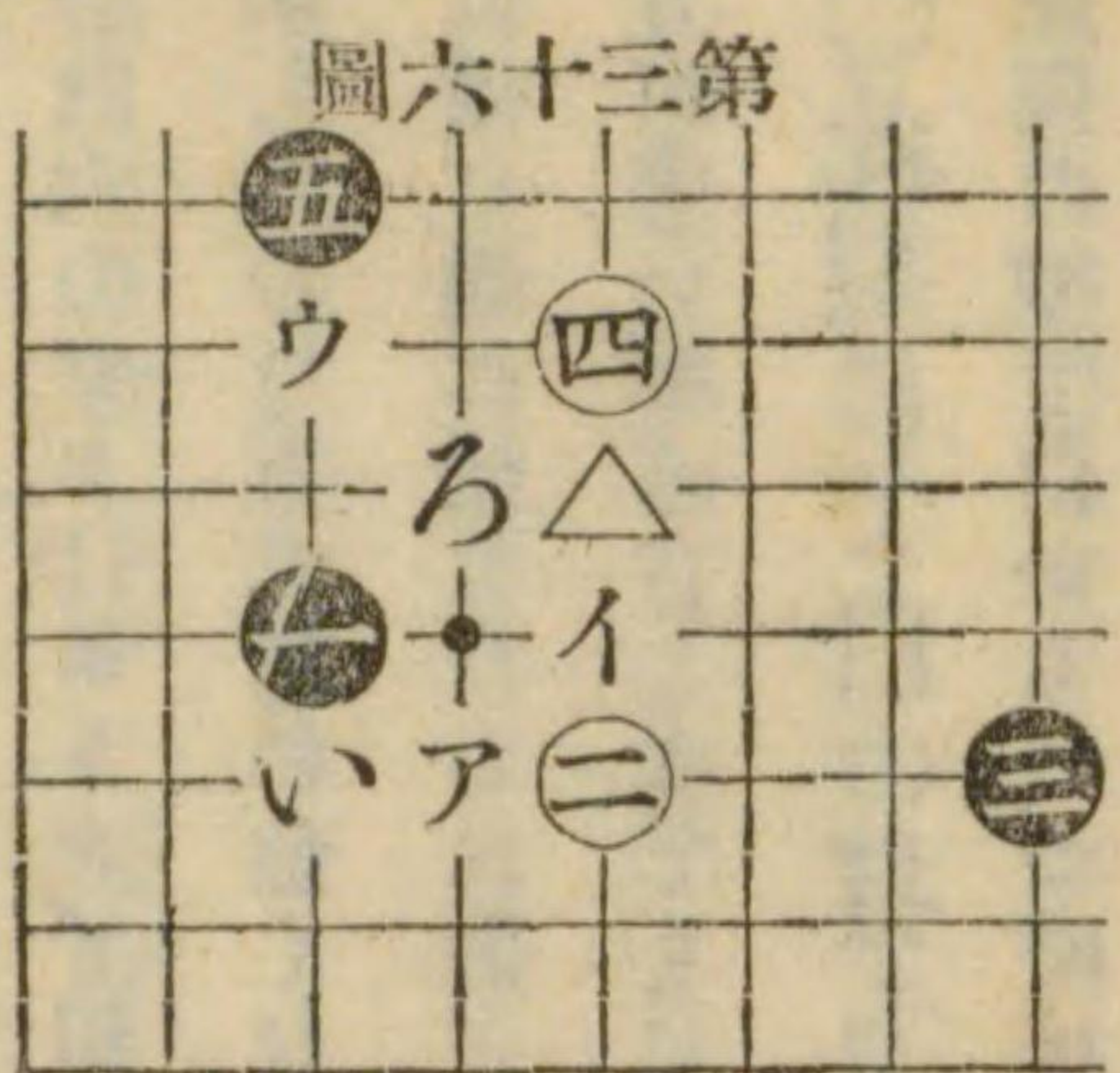
圖五十三第



手が無いといふ利益がある●黒五は斯く二間に飛ぶのが最普通の手である局勢によつては「ア」にコスミシケ白が「イ」に立つた時「ウ」に一間に飛ぶ手段は稀に用ふることがある又五の手を△印にツケル事もあるがこれは次圖で述べやう

●黒五は戦を挑む手なり

(第三十七圖)

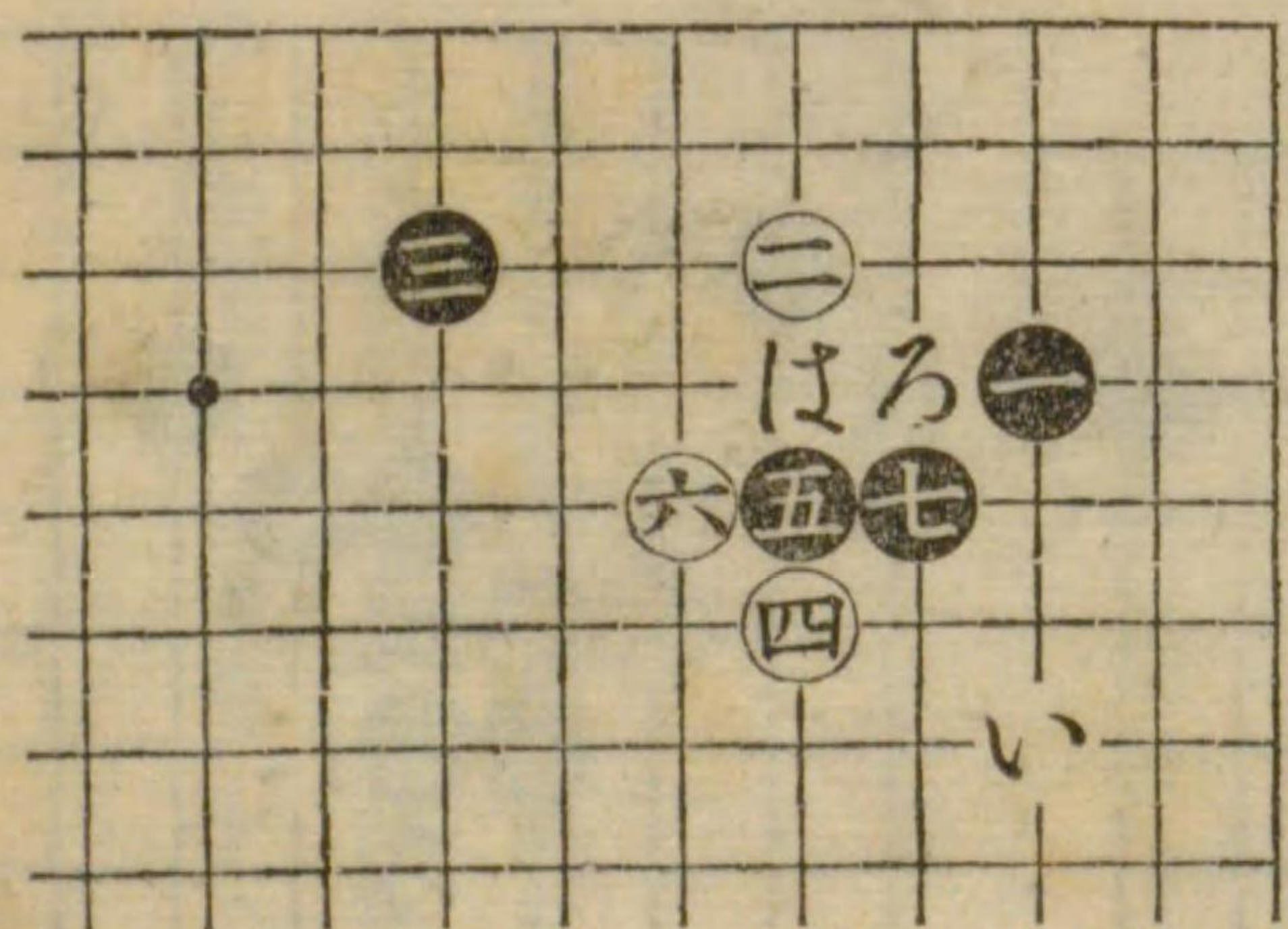


●黒五は普通の如く「い」に打ちて可ならざる場合例へば下邊との釣合上位が低くなつて悪い時などに用ふる手段であつて白の受け方によつては烈しく戦鬪となることがあるから豫じめ覺悟しなければならぬ○白六の手を若し七の方から綽ねたなら黒「ろ」に出で白「は」に切つた時黒六と行びてこれは白が非常に無理である又黒七と引くのを「ろ」に突き當る俗手を數々見るが是亦大悪手で共に初學の注意すべきである

○白八は面白き手筋なり(第三十八圖)

○白へのツケは輕妙な手筋で圖の如く振替る意味であるそれは「い」に引けば黒から九に切られ白十一

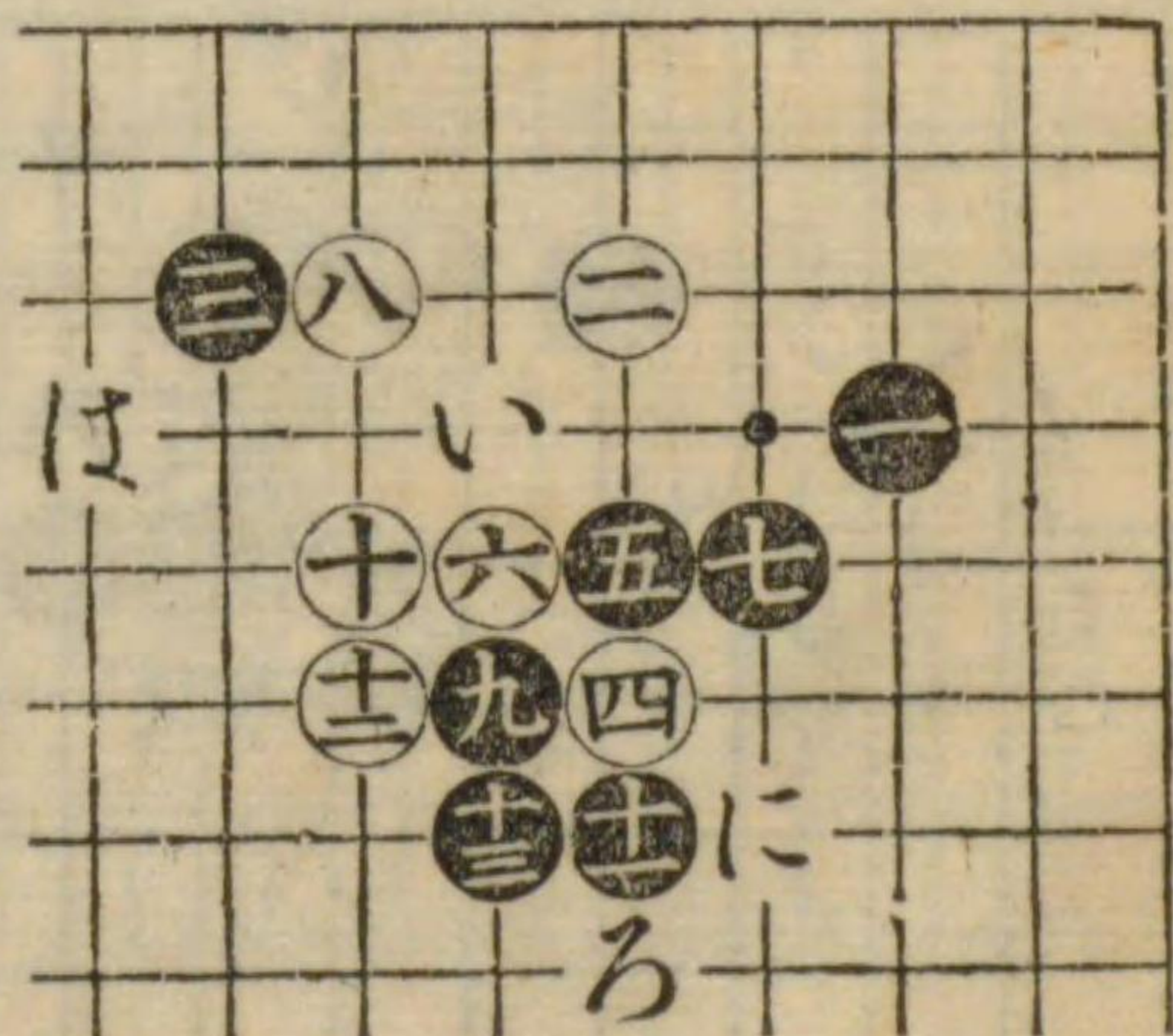
圖七十三第





黒十三「ろ」となつて戦争になるが一體これは黒が悪いのであるから場合によつて斯くなつても黒の方が差支ない時に打つのでこれは五とツケルも時分に篤と考ふべきことでそれ故に白も八の手で「い」に引いて面白くないと見た時斯く八と軽く打つのである尤白が八の手で「い」に引いた時黒が九に切らないで單に「に」に飛ぶこともないではない尙白が八とツケた時振替る事を黒が不利と思ふ場合には九の手で「は」にコスミ白が九に續いたら「に」に飛んで打つのも一策である

圖八十三第



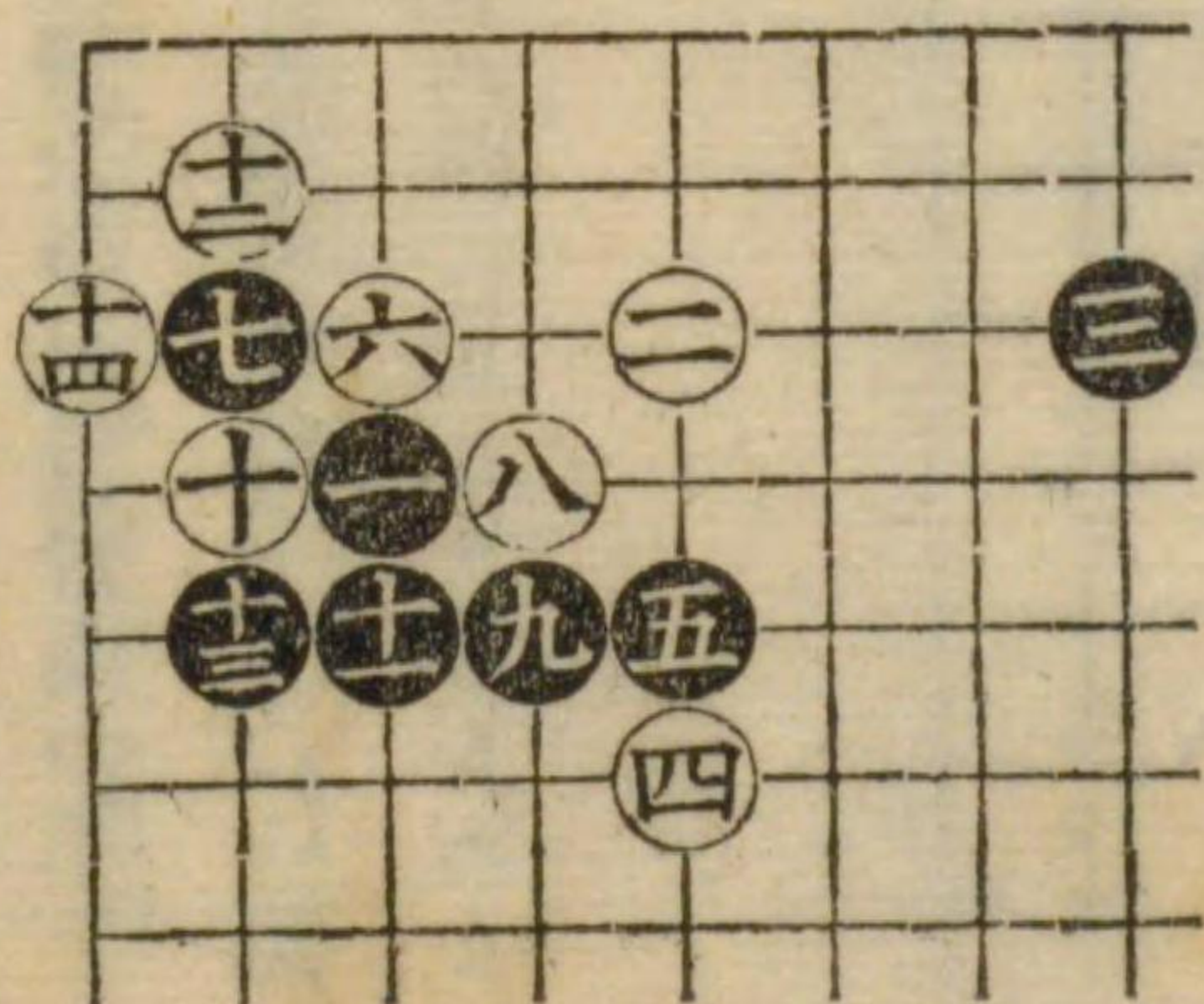
○白六は多くは場合悪し(第三十九圖)

○白六のツケはホトンド用ひぬ手であるが單に參考の爲め黒の受け方を示したのである圖の如くなつては四の一子を委棄し外勢は黒に得られ白は僅に隅に活きたるに過ぎない此の位なら始めから四の手で六にツケた方が善い事は言ふまでもない

○此型にて白の打ち方(第四十圖)

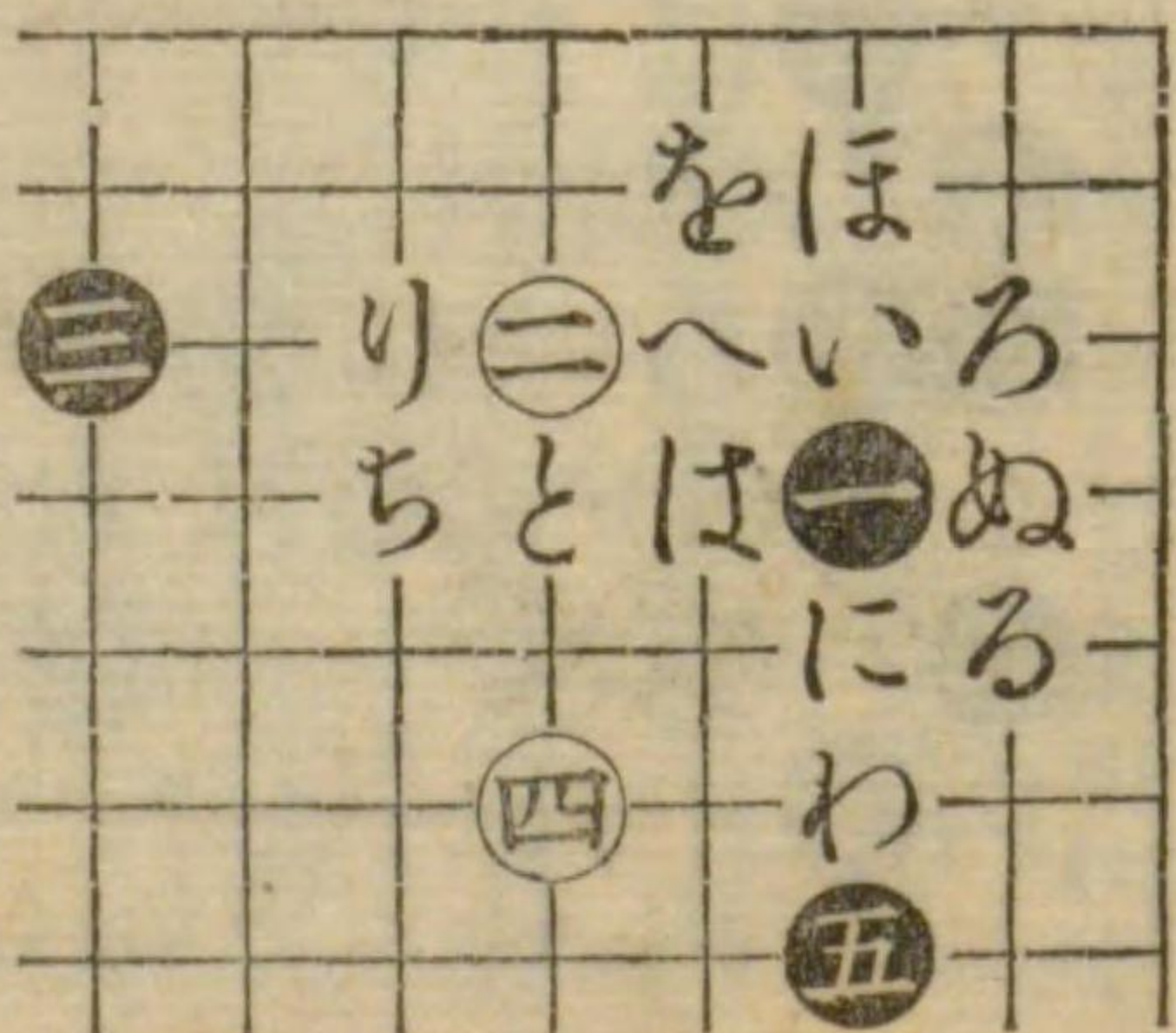
此圖の型で白から打つ時は先づ「い」にツケ黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」と

圖九十三第



なるのが普通でこれは白が己れを治むる趣向ではあるが後手である白「い」の時黒が「ろ」に受けなくて若しも「は」に行びたら白「へ」黒「と」白「ち」黒「り」白「ぬ」黒「る」白「ろ」となるか又は白が「ち」の手で直ぐに「ぬ」にハネツイで打つても善いそは場合によつて選擇すべきである何れにしても黒「は」と行びることは不利の場合が多い偕て本圖に戻り黒が「に」に引く手で若し「ほ」に縛ねたら白「に」黒「へ」白「を」黒「い」白「と」黒「る」となる位である其時白は轉じて三の石を夾撃して善い又白が右側を經營しやうと思ふ時は「を」にアテル手で「ぬ」からアテ黒「い」白「わ」にツキアタリとなる事もある何れにしても黒の方が悪い

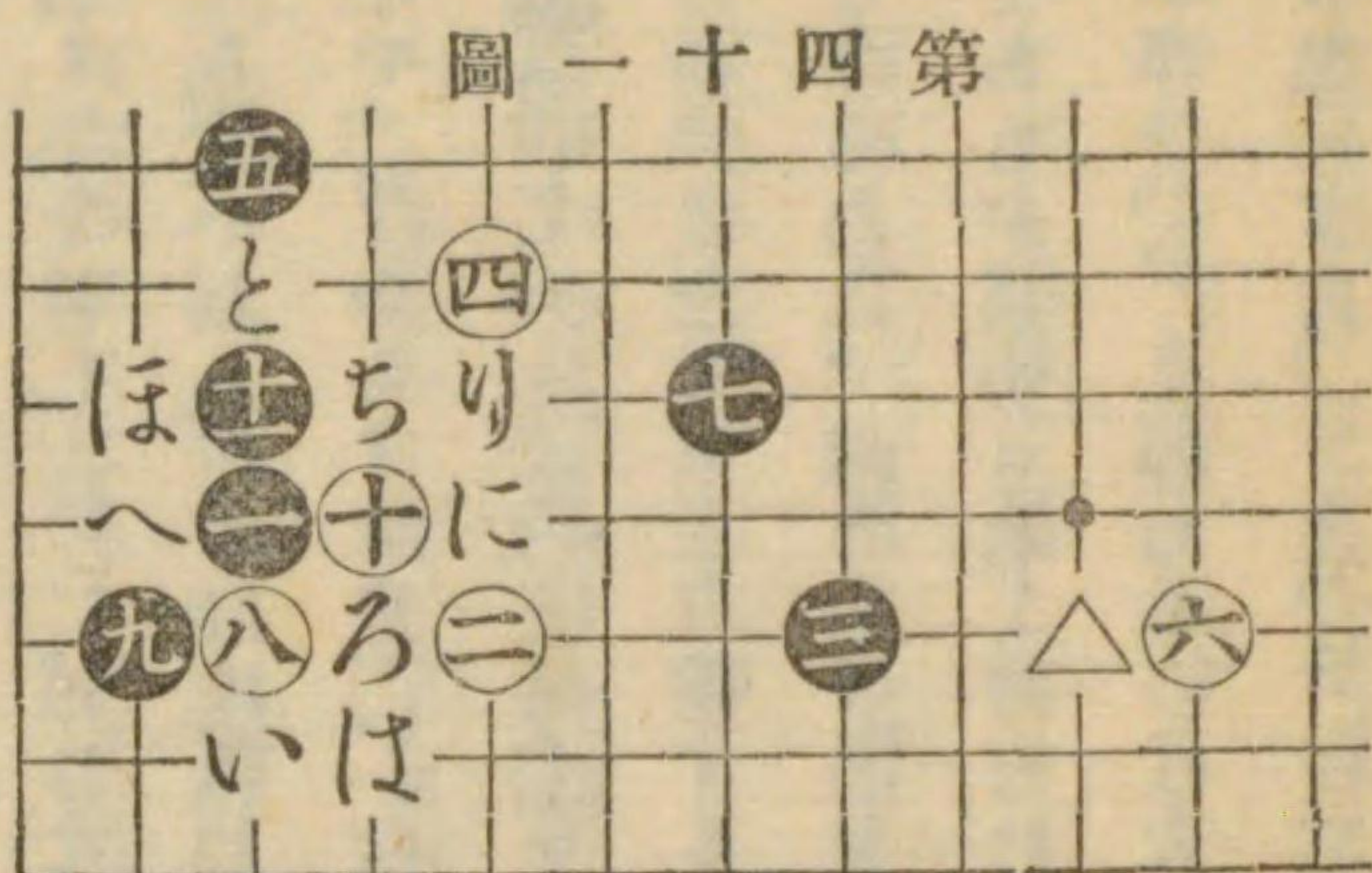
圖十四第



●黒七の桂馬は攻守の働ありて面白し(第四十一圖)

○白六は三の黒を夾撃する手で△印に近かよらぬのは急になり過ぎるのを氣遣ふからだ●黒七は逃げながら白二、四の隙き間を狙つてをる手で即ち攻守兩様の働きがある○白八はただ打つとしても此處であるが黒から七と打たれては尙更斯く打つが善い●黒九の縛ねは普通の手だ●黒十一は通常、十一の手で「い」に縛ねるのは大抵悪いなせかなれば白が十一と縛ね返へし黒が「ろ」に提つた時「は」にアテ黒粘ぎ白「に」黒「ほ」に盤りとなりても白の形が整つてくれれば従つて三、七の石が薄弱となつてくる





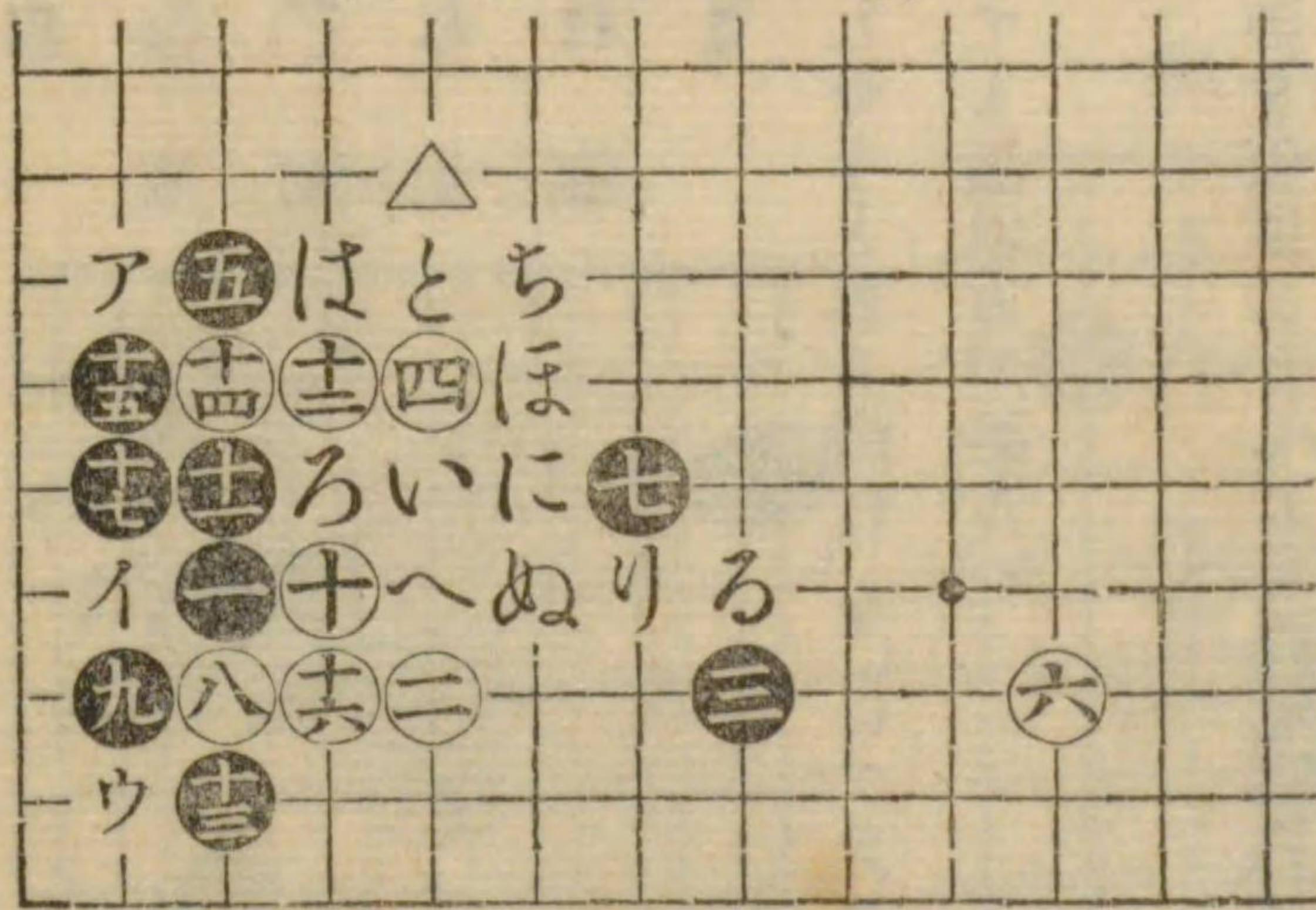
からである尤黒三、七の二子を白が攻めても面白くなければアテル時に考がある即ち「へ」にアテ黒粘ぎ白「と」ち「り」の三つを撰んで五の黒を攻むる趣向に出づることもできる其手段の取捨は白の権内にあつて黒は受け身であるから黒の好都合にはなりにくい夫れ故に縛ねないで斯く十一と引くのである

○白十二は良手なり十三に下るは悪し(第四十二圖)

○白十二は善い手である然し單に良いといつただけでは分かるまいから此の手を十二にナラバないで

通常の様十三に下ると甚悪くなることを述べやう夫れは七の黒があるため若し斯う打つと黒から「い」にツケコサレて白「ろ」黒十二、白「は」黒十四白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」となり白が「ち」に切つても黒に劫を提られて白が大いに悪い又「ほ」に切らないで

圖二十四第

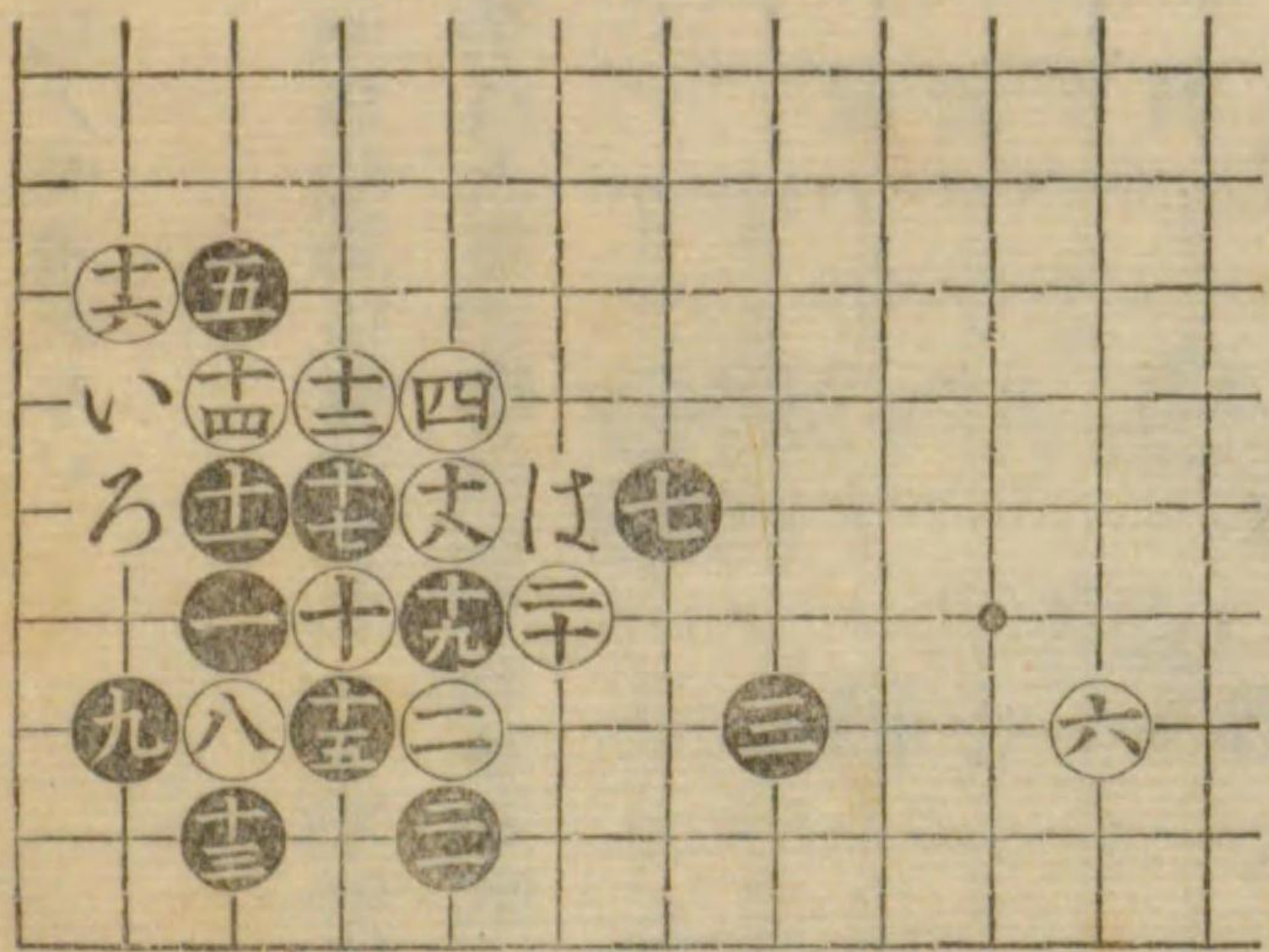


「り」に縛ねても矢張劫を提られて「ぬ」に粘げば「る」に約へられるし「る」に出れば「ぬ」にとり抜かれて黒が先手となるから割合上黒の方が有利である又黒が「い」にツケコシた時白が「ろ」に打たないで「に」にハネコンだら「ほ」に切られ白「ぬ」に引いた時「ち」に立たれて白が不利である又「ぬ」に引かないで「ろ」に出れば十二と切られて前述の形勢と殆ど同様となつて而も割合は一層不良である。だに因つて十二に双ぶ事は緊要で且良い手である●黒十三の手は十四にツイて白を十三の處に下らして打つともある●黒十七のツギは注意の値打があるアイウの何れにツグのも悪い次に打つべき白十八の手は△印に飛ぶ位のものである

●黒十五の提は多くの場合悪し(第四十三圖)

本圖は黒が宜しくない形勢であるそれは黒十五の提りが悪いかからである○白十六の縛ねは面白い「い」に下るのも働きがないしさればとて「ろ」に縛ねるのも黒の堅い方面に向ふ理で十六の下りなどが黒から利く筋があつたりして悪いことはいふまでもない●黒二一の手は良い「は」に切るのは利の様に見へるが劫となつて大に悪い假令劫に勝つたとて大した事もなく若し負けたら大變で

圖三十四第





ある二一と縛ねた手は鈍いやうでも確かだ且實利に於ても切つた手と殆ど大差がない

●黒七以下十一迄最普通適の打ち方なり(第四十四圖)

本圖は白が六の手で他に轉じた場合を示したのである○白六の手を抜いた時黒は七から十一までの様に打つのが最普通である○白十の手を「い」に飛ぶことも稀にはある此手は上部に働かさうとの意味はあるが此の隅には響きがないによつて漫りに打つてはならぬ●

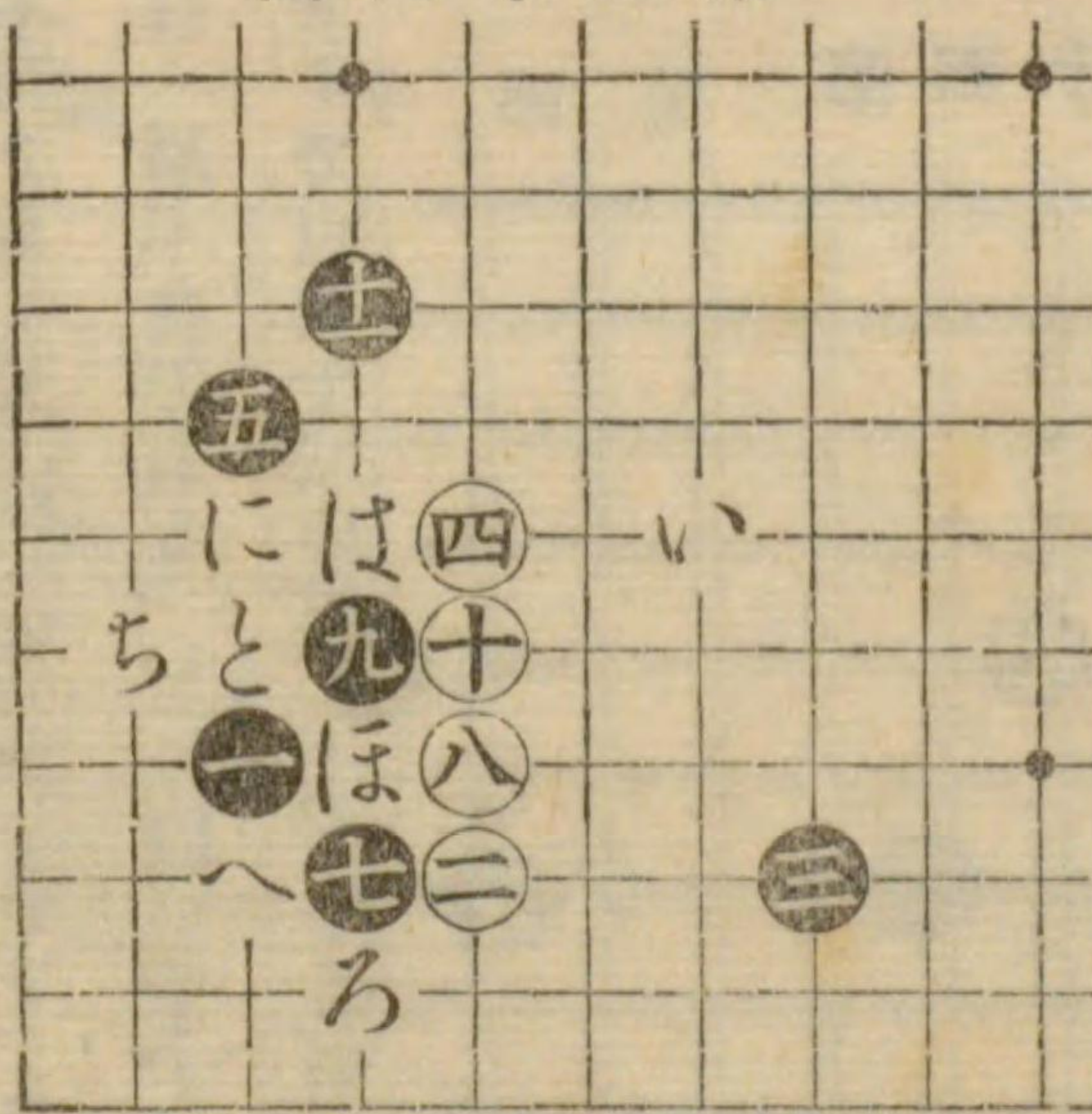
黒十一の手は「ろ」に下る事もあるそれは譜の様にコスンデも上部に餘り効果のない時に白の眼形を奪ひ且つ三の黒を助ける手段である最後に初學のために注意したいのは此の圖で白が「は」に曲つてきたら黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」と運んで黒は

九の一子を軽く捨てることさへ知つておれば差支はない元來白が斯かる手順を打つても面白くないのであるが心得の爲め述べておく。

○白四のツケは場合によりて面白し(第四十五圖)

○白四とツケるのは前に述べた十に飛びや△印にツケでは面白くない時に敵を紛らす氣味で打つ手でおく。

第四十四圖



○白四のツケは場合によりて面白し(第四十五圖)

○白四とツケるのは前に述べた十に飛びや△印にツケでは面白くない時に敵を紛らす氣味で打つ手でおく。

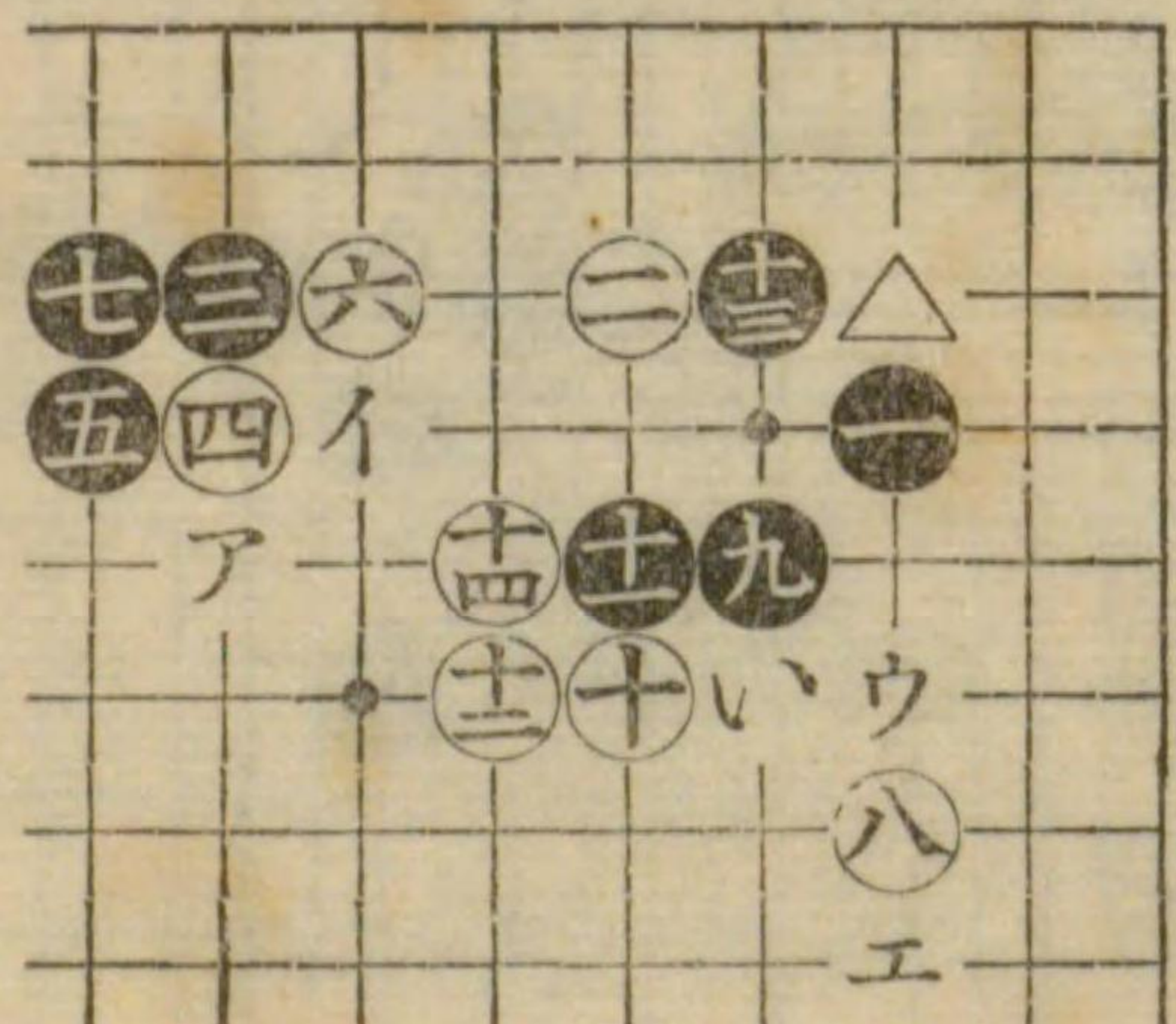
ある夫れ故白を持つては宜しいが黒を持つては好んで打つべきでない●黒五の受け方はいろいろあるが今此處では極く通常の受け方を示したのである○黒七のツギは趣きがあつて面白い「ア」だの「イ」だのに縛ねたり切つたりしたがるものであるけれどそれは悪い○白八は最初四とツケル時に斯く側面から夾み打たうと計畫しておいた手で働きがある若し九だの「い」だの、上部から打つたなら折角最初の建策を滅却することになるのである

さればとて「ウ」に夾んでは餘り接近し過ぎるし「エ」では隔り過ぎるので八の處こそ最適當してをるのである●黒九のコスミは普通の手である(「い」に斜走する手は次圖に示す)●黒十一より十四までは古來より

定法として打ち來つたものであるけれど現今では十一の手で直ぐに十三にコスミツケ白が十一に約へとなる方が少し善いといふ事になつた

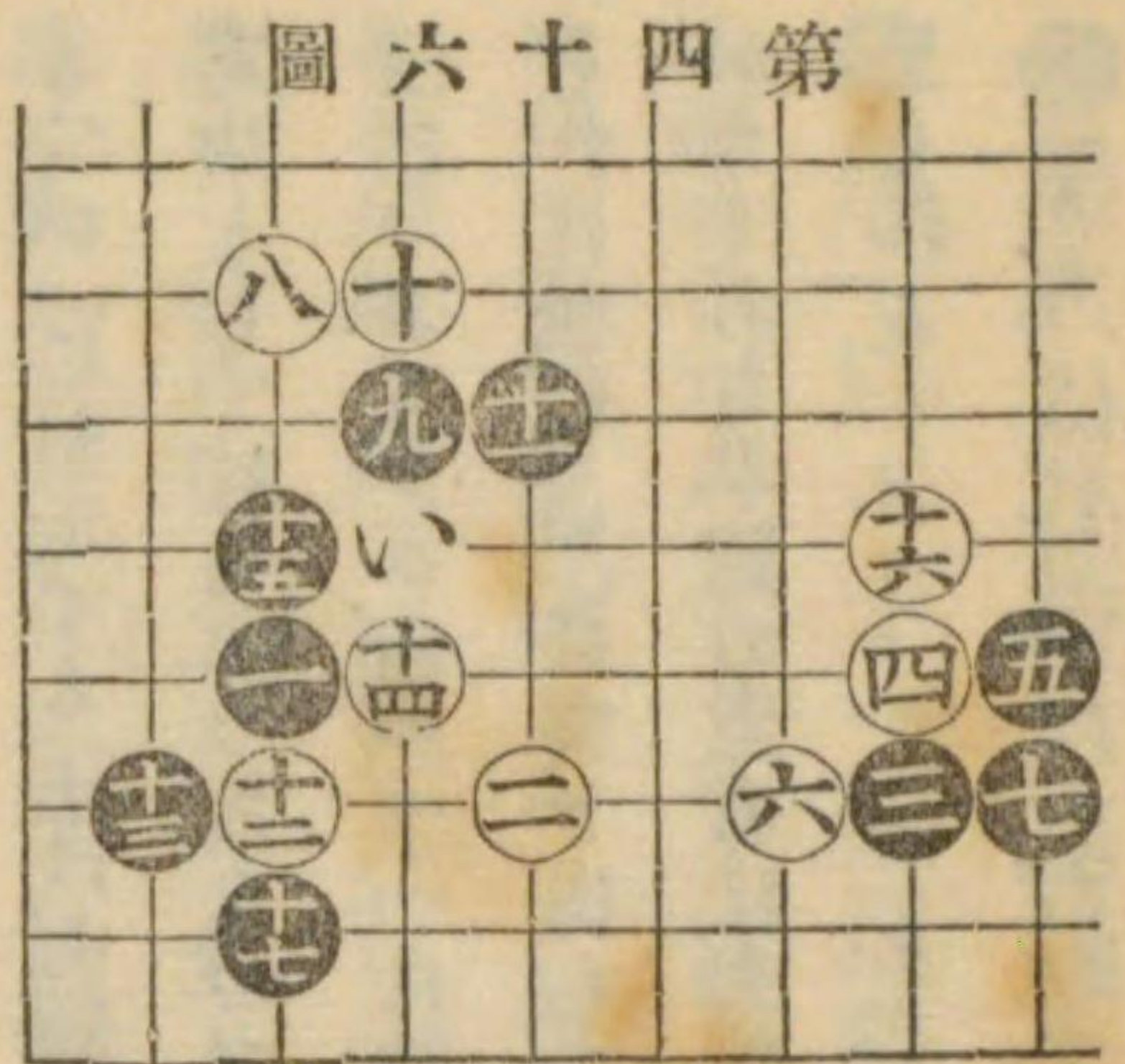
それは後に「い」に突き出して切る手などが残り白の外部を固めさせないといふ様な長所が幾分かあるからである本圖の定石は文化の頃八段本因坊元丈八段安井知得兩師の打碁にいくらかもあるから就いて見られよ

第四十五圖



●黒九は外部に出勤する手なり(第四十六圖)





●黒九は前圖の様に「い」にコスメば白より十一に掛け封鎖されて悪る  
 い場合に打つ矢張定石の手である○白十六は十七に下れば黒から十六  
 と縛ねて壓へつけられて此場合面白くないゆゑ十六と行びたのである  
 ●黒十七は己れを守り且つ白を攻むる意味もあつて善い尙殘説がある  
 から次圖に示さう

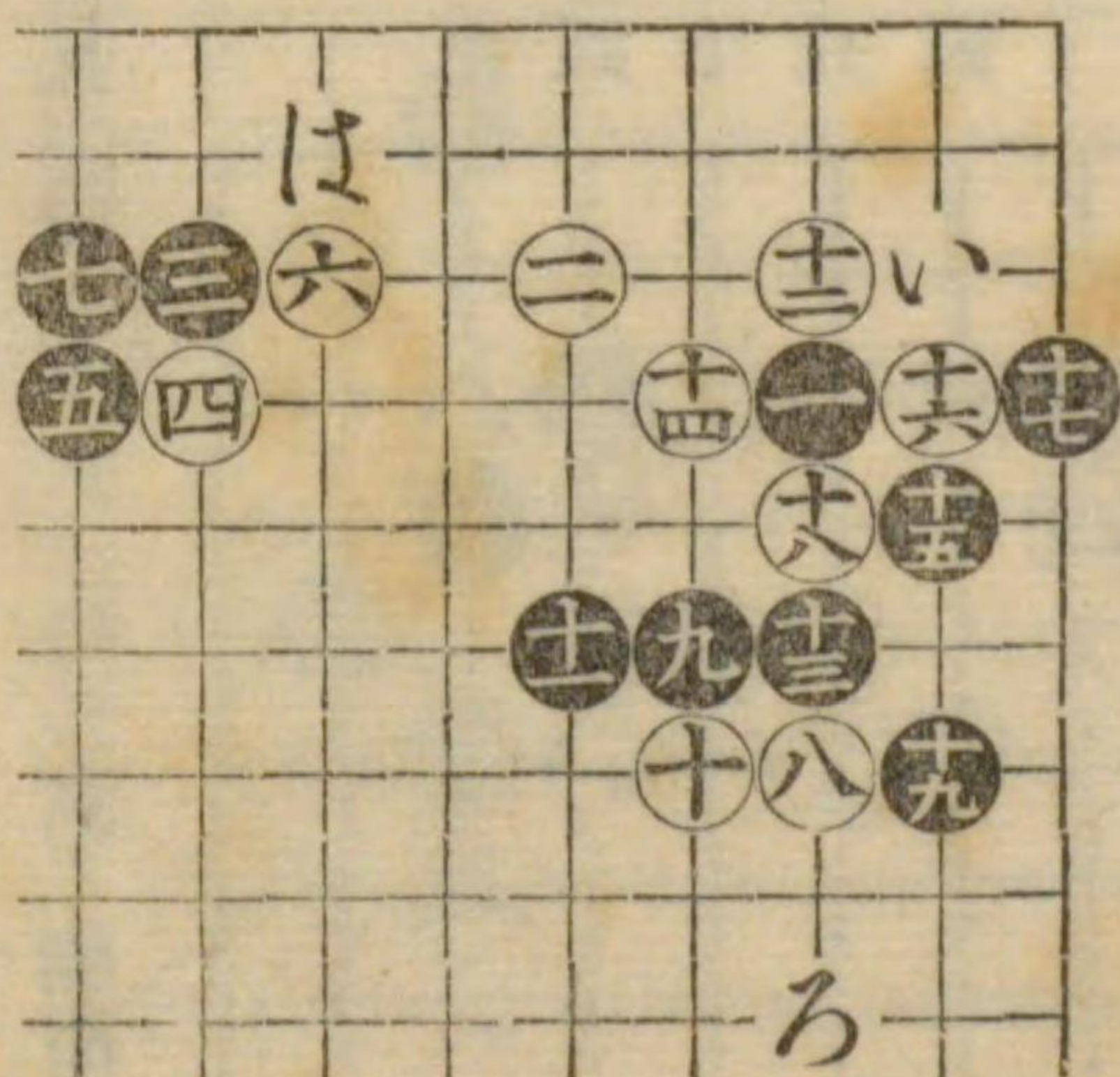
(第四十七圖)

●黒十七は善き手順なり

●黒十三と押した手は「い」に縛ね

ても白に十四とフクレられて都合の悪るい時に斯く變化して打つ  
 ので八、十の白を攻むる意味もある●黒十五は形の善いばかりで  
 なく前後の白にキク良手で所謂形と稱すべきもので若し十六に下  
 つては働きのない愚形となつてしまふ●黒十七は善い手順で白に  
 十八と提らして十九と縛ねるのが如何にも良形ではないか若し白  
 が十八の手で「い」に粘いたら黒は側面の「ろ」邊から攻むることもできる然し後に十七と打つと外面の  
 白二子に利便を與へる虞があるから是非とも此手順に打たねばならぬのである尙白十四とフクレる手

圖七十四第



で「い」に下ることもないではない其時は黒「は」に縛ねるなどが宜しからう。

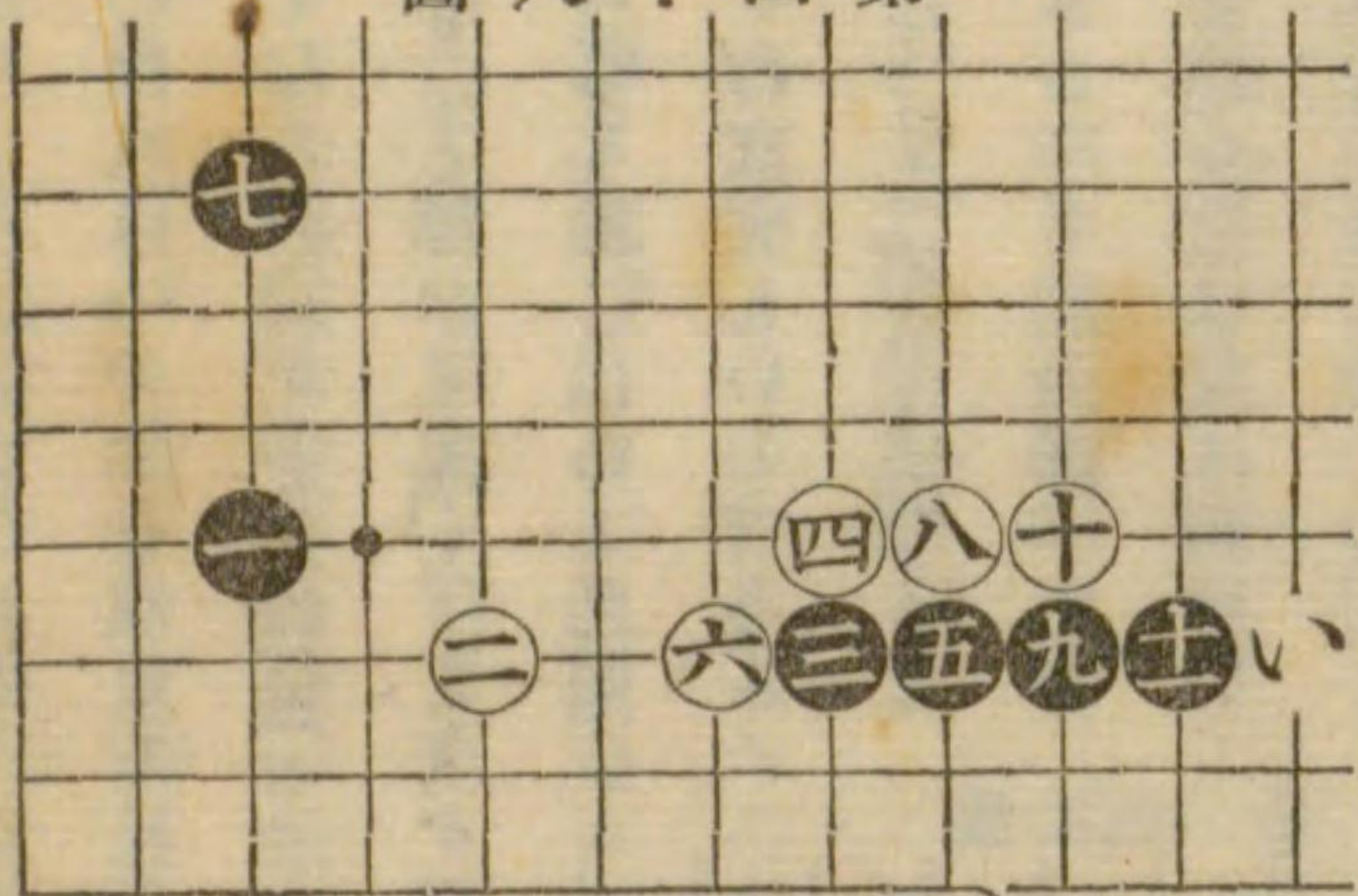
●黒五の手は時として軽く捌くの利あり(第四十八圖)

●黒五は趣向で斯く引いて打つことがある即ち圖のやうに七と拆きたい時斯様に白から八、十、と連  
 續押しつけられ黒は位低く較々重い姿となつても右方との釣り合ひ上左程差支のない場合に斯く拆く  
 のである尤七の手で八に曲る(前圖と  
 同型になる)こともあるが右方に敵の  
 石のある時などには「い」に拆くことも  
 ある

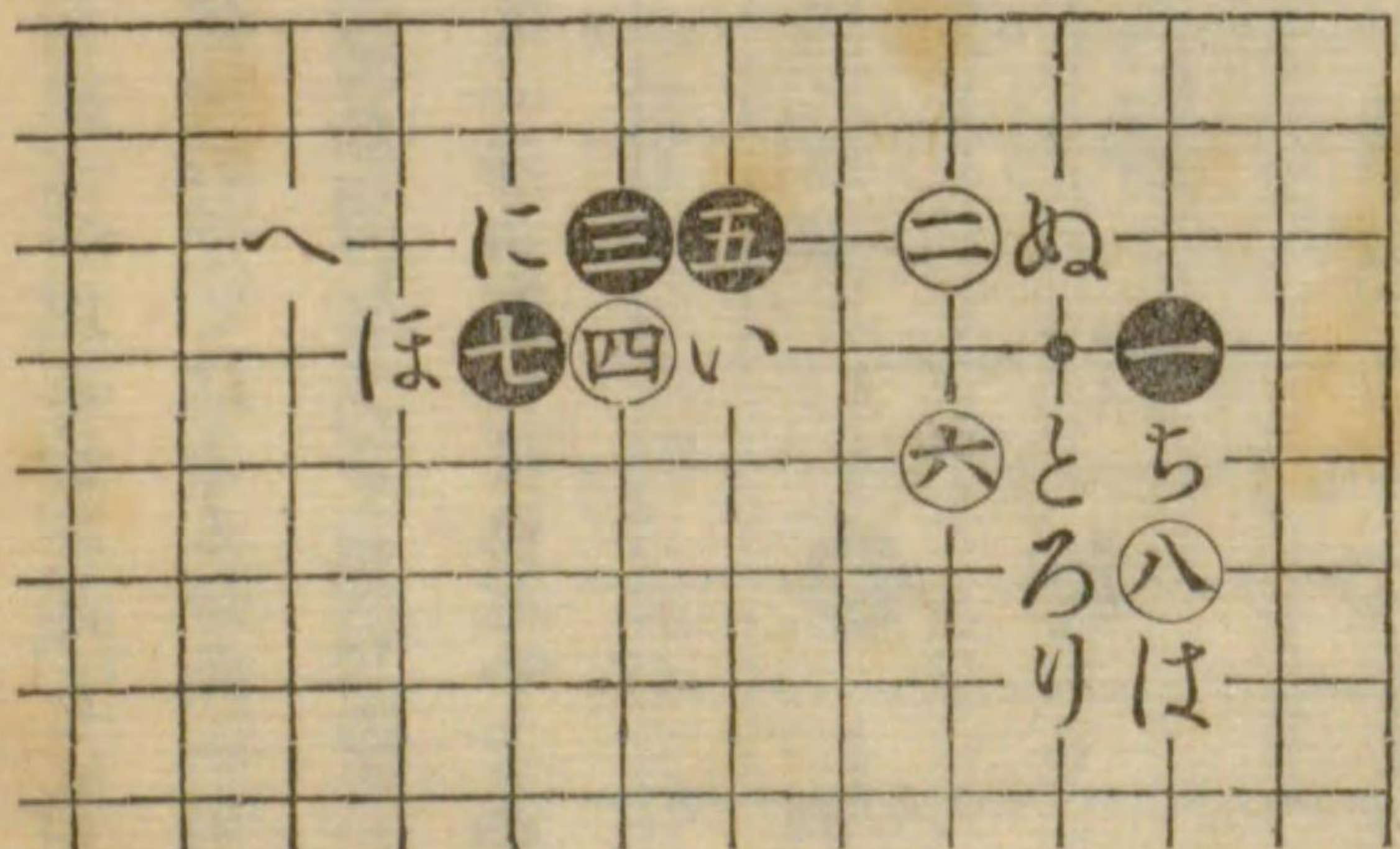
●黒五は不穩の手なれば心し  
 て打たざるべからず(第四十九圖)

●黒五と出た手は事を好むの嫌ひがあ  
 る○白六の飛は普通の應手である「い」  
 に押すなどは大に悪るい●黒七は五の  
 出に關聯した手で恐らく左側に目的の

圖八十四第



圖九十四第



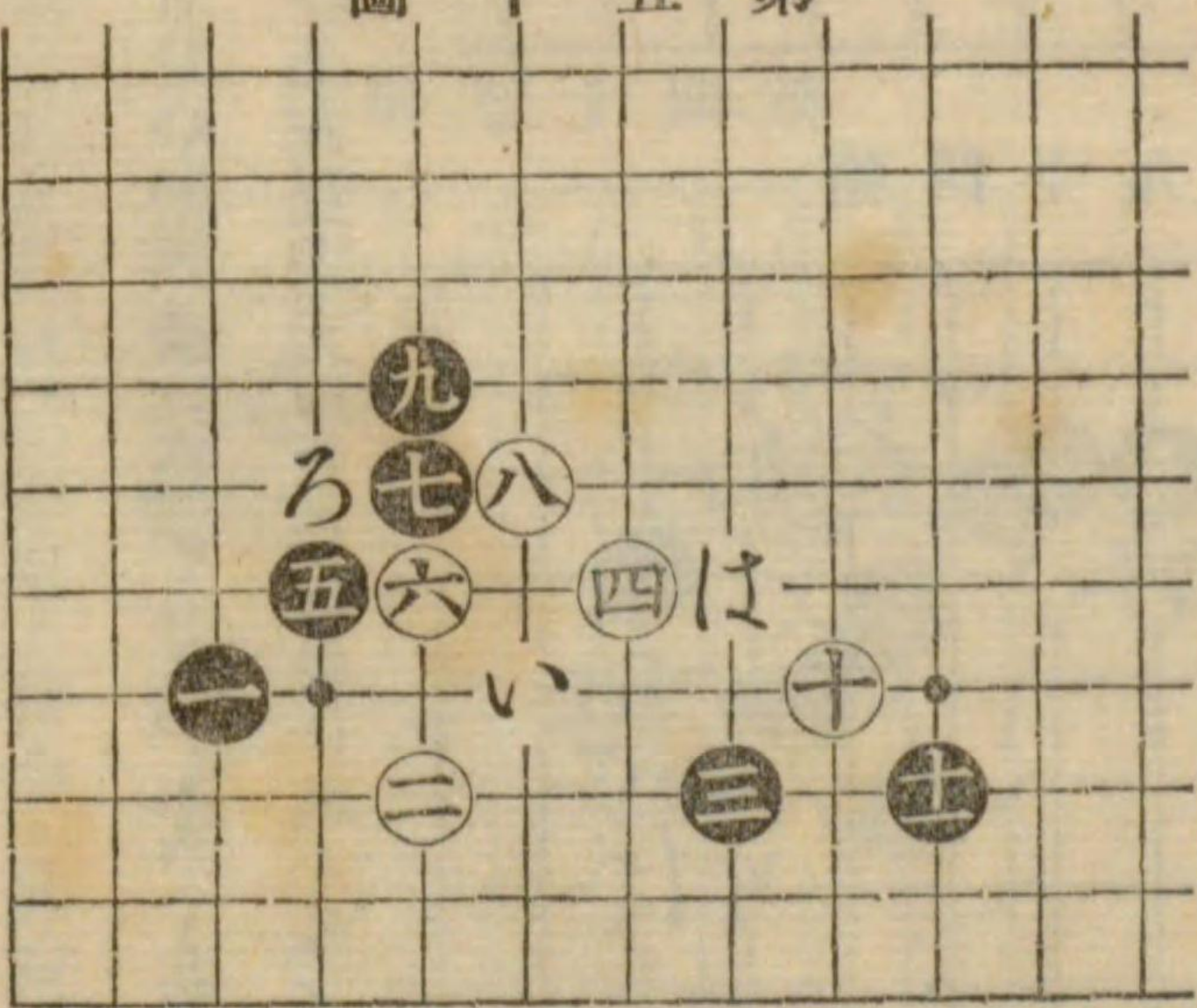


ある際に用ふる手段である尤七と縛ねる手で「ろ」又は「は」に打つてきたら白は七の處に伸び黒に「白」は「黒」へに飛びとなる位のものである○白八は一の黒を攻むるには無論好適の手ではあるが此一の黒は到底獲ることはできぬ唯外部が厚壯となる利益がある但征(シテウ)の關係如何によつて黒は「ろ」にツケ出すことがある其時白「と」黒「ち」白「り」と縛ねて黒「ろ」とツケ出したる一子が征にとれない都合の悪い時は白が八の手で「ろ」にコスム事も稀にはある此圖で黒一の石を活きるには「ぬ」にコスミツケれば宜しいのである

○白四は敵を迷はさんとする手なり(第五十圖)

○白四は手筋ではあるが特別の場合に用ふる手で黒の應手によつて種々に變化を試みやうとの趣向で白を持つては或は面白いこともあらうが好んで打つ手ではない●黒五の手で若しも「い」に打つたならそれこそ白の術中に陥るもので白が隙かさす五の處に掛けて打つてくるそれゆる四の如き手に出會つたら着實に應ずるのが一番確である即ち圖のやうに五にコスムなどは最良い又「ろ」に斜走するのも或は方面をかへて「は」にツケル場合もあらう●黒七と縛ね九と行るのは厚い

第五十圖

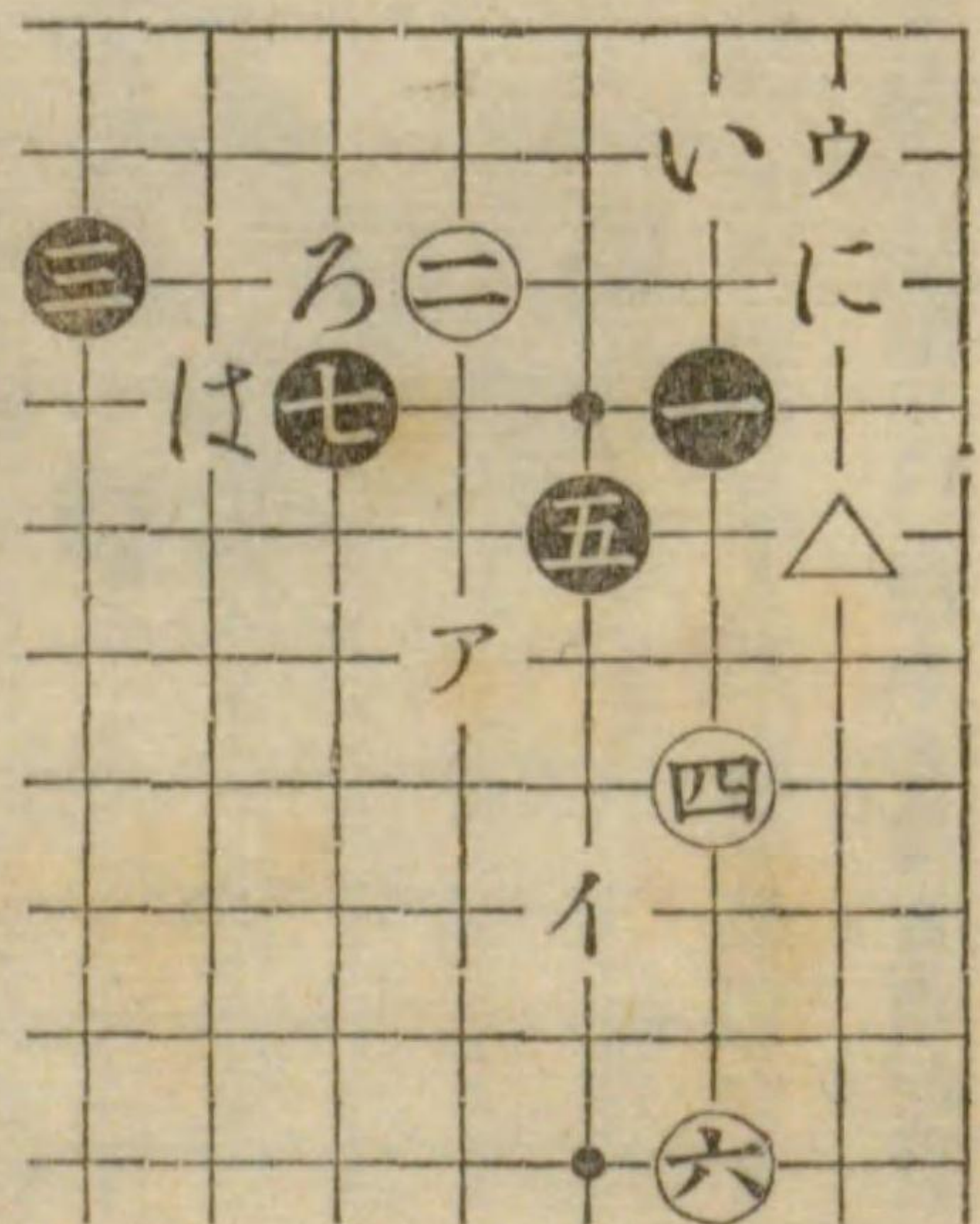


手であるが右方が急な場合には手を抜いて其方に着手しても仔細ないが然し大抵圖の如くに打つのが普通である

○白四は一轉したる趣向の手なり(第五十一圖)

○白四は夾み返しといつて直ちに二の白に着手しても都合の悪い時か又は右側配置の模様によつて打つのである之に對して●黒五は普通の應手である○白六は四の意味を續行する常手である●黒七は兎に角二の白を封鎖する手であるこれ互角の對勢なり此の二の白全く死んだならば黒優勢といふことが出来るけれどまだ此隅には手が残つてをるから先づは互角といふのである○白六の手は棋勢によつて「い」に斜走することもある其時黒が七に掛けたら白「ろ」黒「は」白「に」となるのである此手段は△印に盤りを持つから六の處に開かずして濟む打廻しの場合などに用ふるのである而して四にある處の白が黒から攻められないとなると手敷をかけた割合に一、五、七は「等」の外壁が餘り働きをなさぬ事になる然し黒としても白が「い」に斜走した場合に前陳のやうな不利に陥るのを避けて七に掛ける手で「ア」に尖む手がある其時白が同じ「に」に尖んだら「イ」に掛けて右側方面の白の位を低くして打つのである又白が「に」

第五十一圖



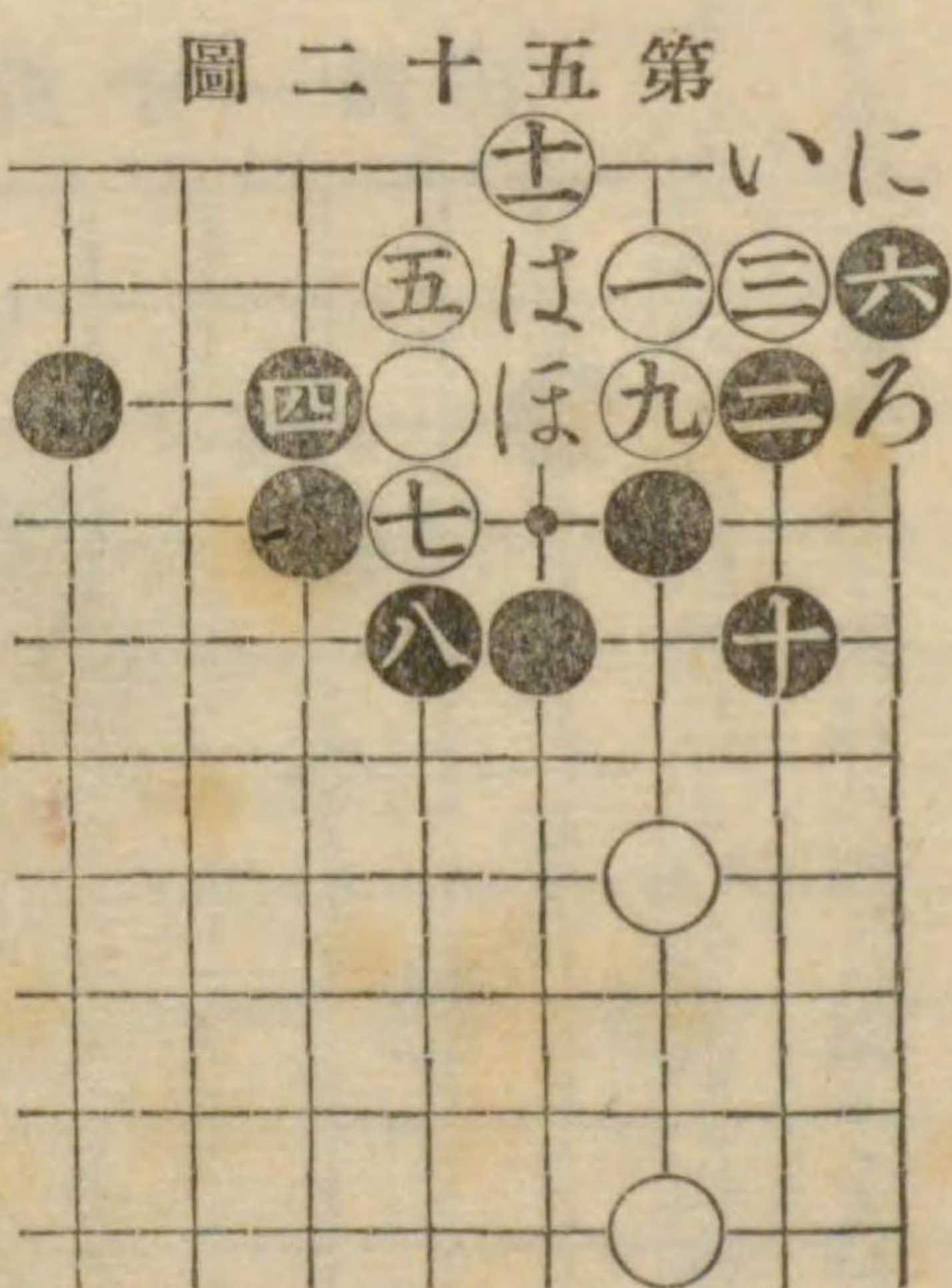
ある其時白が同じ「に」に尖んだら「イ」に掛けて右側方面の白の位を低くして打つのである又白が「に」



に尖まないで六の處に拆いたら「ウ」に頂けて隅から攻めて行くのである最後に注意しておくが本圖で白が六の手で直ぐに七の處に尖み出す弊が初學にあるがこれは折角最初の四の趣向にも相反する結果を生ずるのである其位なら最初から四の手で二の白を直ぐに處分した方が善い事になるのである本圖に戻り黒七の手は他に轉じる事もある必ずしも斯く七と掛くるには限らないのである

○白一は圍中に生くる方法なり(第五十二圖)

○白一と斜走すれば圖のやうに十一までとなりて活ることが出来る其代り黒の外壁が堅くなるから外部に害をなさん虞などのある時は其場合を見合はすのである●黒二の手を三の處に頂けたならば白は二の處に縛出し黒九、白「い」黒六、白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」白十に盤りとなつて一子を捨て、も半分侵略するから生きた位に相當するのであるそれゆゑ最初黒が三と頂けることは考ひものである又白が最初一と斜走しないで二の處にオクこともある其時黒九白一黒「は」白「い」黒六白「ろ」黒「ほ」白十となるのが普通であるこれは圖のやうに生きても外壁が強くなるのを避ける時に用ふる手段である

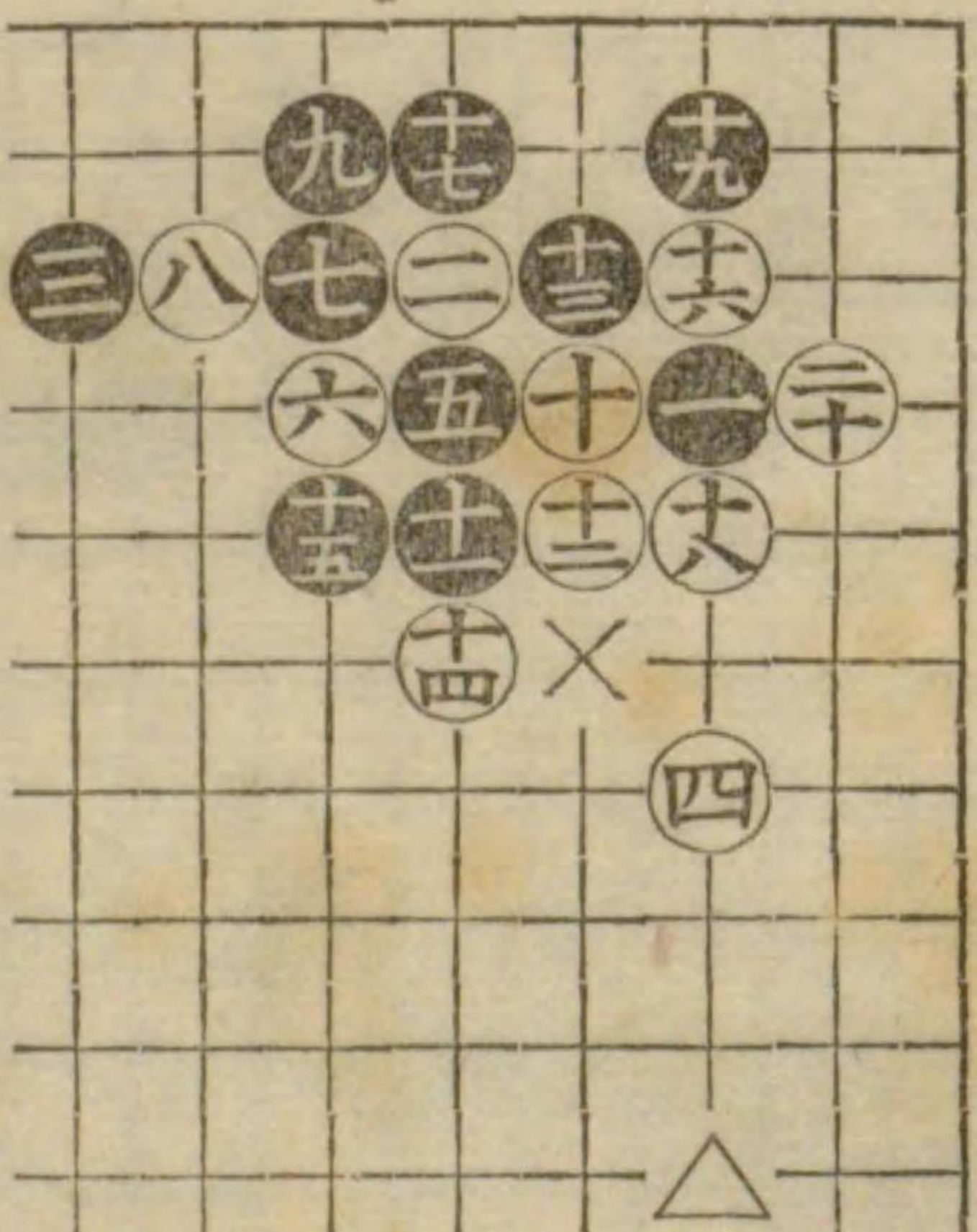


第五十二圖

●黒五は烈しく二の白に着手を促す手なり(第五十三圖)

●黒五は普通十二の處に尖んで△印に白を拆かしては不得策のやうな場合に斯様に頂けて白に手を抜くことの出來ぬ様にする手段である今假りに白が六の手で△印に拆いたら黒が七の處に約へて二の白を抱へ込んで隅に手のないだけ前圖より有利である古碁には往々二の白を抱へさした打方を見ることがないでもないが割合研究が今日の様に進まぬ時代の布石法であつたのであるそれゆゑ圖のやうに二十までのやうになるのが現時の定石である○白八の縛込は手順が善いそれは二の白を捨てるにしても黒から四ツ目抜(圖の如くにて白八と黒九の交換なくして提らるゝ型に名づく)にされても損でもあるし又八の手は後に役立つこともないからである○白十四の手順が善い先きに十六の方から切れは黒十七に提り白十八の時黒から十四の處に立たれて面白くないのである故に斯く縛るのである又●黒十九の手は四の白があるから打つのであつて四の白がなくなつて此形の出來る場合には×印から切る方が善い

第五十三圖



●黒五は普通十二の處に尖んで△印に白を拆かしては不得策のやうな場合に斯様に頂けて白に手を抜くことの出來ぬ様にする手段である今假りに白が六の手で△印に拆いたら黒が七の處に約へて二の白を抱へ込んで隅に手のないだけ前圖より有利である古碁には往々二の白を抱へさした打方を見ることがないでもないが割合研究が今日の様に進まぬ時代の布石法であつたのであるそれゆゑ圖のやうに二十までのやうになるのが現時の定石である○白八の縛込は手順が善いそれは二の白を捨てるにしても黒から四ツ目抜(圖の如くにて白八と黒九の交換なくして提らるゝ型に名づく)にされても損でもあるし又八の手は後に役立つこともないからである○白十四の手順が善い先きに十六の方から切れは黒十七に提り白十八の時黒から十四の處に立たれて面白くないのである故に斯く縛るのである又●黒十九の手は四の白があるから打つのであつて四の白がなくなつて此形の出來る場合には×印から切る方が善い

一二間夾手抜の部

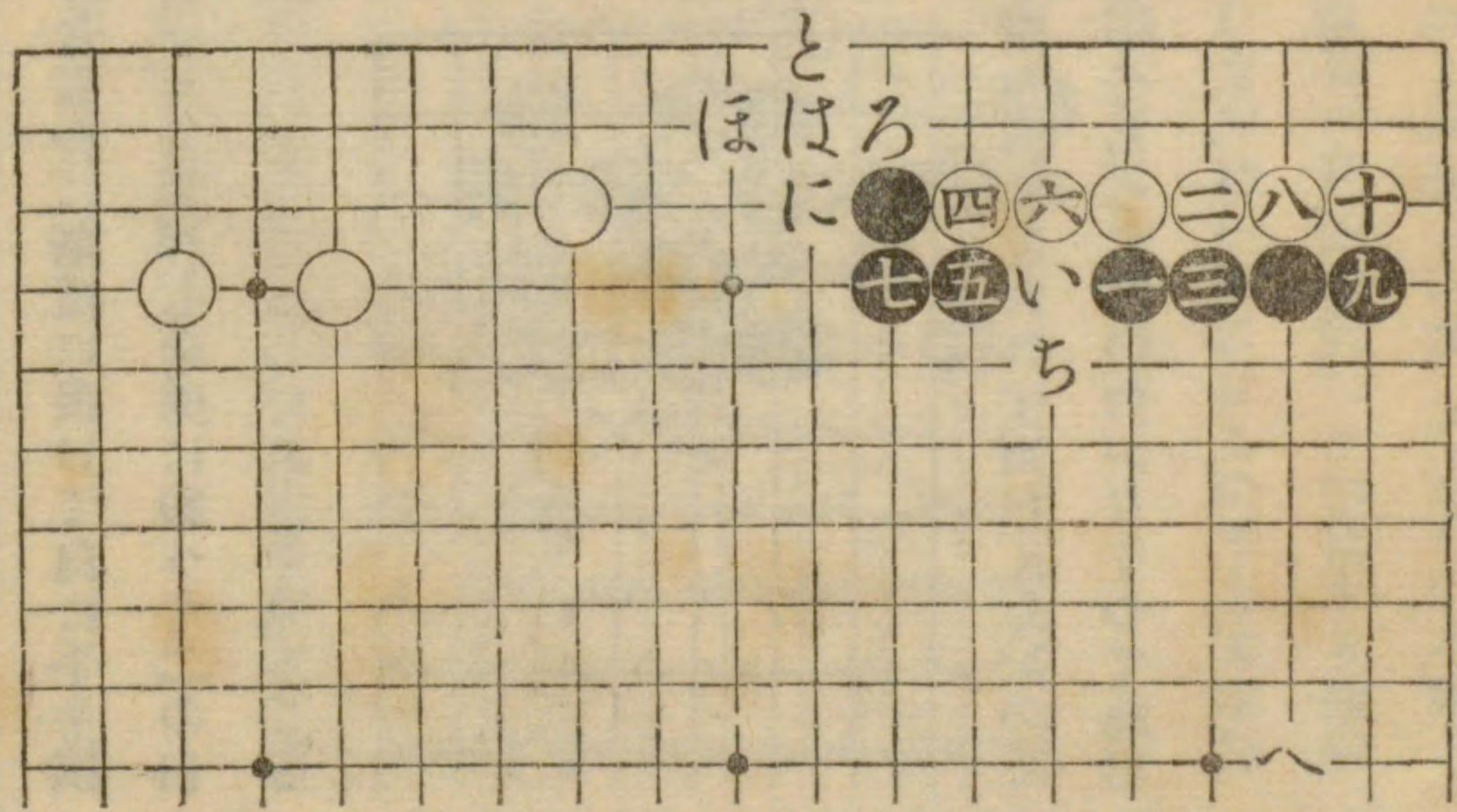


○白二は隅に活くる趣向なり(第五十四圖)

●黒七のツギは通形である然し左方に斯様な白の布石あると  
 した場合などには「い」の穴をツギ白「ろ」黒「は」白「に」黒七白  
 「ほ」と一子を抱へた時「へ」の邊に拆くなどの場合には臨機の  
 手段として善い、尤ただ「へ」に拆くか八の處に曲りを打つて  
 白を「と」に提らして後拆くこともある然し白が「と」に提らな  
 いで隅の四目を捨てらるゝやうな時は八へ曲りは見合すこと  
 〵知るべしだ尤黒が「い」にツグのは白を左方の配置と重複さ  
 せるやうな意味で面白いのである然し斯様な場合には白も亦  
 六の手で「い」に縛込む手がある其時黒「ち」に約へ白が六と粘  
 になるそうすると今度は黒は七の處から切られるから何うし  
 ても七の處に黒がツグ外はない尤それは「い」と「ち」のダメツ  
 メがあるだけ本圖より白が悪るいのである

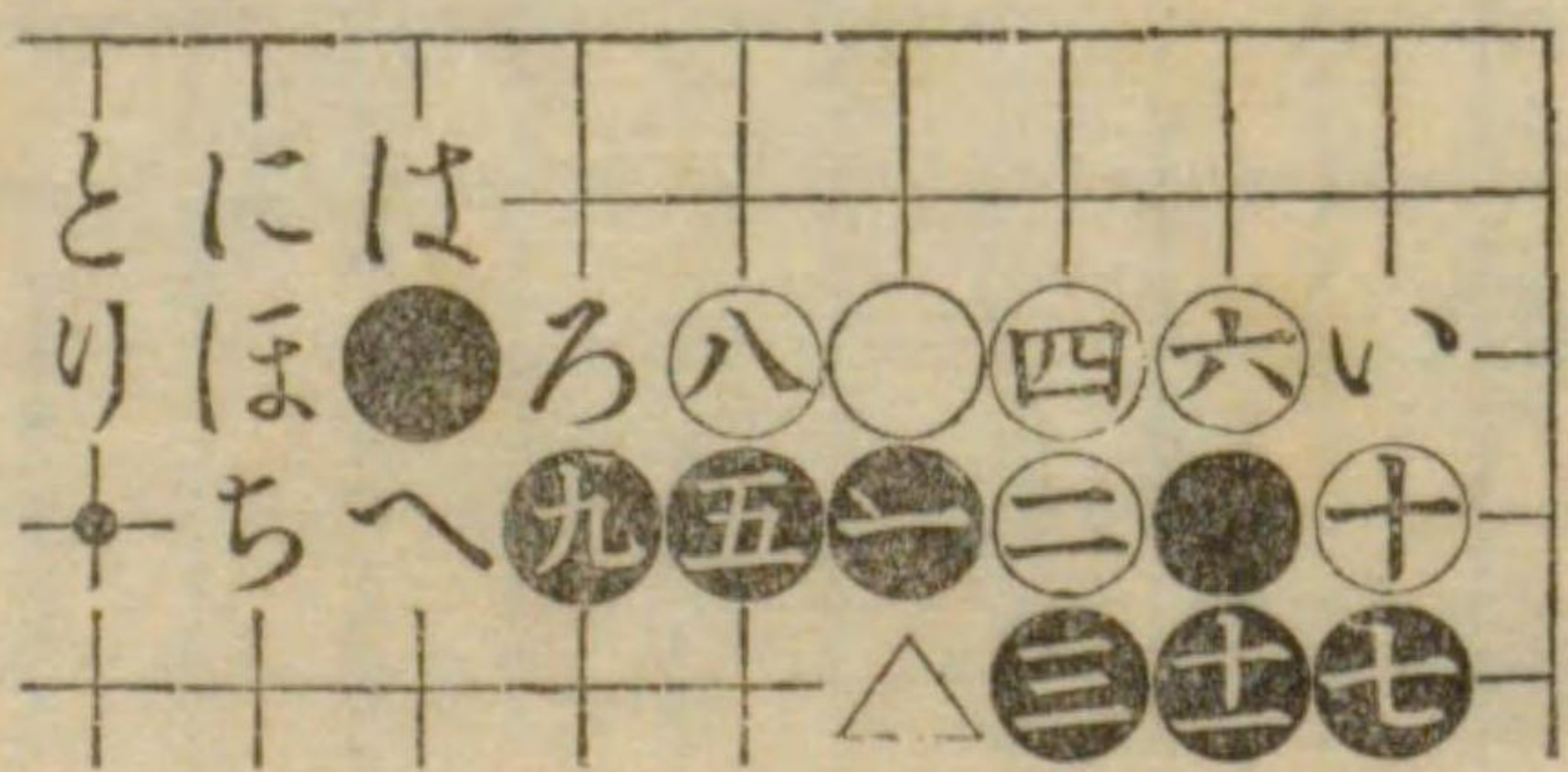
○白二は征のアタリに注意せよ(第五十五圖)

第五十四圖



○白二の縛込は白の一子を治める手であるが黒から四の處に切られて白三に行び黒が六の處にツギ白  
 五に一の黒を征にかけてもアタリがあつて此黒が取れぬ場合には悪るいことは論はないのであるから  
 二と勿込む手は能く考へて打たなければならぬ因つて黒も征のアタリのないと  
 みたら斯様に受けるが善い●黒七の手は働きがあるそれを十一にツイタリ十に  
 行びるのは甚悪るい十一にツグば「い」の縛が先手に打てぬことになり又十に  
 下れば白から「い」に約へられて十一の處に切を生じて悪るいのである○白八  
 の手は場合によるのである左方に前圖にも示したやうな配置がある時などには  
 黒から「い」に縛ね白「ろ」黒九白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白  
 「り」となり黒より星下の邊に拆かれ大模様を生じて悪るい事がある若しさうい  
 ふ不都合な場合には白八の手で己むを得ず十にアテ黒十一に粘、白八黒「ろ」と  
 なつて他に轉ずるの外はない又白左方の配置がない場合か又は「ぬ」の方面に何等か既に布石があつ  
 て前述のやうに外部に黒の大模様を生ずる虞なき時か假令大模様を生じても左方の關係上其割合の悪  
 しくないときなどは十にアテないで八に押すのを手順とするそれで黒が「い」より縛ることが面白くな  
 いから九に引くであらう九に引いたら十にアテ、他に轉じて善い又黒が九に引かずに「ろ」にツキアタ

第五十五圖





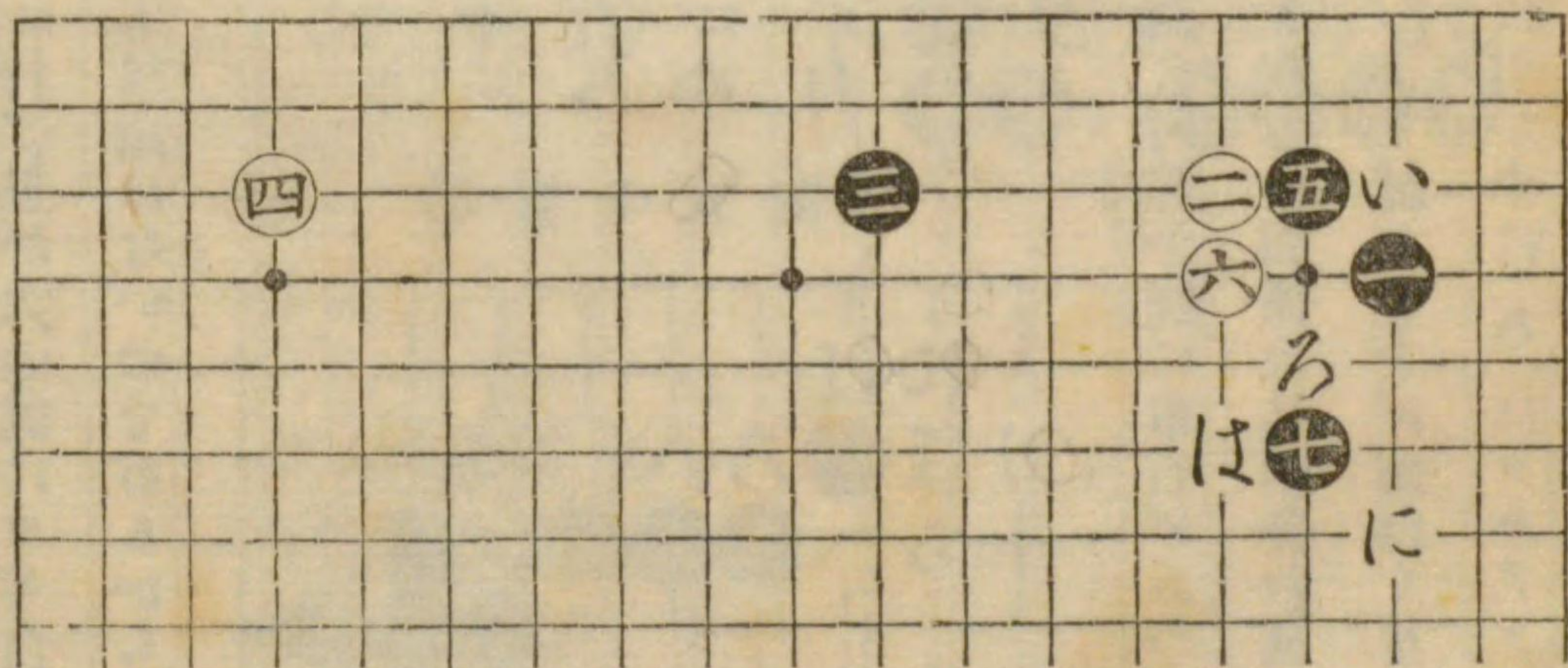
ツタならば今度は白十にアテす「い」に下つて△印の切味を狙ふのが得策である  
要するに白八と打つても外部が差支ない場合であつたならそれに越すことはない。二間夾の部終

### 三間夾の部

●黒三は尖みとして變化最廣し又五、七は白をセル手なり(第五十六圖)

●黒三の手は三間夾としては一番廣い詰方で(四間に詰める手はなし敵より二間に拆かるゝ餘地あるを以てなり)一間夾、二間夾よりは却つて多く用ふるやうである然し勿論場合によることである○白四は假りに手を抜くのを示したのである若し重に二の白に着手する趣向の時は「い」「ろ」「は」「に」七等の内を撰ぶべきである●黒五は白を追ひ立て其調子によりて地境を拓き且三間夾の黒をも之に因つて治めんとする

圖六十五第

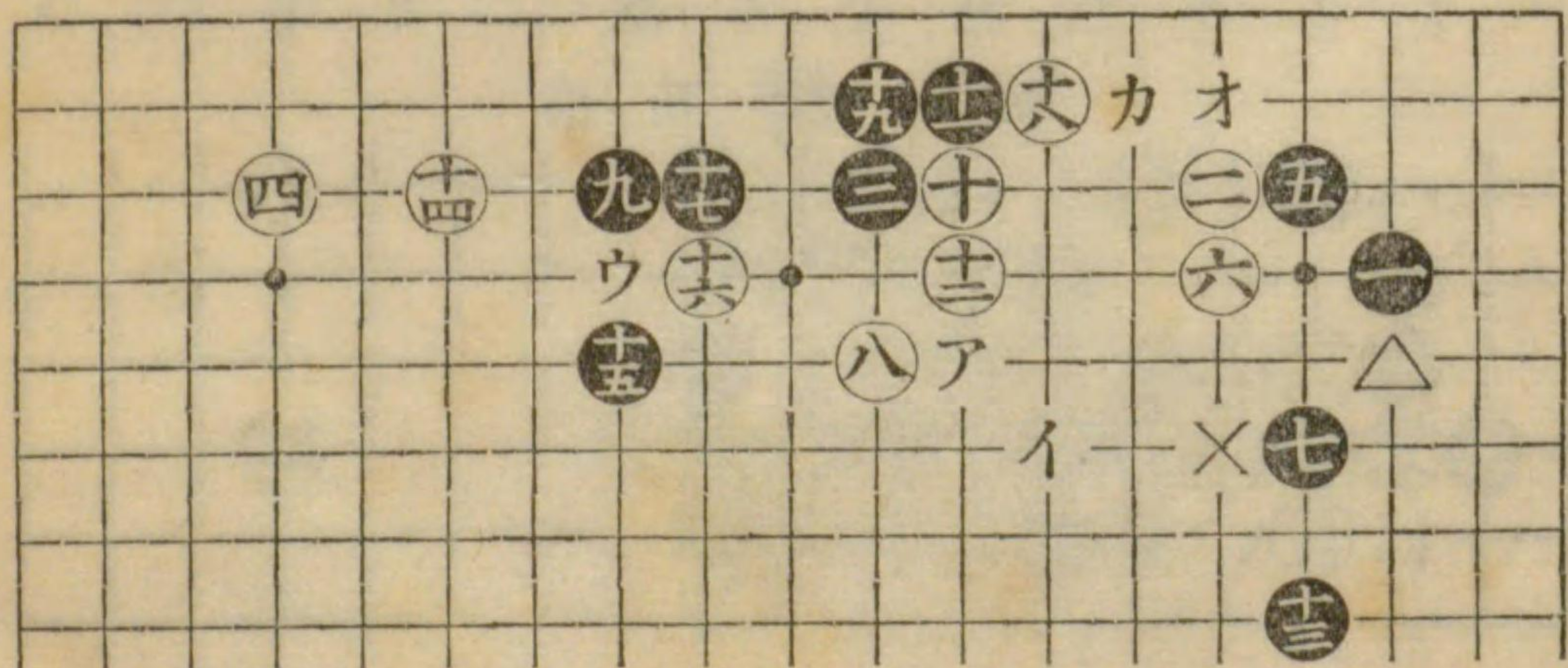


意味を含むのである○白六は己むを得ぬ手である●黒七は白を煽り前  
述の趣向を遂ぐるに釣合の善い手である

●黒十三は權衡を得たる良手なり(第五十七圖)

○白八の手は「ア」「イ」十二、十七の何れかに打つ場合もあり其中白  
を取りては多く此の八を用ふのである八の手で×印に頂けるのは初學  
に多く見るところだが甚だ宜しくない●黒九の手は十六に斜走する事  
もある(次圖に説く)○白十は二子の白に連絡をつけ全體を強固にす  
る手段で且△印のツケコシを狙ふのである●黒十三は△印の頂越を凌  
ぎ且地形を拓く手である○白十四は狭いやうだが黒を攻めてゐる手  
である○白十六は順序として斯く打ち置くので後に利益が残る若し此  
手順を誤つて今打つておかぬと「ウ」にツがるゝかもしれないからで  
ある

圖七十五第



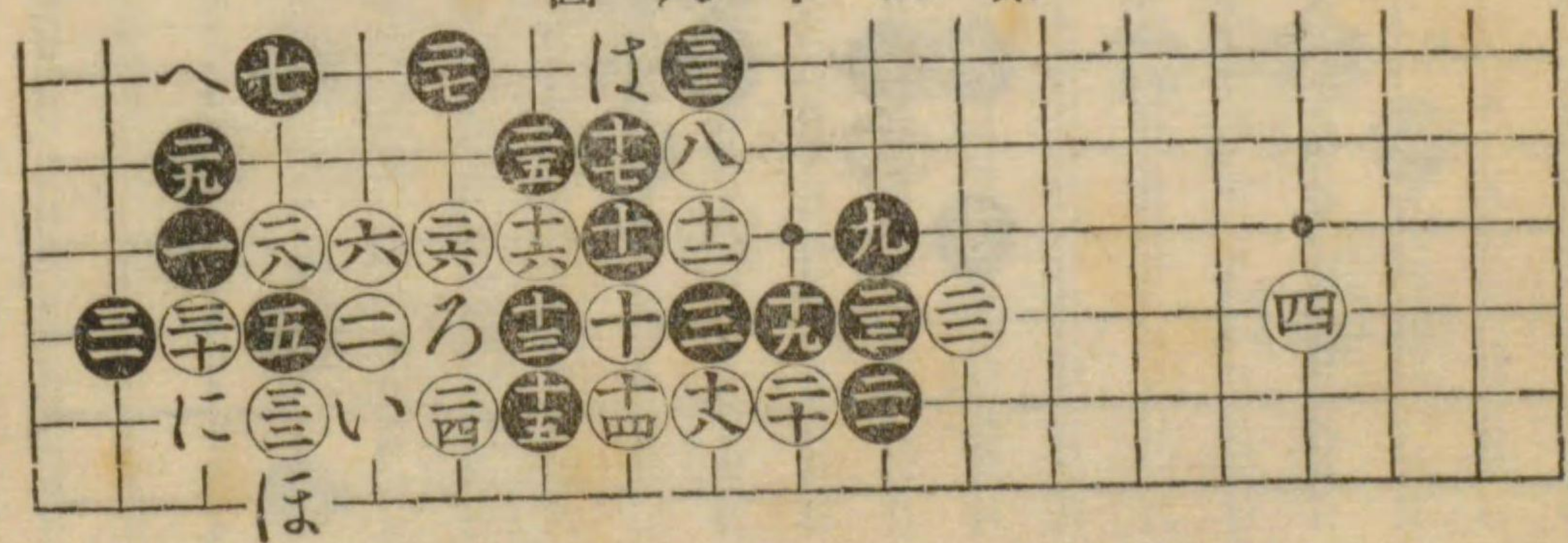
●黒十一以下の手筋味ふべし(第五十八圖)

●黒九は前圖の如く二二の處に二間拆いては位が低くて面白くないと



趣向した時に打つ手である○白十とツケたる時黒十一の綽出は最早九と打つ時に考ひておくべきである。偕前の如く十四の處に綽たらば如何といふに白十一の處に引かれて後の工合が拙づい因つて斯く綽ね出すのである●黒十三、十五の趣向は心得置くべき事で之を捨て石にする手段である●黒二一で二子を取らるゝのを苦しがつて「い」から盤るやうな手は僻事である。白から二四に綽込まれて黒「ろ」の時「は」に打たれて黒に打つ手がないではないか注意迄に記し置く○白二二の覗きは場合により必しも打つには限らないのである○白二八は黒を重くする趣向で單に三二に綽れば黒から軽く手を抜かれるであらう●黒二九の手にて三十にツギ白三二黒「に」白「ほ」黒「へ」となる打方もあるが多くは好しくない。即ち後手となつて白から八、十二の二子を出動さるゝ結果となるかも知れぬからである。故に圖のやうに五の一子を捨て先手を取り二三に綽るが善い。此三三と打ちて二子を約へ置く事は厚壯なる良手と知られたい。此定石全體の形勢を論ずるのに從來の書物などには多くは互角とあるが余は黒の方が外勢を張るから寧ろ黒に與みするものである。

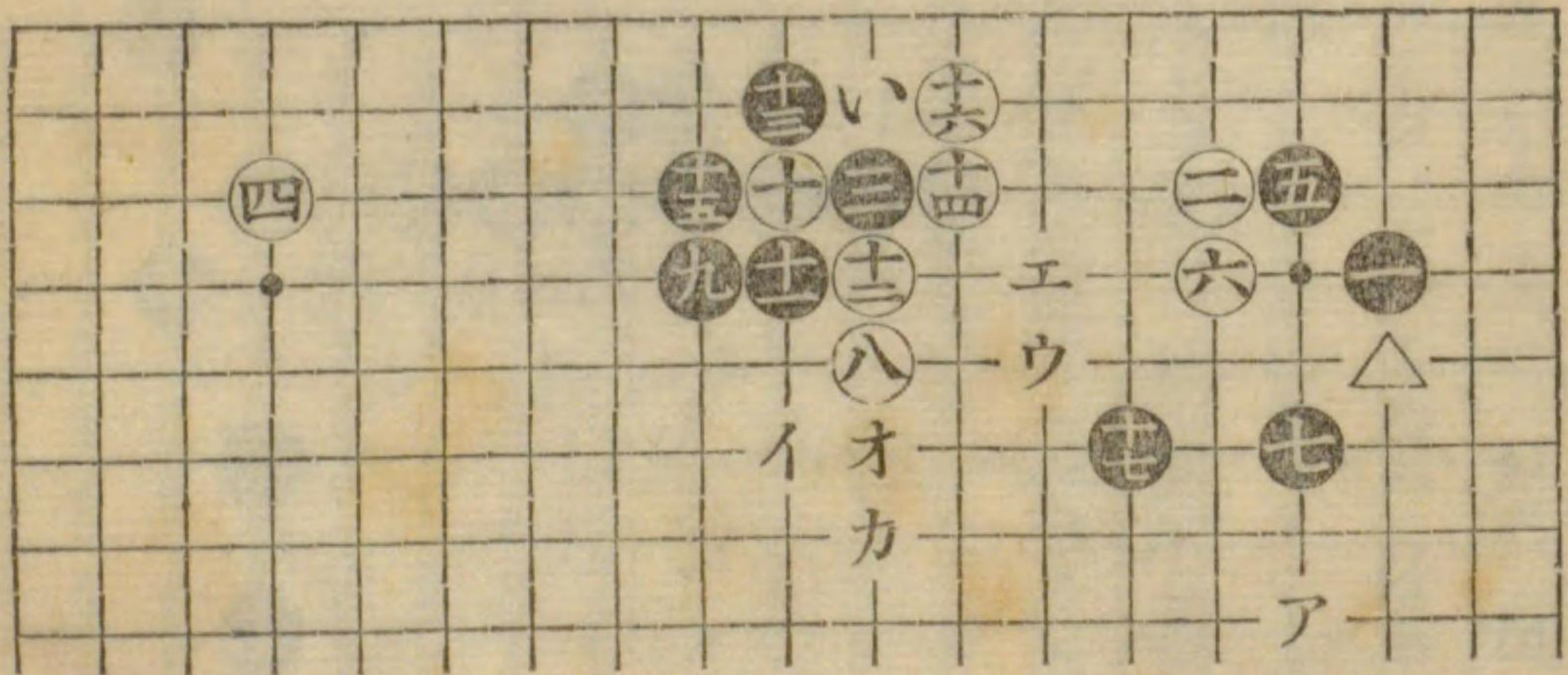
圖八十五第



○白十は早く治むる策なり(第五十九圖)

白十は十四に頂れば前圖のやうになつて面白くない時に斯く十と外より頂くるのである。兎に角此一子を捨て、軽く捌く手段である●黒十三の手で十四に行ければ白から十五に行びられて悪いのである○白十六の下る手は肝要である。捨て、おいて若し黒から十六の處に綽ねらるれば白十以下の趣向が悉滅却するのである。又此十六の手で若し「い」にアテルとすればそれは白甚だ悪いのである。斯かる劫は黒への響き極めて微妙で却つて黒から十六に切られて劫に負くともあれば測るべからざる損害でそれも黒が直ちに十六に切つて劫争に打つならばまだしもだけれど機を觀て來らるゝから斯かる危険を冒してまでも「い」にアテル必要は決してないのである●黒十七は△印の頂越を凌ぎ其上に白に響かせて打つ手である。此の場合には十七の手で「ア」に打つのは己れのみ守る手で働きがないのである。此次ぎ白の打つ手は此近邊なれば「イ」に尖む位である。し黒の打つ手(白手を抜き他に轉じたるものとす)とす

圖九十五第



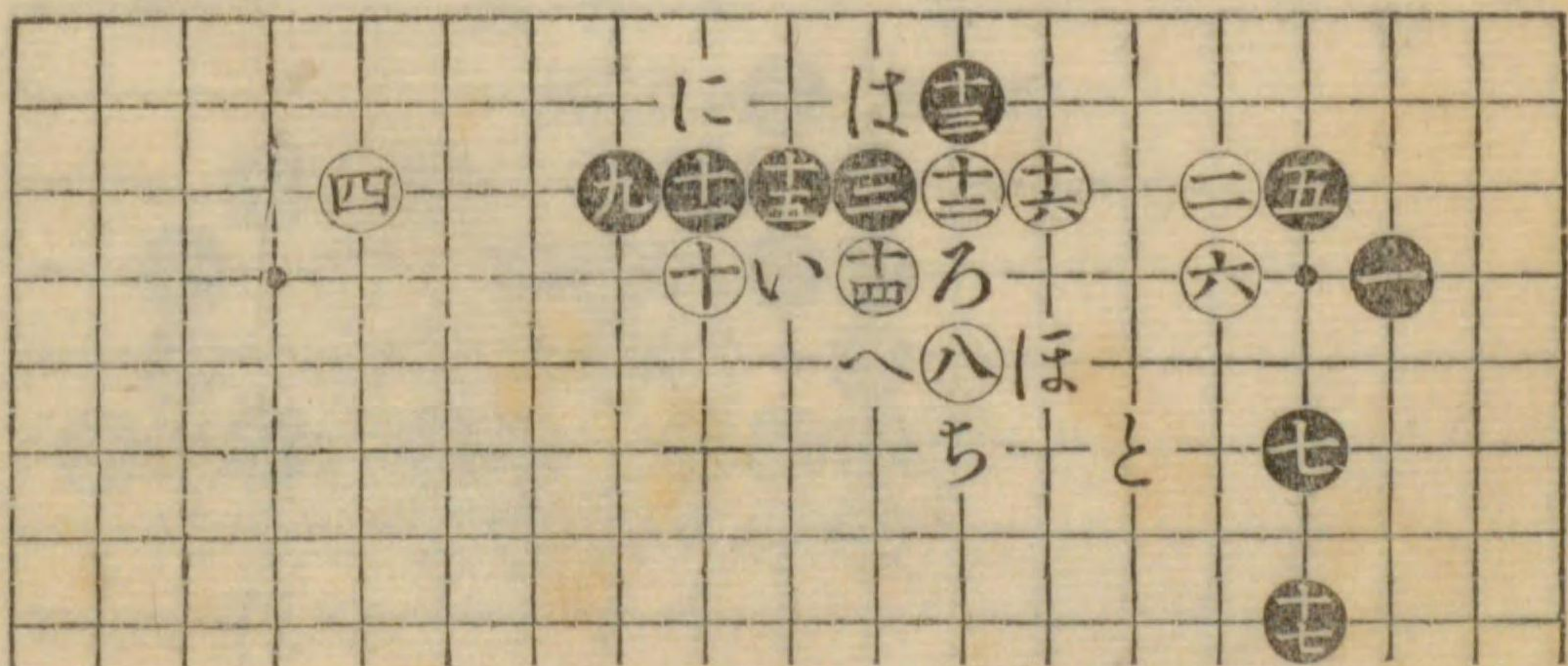


れば「ウ」に尖み白「エ」黒「イ」白「オ」黒「カ」などが手筋である

○白十二、十四を打つ時特に考慮を要す(第六十圖)

○白八も一手段である●黒九は「い」に尖むこともある○白十他に轉ずることもある○白十以下十六まで圖のやうに打つのは已れを治むる趣向である而して此場合十の手は打ち徳で且順序である●黒十五の手で十六に綽ね捲つたら白十五に割り込み黒「ろ」に提りし時「は」にアテ黒十二に粘ぎ白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」と打つもあり尙又黒「ほ」の手で「へ」に切り白「い」に粘ぎ黒「ほ」白「ち」黒「と」となる事もあり要するに此變化は形勢にもよるが白十二、十四と打つ時に斯く振替られて差支ないと見込をつけねばならぬ此變化をするにつけて白十と打ちおくが順序であることが分るであらう

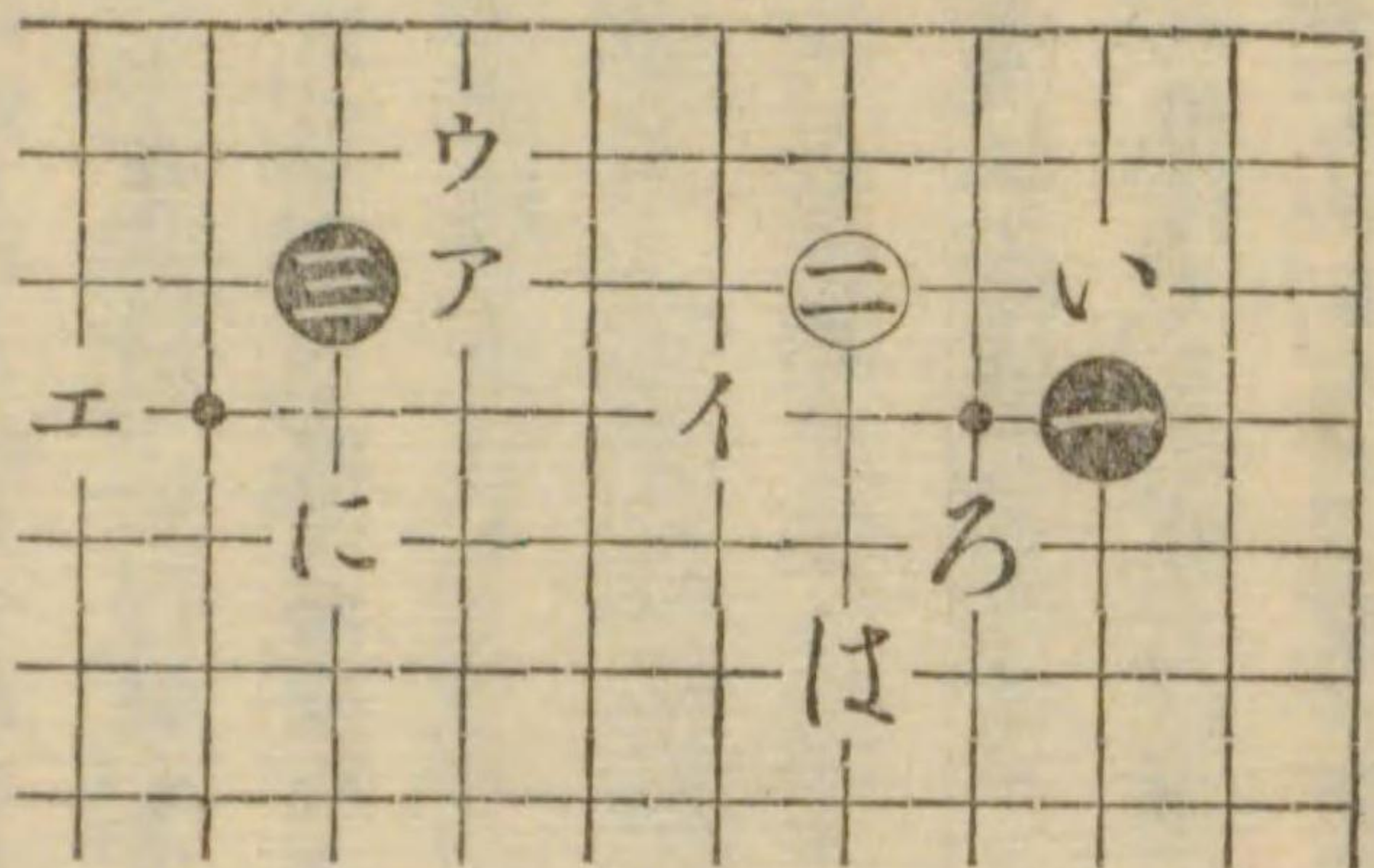
圖 十 六 第



○白四の種々なる打方(第六十一圖)

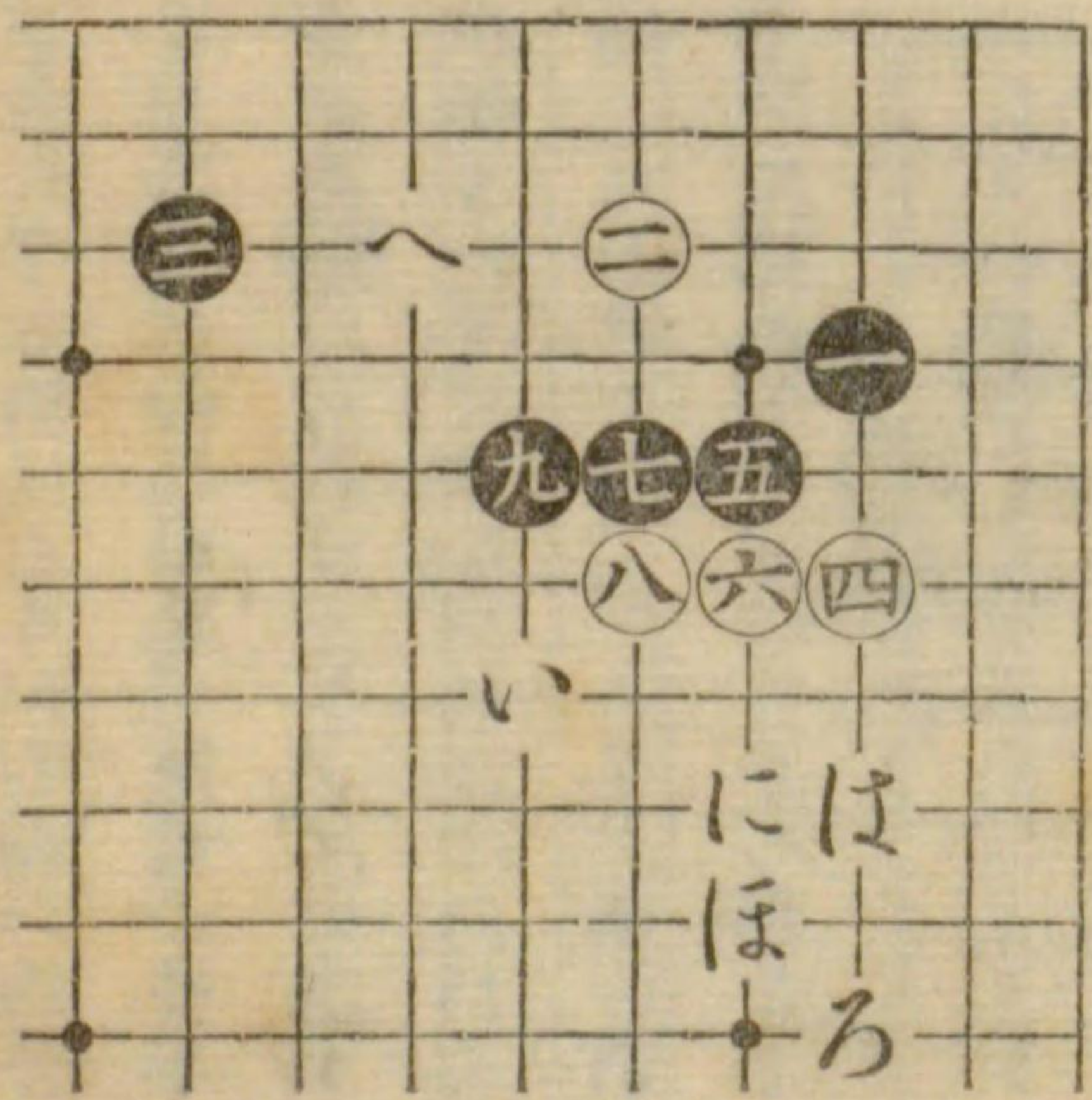
白四の手は此圖に現はさざるも黒より三と三間夾せられたる次の手を指したるなり本圖のやうに黒より三間に夾まれた時直に此處へ白四と着手するとし

圖 一 十 六 第



ては「い」「ろ」「は」の三箇處を擇ぶのが普通である尤これは一間夾二間夾でも殆大同小異であつて既に前に委しく述べておいたから此處には略するたゞ「に」に打つことだけ言ふがこれは古法として打碁に見受ることがあるその意味は他の方法では面白くないと思ふ時に黒の應手を試る位のものである決して着實とはいへない白でも持つた時に此手を用ひるのである之に對して黒の方は「ろ」に尖むが沈着な應手である、それから次に白が「ア」に頂け黒「イ」に掛け白「ウ」に下りとなる姿勢が古書に現はれてをるが此黒の「イ」は白の「ウ」と交換して面白いのではないのだから「イ」は打たずして他に轉するが宜しい即ち此儘の形では後に黒から如何様に打たるゝかの懸念が白に残つて居るからである尤他に打場がないと思考の餘り強めて打つなら軽く「エ」に斜走するなどが良い

圖 二 十 六 第



●黒五は白の四に對し最普通なる應手なり(第六十二圖)

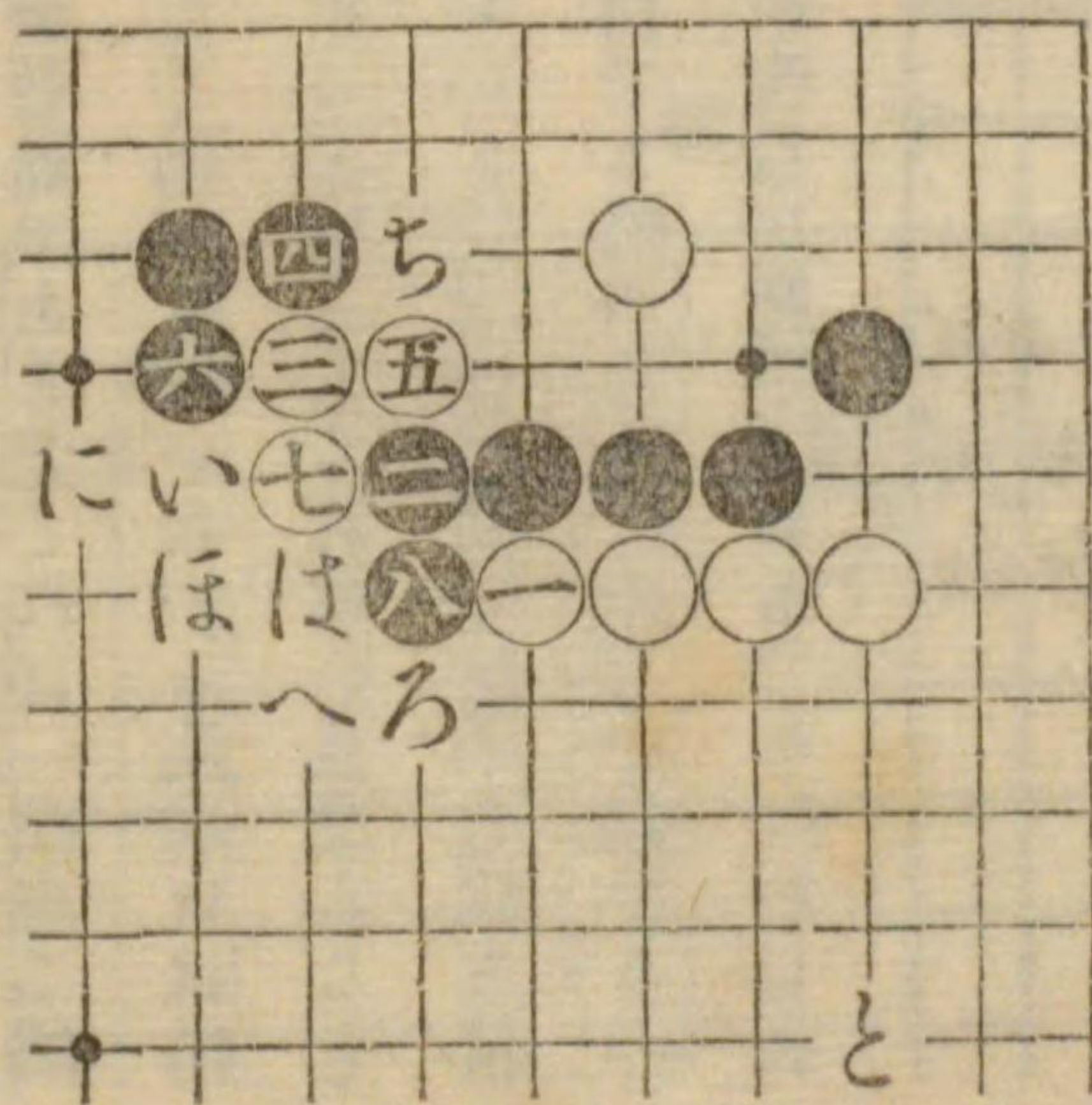


○白四は之を一間の夾返イッケンハサミカヘシといつて一種の趣向であつて尤此手は碁勢を急にする傾はあるが右側の約合によつて却つて面白い因てその積りで心して打たねばならぬ之に對する黒五は紛れのない通常の受手である●黒七の手は時として九に飛ぶ事もあるが多くは斯く行びる方が善い○白八は「い」「ろ」の二ヶ所に打つこともある若し「い」に打つた時は黒は先づ「は」に試みるのが働きの手だ、なせなれば白が八に應じたら黒は九に伸ぶのである、さうすると白「い」と黒「は」と交換したわけで白「い」の手が氣の利かぬ姿となるからである尤白が八に添はないで「に」に頂けたら黒は「ほ」に縛ねて白が打つ手に困るであらう又白が「い」に斜走する手で「ろ」に展開したら黒は八の處に曲つて良い或は場合によりては「へ」に詰める手もなくはない餘は次圖で説かう

○白一、二は急の趣向なり(第六十三圖)

○白一の押は外部を厚くして三の間(ハザマ)を生せしめ此間ココを利用して出動する手段である八までの黒の受方は白と搦みつゝ、共に相持する形勢といつてよい尤此打方は白が碁勢を急にするおそれがあるから豫め覺悟してかゝらねばならぬ此の先きは白

圖三十六第

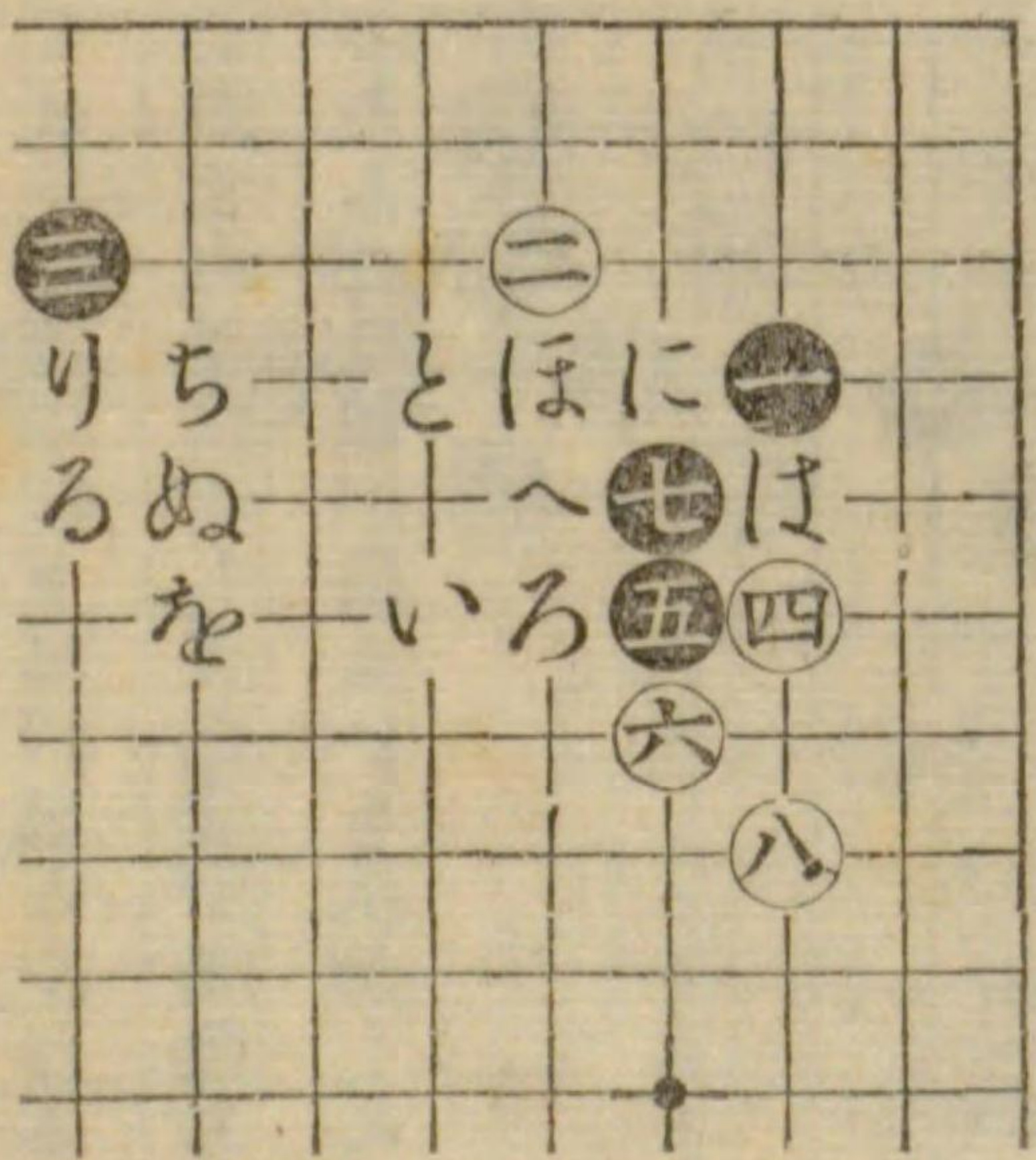


が單に「い」に曲るか或は「ろ」に捲るのである今白が「ろ」に捲るとし黒「は」白「い」黒「に」白「ほ」黒「へ」と打つなどは往々見る姿で打碁にもある又説明が最初に戻つて白一の手で直ちに三に打つこともある其時黒六白七黒四白五黒一となる變化があるが矢張前同様急迫を免れない。それ故に白は一の手で「と」に拵き黒も「ち」に詰めて打つのが穩な打方である

●黒五は場合によりて用ふる手なり(第六十四圖)

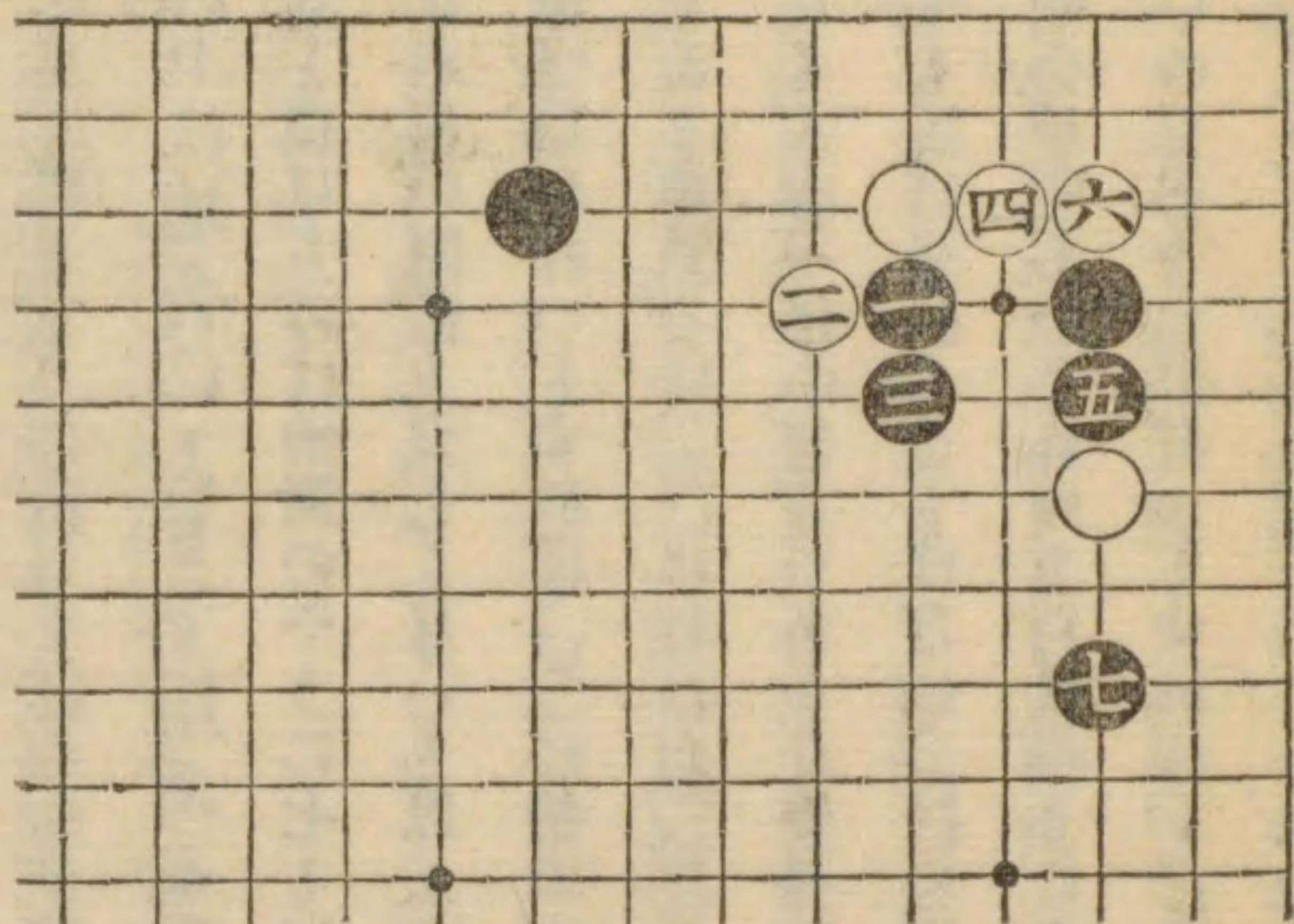
●黒五と頂けるのは前圖のやうに七と尖んで白より五と押されては右側の關係上宜しくないと思ふ時に斯く打つのである此の形で黒が打つとすれば「い」に飛ぶのが宜い然し手を抜くこともある●黒七は「ろ」に行ひ白「は」に突き當り黒「に」に伸びとなるも亦一種の打方である此姿勢で白から七の處に突出されても黒は恐れることはない「ほ」に打ち白「へ」黒「と」と伸びて割合が宜しいそれゆゑ白は漫りに七の處に突出することはないのである白が打つとすれば「ち」と肩を衝く位である其時黒「り」白「ぬ」黒「る」白「を」となりそれから「ほ」に打つて突出を防いでも晩くはない

圖四十六第





圖五十六第



●黒一の頂は此場合悪し(第六十五圖)  
これは参考に示したまで、ある黒一と打つ事はある手であるが此三間夾のある場合に於てはその石の在り場が悪くなるから一の手が面白くない然し通常の手段として此姿が書物などに現はれてをるが三間夾のある時は黒が悪いと承知して差支ない注意のため掲げた次第である

(白二間夾返)

○白四の手は二

間夾返ハサミカヘシといふ

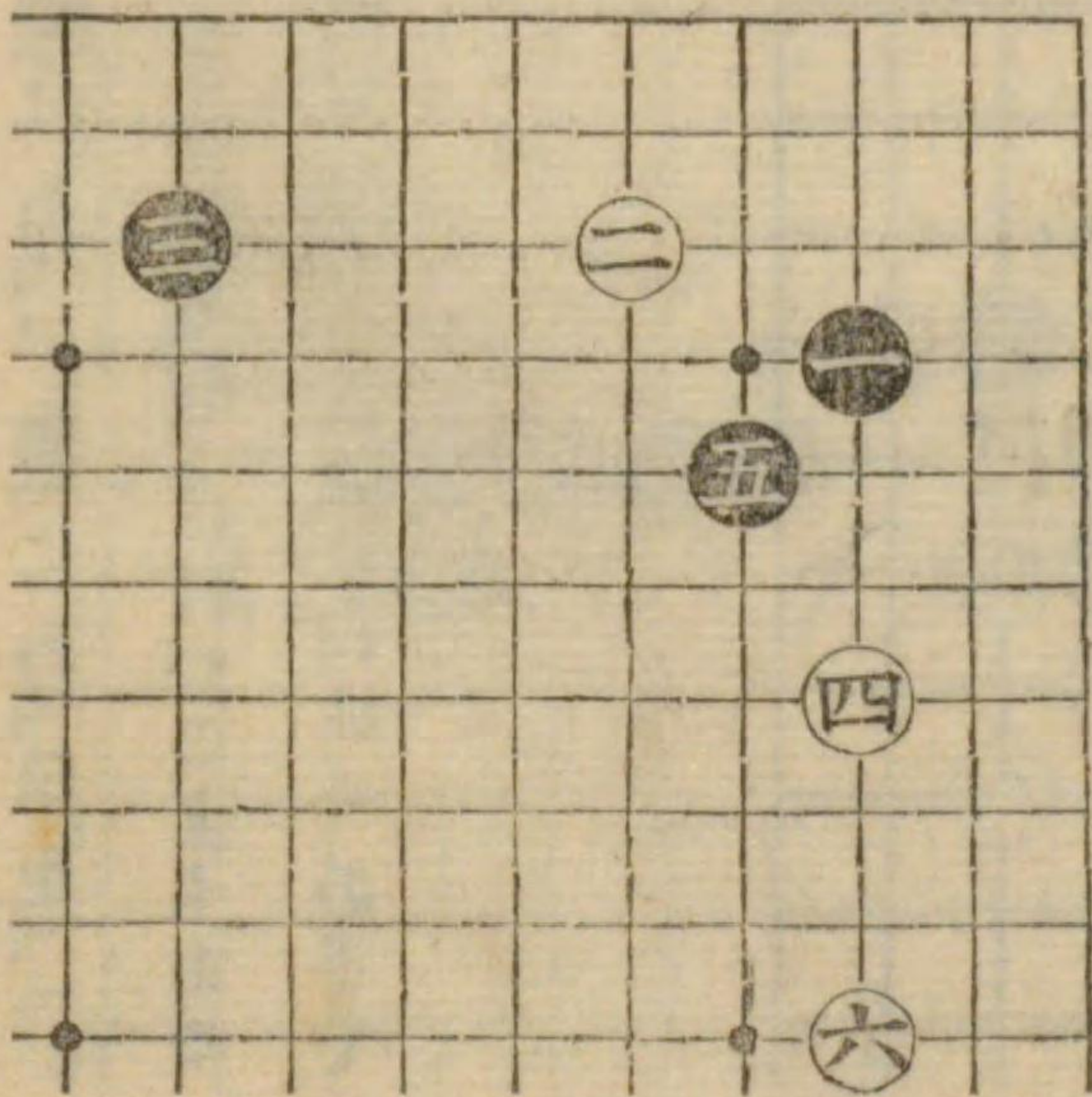
(第六十六圖)

○白四の手は一間夾返

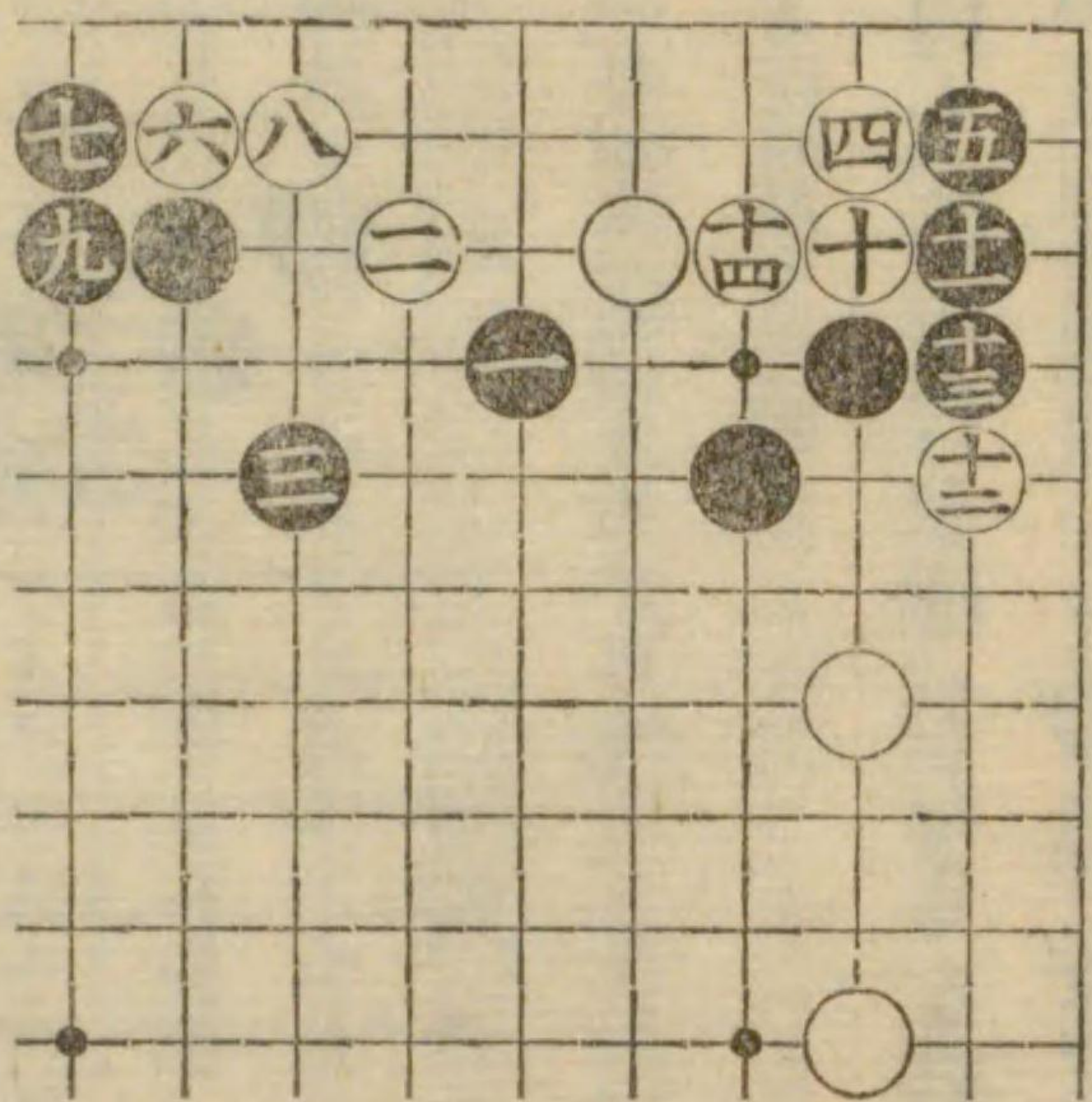
しよりは用ふることが

多い尤善悪は場合によること勿論である之に對して黒五の尖みは穩かなる通常の手である○白六は四と打つた趣向に關聯した常用の手段である

圖六十六第



圖七十六第

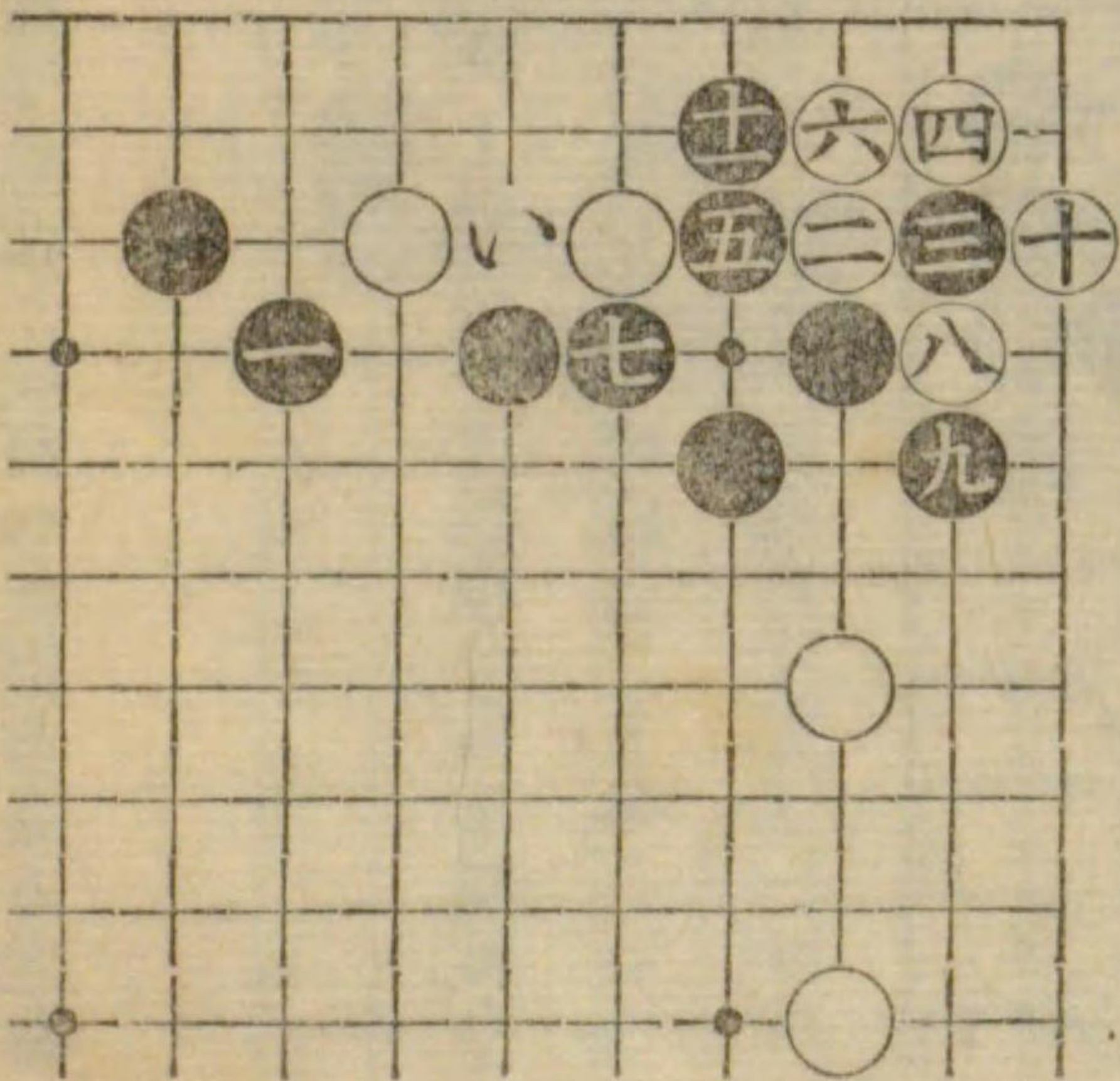


●黒一は白を壓迫する趣向なり(第六十七圖)  
數字なき白丸黒丸は既成の碁勢なり以下倣之(前圖参照)  
●黒一と掛けるのは封鎖して中原等に利する處あらんとする時に用ふる手段である○白二、四は活きんとする常手である●黒五は尙追窮する手であり夫れより十一までは双方普通の應接である○白十二は打徳の手だ○白十四は此白を活きるのに最適當の點である尙變化は次圖で示さう

●黒一は緩みなく白を攻むる手なり(第六十八圖)

○白二及四と變化して打つ趣向は黒一に對する相當の應手である圖の如く十までとなるが普通の振替りであつて互角といふべきだその中黒七の手で直ちに十一に下るのは宜しくない、なせなれば八の切提を打たれて白から七の處に突き出さるゝ手が残るから直ちに七に備へなければならぬことの不利がある然し

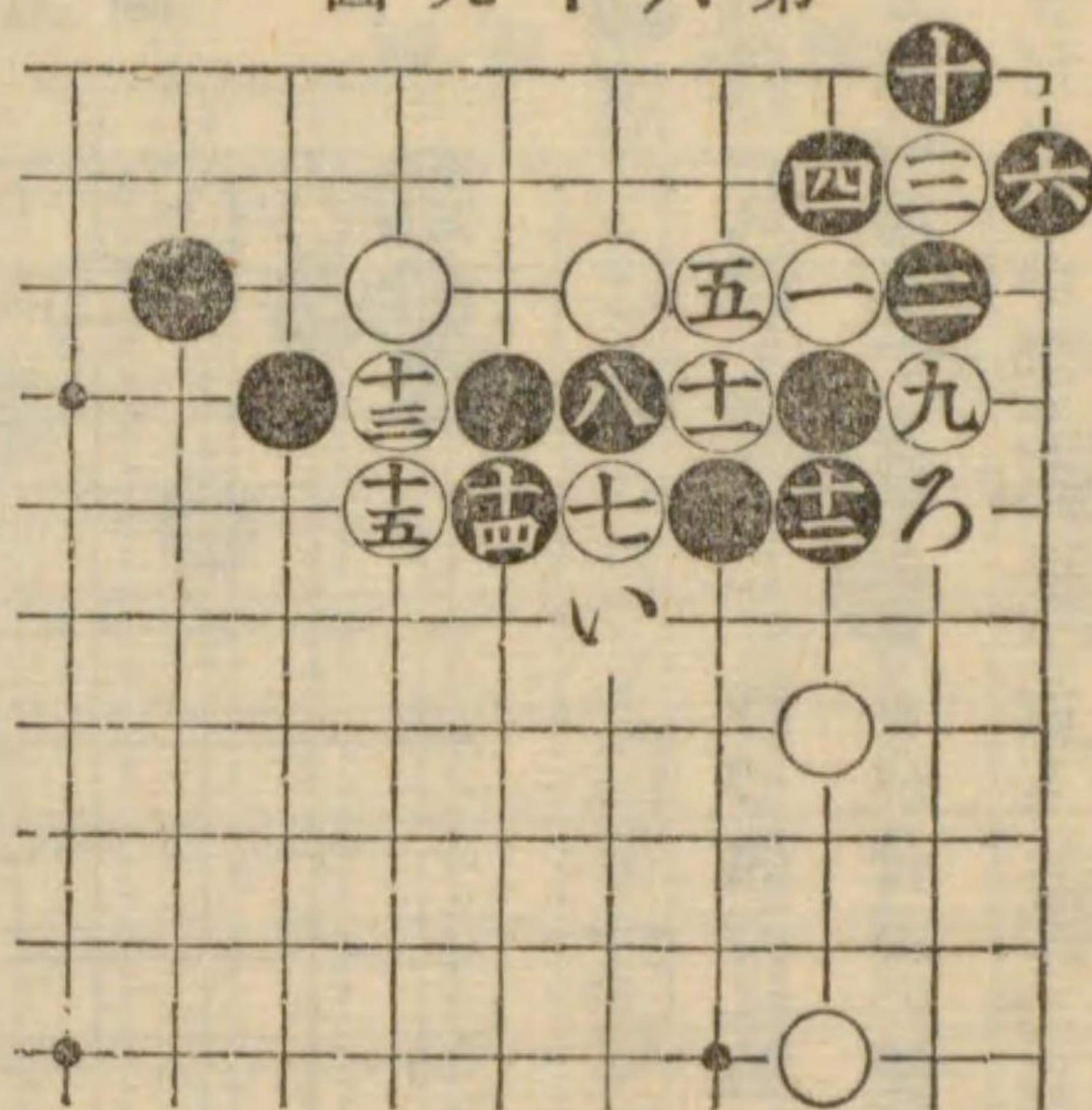
圖八十六第





七と先きに約へ置けば十一の手は必ず打つには限らぬのである又七の手は「い」に打つこともある尤それは白から三の一子を切り取り取られた時手を抜く趣向である

第九十六圖



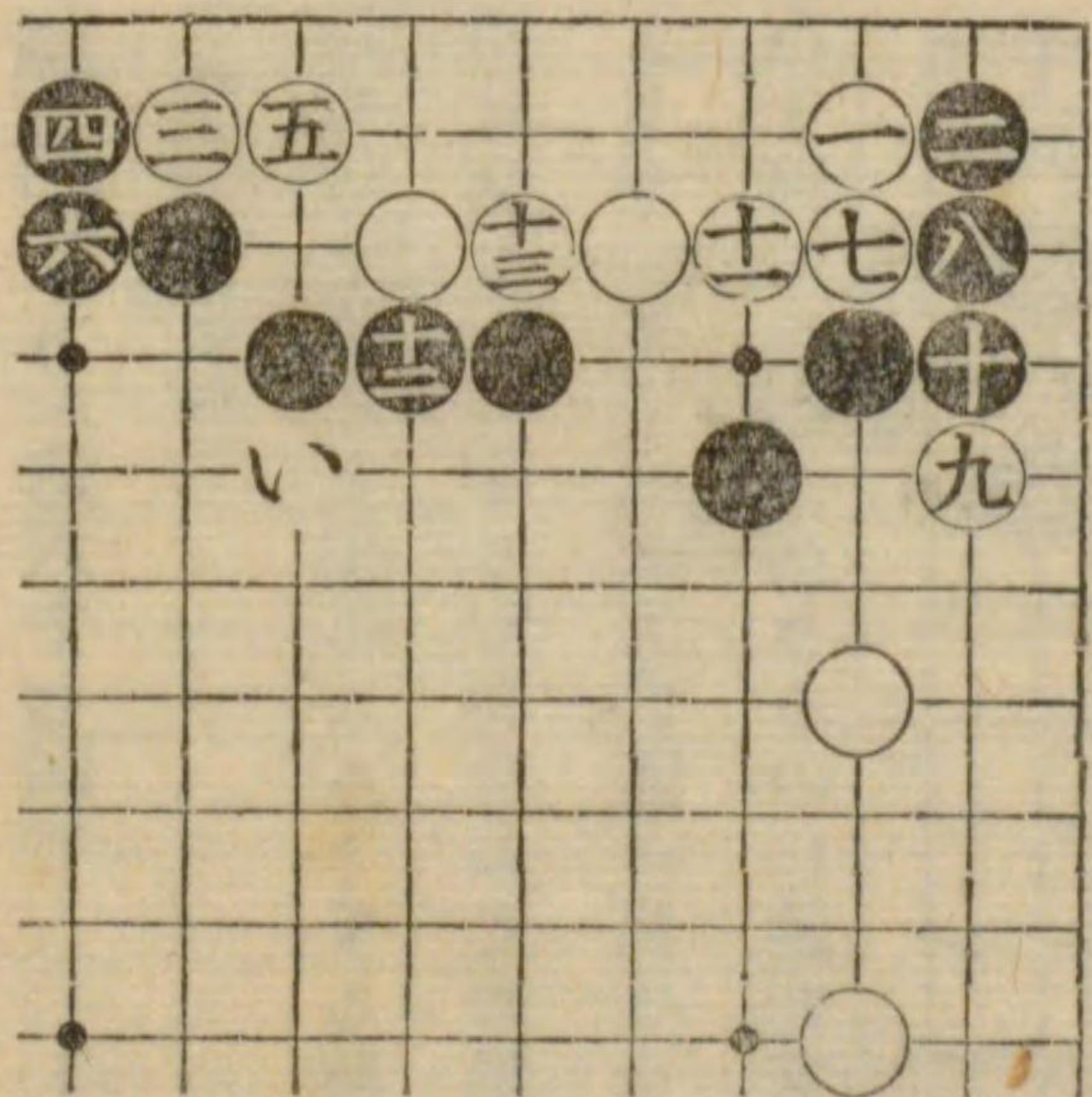
●黒四、六無理なり(第六十九圖)  
●黒四、六と強ひて白を殺さうと打つのは無理である圖のやうに白から十五と突出せられては黒の形が破壊したものとつてよいそれゆゑ黒が四、六と打つてゆくのは悪手で用ふべからざるものであるが参考のため示したのである其中黒八の手を十四に打つたなら白は「い」に行び黒八

なれば白九に切り黒十に提つた時白十一に切り黒十二に粘かば白「ろ」に打つて善い

○白一は場合をはからざる悪手なり(第七十圖)

○白一の手は黒が「い」と緩めずに尖みて打つたに拘らず同じく

第七十圖

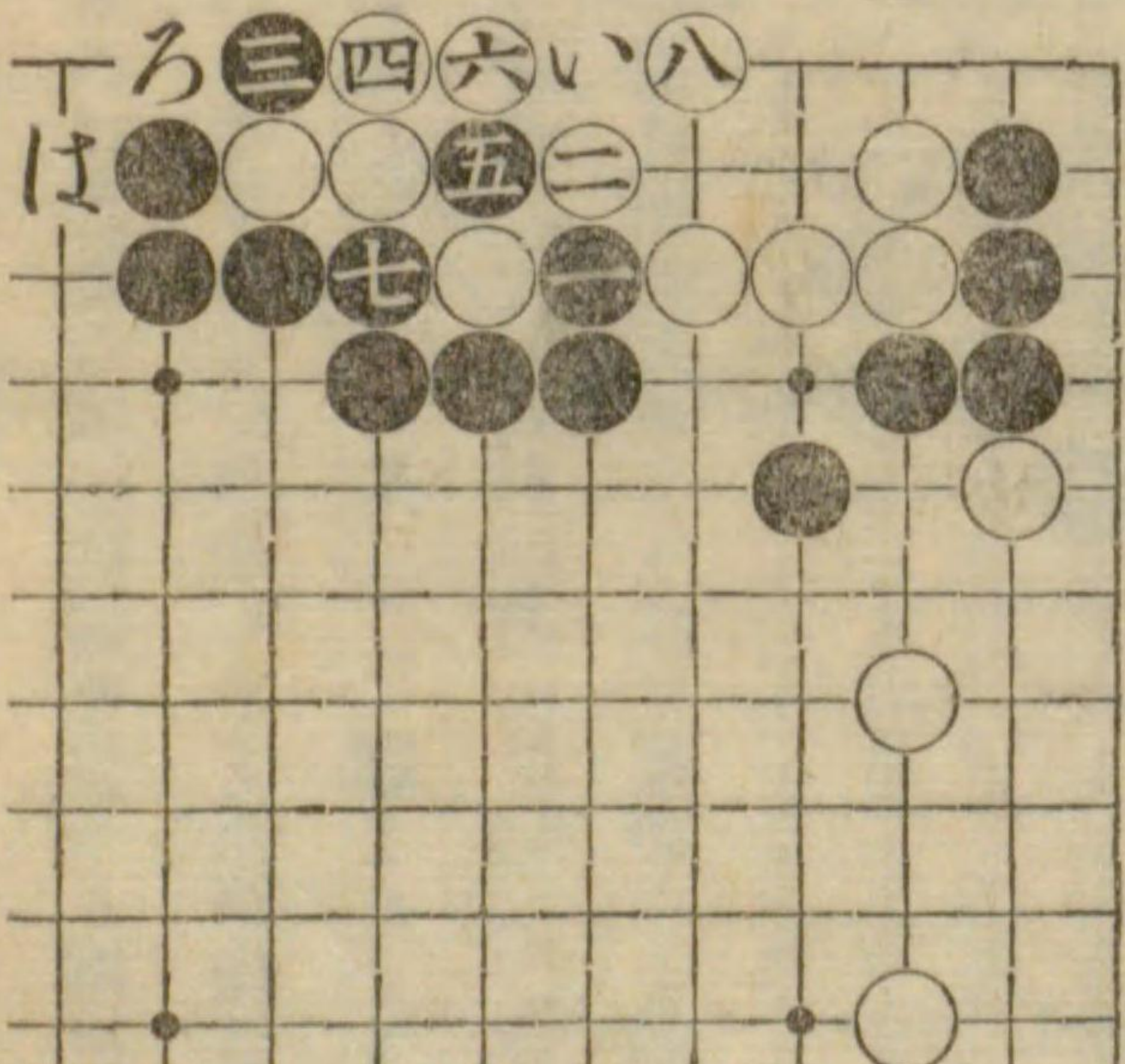


走するは場合を思はざるの點で宜しくない圖のやうに黒から二以下十二迄攻撃されて己れは緊縮の姿となり外部は黒に厚壯の勢を與へ十三と後手にツガざるを得ぬ結果を生じたのは一の手宜しからざるに原因するのである前圖に示したやうに七に頂け二に二段縛する手筋に打たねばならぬ場合で此處には悪例を特に示した次第である次に十三の後手の理由を説かう

○白手抜きならぬ説明(第七十一圖)

前圖黒十二までのまゝで白が手を抜いたら黒から一と突出し白二と受け黒三と縛ね以下九の劫提となり劫争を生じて黒の利なることは言ふまでもない其中白四の手を單に六に打つても黒から七にアテられ白八の時矢張黒から五と劫を提られ同じ結果であるたゞ此處に注意すべきは白四の手で八にカケツイだら如何黒六にオキ白四黒五白「い」黒五の處に刺白「ろ」に提り黒も七に提り白「は」となる次第もあるからその心得で打たねばならぬそれゆゑ左側の配置如何によつては黒も直ちに取

第九十七圖 提劫



りかけを試み白に連絡されては大損害であるから若し斯かる場合に黒が左側に向つて其豫備をして利

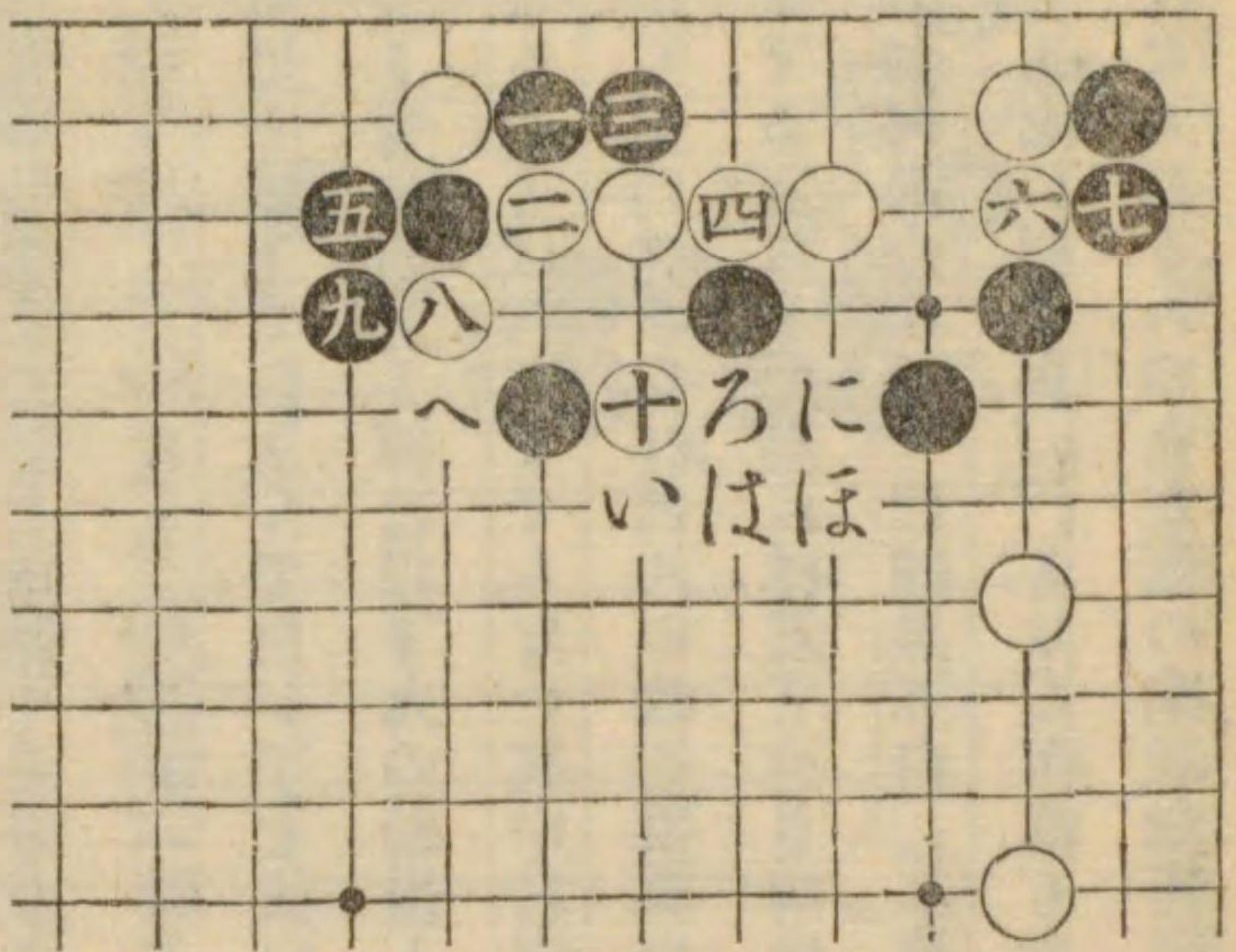


するところがあるから到底白は此處を手抜きして置くことが出来ぬといつて善い

●黒一は良手にあらず(第七十二圖)

●黒一と勿出して烈しく攻めるのは普通の場合破綻を生ずる虞があるから決して好みて打つべき手ではない白から十と頂け出さるゝ運びとなつて宜しくない然し今假りに黒「い」に應じたとすれば白に種々の手段もあらうが先づ「ろ」に行び黒「は」白「に」黒「ほ」の時白が「へ」に出てたら黒は困るであらう故に最初一と綽ね出すことは非常の場合を除く外大抵悪いことゝ了解して差支ない

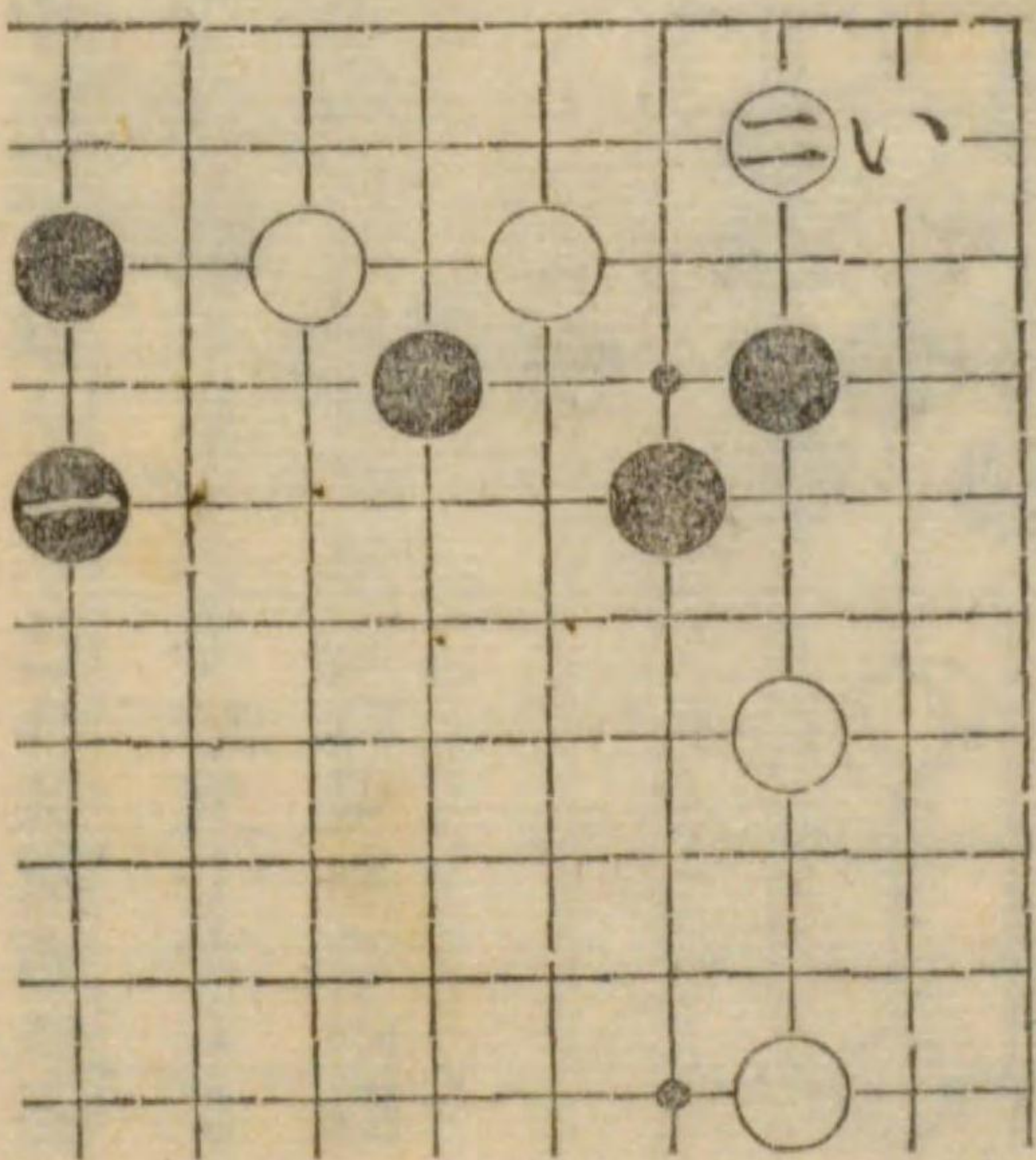
圖二十七第



●黒一と飛ぶのも一策なり(第七十三圖)

●黒一は左側方面の關係で斯く打つこともある即左側の碁勢によつては白二と打つた時こゝらで手を抜くが得策の場合などに

圖三十七第

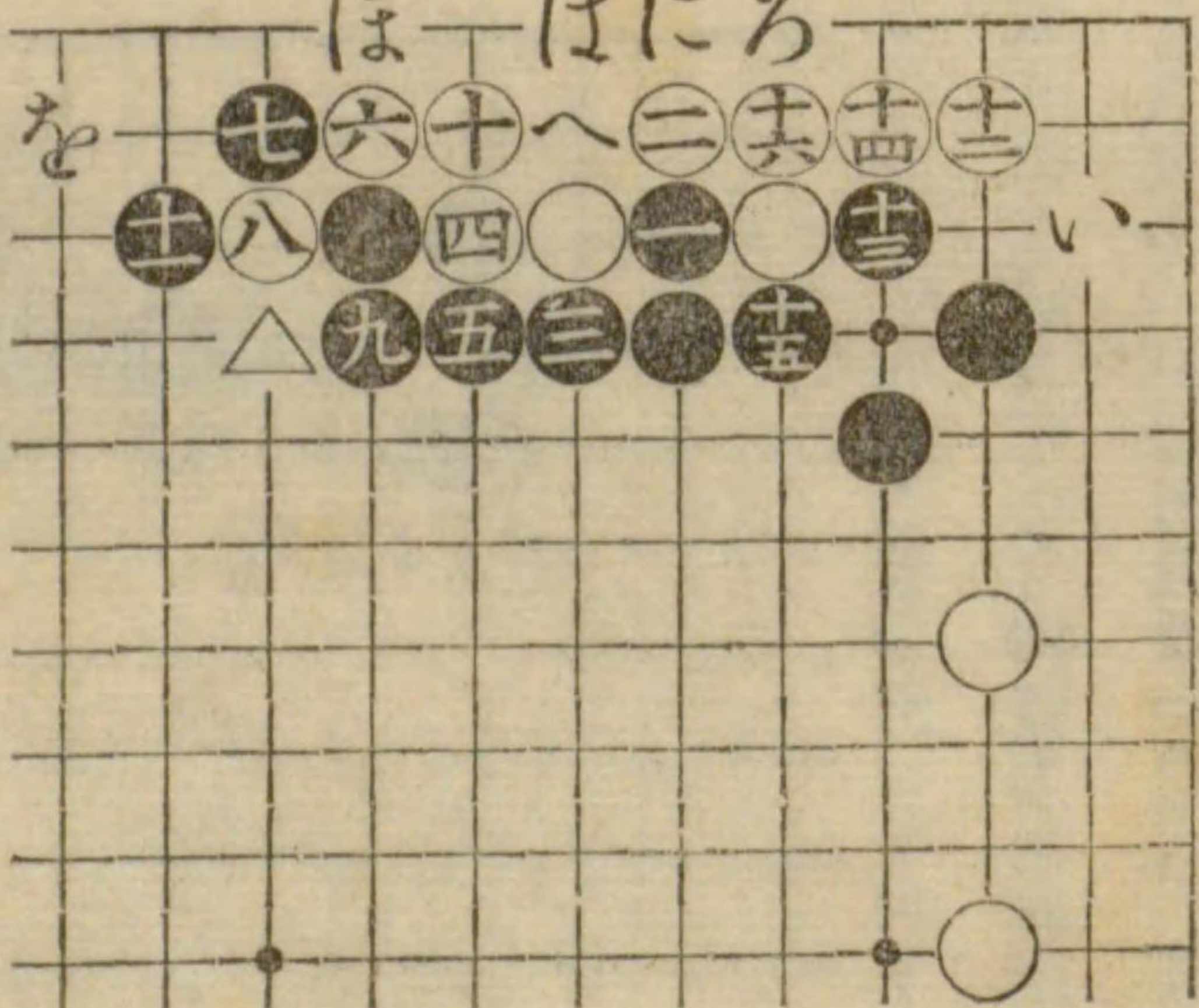


用ふる趣向の手である白二の斜走に對し黒が攻めるには矢張「い」に頂けるが善い。以下前圖と大同小異である。

●黒一、二はきびしく外面を固める趣向なり(第七十四圖)

●黒一、三と打つのは中央及び左方面に利用する碁勢の時に行ふ手段で十六までの應接は普通である黒は八の白に逃げられると危険なれば常に心掛けなければならぬ(白十六の變化)白十六と粘ぐ手の場合によつては右側の二子を掩護する目的を以て「い」に尖む受け方もある其時黒は十六に提り白「ろ」に盤た時黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」となる「い」に尖むは右側の二子を掩護するには善いが圖の如く黒より「ほ」に綽ねられてあるから△印に征を出ても黒に「と」にカケツグ好形あるだけ征の効力が減するものと心得るが善い

圖四十七第



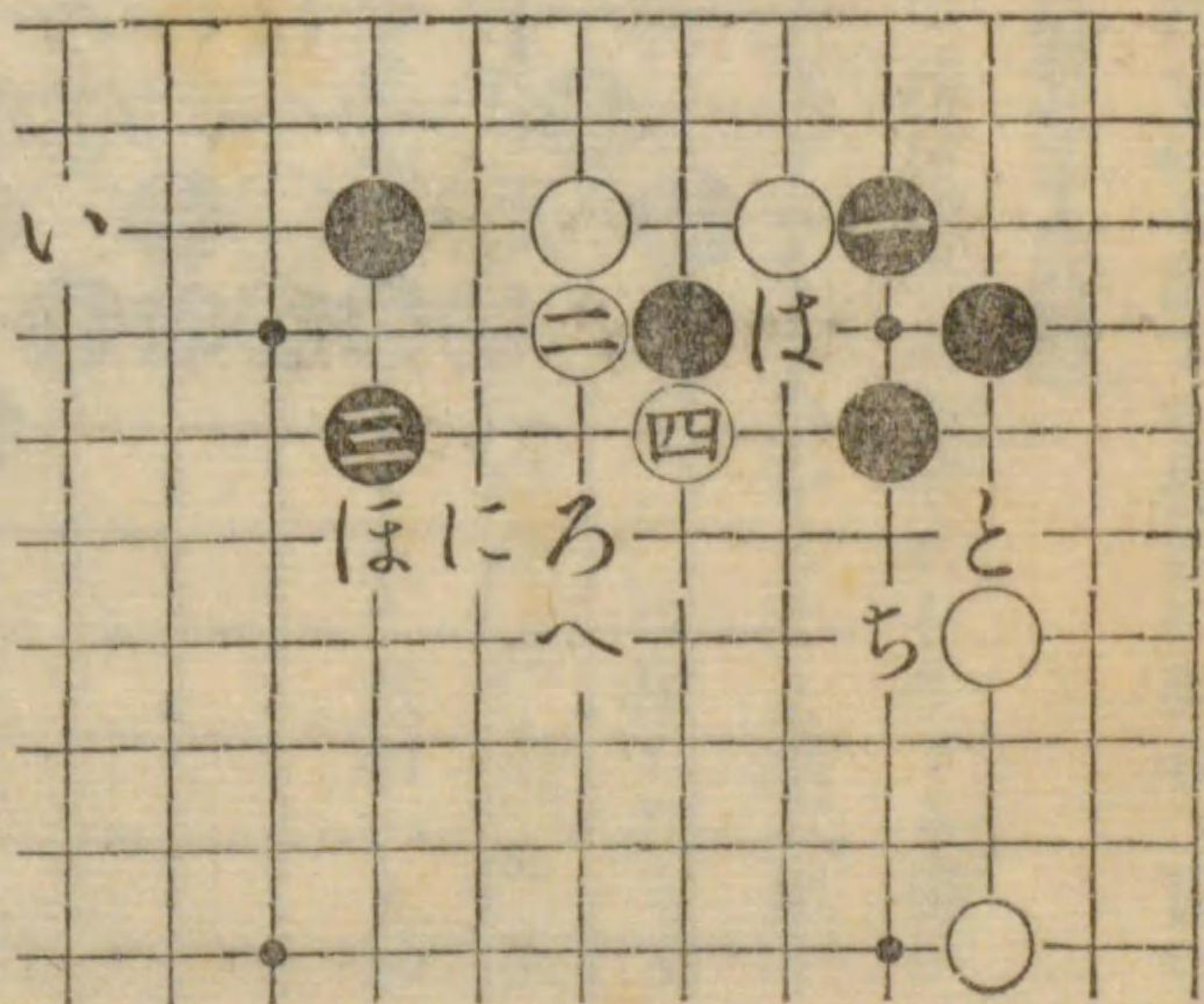
●黒一は先づ自分を固め兼ねて實益を占むる手なり(第七十五圖)

●黒一は前に示した通り外部を鞏固にしてもカラヌリとなるの時寧白を追ひ出す方得策の場合に打つ



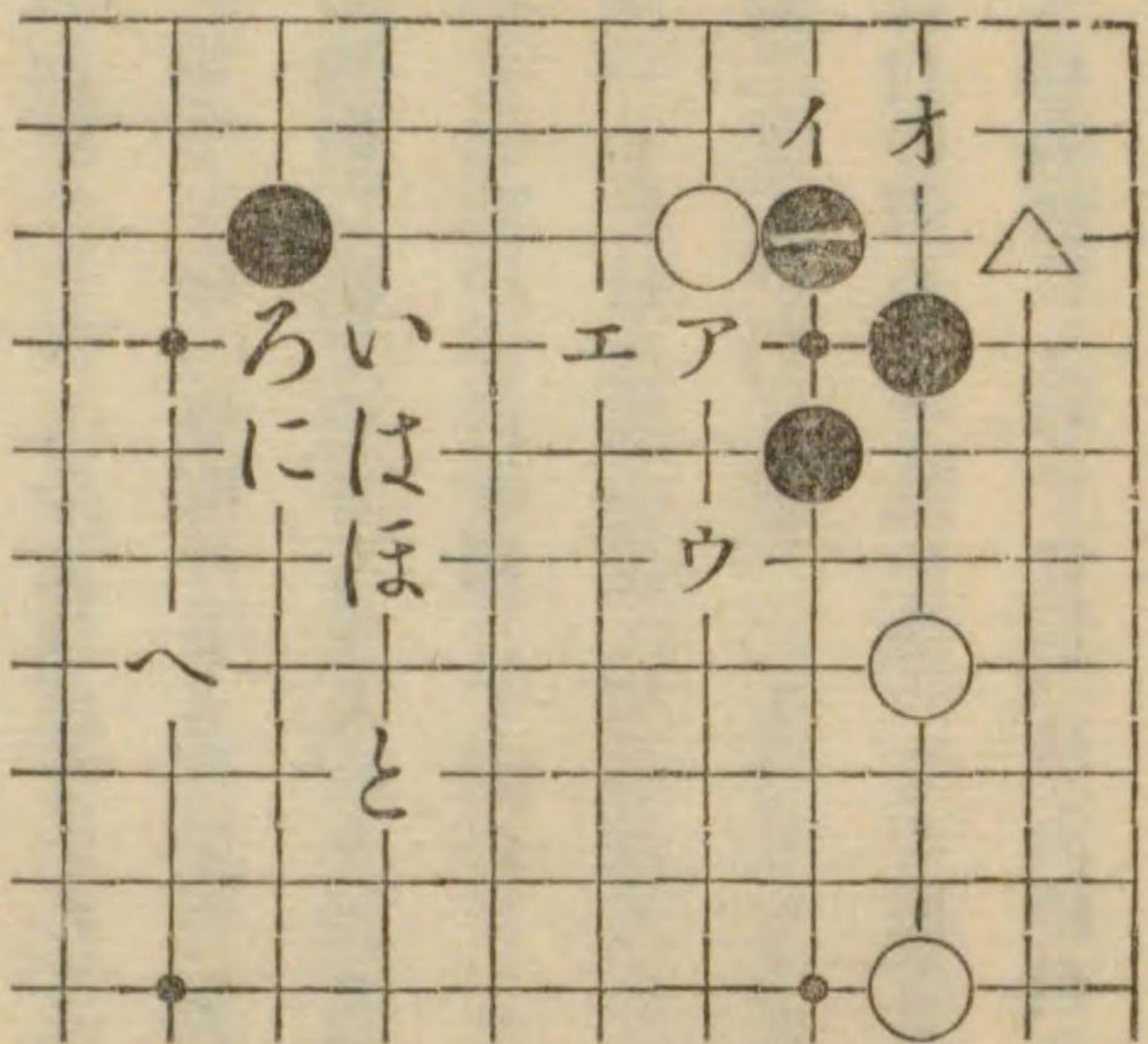
手である●黒三の手は時として「い」に拆いて地歩を占めて打つこともある○白四の手は普通にして稀には「ろ」に飛ぶことがないでもない此形に於ては黒「は」に引き出すと又白が「は」に抱へ込むのは大なる手だが時機見合をするが善い大抵直にはやらぬものである假に黒引いたなら白は「に」にカケツギ黒を「ほ」に行ばして「へ」に斜走する手と或は「に」に打たないで直に「へ」に打つ手と又は「ろ」にカケツグ手と其他攻め手の關係にて臨機の手段が一二ある白又假に「は」に取つた場合に黒「と」にコスミックケ白を「ち」に立たして手を抜くことがある

圖五十七第



●黒一の手は前圖の意味と略同様なり(第七十六圖)  
●黒一は實益を占め且つ白に調子を與へる趣向である此時白他に轉ずることがあつても打つとすれば「い」に打ち黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」となるが通形である又白「い」に打たないで「ア」に立てば黒より「イ」に下られて重くなつて甚だ悪しくなる前圖では烈しく白に手を抜かない時に打つものでこれは白に手を抜かれても調子を與へぬ方得策の時に用ふる手段で前圖と關聯するものである故

圖六十七第

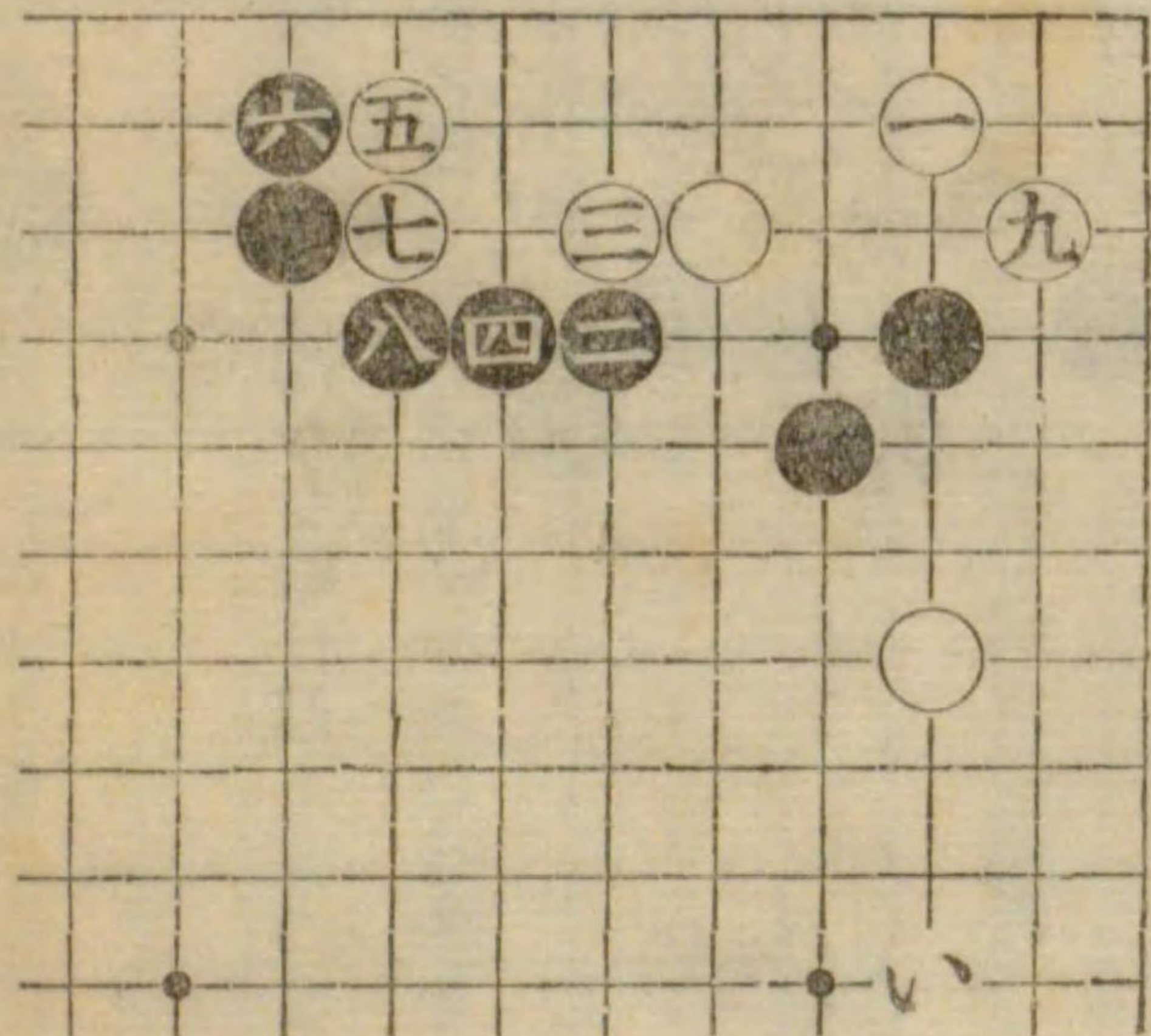


に黒が白を取るには「ウ」にコスミック二子の白にも響きを與へ地を深く厚壯にする手であるので白も此處はカケル次第である時機を見合すが善い此白を捨て打つ時には一法があるそれは「ウ」に掛け黒「エ」白「イ」黒「オ」と打つのである此白の「イ」の勿は其石に多少の味ひを残す爲めにもなるが又侵分の際△印に覗いて利する爲めにも此際打つておくのが手順である

○白一は割合を利する手なり(第七十七圖)

○白一は割合を儲けやうとする手で黒二以下十まで通形である前圖には白が「い」にあつたがこれには一手を略してあるが隅に九

圖七十七第



の處に来て居るから連絡の路があるので白の此の一子は攻められるわけではない此に於て「い」の一子が他の必要な所に廻りる次第でそれだけ割徳のある次第なれば斯かる場合に此の打方

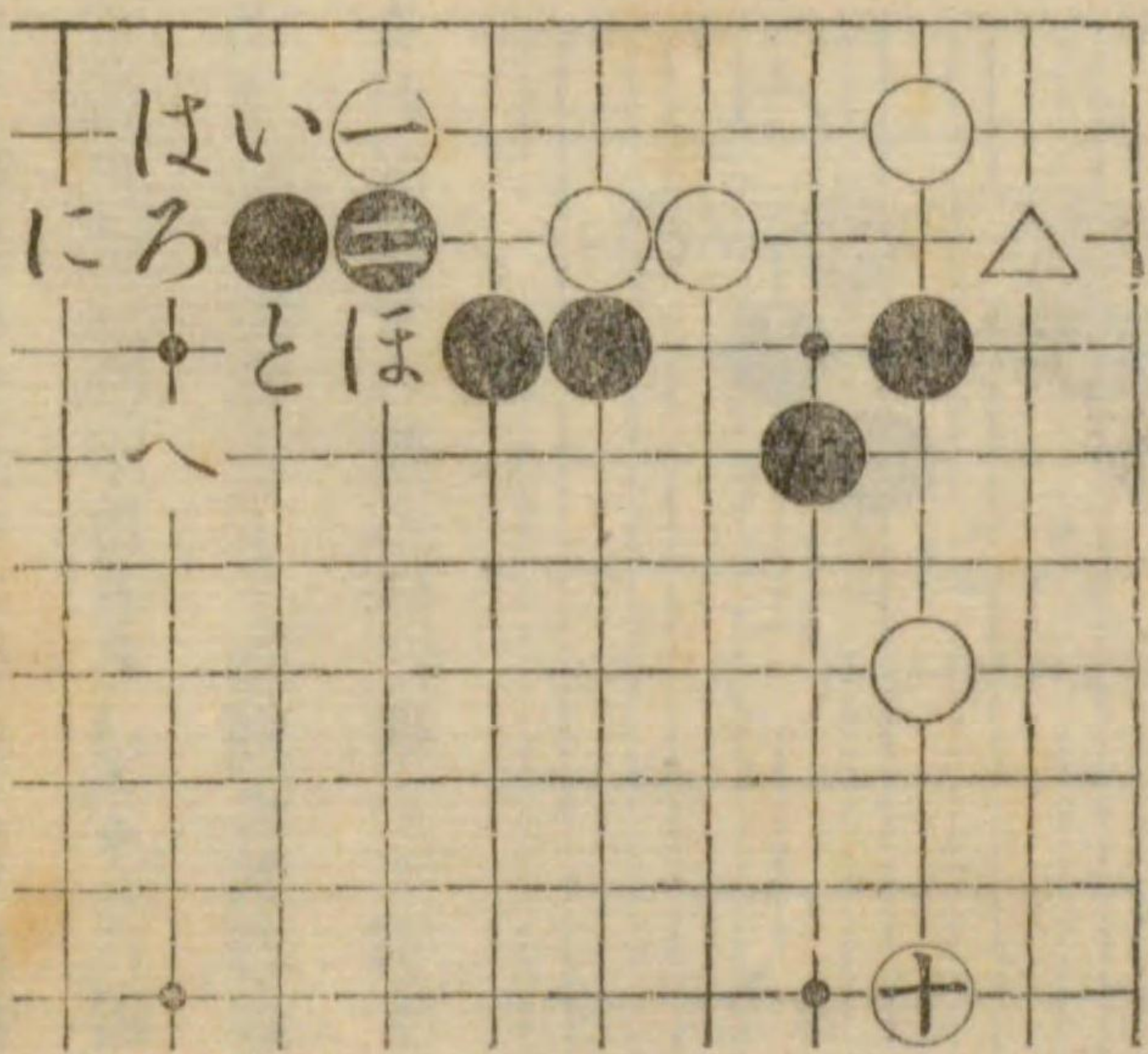


を用ふるのである併し黒に強壁が出来ることを覺悟しなければならぬ尙殘説は次圖に示めさう

●黒二は敵の趣向を挫く手なり(第七十八圖)

●黒二は「い」に約へ前圖の如く白より△印に尖まれることゝなるが面白くなく思つた時に斯く打つこともある其時白「い」なれば黒「ろ」に行びる白若、猶這ふとすればそれに従つて行ばさせて善い外勢を黒に與ふる結果となるので左様に這ふことはない大抵白「は」黒「に」になる位のものである而して一方右側の白一子は隅の△印に援助がないから今度は何とかして凌がなければならぬ多く二間に星下×印へ展開するものである左すれば白一と斜走して前圖の趣向に出でやうとするのを黒が挫いた結果となる或碁勢によつては此の手段を用ひて利あることがある心得おくべきである又一つには左隅方面に白の布置ありて前圖の如く黒「い」に約へ白二黒「は」白△黒「へ」となつて外勢を獲やうとしても既に左方に白の石あつて意の如くならぬことあるか或は其左方の白の在り場如何によつては黒「は」の時白△印に打たないで先、一應「と」を切ることもない黒「に」

第七十八圖

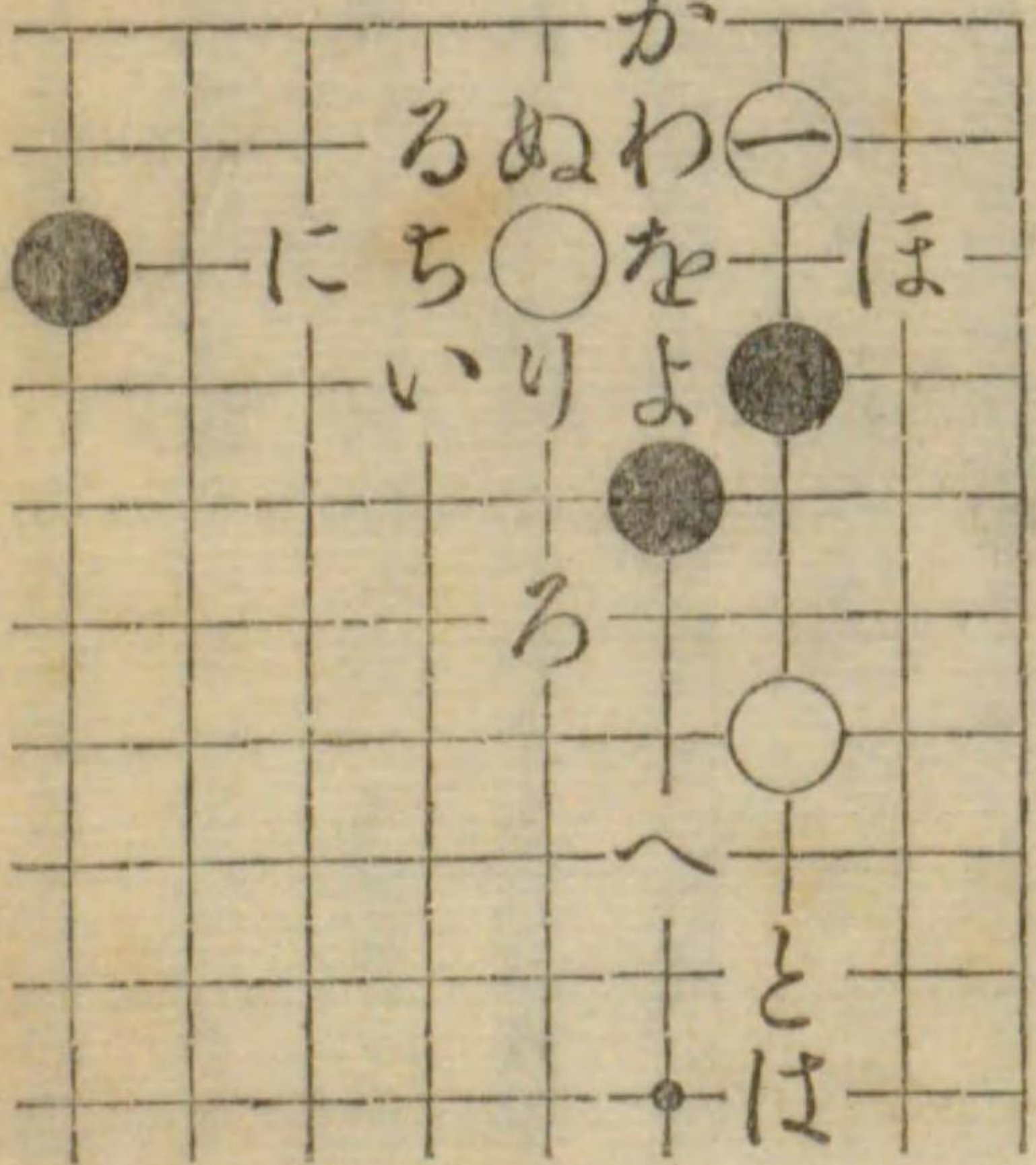


なれば其時白△印に打つべくこれ」と切り徳をされた譯で黒の割合は悪い尤其左方の石のあり場の如何によつてこの切りを生ずる次第で白とても漫りに用ふることは出来ない又之に反して左方面に黒の配置ある際にはこの二と打つ手は大抵悪くある「い」に約へる手段に出て左方面と相呼應して形勢を成すべきものである然るを二に約へ白「は」までの運びとなつては左方の黒石其働きを失ふ次第となつて善くない

○白一は黒の應手を試みるなり (第七十九圖)

○白が一と來た時前に示した二圖(第七十七圖第七十八圖)の如く黒「い」にカケル手段に出ては面白くないと考へた時には「ろ」に打つ手段がないでもないこれは「い」にカケるも其結果何れも割合が悪いと見た時は左りとして捨て置いても白より先着されて紛れを生じ易い斯く「ろ」と雁行することがあり其時白「は」なれば黒「に」にツメ白「は」に尖んだ時手抜するなどの趣向もある然れども白「は」の手にて「に」に打つことも出来る黒「へ」にカケれば白「と」に應ずる而してこの何れを撰むかは白の隨意で局勢の如何によつて白は都合よき方に出づる

第七十九圖



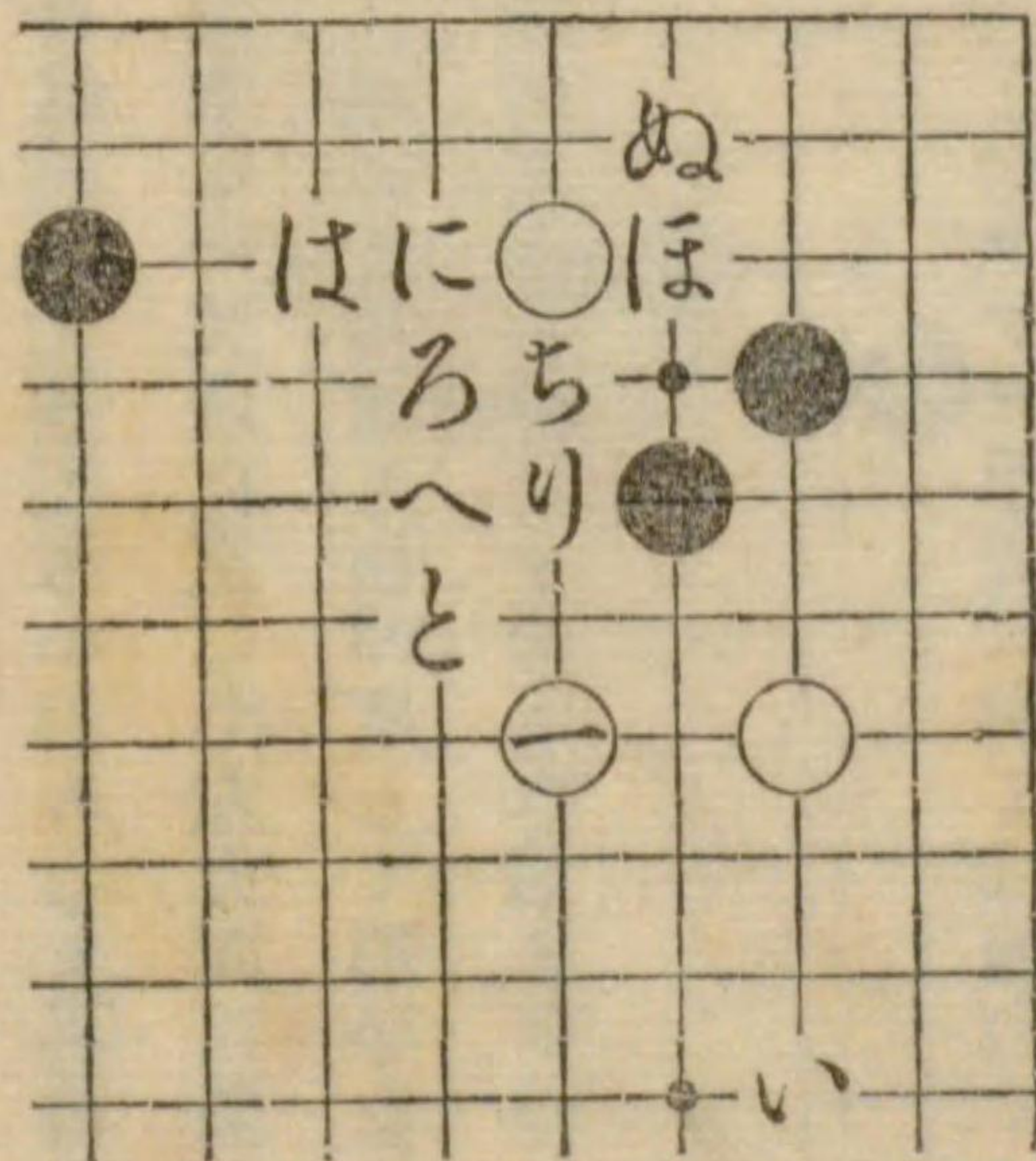


なれば少しく紛れないとも言はれない。その一隅のみで断ることは出来ない。されば黒は大抵の場合には「い」にかけ連絡して治り置くに若くはないが「い」にカケたる結果が餘り働きのない場合にもあつた時は臨機の一策として此の「ろ」に打つことがあることを心得置いて善い又序に白一と斜走した時黒「い」にも「ろ」にも打たないで「ち」にツケるを見ることがある。これ一見手筋なるが如きも實は良手ではない。其時白若し「り」に行びなば黒「ぬ」に縛ねて白の形を破壊し誠に都合よく即ち黒「ち」の趣向を遂げた譯なれど白にも手段がありそれは「り」に行びる手で「る」に縛ね黒「を」に來たら白「り」黒「わ」白「ぬ」となつて黒は悪い尙黒「か」に下るか白は機を見て「よ」の差込みを打ち敵を兩断する手が残つてゐるから到底黒の割合悪いされば黒「ち」に打つことは多くは悪い或場合に臨んでもよく熟慮すべきものである。

○白一は場合見計ふべし (第八十圖)

○白一と飛ぶは下隅との釣り合ひで「い」に二間拆いては平凡に過ぎるが如き場合に下方を廣く見せ且つ懸カカリにある白石に響かせ黒をして直ちに着手せしめる等處分を促すの趣向をも含んでゐる。其時黒「ろ」に掛れば白「は」に飛びとなつて以下の打方は既に

第八十圖

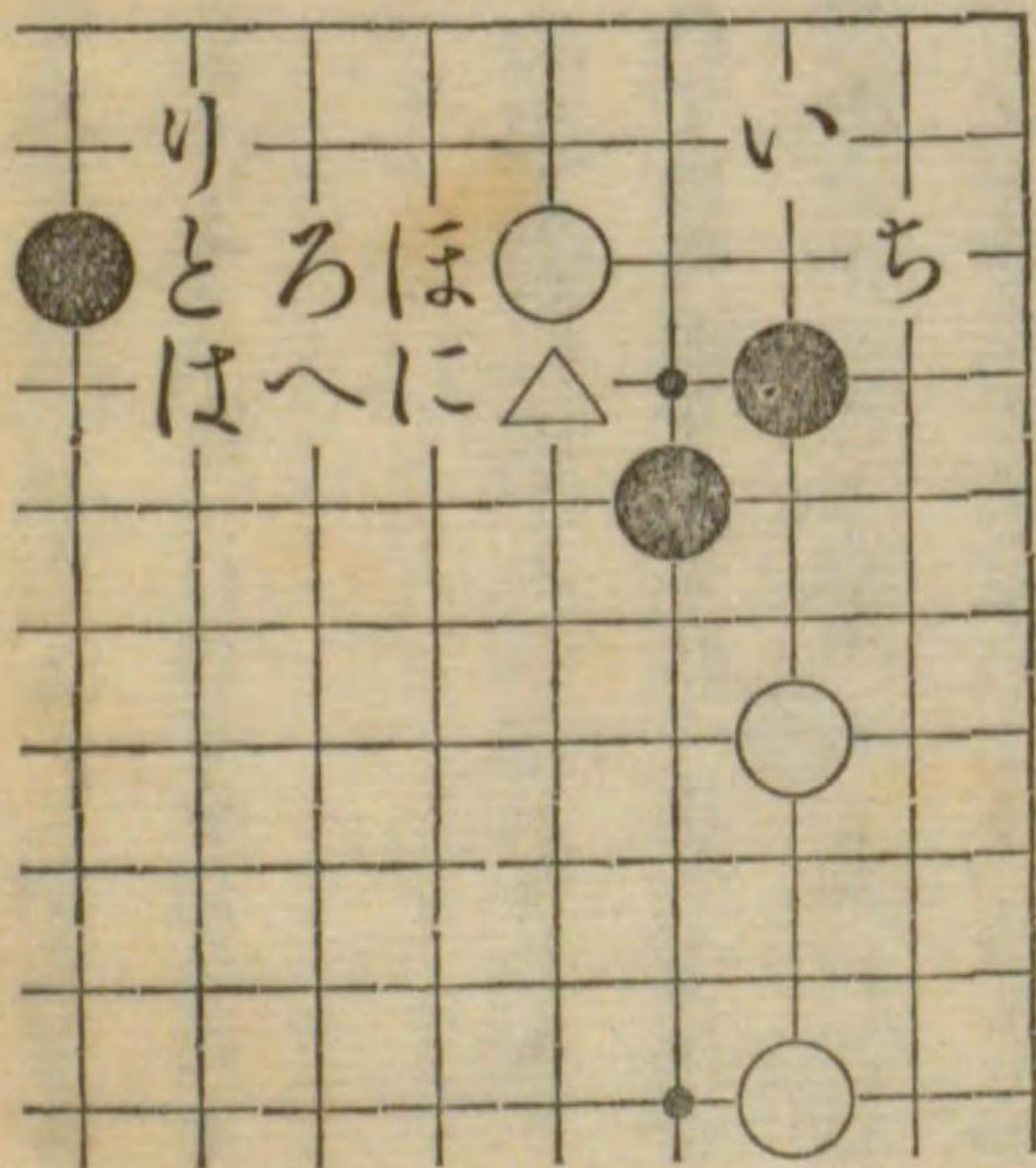


前に詳なれば略する極めて稀有の事だが白「は」の手にて下隅に轉ずることはないでもない然し黒より「に」に押し切られては此の隅の結果白悪しくあることは言ふまでもない而して此黒より「に」に取りきらるゝ場合には白は一の手の飛びにあるから「い」に二間拆きにある方優つてゐる而して黒が「ろ」に掛けを打ち白を「は」に飛ばして「ほ」に尖みつけると始めより單に「ほ」に打つ趣向との相違は前者は白を重くして攻めたてる時に後者は白に調子付ける際に用ふる手段と知るが善い。黒より單に「ほ」の尖みツケてある形にて白より打つ手は「へ」と斜走にある又黒より打つとすれば「と」に斜走するにある白「へ」に打たないで「ろ」に行びるのは黒より「り」に押されても又碁によつては「ぬ」に下られても重くつて宜しくない。

●黒手抜の時白の打場如何 (第八十一圖)

此の姿勢で白着手して何處を宜しとするかといふに「い」「ろ」「は」の三點がある。稀に「に」に尖む事もないではない。今「い」に斜走するとすれば黒「に」に掛け白「ほ」黒「へ」となることは前號に述べた以下白「ろ」に押し黒「は」に引けば白手抜きして他に打つが善い。又黒「と」に突き當れば白「ち」に尖んで△印の出切を狙

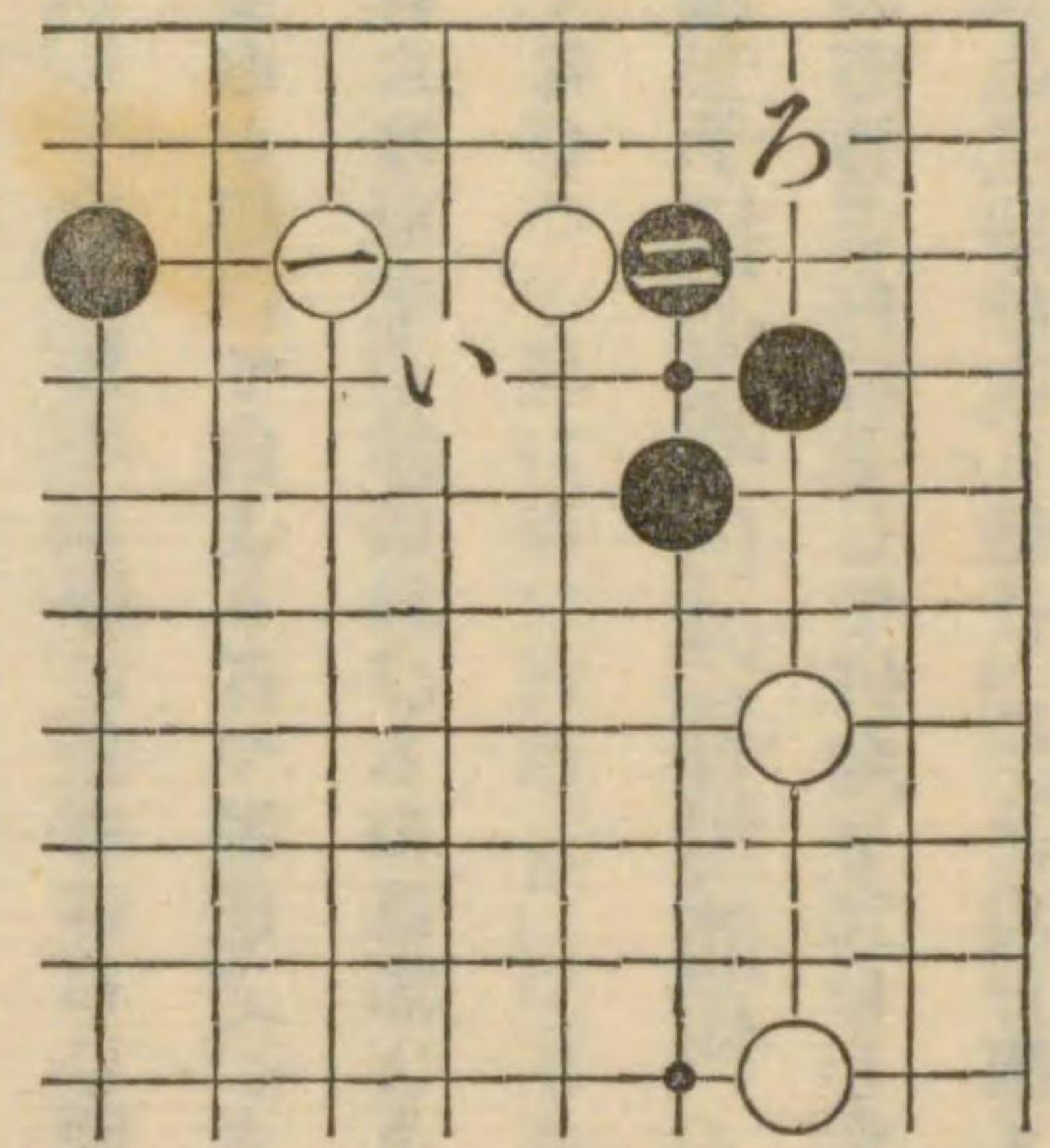
第八十一圖





ふがゆる黒は此弱點を防守せざるべからずして畢竟黒後手となる故に此の場合には白「り」に斜走するよりも「ろ」に押を用ふる事が多い又黒は同じく後手にせよ」との突當りより「は」に引きを用ひ白を「ち」に尖ませぬやうにする尙圖を改めて殘説を述べやう

圖二十八第

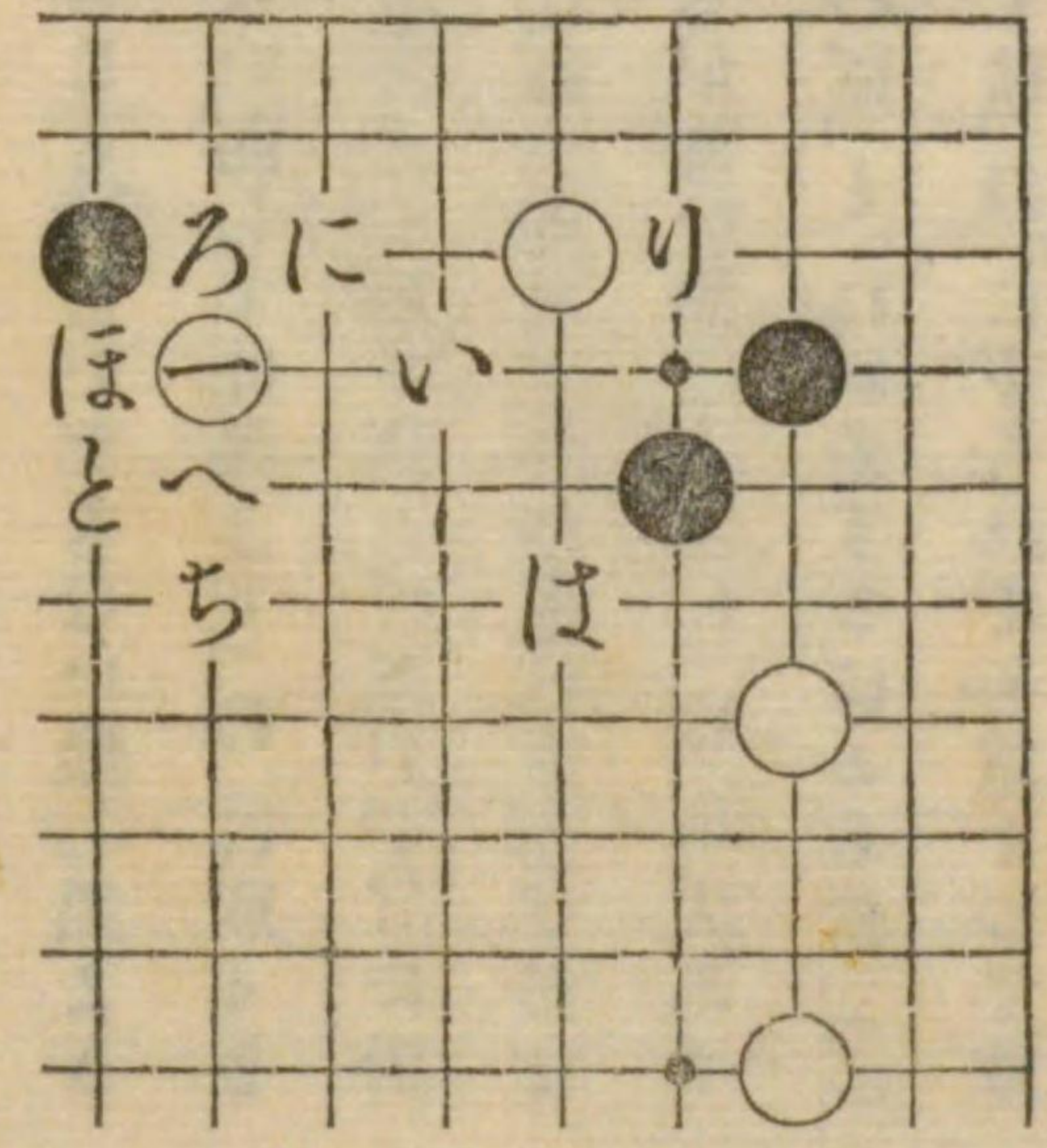


石となつて逃出を餘儀なくするの形勢となるからである

○白一は中原との權衡上用ふる場合多し (第八十)

○白一は黒より「い」に掛けらるゝ嫌ひ出路を得つゝ中原の釣り合ひが一步敵より進むを得策とする時などに面白いことがある

圖三十八第



○白一は黒に掛けさせぬ場合に用ふ (第八十二圖)

○白一は黒より「い」に掛けられては外面を閉されて悪しき場合に斯く出路を求め且つ白石の幾分を治めたる姿である其時黒は二に尖みつけるを可とする若、之を等閑にせば白より「ろ」に斜走して隅の二子を攻撃されて悪い其故は左右の白は各地歩を占め黒のみ浮

之に對し黒は「ろ」に應じ白「い」黒「は」白「へ」黒「と」白「ち」黒「り」となるを通形とする其

中黒「は」の尖み出しは肝要である之を掛けられては外勢を作られて善くないことが多い次に白一の手

を「い」に尖むこともあらば黒は「り」に打つて多くの場合悪しくはない白「は」に掛ければ左方の碁勢に

もよれど「と」に飛ぶ位にて仔細ない又白を「は」に掛けさせて黒の悪い時は黒も「は」に尖み出して善い

○白一は常套を脱したる手段なり (第八十四圖)

○白一と打つことは通形の如く「い」に尖んで黒より「ろ」に拆かれては平凡で面白くない碁勢と考ひた

時斯く變化して打つことがある其時黒「は」なれば白「に」黒「ほ」白「へ」となるが普通である斯くなりて

は黒は「ろ」に拆く違なく「と」「ち」の何れにか打たねばならぬ勢

となる假に黒「と」にカケツギたりとすれば白「ろ」か「り」の方面

より打ちて此一子の黒を夾んで紛らかさうとする手段に出づる

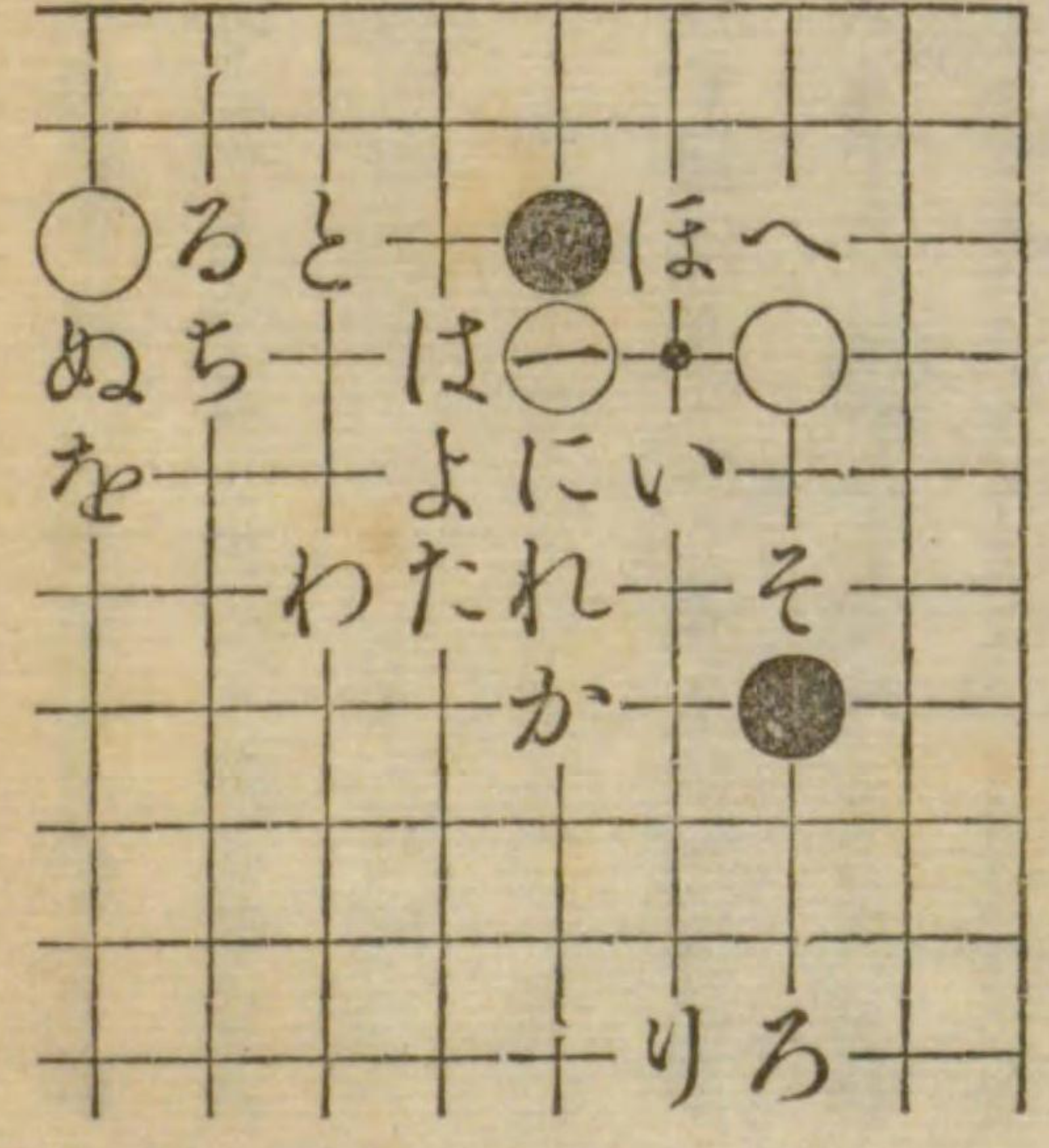
ことがある又黒「ち」に打たば白「ぬ」黒「る」白「を」黒「わ」白「か」

となる運びを見る兎に角斯くの如く通法によらないで黒を迷路

に誘ふ趣向である又黒の方よりいへば「と」「ち」に打たないで

「よ」に押すこともあらば白より「た」に縛ねられて黒「れ」白「そ」

圖四十八第





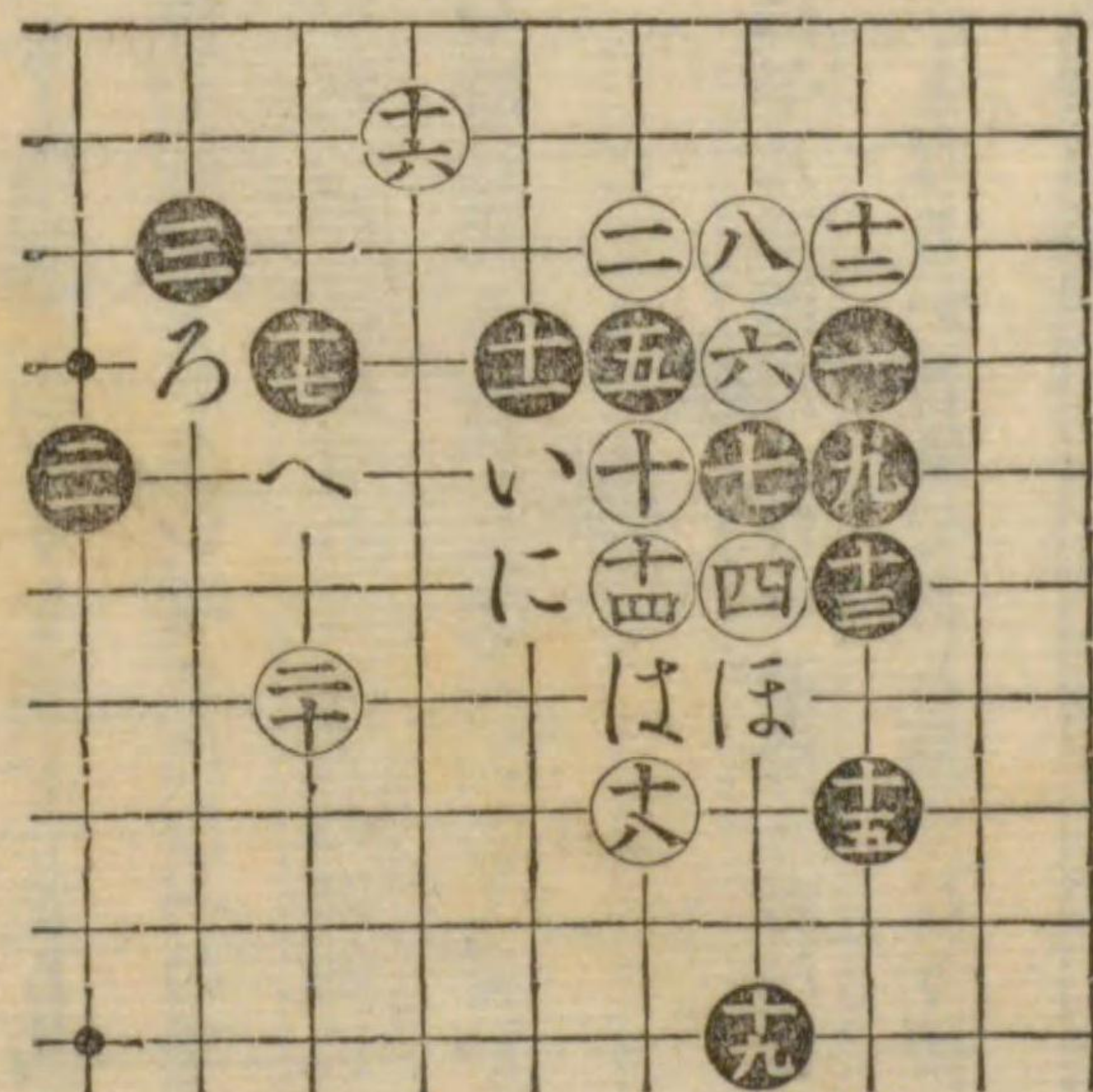
となつて白の趣向に陥る嫌がある注意すべきことである

### 三間夾大桂馬懸カケ

○白四は大桂馬懸と稱す (第八十五圖)

○白四は常用の手段であつて應接の着手非常に多様なると場合によつて變化も從つて種々あれば白を持つては面白い趣向である但、妄りに打つ時は形勢早く定まる嫌があるそれは此形の通勢として形成すべき着手の数が他の定石に比べて多いからである黒五より黒二一まで受手の應答として最、多く用ふる手段である此形勢は互角である其中黒十一の手で十四を切る手もないではないけれど三の三間夾みある時は此石が白の堅壘に近づくので黒悪るく用ふるとは稀である尤其時白十一に提り黒通形の如く時として「い」にアテずして十二に約へこむ手段がある其場合白は十七又は「ろ」に打つ手段に出づることがあるそれより先きの變化は碁勢によらなければ言ひ難いたゞ在來打ち來つた通り白「は」に綽

圖五十八第

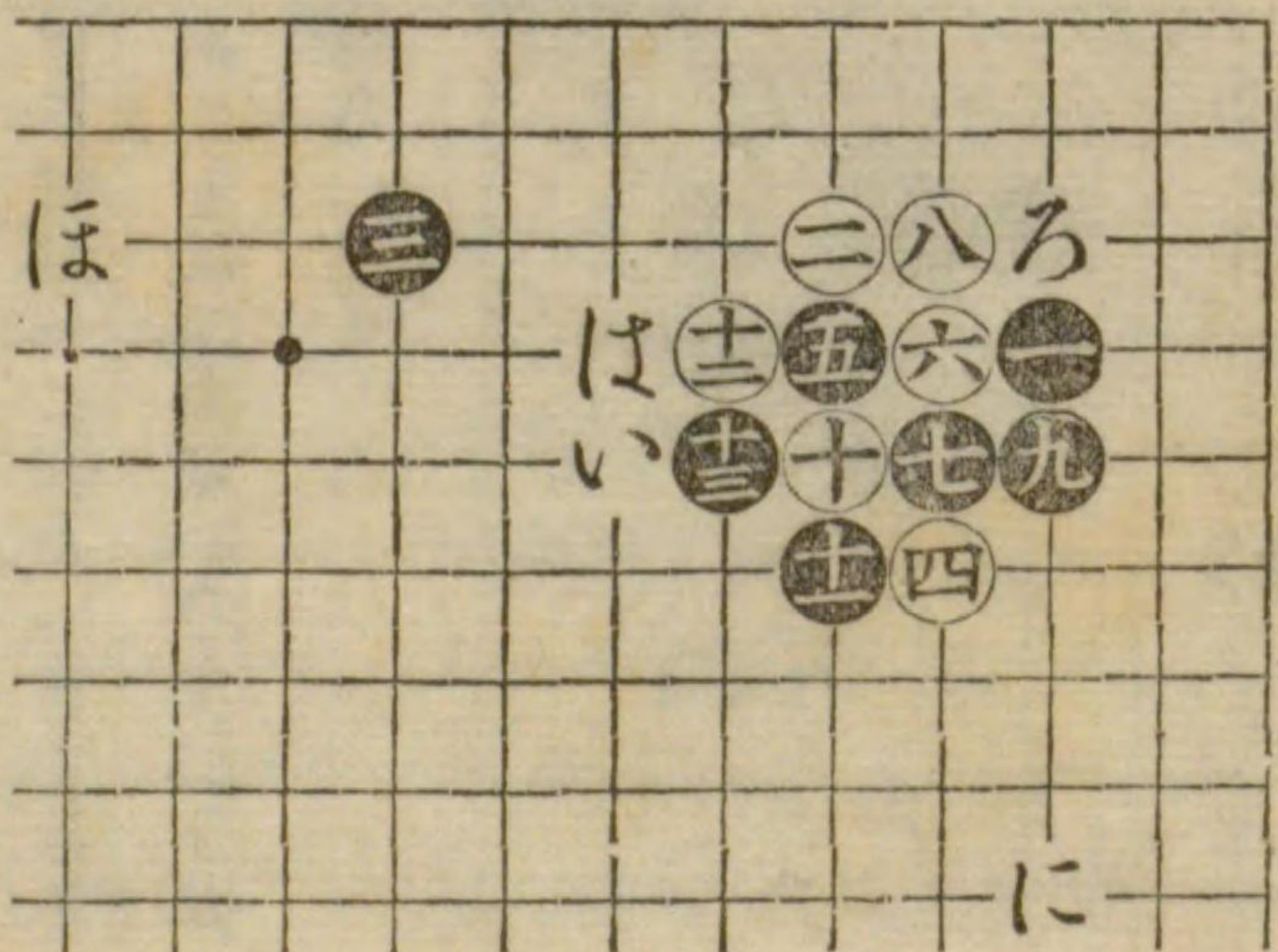


ね黒「に」白「は」と打てば當今黒は「へ」に斜走(以前は十七に尖みしなり)する手で打つので白「は」に綽るは一考を要すべきである尙次圖に殘説を述べやう

### ●黒十一の切の悪しき所以 (第八十六圖)

此形は前説に一寸述べたところを圖に示したので三の三間夾ある場合に黒十一と切れば白十二黒十三白「い」黒提白「ろ」黒粘白「は」となつた形を見よ三の黒の在場白に接近し過ぎて宜しくないことは明である即定石の如く「に」に拆けば白「ほ」の邊より三の黒を夾みて攻めたてるから黒の不利である

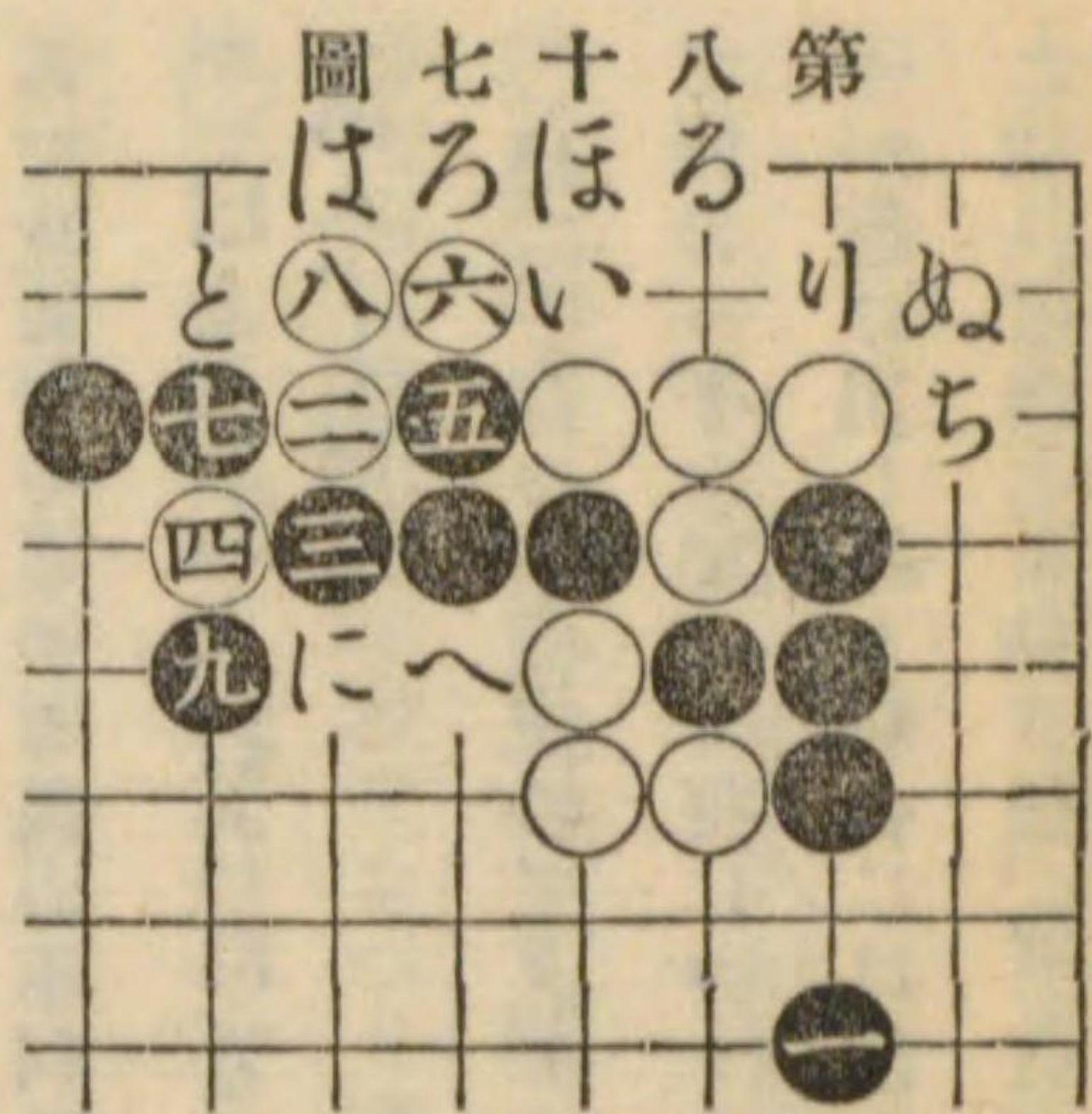
圖六十八第



○白より二と打たれる手は黒の注意すべき事 (第八十七圖)

○白二と打つ手は征のアタリの有無によつて來る事で此形になつて四の一子を黒より征にカケられる時には白二と打つのは損である若、此征のアタリがあつて四の一子が逃げ出し得る場合には黒の損は非常である故に能く々々注意すべきである其中黒七と切る手を八に切れば白七に粘ぎ黒「い」白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」白六の處黒「ろ」に提り白「へ」黒四目粘白「と」黒



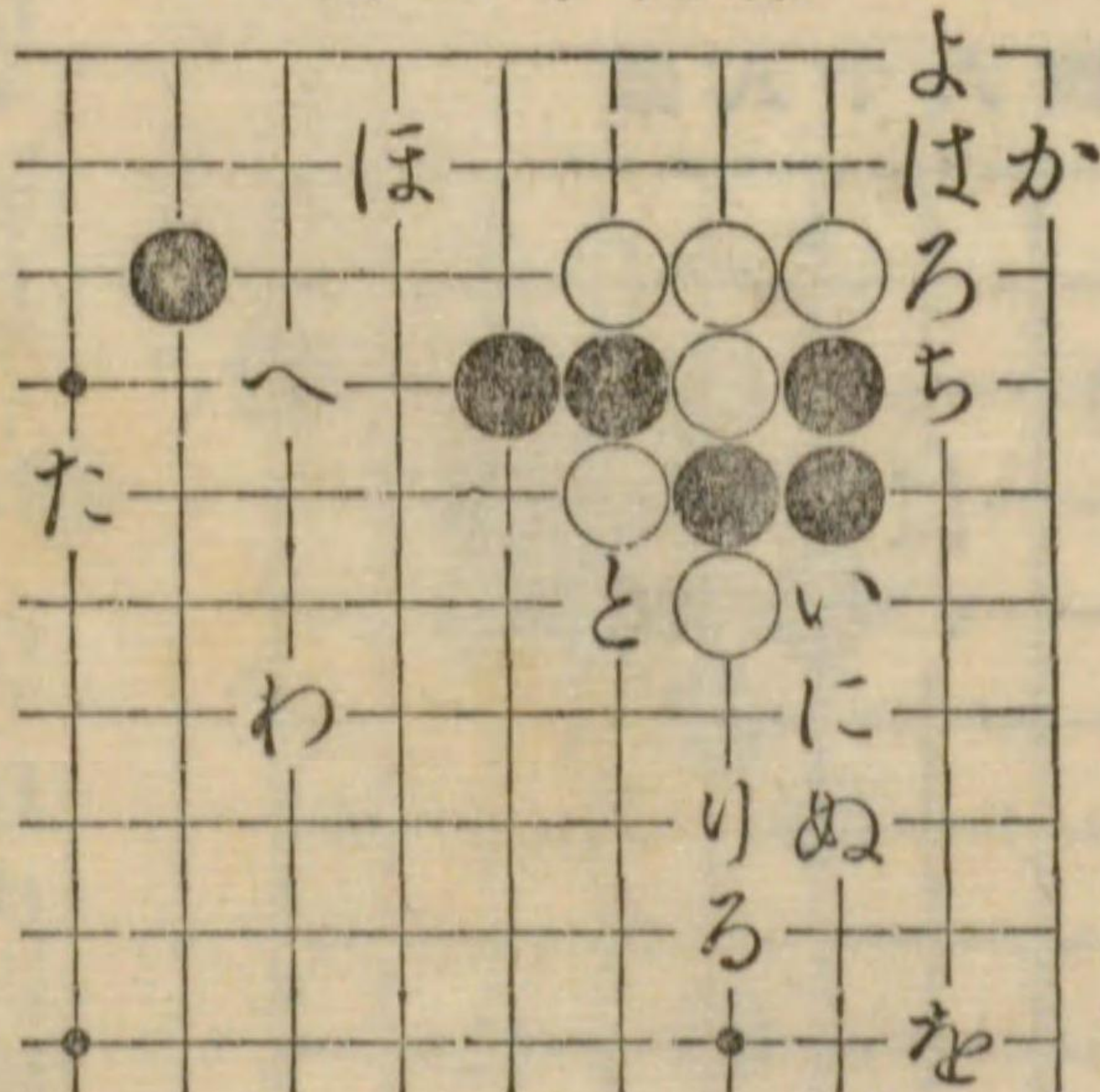


「ち」白「り」黒「ぬ」白「る」となつて黒取られてしまふ故に黒七の手で八の處を切る手なければ如何にしても黒は圖の如く打つ外はない従つて征のアタリは大切となる若、征のアタリある場合に此形が出来れば黒一と飛ぶ手で先、「ち」に綽ね白「ぬ」に受けた時黒一に飛ぶべきであるさすれば白征のアタリあつても白二に飛ぶことは出来ない今度こそは黒七と切る手で八より切りて善いからである

●黒十三の手より變化を示す (第八十八圖)

今まで十三の手で「い」に打つのか通形であつたのに前の征の關係もあつて其他中央右下隅の模様によつて「い」に打つ手で「ろ」に綽ね白「は」黒「に」白「は」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」白「る」黒「を」白「わ」黒「か」白「よ」黒「た」となる定石もある参考のために示さう前圖に説いた征の關係によつて黒「ろ」に綽ねは多少の損だが之を避けて斯くの如く變化して中央及下隅の形勢

第八十八圖

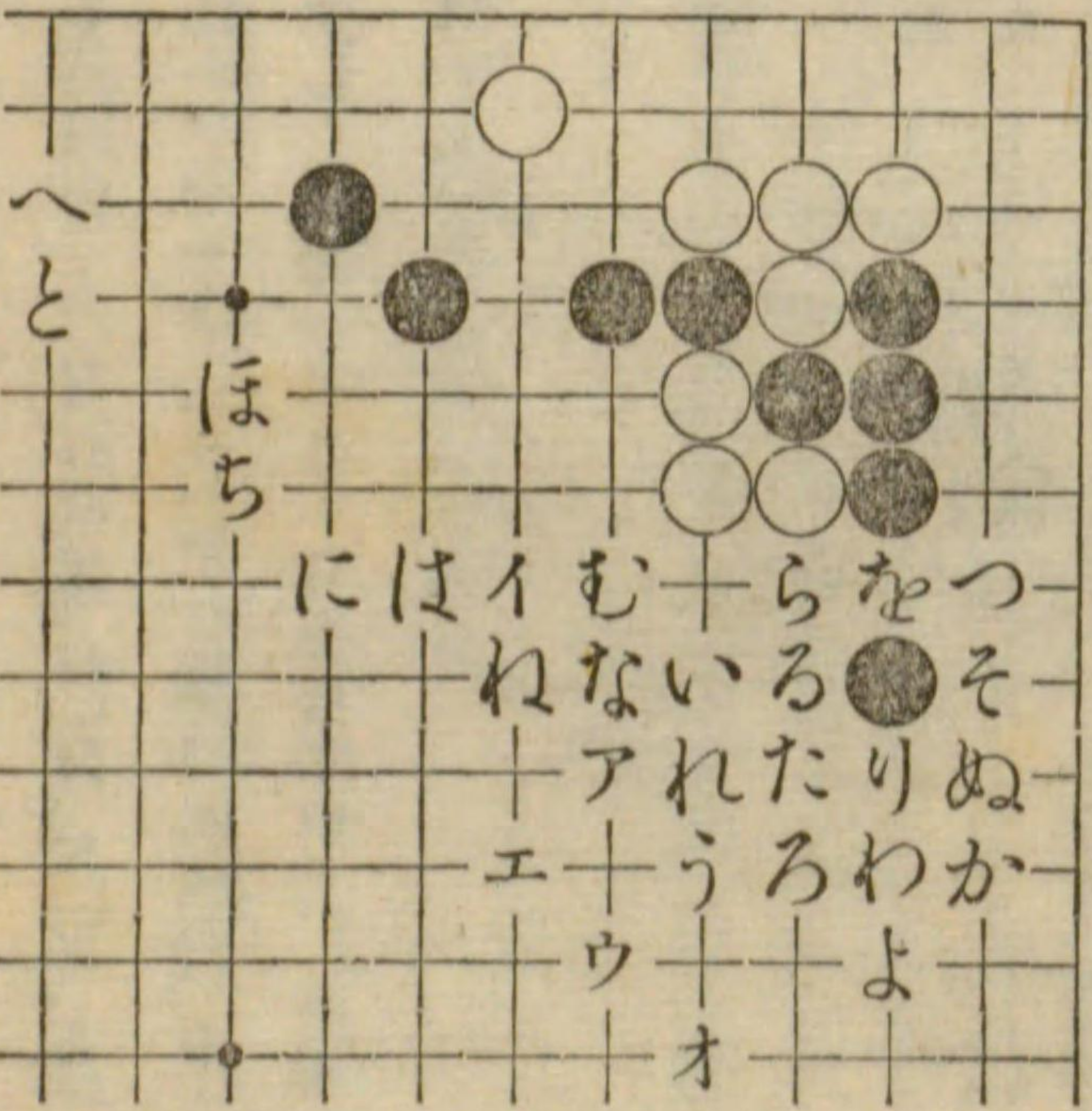


を參酌して差支ないと見た時に打つ手段である

○此形勢に於ける白の手段種々あり (第八十九圖)

白「い」と打ち黒「ろ」白「は」は通常なること前述の如くある尤白「は」の手を今一路進んで「に」に打つことがある嘗て本因坊秀和師打ち出したといふことである場合によつて面白いことがある然し黒より「ア」に打たれて白「イ」に受けなければならぬこととなるが如きは「に」の手の缺點があるた「に」の手は上邊に手段を持つ時面白きことがある白の「に」に對し矢張黒は「ほ」に應ずるを通常とする或場合によつて「へ」「と」「ち」の諸點に應じたのは打碁に見ゆるところなれどもこは皆碁勢によつたる各自の趣向とする若、黒「ろ」に斜走する手にて「は」に飛ばば白「り」にツケて宜し其時黒「ぬ」なれば白「る」黒「を」白「わ」黒「か」白「よ」までの運びとなり黒位低くて悪い又黒「ぬ」の手で「る」に突きあたれば白「た」黒「れ」白「そ」黒「つ」となつた時白「を」に打込み絞つて後「ね」に飛んで宜しい又黒「つ」に約へる

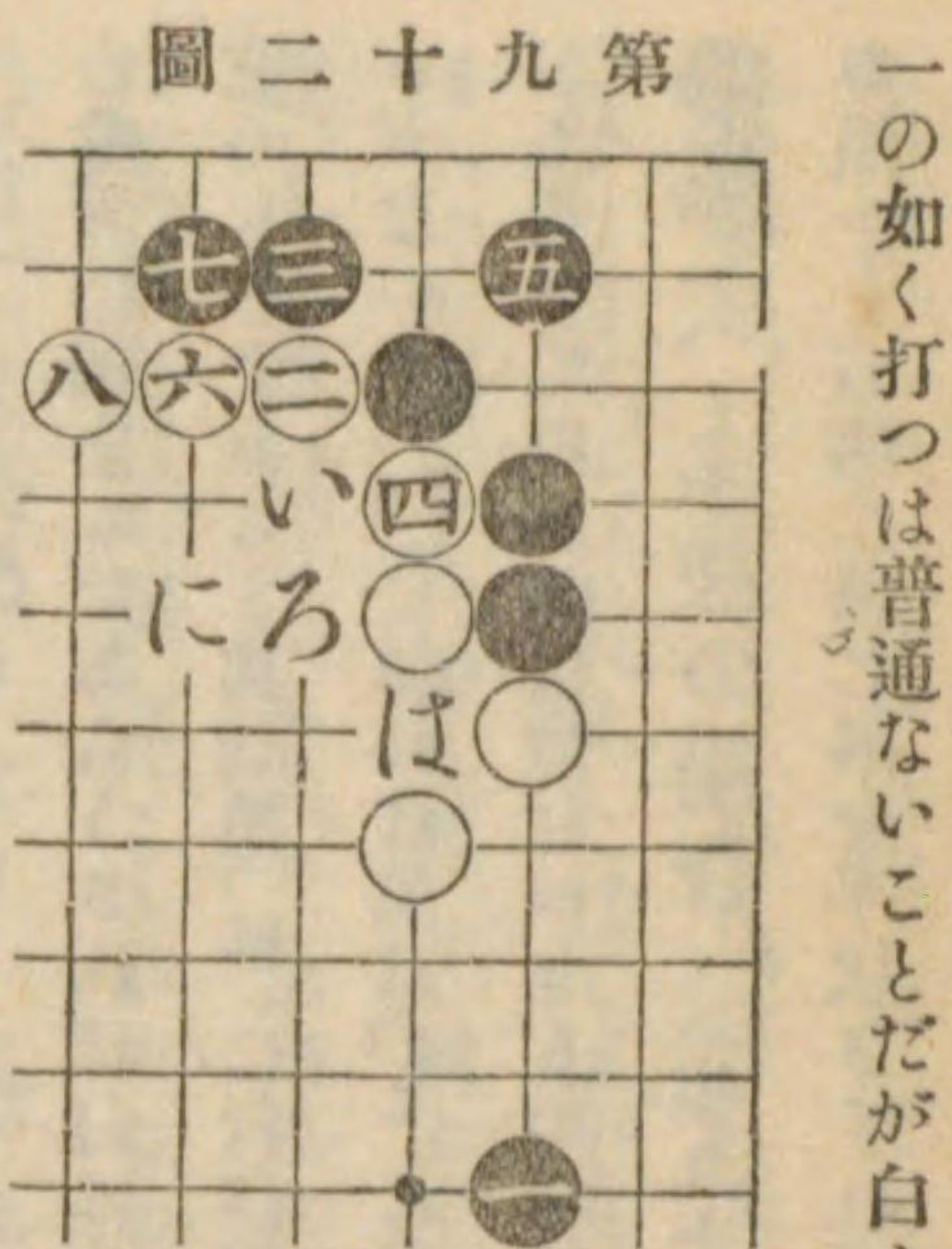
第八十九圖











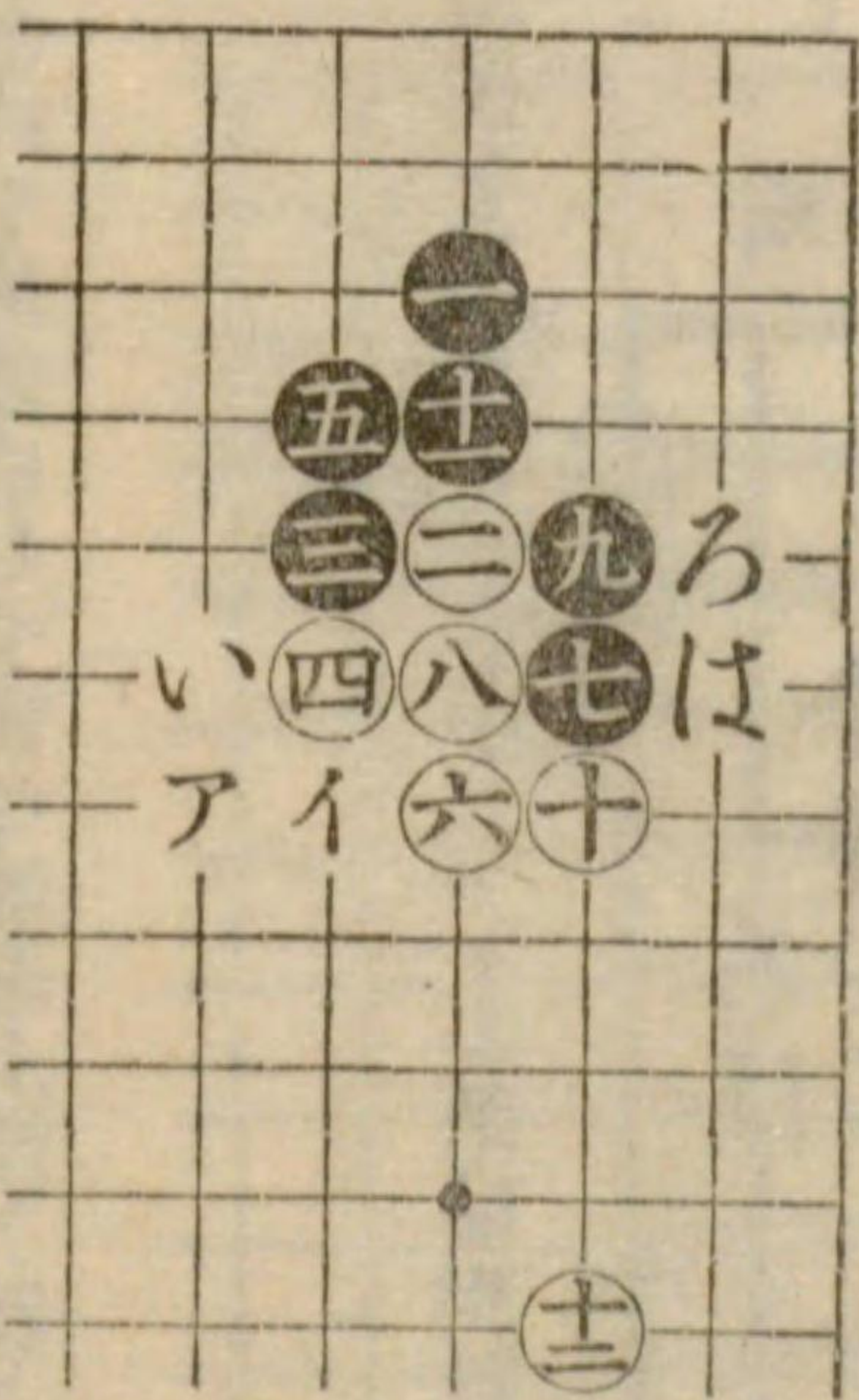
一の如く打つは普通ないことだが白より一の方面に折かれるのが甚苦痛であるが如き或特別な場合に趣向として用ふることは稀である斯かる時には黒三の手で強硬に四の處にグズミ白「い」黒「ろ」白「は」黒「に」白「八」なつてこゝに戦鬪（此先き如何に成り行くかは力量次第にて見すえつかざれば好ましきものではないと知るが善い）を起すのが黒一の隅に手抜きする手段である又最初白のカケツギが「は」にシツカリツギとなる形にて黒一と隅に手拔せば強硬に四にグズム手が

なく白よりの壓迫を甘んじるは致方のなきものである

●黒三は外頂といふ手である（第九十三圖）

●黒三の外頂は普通である九の内頂にては面白くないと見た時斯くの如く三と外頂の變化に出でる白四以下十二まで定形である此割合互角とする此中白六の手にて「い」に行び黒八白六黒七白十黒「ろ」白「は」黒九となつて白先手にて他に轉ずる一法もあれど其損失は夥しいから妄りに用ふべき

圖三十九第

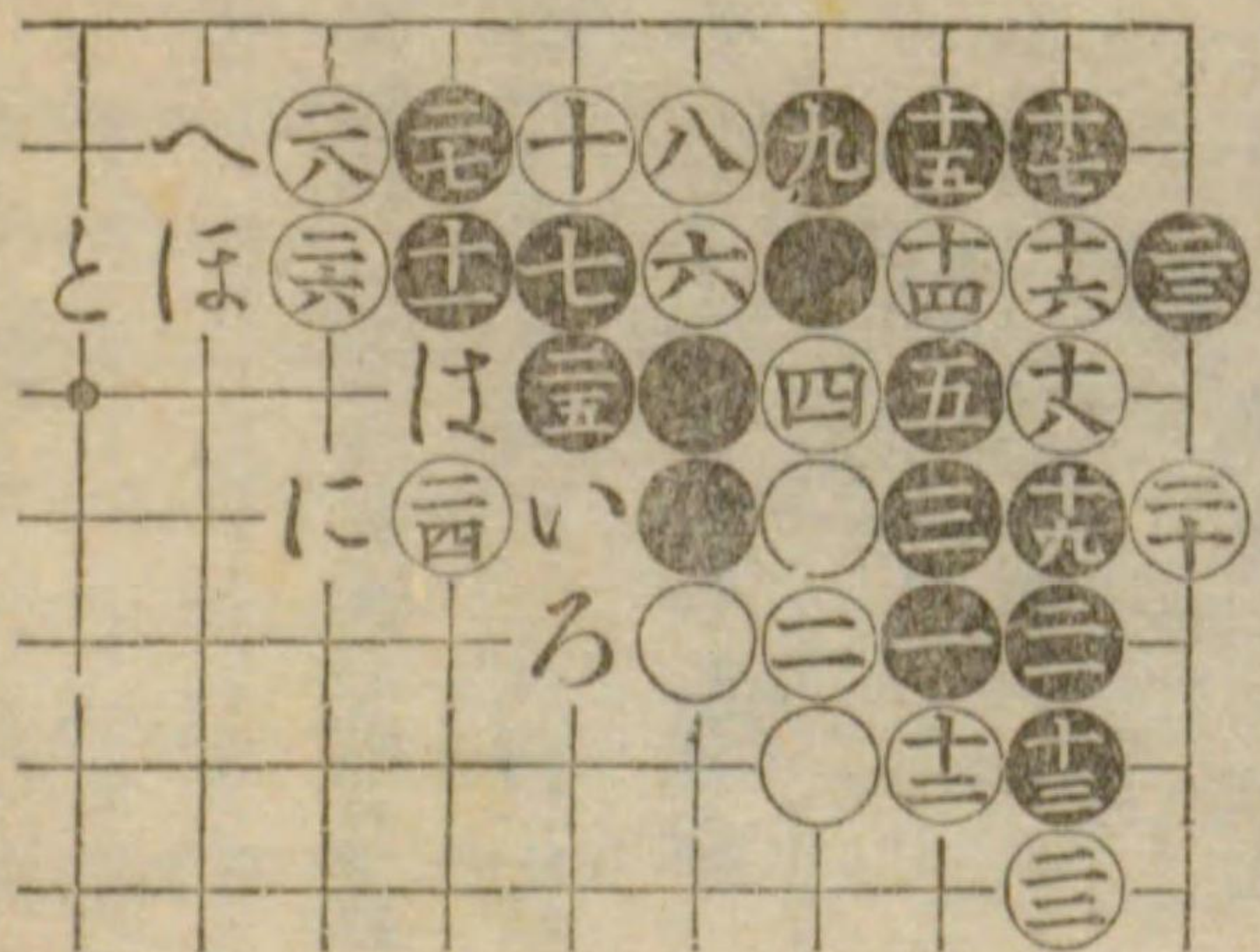


でない又白八の手にて九に抑へたならば黒は「い」に捲もべきである其時白「ア」に應すれば黒八に切り白「イ」黒「は」となつて白如何ともなし難いので白は八にツグ外はない因て黒「ア」に行び上部と側面との交換になつて悪くない

○白四以下の變化深く注意すべし（第九十四圖）

○白四の手は變化を試みる手段で其趣向は外部に模様を張らうとするので且つ後に説く征の關係如何によつて其利害尠くない順次に之を述べやう譜の如く白二八までとなつて隅は黒に與へ外部を塗りたて中央に利益しやうとする此形勢となつては白に未多少の缺陷のないでもないが全體大模様を生じたので棋勢廣くなつたやうに思ふ又局面によつては此形勢を現出するは黒として戒心すべきことあれば最初一と打つは熟考を要する手と知るが善い又白二四の手にて征の有無によつて二五に切る形がある其時黒「い」白二四と捲り黒「ろ」に出づれば「は」に粘き四子の征と二子の抱への兩天となる尤白は四子を征にとる場合に限つて二五に切る手段を用ふるはいふまでもない因て黒「ろ」に出でず「は」に提り白「ろ」黒三目粘白「に」黒二七白二八黒二六白「は」黒

圖四十九第



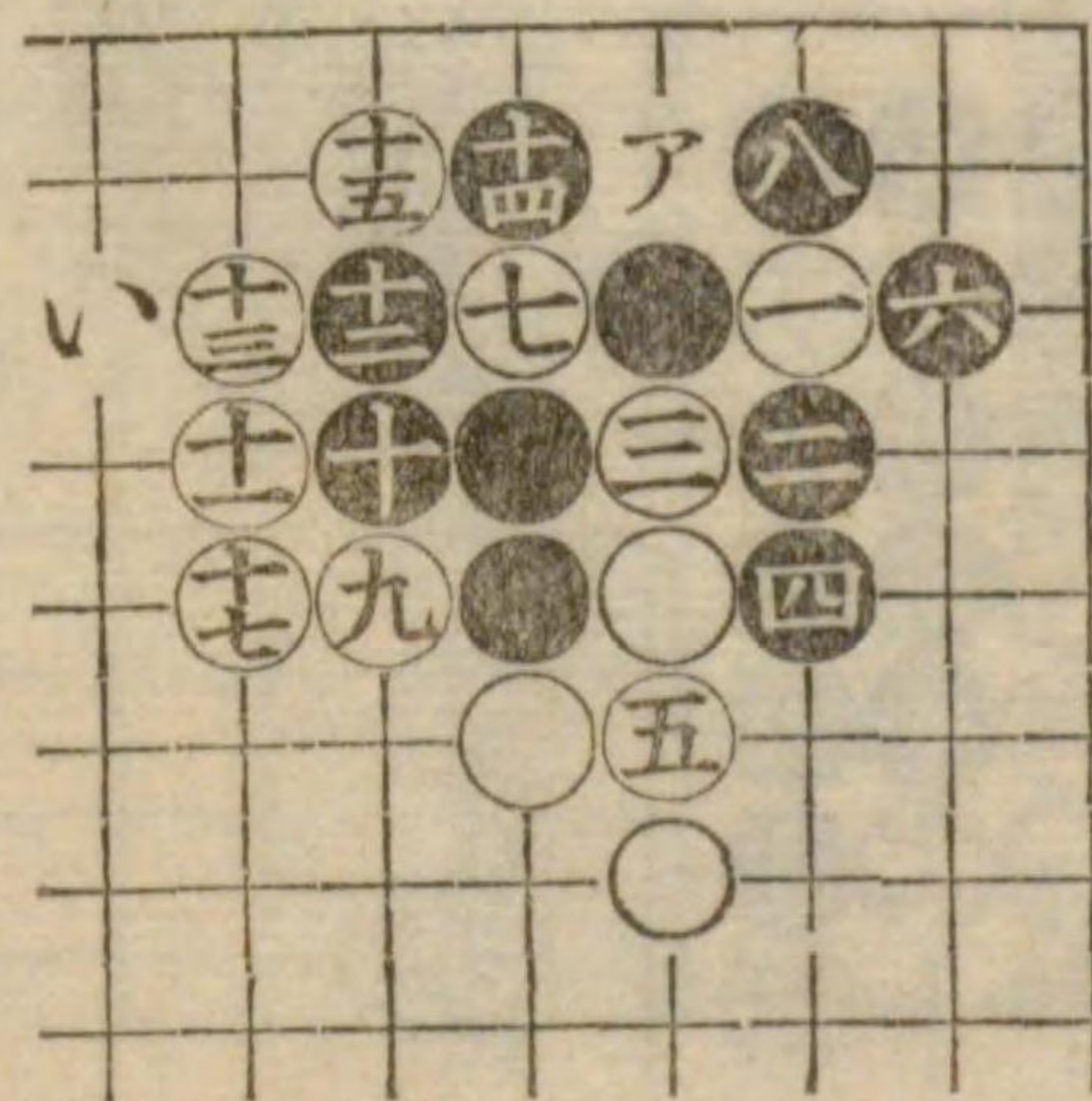


「へ」白」となるこれは本圖に比し一層完全に白は黒を封鎖し得るを以て白愈々面白くなつた是に於てか一と打つ手は益々注意すべき手であることを悟るが善い

●黒手を抜きたる時白の打方を示す (第九十五圖)

○白一の頂は常用の手段である圖の如く十七までは能く見受る姿である之は黒が一手手を抜いたなれば斯くの如く封鎖されるのも亦己むを得ない尤封鎖を避くる場合には二と打つ手にて八に受け白二に引き黒「い」に大桂馬に備へ置くが善い其中白九の手にて十の處にカケ黒を征にとり得る場合には白一應「ア」にアテ黒一に粘いだ時白十に征すべきである然る時は黒割合が悪いので二と勿出すことを注意するが善い圖の如く白九と打つ際は「ア」のアテは無い方が優つてゐる又黒十と出づる手で十四に緯ね白十二に行びとなり軽く二子を捨て、黒は打つことがあるこれは圖の如く白に隙き間なく追撃されて調子を與ふるよりは然かするも却つて後の運びの善いとあるので何れも局勢によりて擇ぶべきである

圖五十九第 粘目四

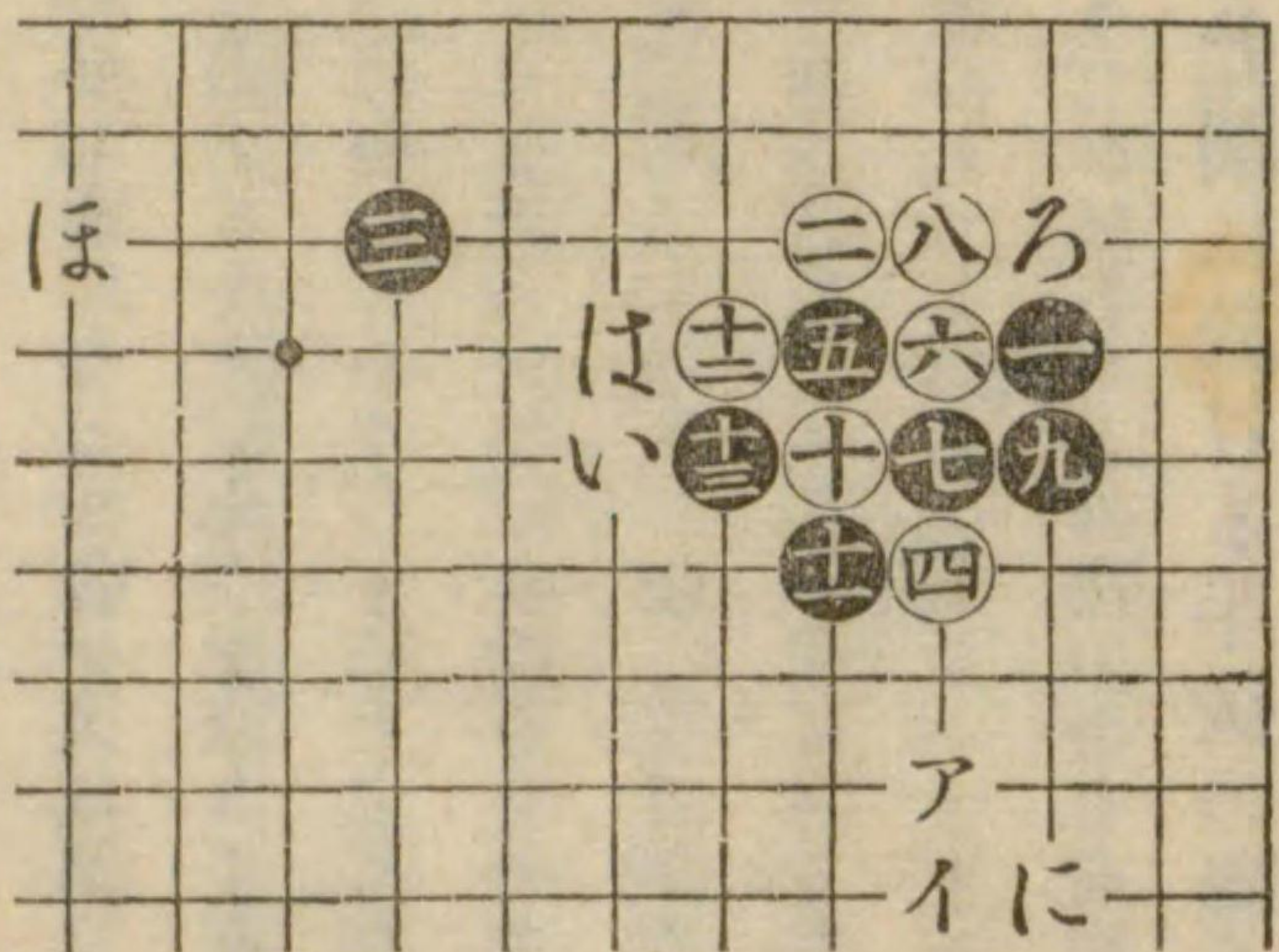


●再び黒十一の切悪しき所以 (前掲第八十六圖再載)

此形は前説に一寸述べたところを圖に示したので三の三間夾ある場合に黒十一と切れば白十二黒十三白「い」黒提白「ろ」黒粘白「は」と

圖六十八第

(遺補圖前)



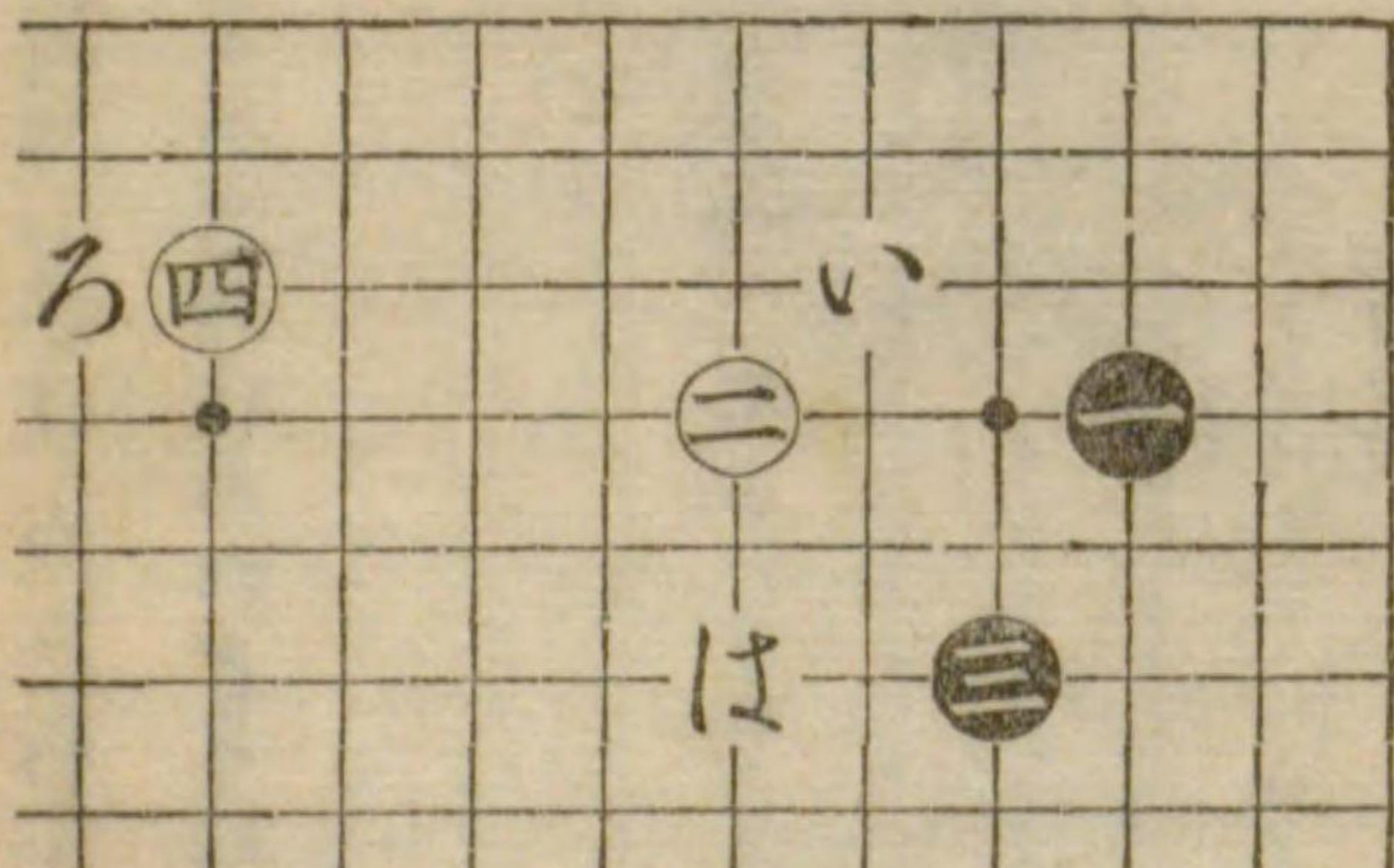
なりし形を見よ三の黒の在場白に接近し過ぎて宜しくないのは明である即ち定石の如く「に」に折れば白「は」の邊より三の黒を夾んで攻めたつるがゆゑに黒不利である (参考上再記)

又黒「に」に打たないで「は」に折けば下隅の釣合にて「ア」「イ」の邊より打たれて手段される一方此「は」の折きは最初の布石として急ぐべきところでないのに二子を費すことゝなつて三の一子の在場宜くないのである故に是等を考ひみれば三の一子あるに十一と切るのは不利なることをさとするが善い

○白二の手は二間高懸りなり (第九十六圖)

○白二と高懸りした時黒は三に受けるのが通常である白四も亦通法で權衡を保つ手である此形互角と知るが善い全體白二と打つ場合は通常の如く「い」に小桂馬懸しては悪しき場合即ち強ひていへば黒より何間かに夾まれて其局勢面白くない時などに用ふる又「い」に懸りても黒直に應答せ

圖六十九第





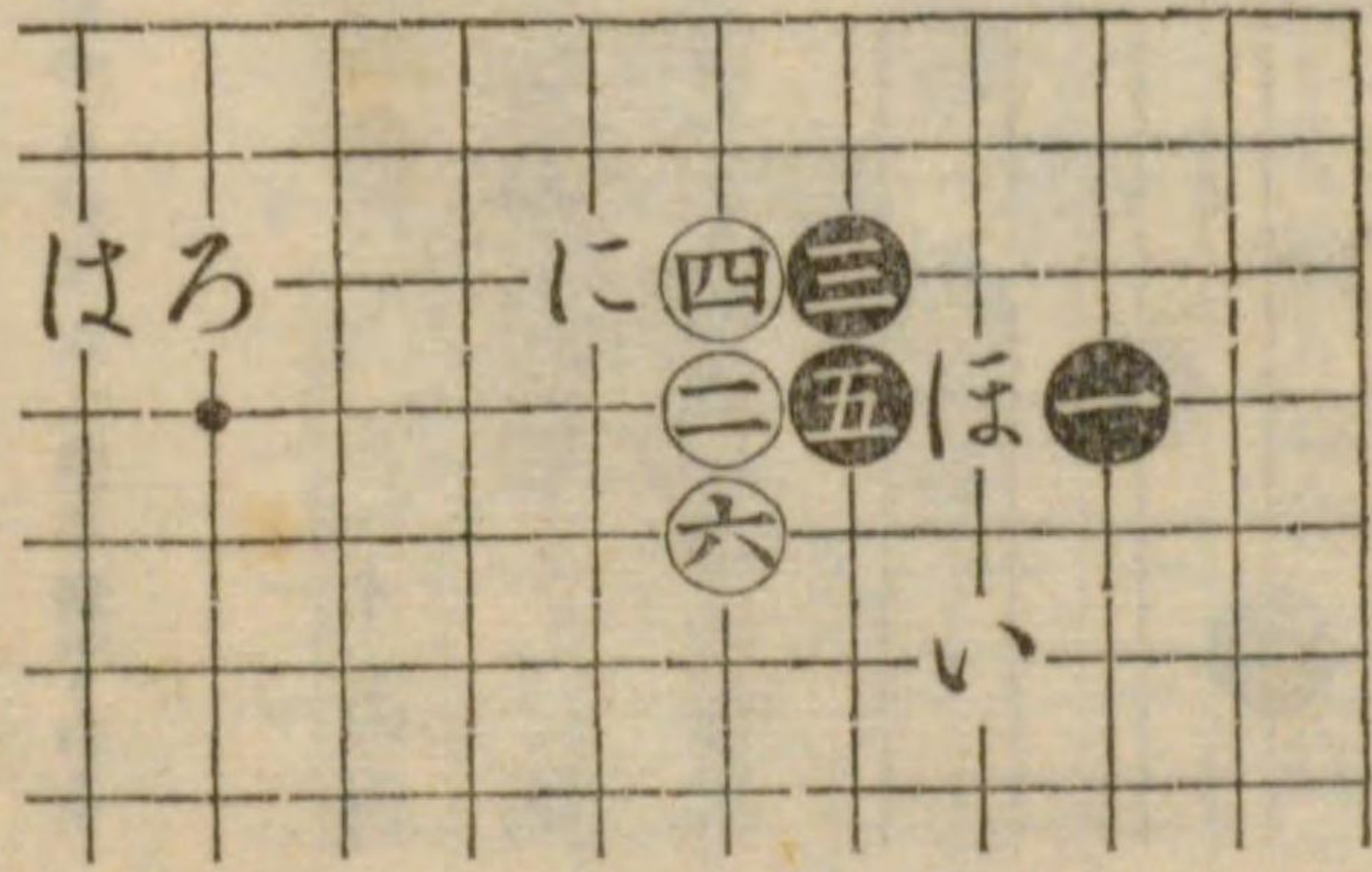
ざる場合などに斯く二間に懸つて何とか黒に打たせ他の急に赴く際にも用る尙白四の手は「ろ」に拆く事がないでもないさすれば黒より「は」に飛ばれた時拆きの廣いだけ打込を生ずるの不利はあれどそは曩きの場合を見て廣く「ろ」に拆いた返報として致方なき次第である

●黒二の手は一法とし心得置くべし (第九十七圖)

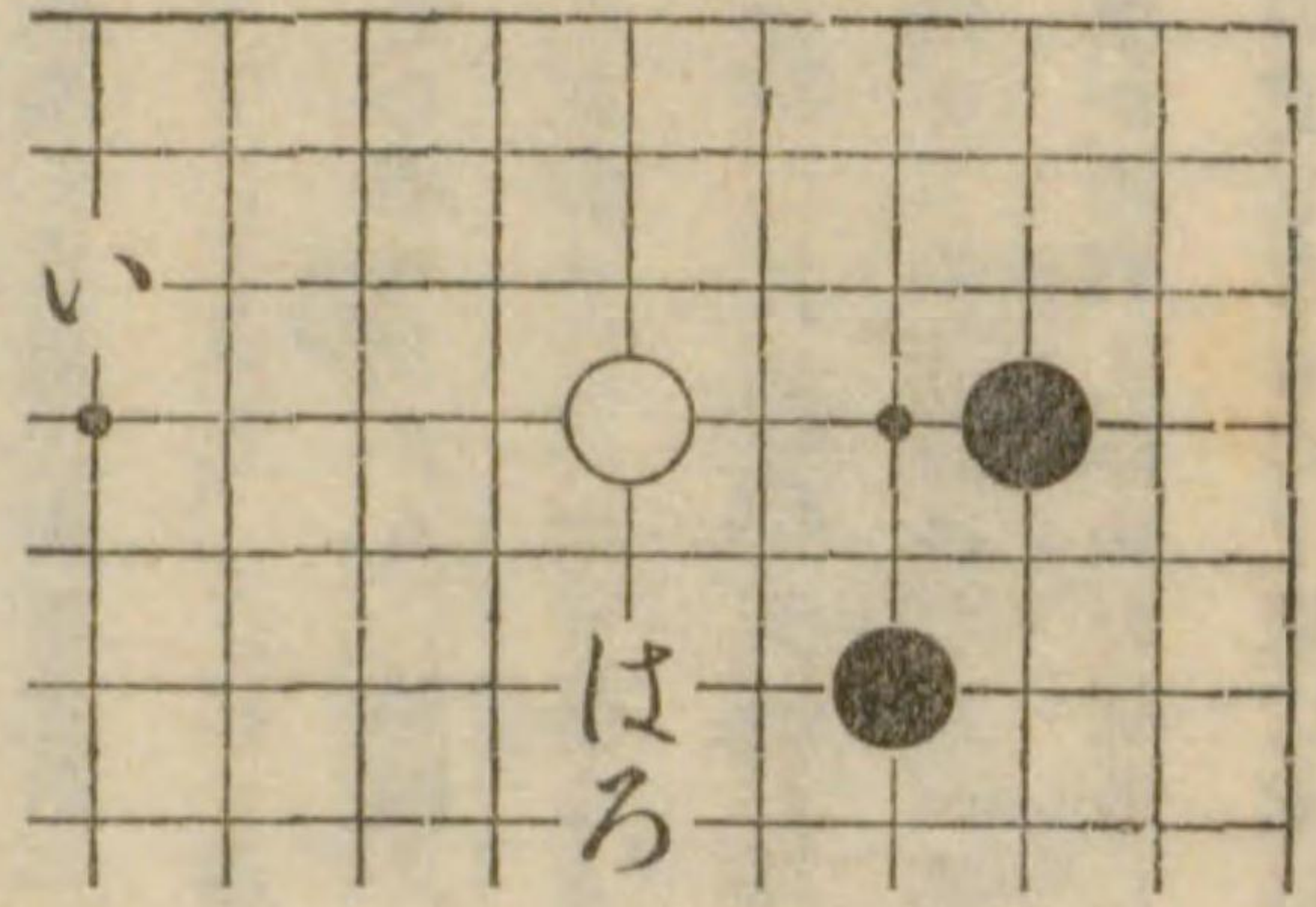
●黒三は己れを固めて先手をとる趣向である通法の如く「い」に受けければ白より左方面に拆かれる事が白の好都合になる場合か又は他に急場ありて先後を争ふときなどに此手段を用ふる今黒が先手を取りて左方面より己れ拆かうとする時には「ろ」「は」の何れにか打つもので之は左隅配置の釣合より來ることにて此圖のみにては斷じがたい白四の手で若、五に打たば黒四白「に」黒「ほ」となつて白損なるがゆゑに四と受ける外はない又白六の手は致方なきもので之を手拔せば黒より六の處に縛られて白甚、悪しければこれまでの手順は如何にしても定形といふべき運びである此形は一見白得るところ少ないやうだが厚壯なる外部の勢を利用して後に十分償ふことがあるであらう

○此圖に於ける手拔の場合 (第九十八圖)

圖七十九第



圖八十九第

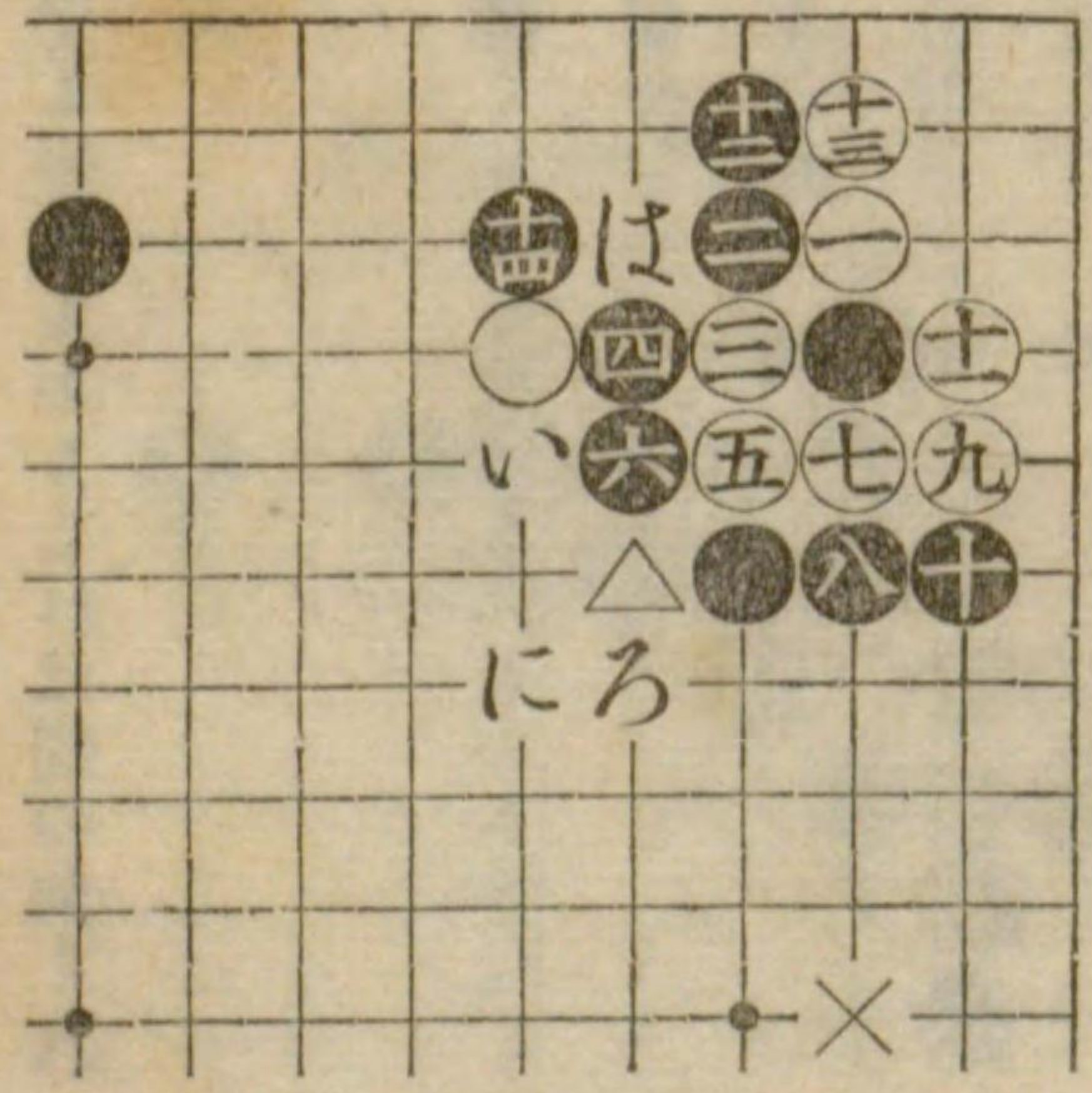


○白が二間高懸をして黒桂馬に應じた此形のまゝで白手抜きした時黒より打つ定法は「い」に夾み打ち此白を緩かに攻めたて右側もそれによつて固め又左側も勢を付けやうとの策である今黒「い」に夾みたりとして白此處を打つには「ろ」に二間飛ぶ位のものである其時黒左方に着手するか右側に打つかは碁勢に因りて擇ぶべきである若、白「ろ」の手をも打たなければ黒は「は」に攻め立てる手段が残つてゐる

○白一は振替る手段なり (第九十九圖)

○白一は懸つた石を攻められるのを避けて振替る策で以下黒十四まで通法である然し此形となつては一隅に屈し外勢を張らるゝにより白の損は明であるこれは妄りに打つべきものではない ×印に白の扣へある時など譜の如き運びとなつて後に△印を切つて右側の黒を攻るか中央の模様を消し得る場合などに一の頂を用ふることがある尤白が×印にある場合には黒にも手段がない

圖九十九第





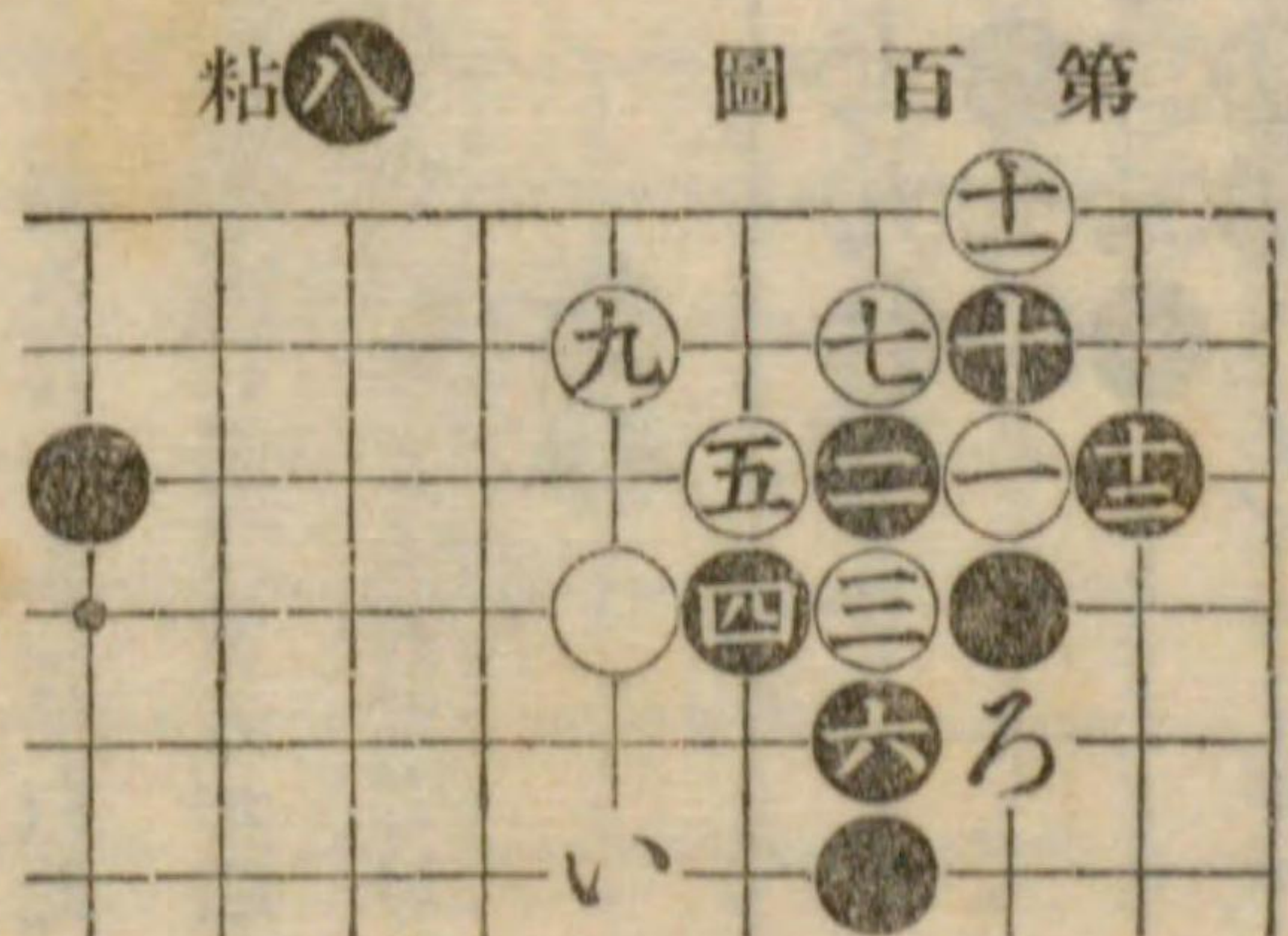
いでもない八と押す手で「は」にツギ白十一に提つた時黒「に」に斜走する變化もあるこれは圖の如く八と押しても△印を切られて重くなる事を避くるためである

○白五は稀に用ふることもあり (第百圖)

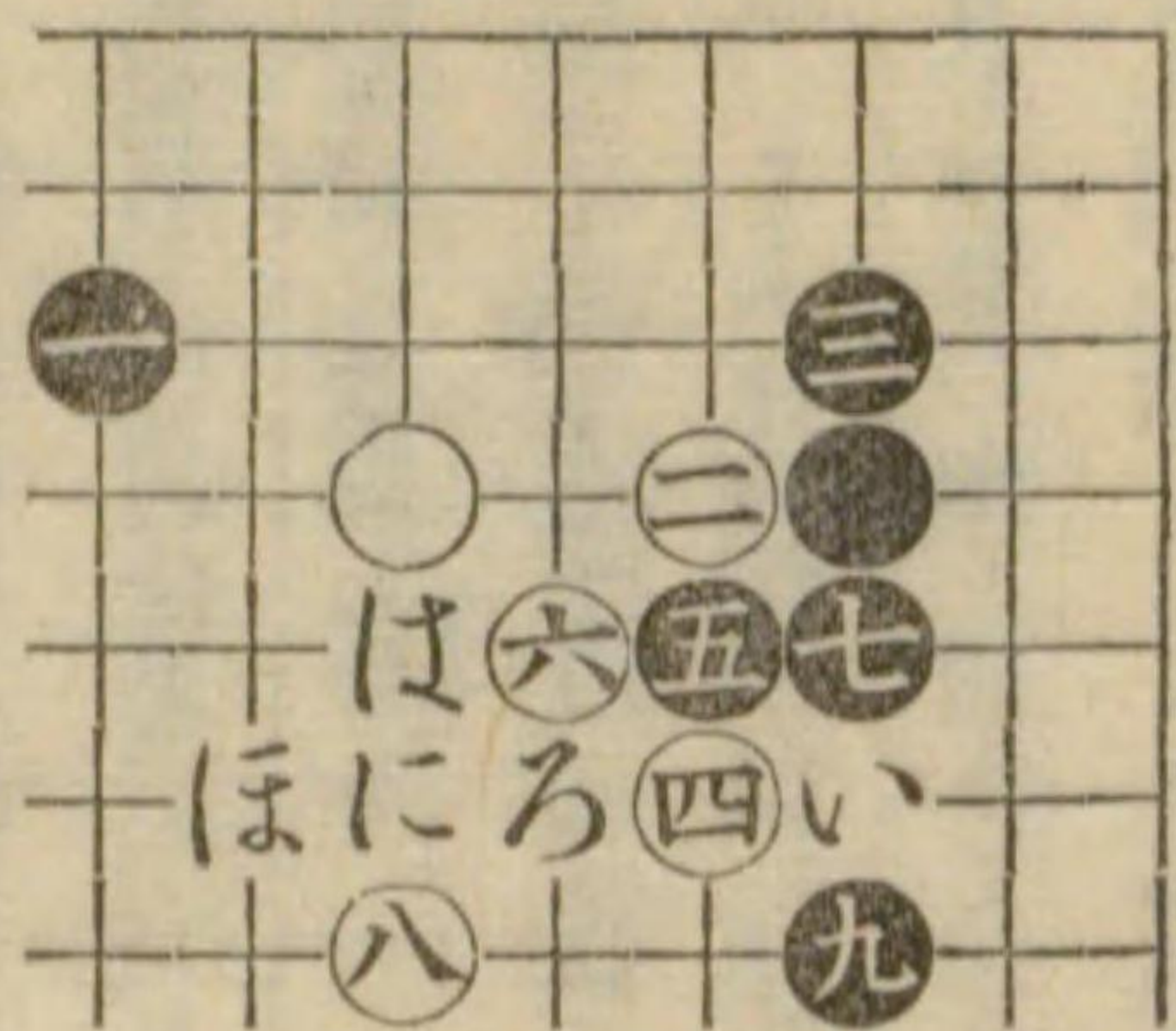
○白五と切る手は六に出で、前圖の如く外勢を張られるのを厭ひ又捨ておきて攻められるのも面白くない時に己むを得ず早く損ながら治める心にてする手段なれば此の場合などにては割合の損なるは申すまでもないされば或る特別なる碁勢のみの外用ふること稀である尤白一の手を打たないで黒「い」に蔽ひし時此圖の運びとなすことは黒「い」に一着を費しあるだけ割合上差支なき事あり尙注意の爲め申添へ置かんに黒四の手を十か十二かの方へ打たば白より「ろ」に勿出して兩斷せられ隅を得るも損である

●黒一は臨機の變化なり (第百一圖)

○白が二間高懸りした時黒四に通法の如く應答すれば白より左方に拆かれる事が不利と認められた場合に黒一と逆撃を試ることがある其時白二以下黒九迄通形である其中黒五は順序の宜しきもので單に七に打たば白は八に打たないで左方の模様によつて種々趣向を廻らす而して白



第百圖

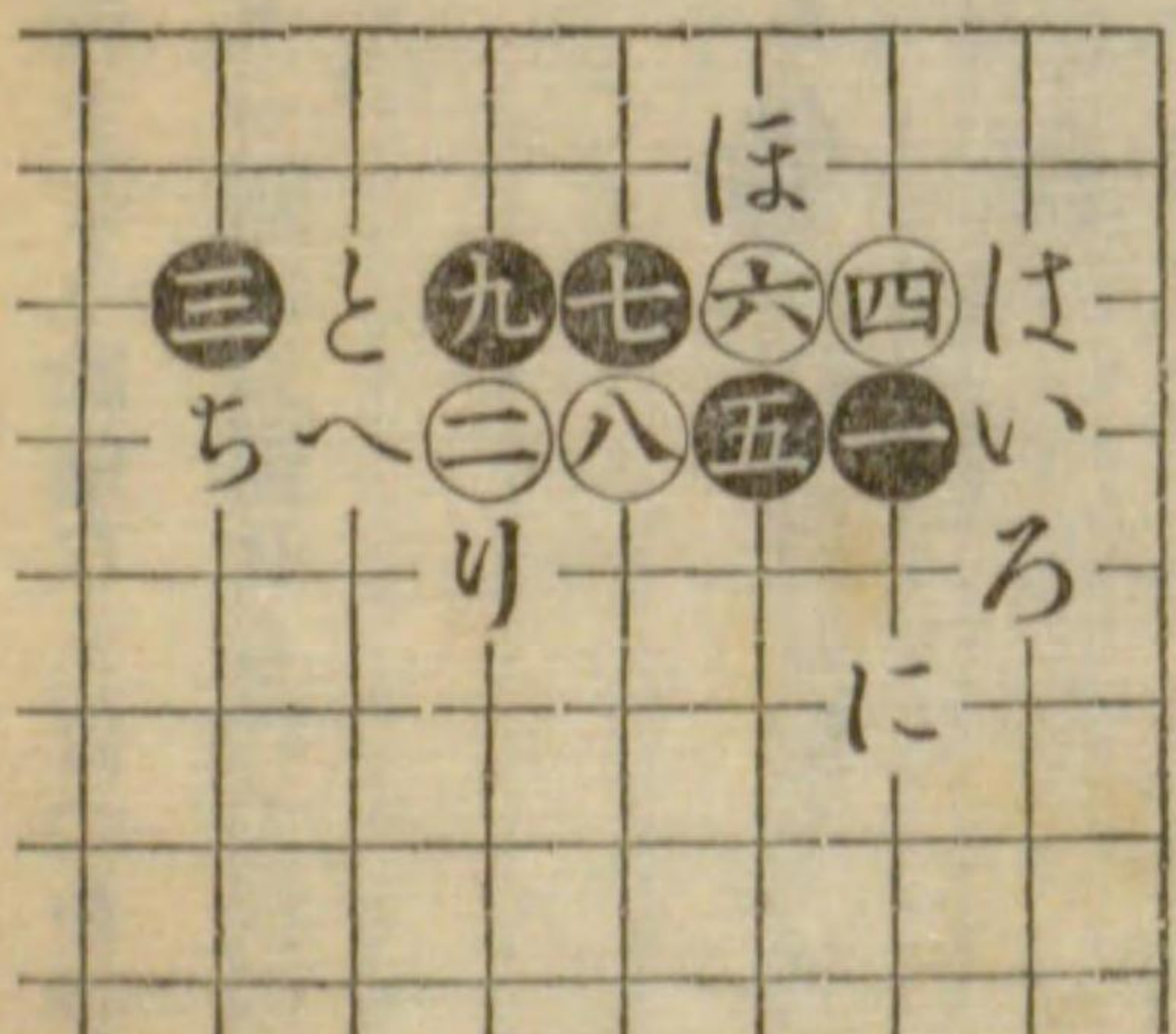


は八にツグ策に出でないで「い」に約へる手段を考ふることがあるそこに至りて黒五に出づるも白は六と受けないで「ろ」にゆるめ黒六白「は」と約へ黒「に」を切り來るも差支なき様最初「い」を約へる前に左方に豫備しておく次第である故に黒五と勿込むが順序を得たもので因みに白八の手にて「い」に約へることは「ろ」に切られて悪るければ萬々なし白八の手にて「ほ」に斜走することもあり黒は矢張九に打つべく其時白左方に向つて趣向しやうとする意である。

○白四の手無理なり (第百二圖)

●黒三とある場合に白四と頂けるのは大に悪い黒より五と出でられて譜の如く九までとなれば如何にといふに白は隅に活きるために「い」に勿ね黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」と打ちて活きるの外はないさすれば黒より「へ」に緯ね上げられ外部の形勢黒の優れることはいふまでもない此結果となつたのは黒三の石あるに拘らず通法の如く四と打つたためである尤白六の手にて「と」に尖みつけ黒七に尖まば白「ち」に緯ね又黒

第百二圖





七に尖ます「ち」に行れば白六と打つ事がないでもないこれとても左方の關係上より餘儀なく打つわけにて漫りに打ちては悪い若、妄りに打てば黒「ち」白六黒八白七黒「り」となり一隅に封鎖せられて白の不利なる事明になる

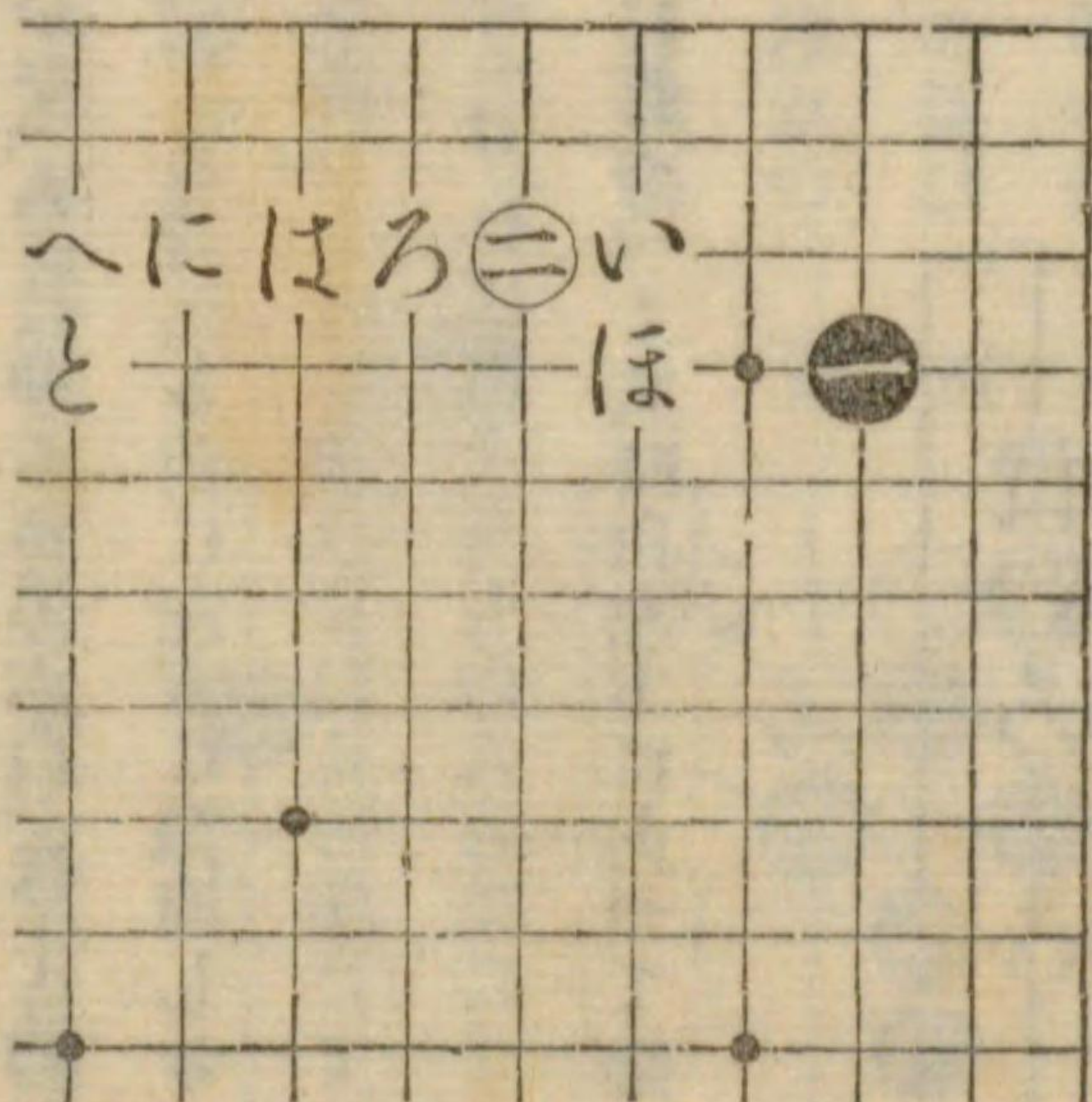
○白二の大桂馬懸は稀に打つ手段なり (第百三圖)

○白二は大桂馬懸と稱して通常用ひない手だが左方との釣合上打つことがあるこれは普通の如く「い」に小桂馬懸せば黒より「ろ」「は」「に」の何れにか夾まれて都合悪しきと認めたま懸としては緩きも夾まるゝを避けて故らに一路扣へて懸るわけなり而して之に對する黒の應手は「ほ」に打つか或は左隅との釣合上「へ」との諸點に應答することあり此の成行は次圖に説明しやう

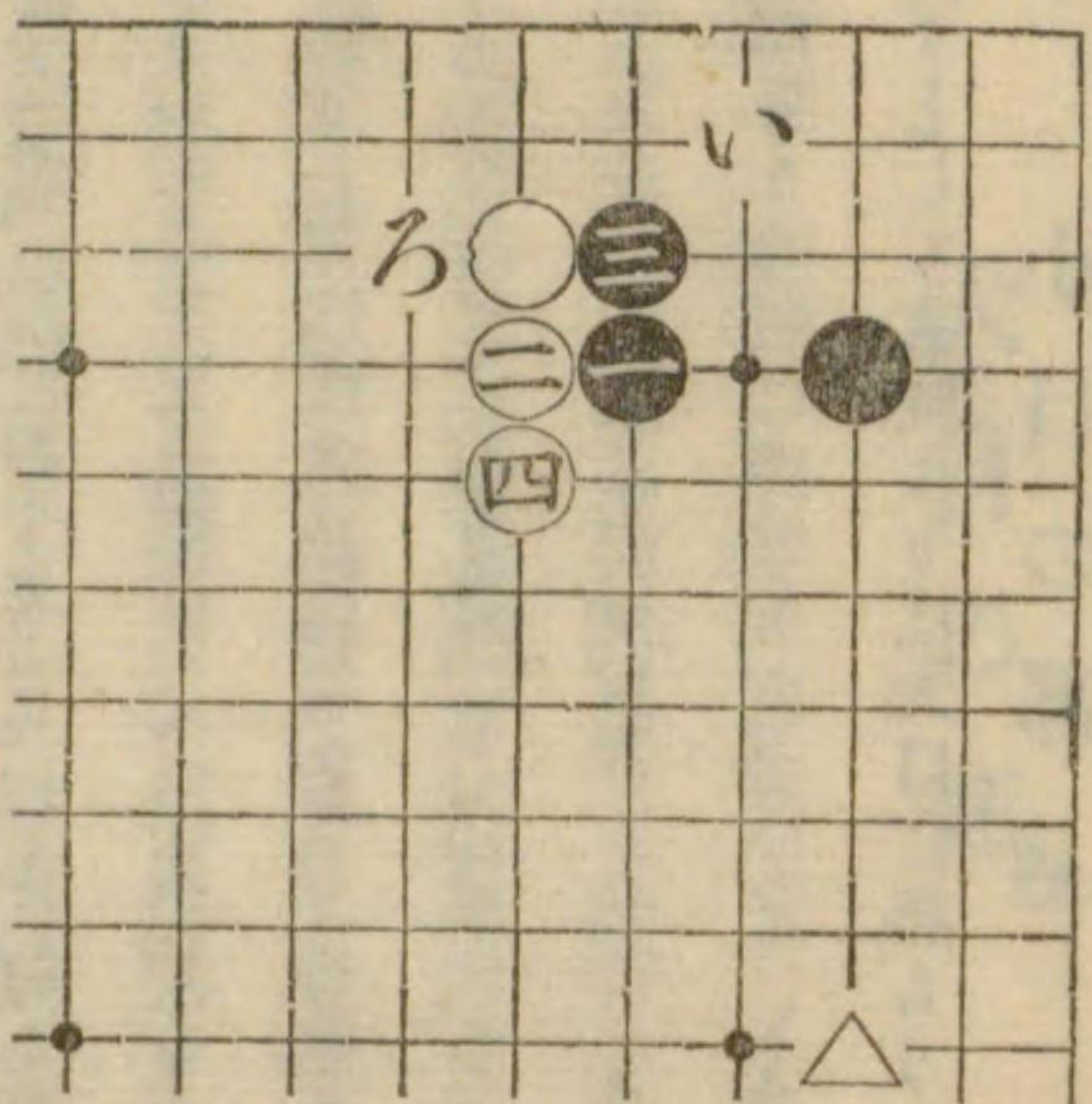
○白二の手考慮を要す (第百四圖)

●黒一と大桂馬懸の肩に打つは白の應答を試みる手である白二と押せば圖の如く四までとなりこれは二間高懸に於て既に掲げた形と同じ斯くなるが局勢上利便と觀た際には二と押しても善いが又然らざる場合もある其際に於け

圖三百第



圖四百第



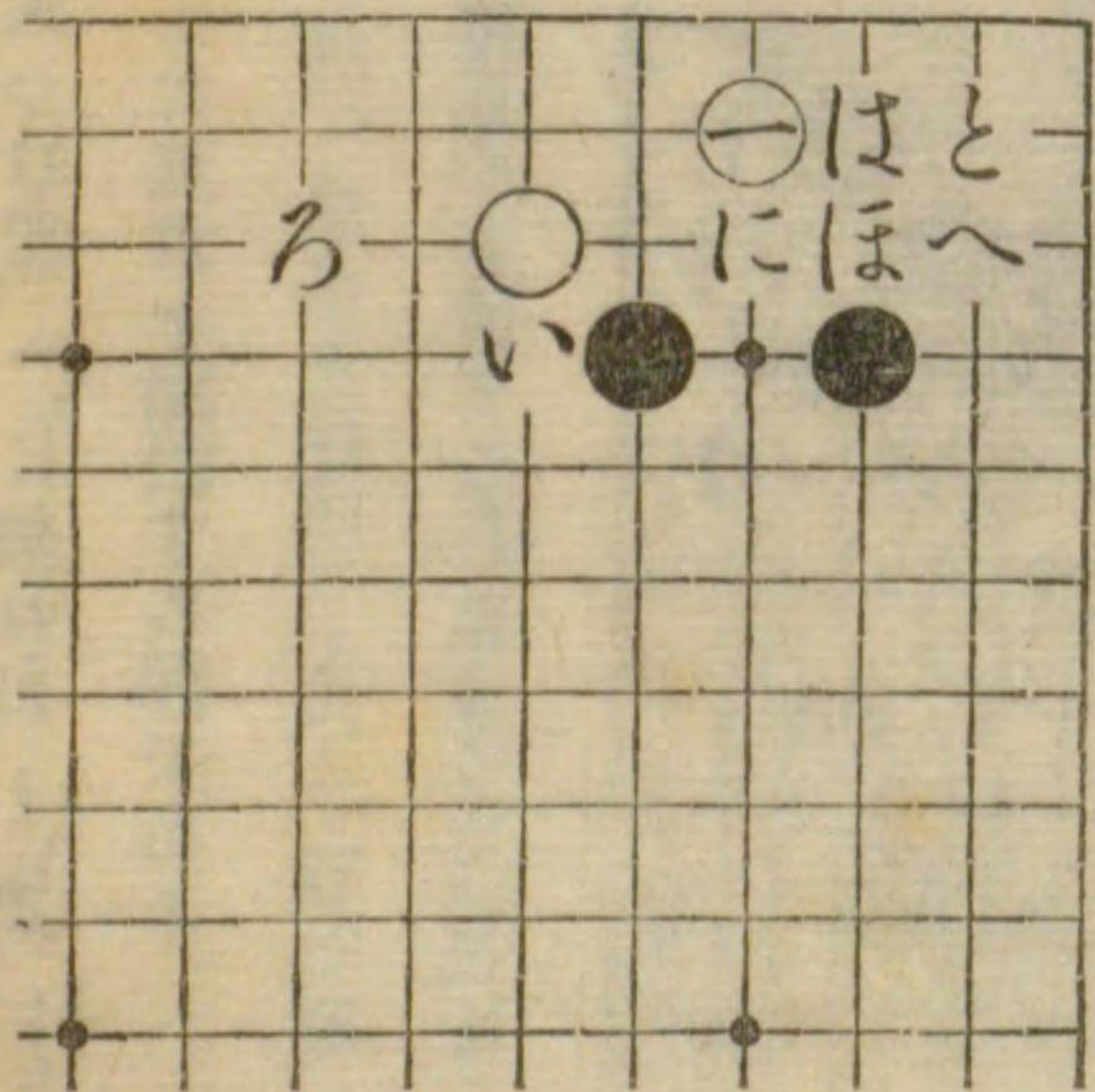
る手段は白二の手にて「い」に走り根據を作り且つ敵地を侵すのである黒二と押せば白「ろ」に出で、行びる然しながら此形は△印方面に黒の配置あつて中央の模様の出來る場合などには悪しく「い」に打つは不得策なることがある注意すべきことである尙殘説あり次圖に説かん

○白「ほ」の尖二ツケは輕き趣向なり (第百五圖)

前に述べた如く白一と走りこむは輕き手で唯畏る

ところは外部の模様如何にある而して一の手にて差支なき場合には黒も亦「い」に押すのは不可なれば「ろ」方面より來るであらうその時白「い」に出づれば黒「ほ」白「に」黒「ほ」となる斯くなつて黒「ろ」と打ち來りたるが適切であるとすれば白「い」に押して「ほ」までの成行となつては少しく黒の手段に陥つた傾がある何分白一に斜走するも黒「ろ」に來るも共に「い」と外部に出づる

圖五百第





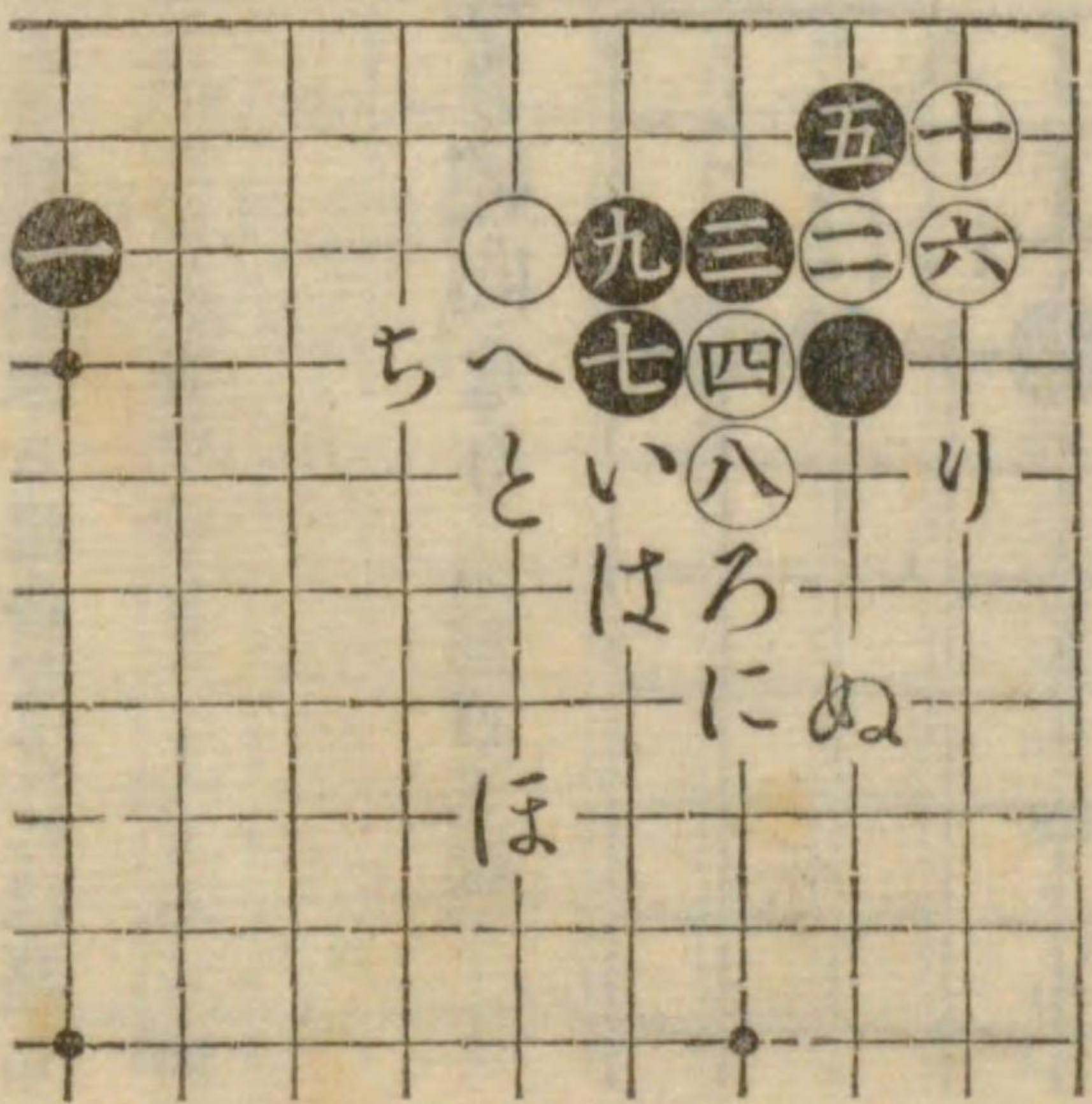
必要の少ない場合なれば其際だけは「い」に押さないで軽く「ほ」に尖みつけ黒「へ」に刎ね白「と」黒「に」白「は」とツギて一隅だけにて活を保つが敵の趣向を挫き且つ一と打ちた意志を繼續する譯である

○白二の頂は振替る手段なり (第百六圖)

○白の大桂馬懸に對し黒一と左方より夾んだ時は白二と頂けるのが常用の手段でこれは十までのやうに振替る心である然して黒此後の打方は局面の模様によつて「い」に押し白「ろ」黒「は」白「に」黒「は」と斜走して打つなぞもある或は黒「い」に押す手で「に」に打ち白「い」黒「へ」白「と」黒「ち」となるもある又黒單に「へ」に曲がるも稀にはあらう兎に角相當の振替と見れば大差はなからう尙變化を記さうなら黒三の手で六に縛ね白三に引き黒「り」にカケツギ白八黒「ぬ」と斜走する打方もあるがこれは白働きある姿にて黒は位が少しく低い故に前説振替りの策に出づる方多い之にて小目に於ける打方は一先づ終了として次圖よりは大目に移らう

小目の部 終

圖六 百 第

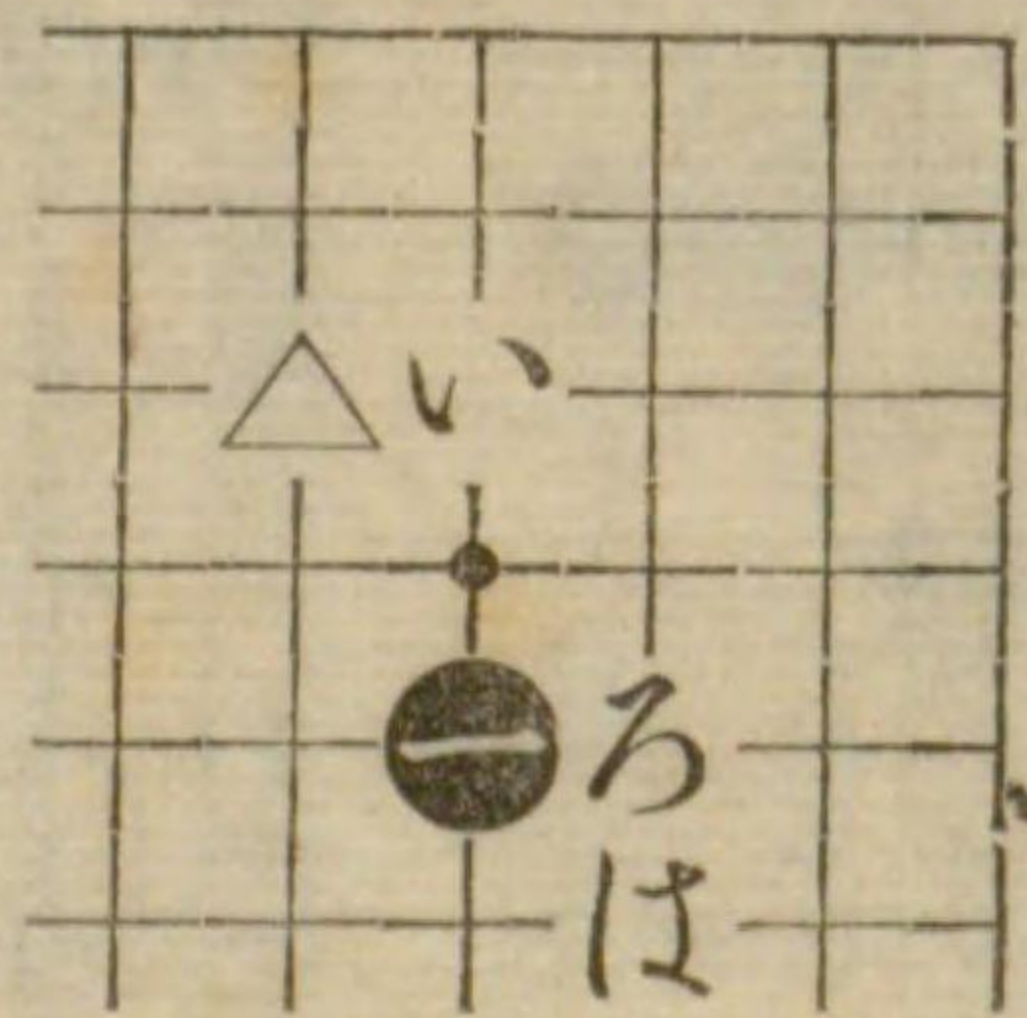


大目の部

●黒一は即ち大目なり (第百七圖)

●黒一の手は大目又は高目とも稱して時々用ふる手である初心者は大目を見て位が大きく觀し打ちにくく思はれるものが多數だが實は然らず能く其割合を考ふれば左程おそるゝには及ばない何となれば此手は小目に比して堅實を缺いて且下側を開放してあるから一手にて完全せざる缺點があつて縮がない例ば「い」に敵より小目に打込まれるれば主客顛倒となる又己れが縮らうとする時は「い」或は△印に打つ外はない(普通「い」を用ふる事多し)されば最初より高目に據らんで小目に打つておけば一と縮つても或は「ろ」「は」かの何れに縮つても皆法に適ひ各場合に應じて隨意である然るを一と高目に打つのは「い」のみ縮るに限れるの損がある此二つの不便利から黒など持ちては小目に打つの堅實に若かずこれ好みて大目に打つべきでない理由である但、黒でも趣向によつて打つ場合あれども多くは白を持つた時の方面白いものと知るが善い

圖七 百 第

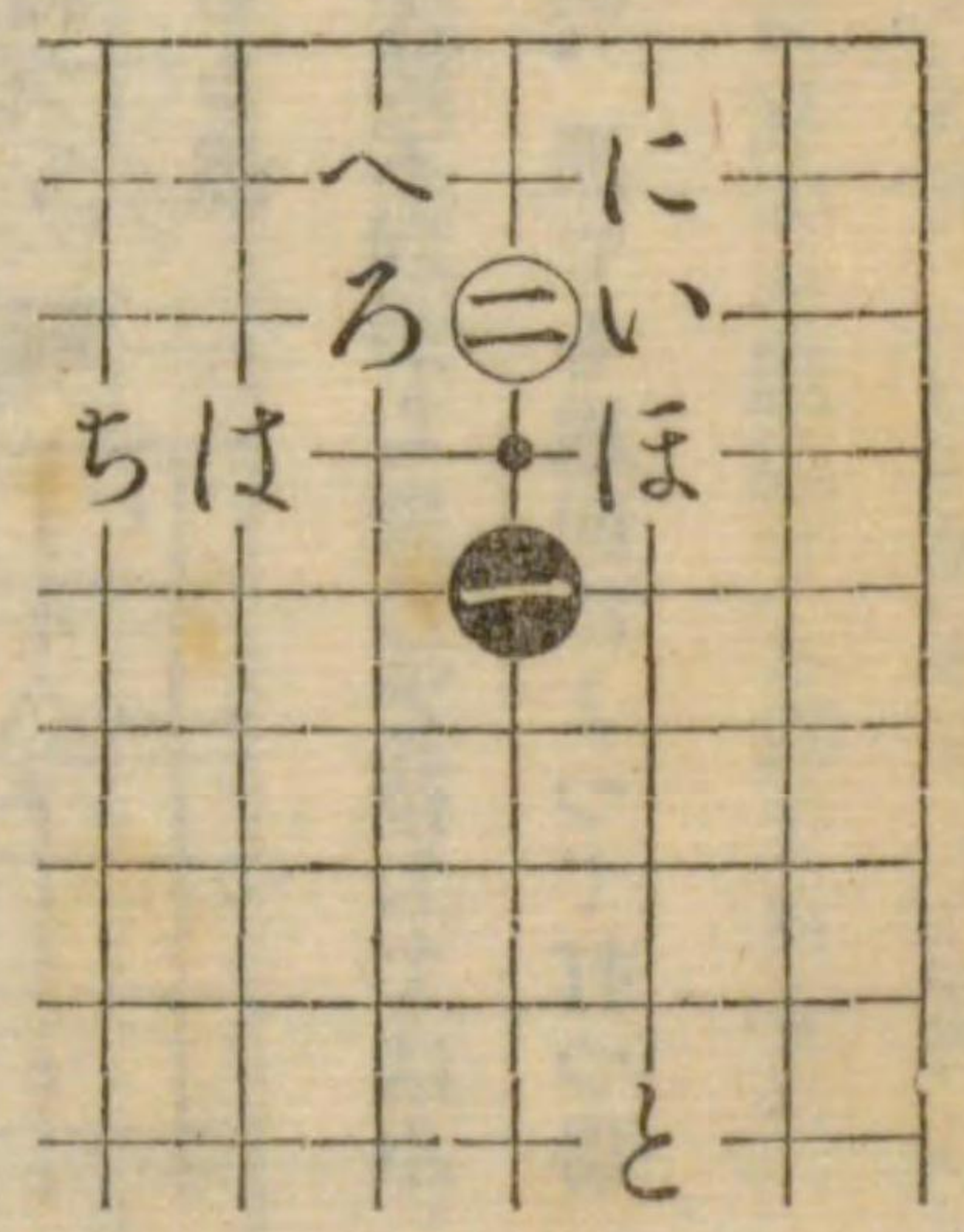


○白二は最普通の懸なり (第百八圖)



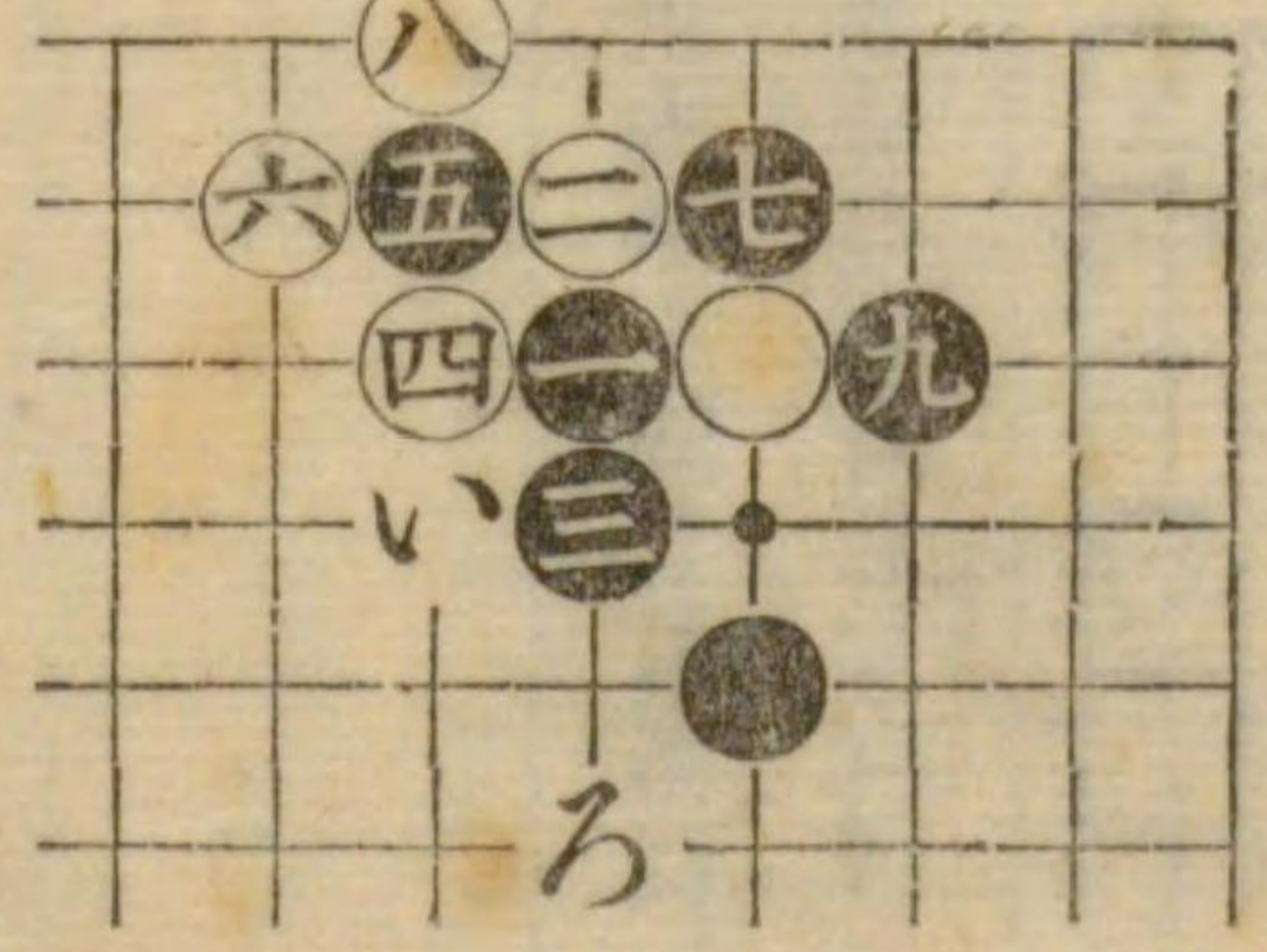
●黒一の高目に對し白二と打つは普通にして此時黒「い」「ろ」「は」に打つの三點あり各々其時の趣向によつて擇ぶべきである先「い」より説明しやう之は内頂ウチツケと稱し穩なる手である白「に」に應ずれば黒「ほ」「白」「へ」「黒」と展開するを通形とす其時白手抜して他に打つこともある尙茲に加手するなれば「ち」に打ちて釣合を保つべきである此割合黒白双方互角とする

圖八百第



●黒一は外頂ソトツケなり (第九九圖)  
 ●黒一の手を外頂といふ此手は内頂より用ふることが尠い特に場合によつて用ふるもので心して打つべき手である白二と受け黒三と引き以下九までの振替りとなるは通形で此結果は黒九と白の一子を抱へて隅に利なるやうだが先手は白にあるから互角の勢とする昔の定石には白「い」に押し黒「ろ」に尖みとなつてをれど白強ひて「い」に押す必要もなく黒も亦「ろ」と應ずるとも限らざれば當今にては必しも打つに及ばない尙殘説あれば次圖に説かう

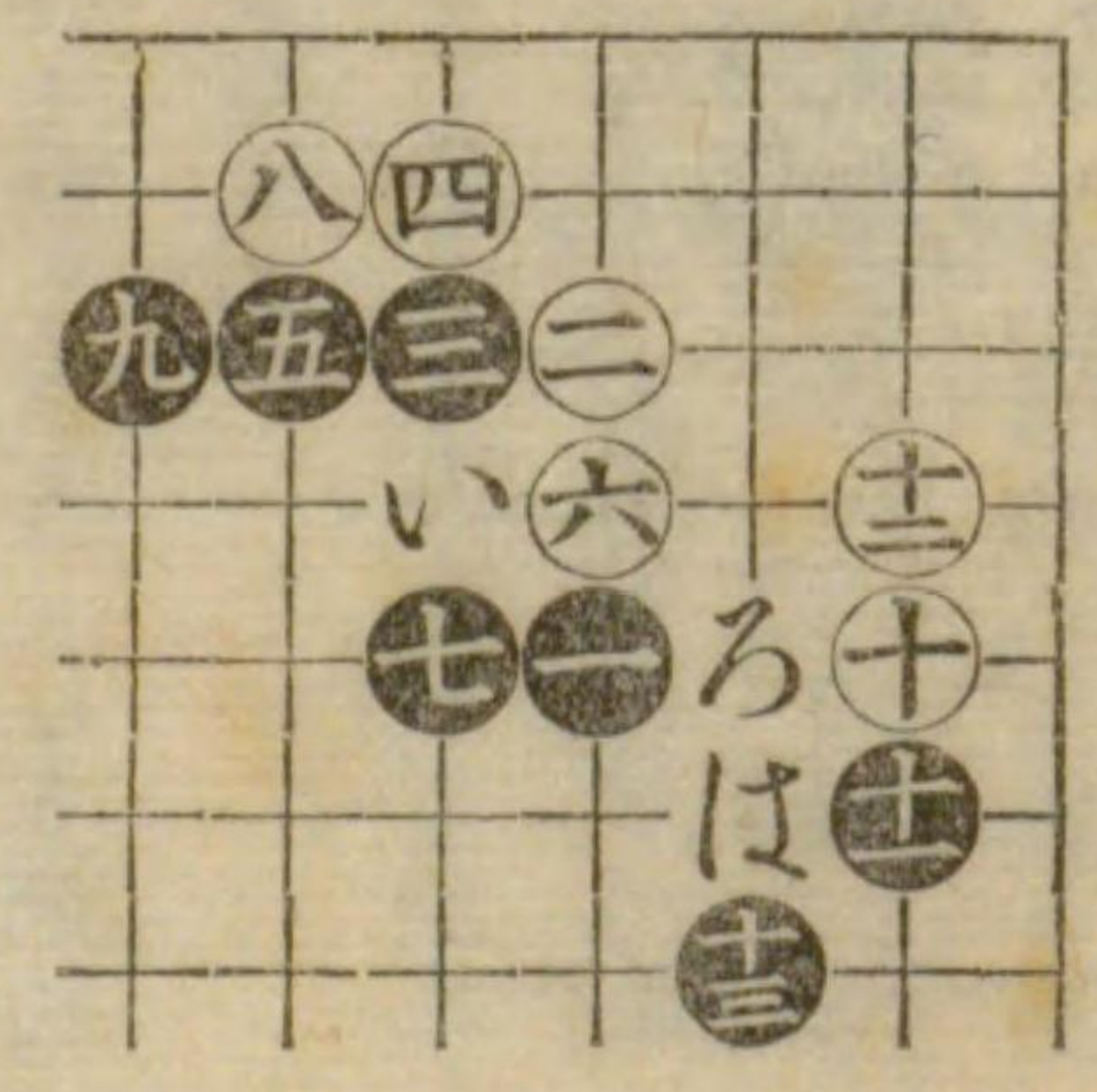
圖九百第



●黒五は割合悪しき手なり (第一百十圖)

●黒「い」に引かないで圖の如く五と行びて打つ事は定石の如く基本に掲げてあるが十三までとなつて白は一隅を確實に占領したにも拘らないで黒は空に外部を塗りしに過ぎない且つ「い」の穴の瑕疵あり下邊も開放しあるのみならず剩つさへ後手になるので割合は善いといふことは出来ない○白十は軽くして宜しい之を「ろ」に刎ねては黒より「は」に約へられ調子を與へて面白くない●黒十一の手も亦善い之を「ろ」に突き當れば白十二に引き黒十一に受けなば白を抑止し得れども十三の處などに打つ手残りて面白くない○白十二の手も「ろ」に突き當るべきでない若、「ろ」に打てば黒より「は」に約へられて折角思慮ある十の手の効能を没却するものである●黒十三の尖みも手筋である「ろ」に突當れば矢張十一の良手を無効ならしめる又「は」に引くも働がない共に注意すべき事である兎に角黒五と行びて此の圖の如くなりては黒の方頗る悪るけれども参考のためこゝに掲示するのである

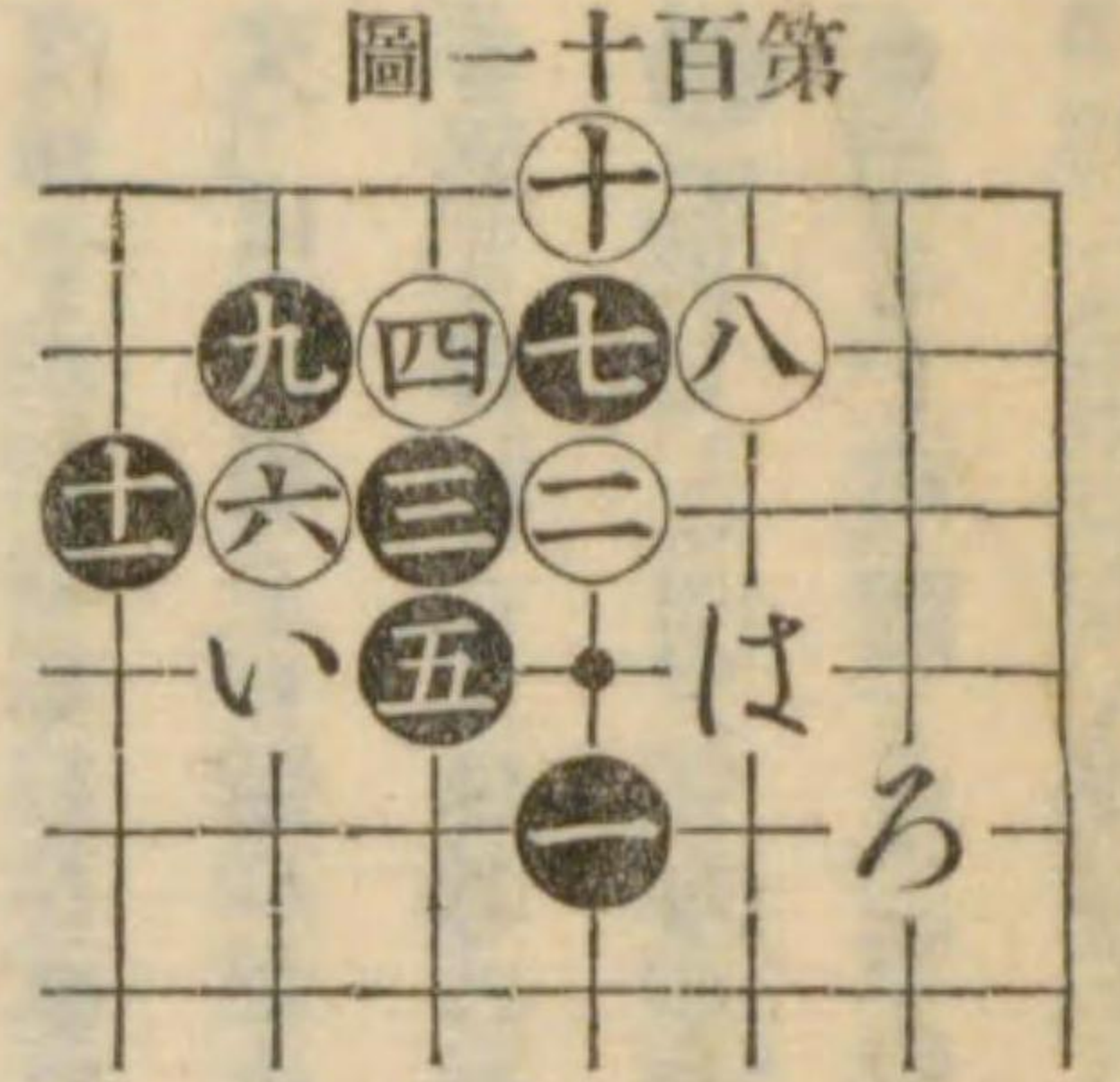
圖十百第



●黒七と切るのは外勢を張る手段なり (第一百一十圖)

●黒七と前圖と反對の側より切つた結果は斯くの如くである六の一子に征シヨウのアタリがあつて白より「い」に出らるゝ場合には七と切つて斯くの如く振替るは甚悪しく打つべからざるものである之は征の



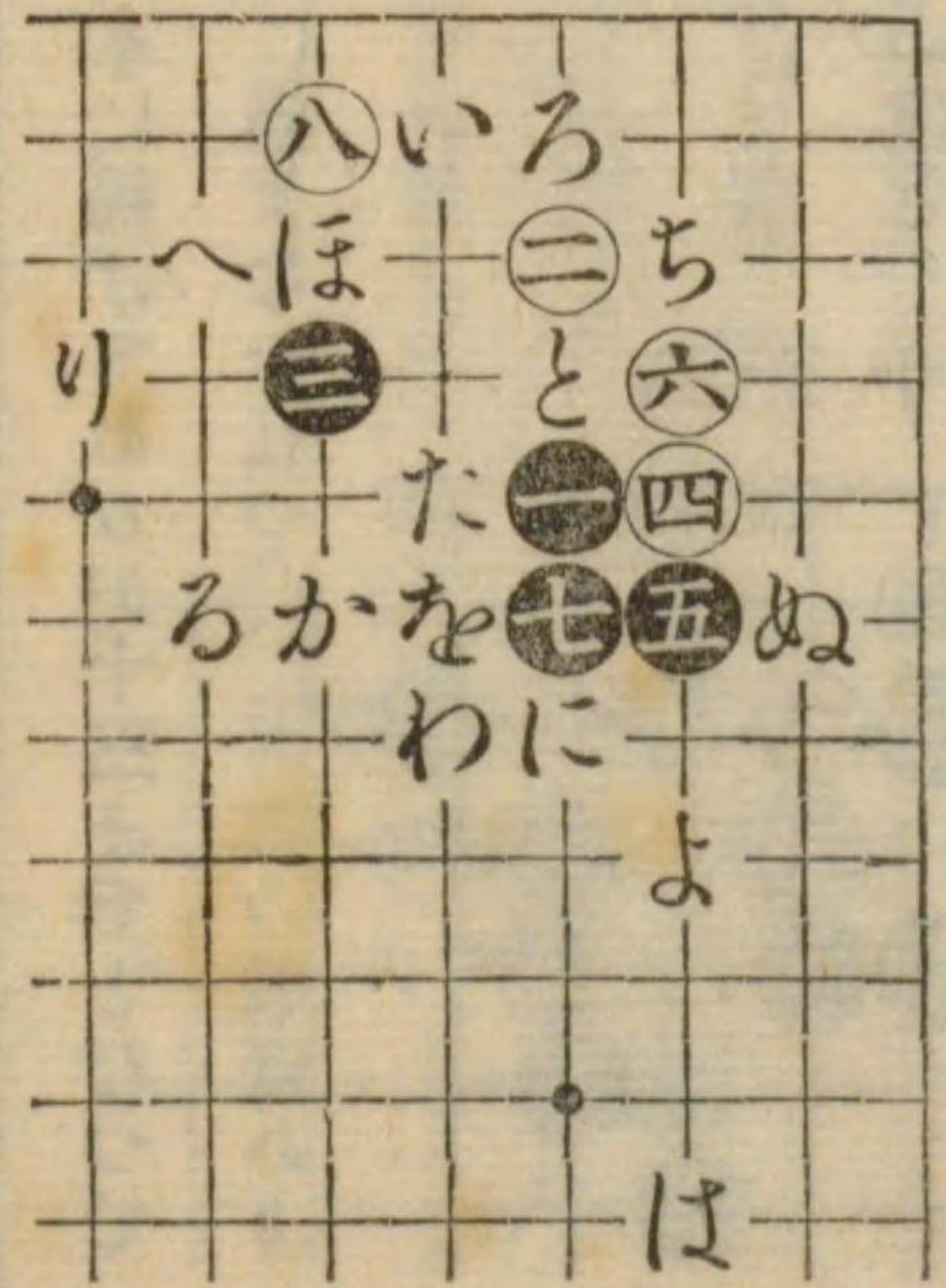


「アタリ」ないものとしての事で此形にて白の打つ手は「ろ」に走る事である黒は碁勢にもよれど「い」に提り置くを安全とする又白は「ろ」の手を打たない時は黒より「は」に攻めこまれて悪しくある尤白「ろ」に打つ手にて征のアタリを打ち黒「い」に應じた時此隅を顧みないで他に連發して打つ手段がある其時黒「は」に尖めば白又手を脱きて更に連發をかさねる然らば最初より白は連続して三手を他に打着しおるの割合となるを以て本圖に示せし此の一隅を放棄して黒に與ふるも亦悪しからざることゝなる且黒は尙一手を費さなければ隅の白を全く我有となす能はざれば此三手抜き趣向は場合によつて面白い宜しく時に臨みて考察する事を要する

●黒三と打つは二の白を封鎖する手段なり  
(第百十二圖)

●黒三と桂馬に掛け八までの應答通形なり○白八の手は抜くこともある然る時は黒より「い」に打ち白「ろ」に應じなければならぬ先手に此出路を黒に閉塞される圖の如く白より八と打たれては黒は此處を手抜して「は」の邊に展開する心

第百二十圖

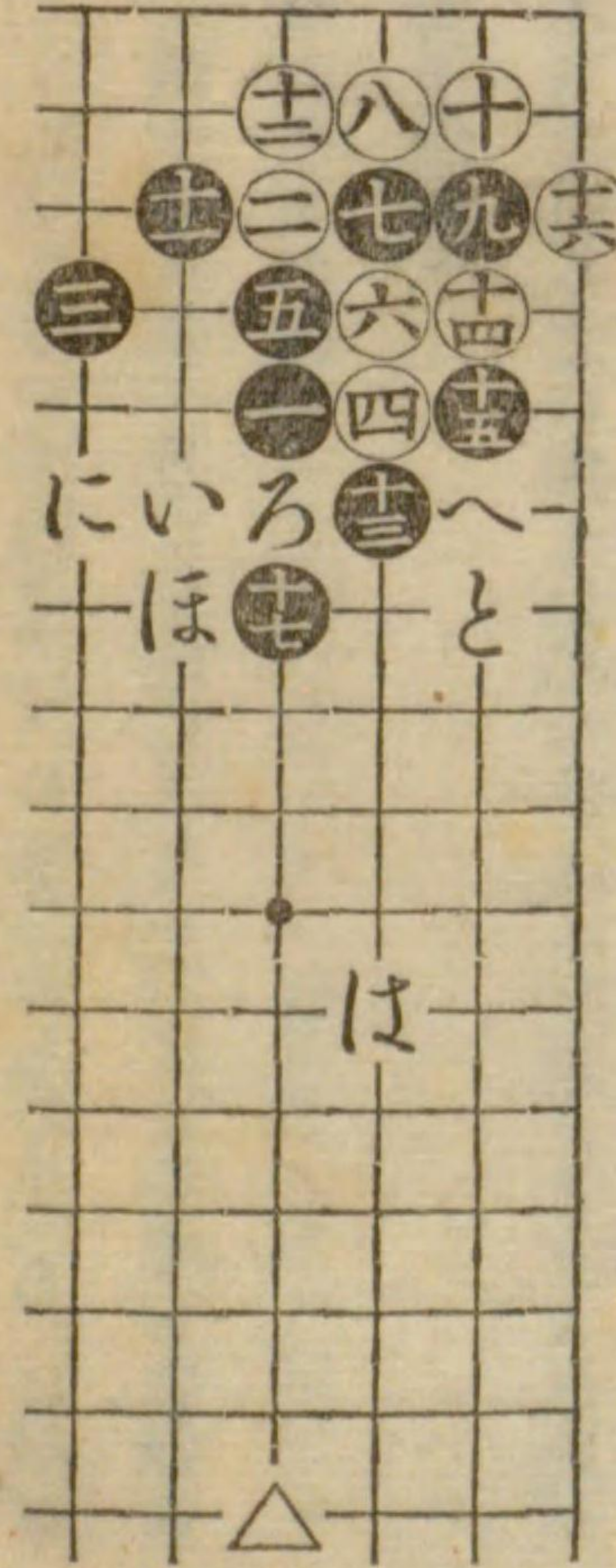


得ありて宜しい又黒七の手にて「に」にカケツガば白は八の手にて烈しく「ほ」に頂て打つべきである黒「へ」に約へ白八に下りとなるが通形なり其時黒は手抜して打つ事も或は之を完全にしやうが爲「と」にアテ白を「ち」に續かして「り」にカケツギて打つことがあつてこれも定石である又場合によつて黒七は「ぬ」に下る手もないではない其時白八に斜走すれば黒は「る」に守るべきである此場合に白若、七の處に切つて來れば黒「に」に縛ね白「を」黒「わ」と打ち一の一子を捨て封鎖して打つが善い又白八の手で直ちに七に切ば黒軽く「か」に飛び白「に」に行ければ「と」にアテ白「ち」にツギし時「よ」に飛んで打つべきである若、白「に」に行る手で「た」に一子を抱れば黒「に」に捲りて抑ゆべきである

●黒七と切るは捨石なり (第百十三圖)

●黒五と突き當り七と切つて隅を捨石に打ち外部を極り善く封鎖するは常用とするところである此形は互角で場合によつては黒の手段大に働あることがある而して白今此黒の外勢を削らうには先づ「い」に覗き黒を「ろ」に續かして「は」の方面に打つを可とする尤こは下隅(△印のある隅をいふ)との釣合を見ての事

第百三十圖



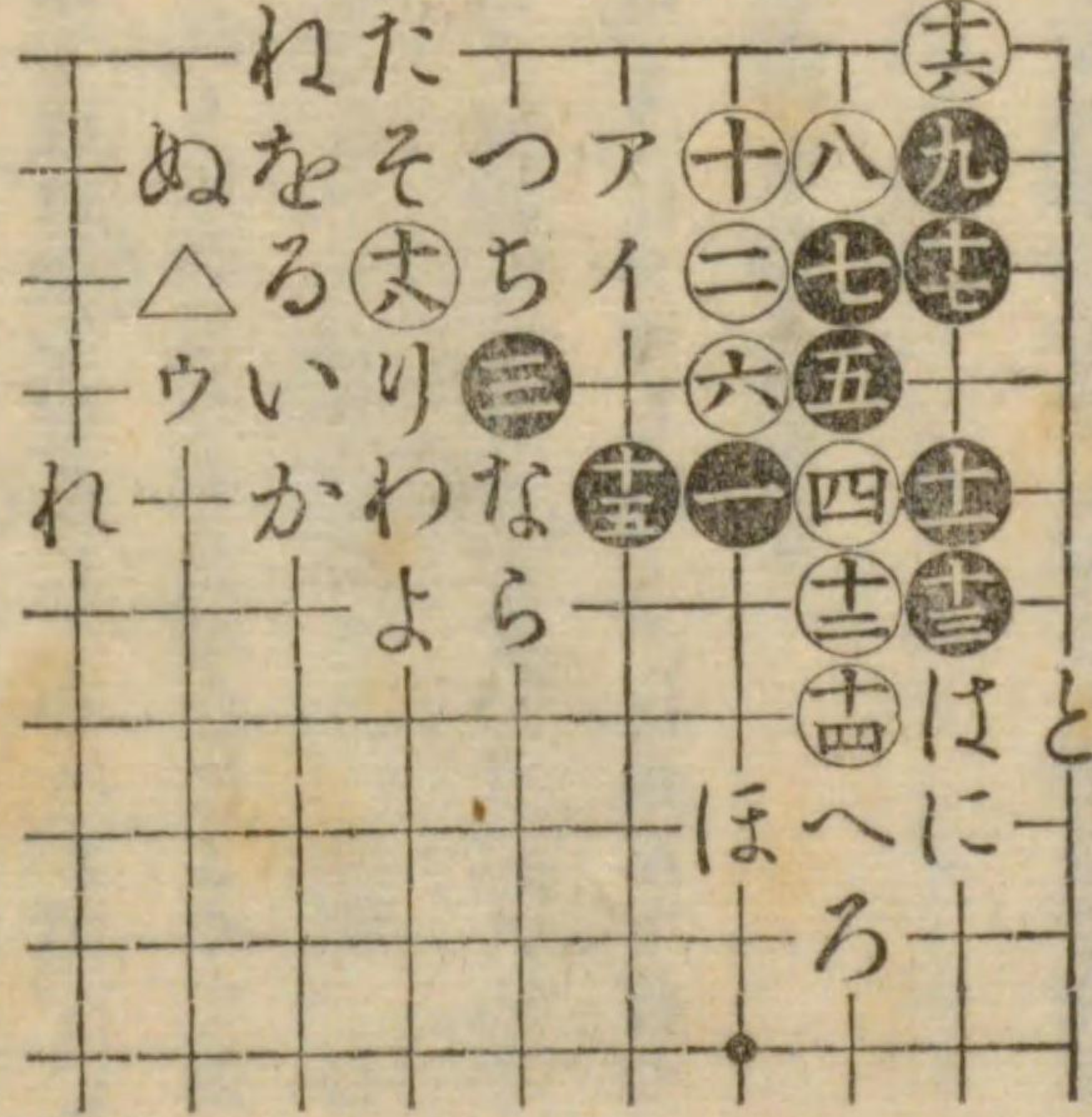


である上邊は裾明きなれば黒より拆かれても恐るゝに足らない其内白「い」の覗に對して黒「ろ」に續がないで「に」頂る手のないでもない其時白「ほ」に出づるは重くなつて宜しくない其儘に捨ておき後に「へ」に切り黒「と」に打てば「ろ」に切つて打つ手筋を窺ふが善い

●黒五は普通は不穩と知るべし (第百十四圖)

●黒五の芻出は特種の場合の外漫りに用ふるは不可である之に對し白黒十八までの運びとなるは通形にして割合も大差はない次ぎに黒の打つ手は「い」に掛くる位のもので白「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」白「ち」となる其時黒「り」にツガば白「ぬ」に斜走する又黒「り」にツガずして「る」に約れば白「を」黒「ぬ」白「り」黒「わ」白「か」黒「よ」白「た」黒「れ」となつて此割合は白の方宜しい其中黒「よ」の手にて強ひて白を取らうとして「そ」に切れば白「つ」に約へ黒「ぬ」に提り白「よ」黒「な」白「ら」となつて黒の方却つて取られる事になるので黒「そ」と切るとは出來ない最後に心得べきは白「ち」に打つ手で「る」に出づるは悪い其故は黒より「ア」に頂けられて白「イ」の時黒△印に約へる手段がある又白「イ」に出で

第百十四圖

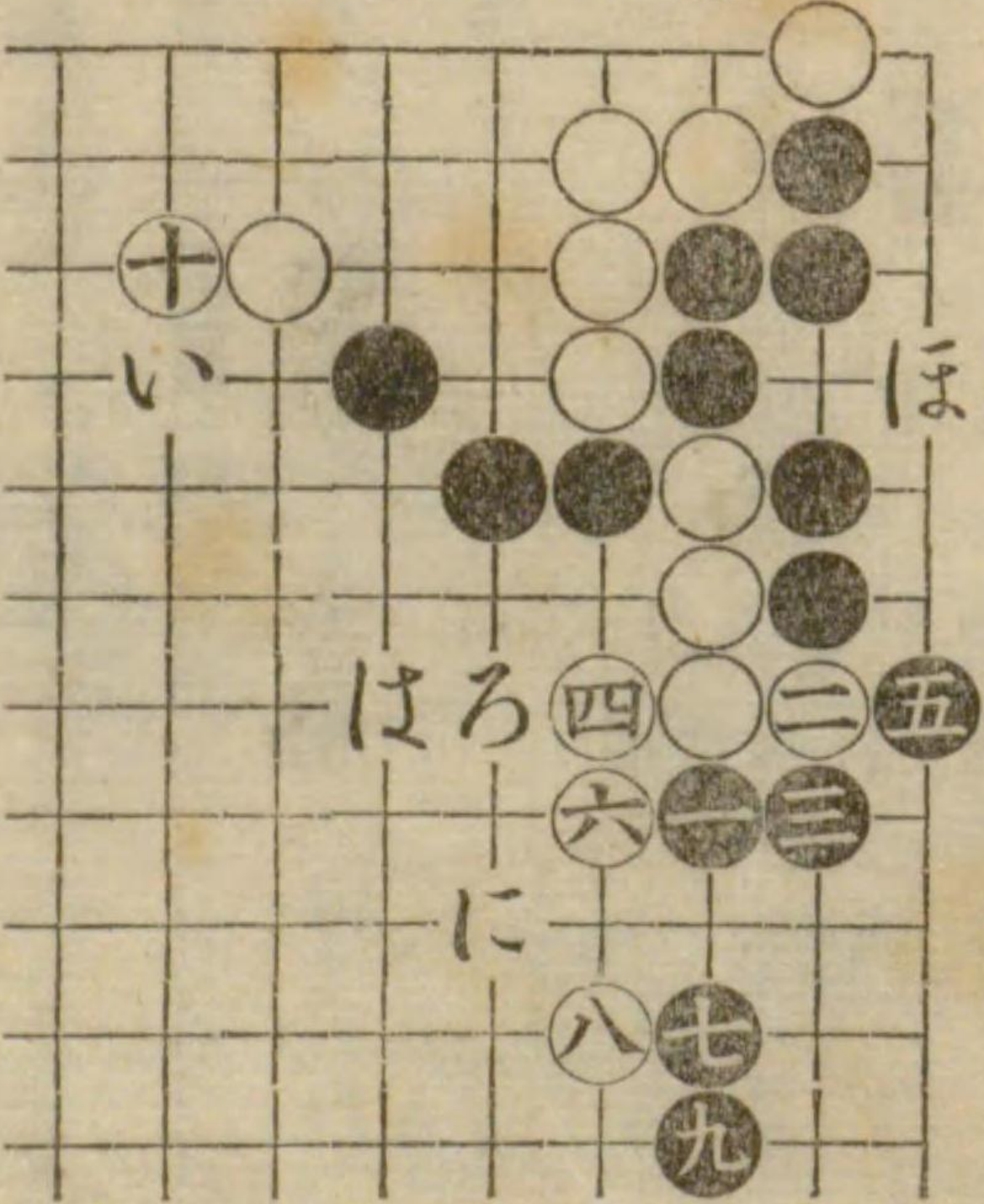


ず「つ」に頂ければ黒より「ウ」に行びられ白の位低くなつて悪くなる

●黒一と頂くる手場合によつて面白きことあり (第百十五圖)

●黒「い」と掛くる手で「に」頂ける手段があるさすれば圖の如く十までの運びとなつて双方無事なるが幾分か白の方の面白いのは大體が芻出したる (前圖黒五の手をいふ) 最初の趣向穩でないので己むを得ぬことである其内白四の手にて「ろ」に飛び黒五白六黒七白八黒九白十黒「は」白「に」となるも一種の打方なり茲に注意すべきは黒一の手で二の處に這ふは悪しくある又黒三の手で白を取らうと六の處に打てば白より「ほ」にオカレテ攻合の手數黒不足である

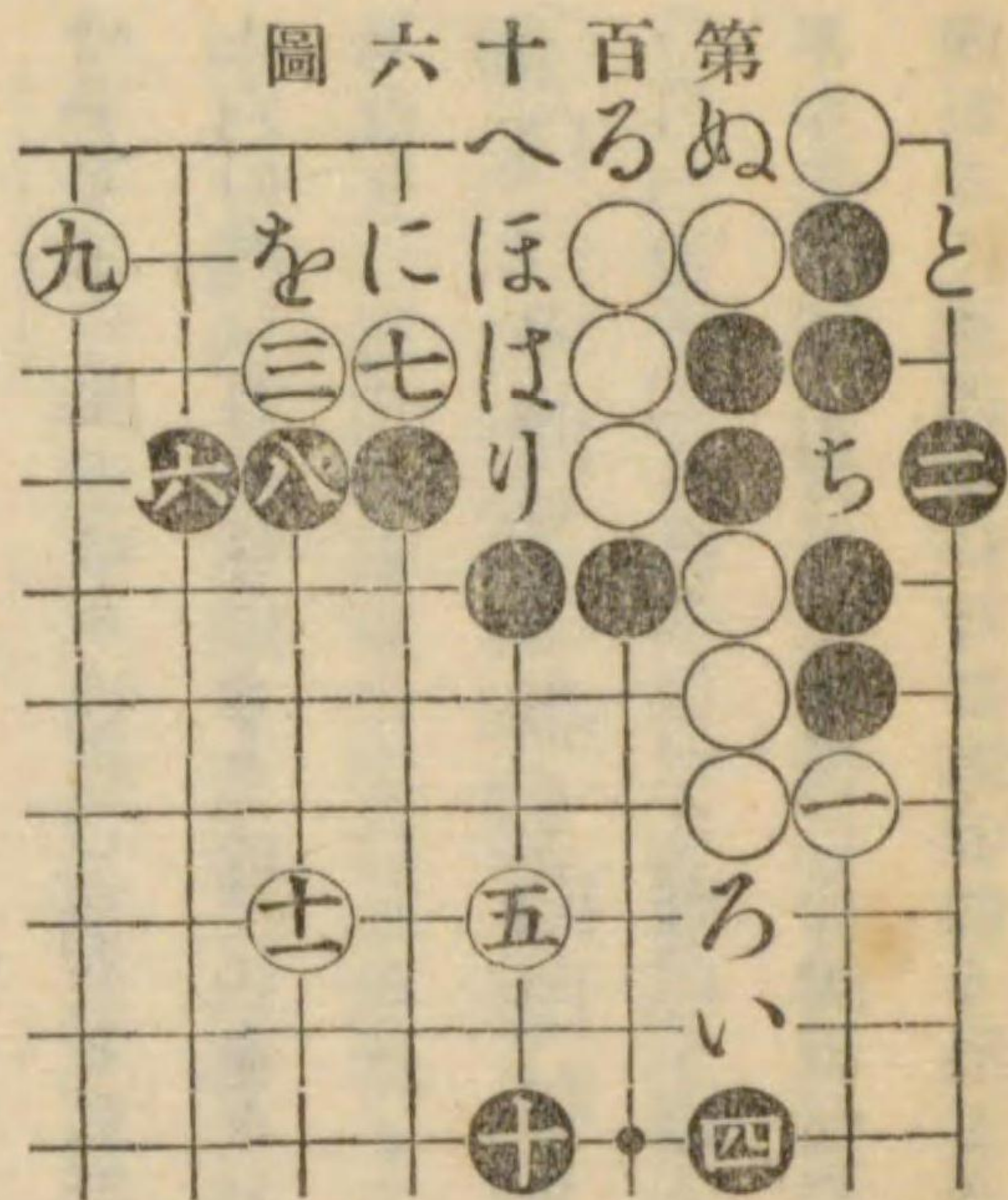
第百十五圖



○白一の曲りは多く面白からず (第百十六圖)

○白一の手にて直ちに三に飛ばす斯く曲がりやを打つて置いて而して三に打つことは大體に於て大差なきも先づ三と打ちおき後に前説の如く「い」に關してキカする方少しく働あるものとするされば強ひて曲がるに及ばないただ前の如く黒より「ろ」に頂けらるる事が面白からざる場合には斯く打つも宜し



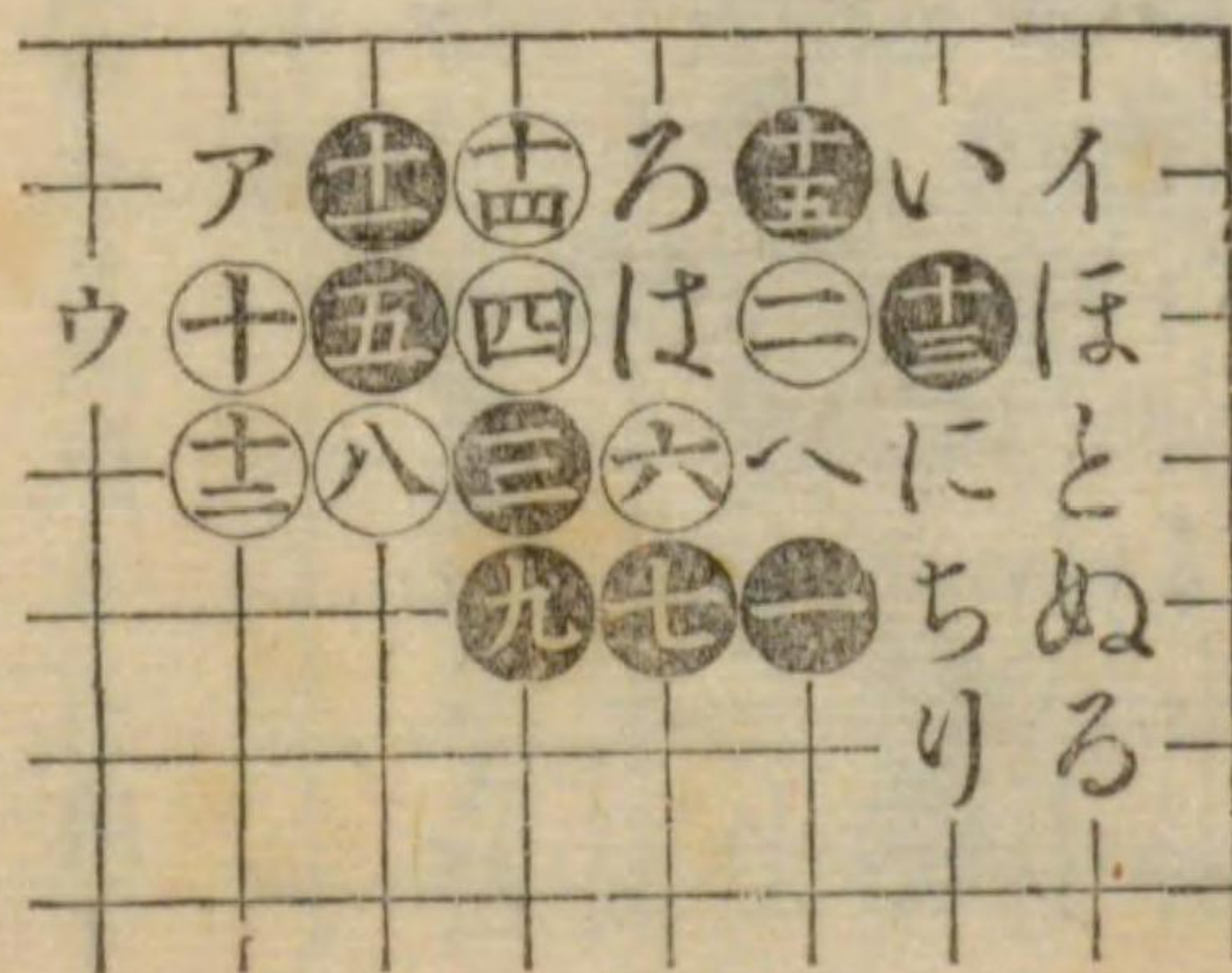


「へ」黒「り」白「ち」黒「ぬ」白「る」黒「を」となつて攻合白負なれば二とオク  
前に白は「に」に飛び出すべきである

○白四の手は不利なり (第百十七圖)

○白四と頂くる手は特種の場合の外多くは悪しきものである斯くの如く  
十五までとなつて二子を獲れども隅を黒に占められ損害尠くない其中白  
十四の手で「い」に縛れば黒より「ろ」にオカレ白「は」にツギ黒十五白「に」  
黒「ほ」白「へ」黒「と」白「ち」黒「り」白「ぬ」黒「る」となつて白は全滅となる

第百十七圖



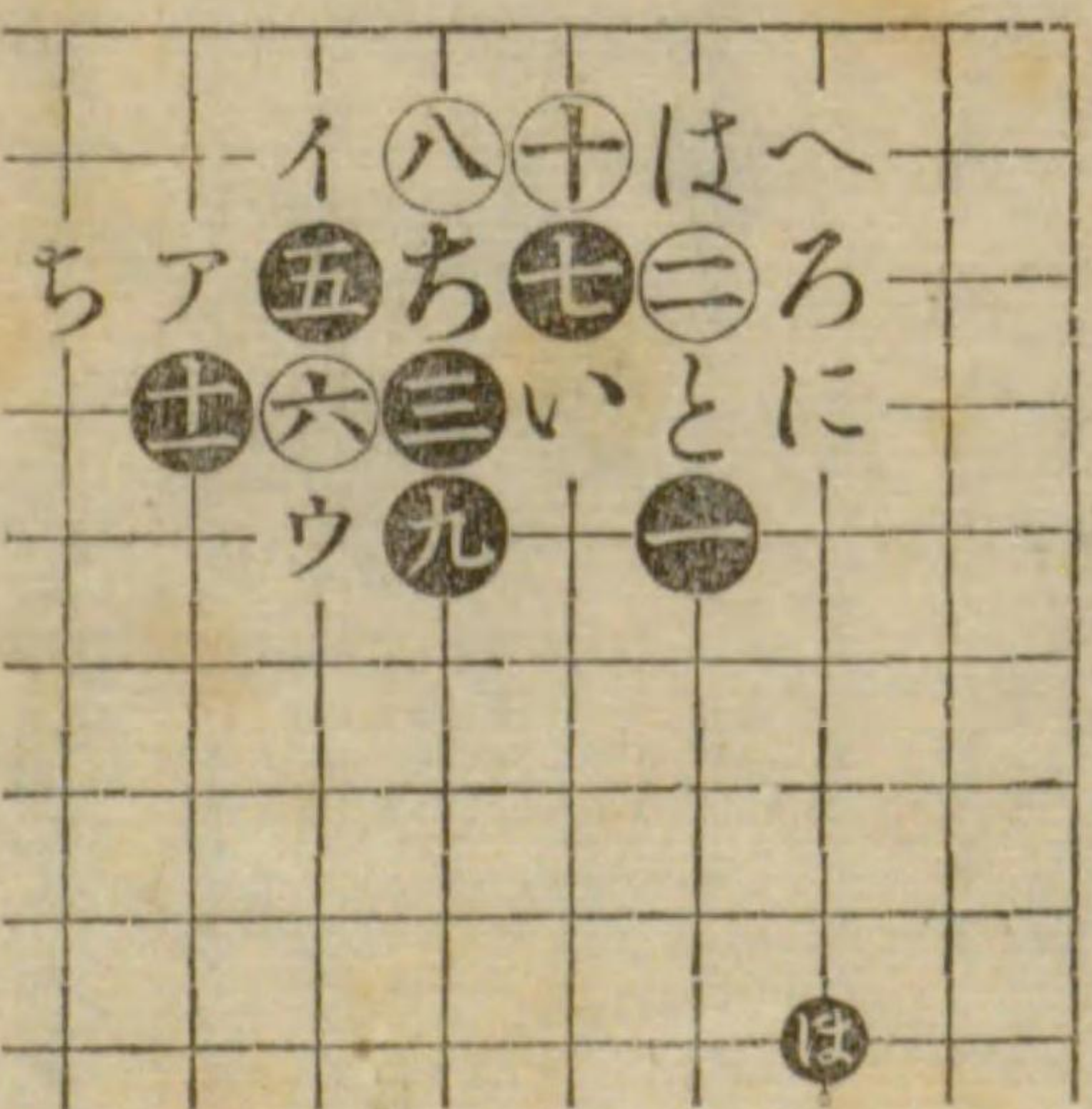
「参考」黒二の手で「は」にコスミツケて來たら白「に」に飛ぶべき  
である黒二に眼做らば白三に尖んで宜し又黒二に眼做らず「ほ」  
に出づれば白「へ」に盤つて黒三の處に尖めば白二の處にオイテ  
攻合白勝である然るを黒「は」に尖みつけた時白急ぎて二の處  
にヤクは宜しくない何となれば黒「と」に曲がる手がある其時白  
「ち」に切れば黒「ほ」に押し二子を捨て攻合黒勝なるとを以てな  
り又白「ち」に切る手にて「に」に飛ぶも黒より「ほ」に出でられ白

ので「い」に縛るは悪い白八と切る手にて十一に二段縛するもある其時は黒八の處にツギ白「ア」に伸び  
黒十三白「い」黒「に」白「イ」となるのもある又黒八の處にツガずして十の處に行び白「ア」に這へば又  
「ウ」に行び従つて白這はば従つて黒行びて何れにしても位が低くないので白宜しくない

○白六と切るのは一の趣向なり (第百十八圖)

○白六の切りは前圖の如く「い」にフクテ後にするよりは面白いけれど四と頂けるのが既に悪いなれ  
ば大抵之にても好結果を得ない即ち圖の如く十一となりて内外の  
振替り黒の方が割合は善い尤黒に於ても六の一子が征に取り得る  
場合に限る事で若も征のアタリある時斯く打ちては黒大に悪しく  
又アタリある場合には黒の打方變化しなければならぬ即ち九の手  
で「い」にツギ白十黒「ろ」白「は」黒「に」白十一の處に行びた時  
黒「ほ」の處に拆いて宜しい其中白「は」にツグ手で「へ」に縛れば黒  
と「に」アテ白「は」黒「ち」に飛びとなる(此「ち」と飛ぶのは軽くつて  
面白い手である即ち白「ア」に勿込めば黒十一に切り白「イ」黒「ウ」となる手筋に打つべきである白益々  
薄くなり黒は追ひ々厚壯の形勢を増す) 此第百十七第百十八の兩圖に説示せし打方は最初白四と頂

第百十八圖





けし打方悪しく従つて結果も宜しくない

○白二の打込は場合に因つて往々用ふることあり (第百十九圖)

○白二は最初より打つべき手でないが△印方面に黒ある場合には其効力を鈍からしめる爲に二と打込む趣向面白いことがある四までとなりて黒が「い」なれば白「ろ」

黒「は」となつて即ち目下の石が「は」の自石と接近し過ぎて其働

きを減ずる事となるされば白二の打込が當を得たもので又黒

「い」に尖まず「ろ」に頂れば白「い」に勿出し振替りて善い又黒

「ろ」にも頂けず「に」に打てば白「ほ」に行び黒「へ」に突きあたる

白「は」に斜走すれば矢張△印にある黒の位置悪しくなるわけで

故に黒が三と打つ手にて「ア」に尖みつけ白「へ」黒「イ」白「ウ」

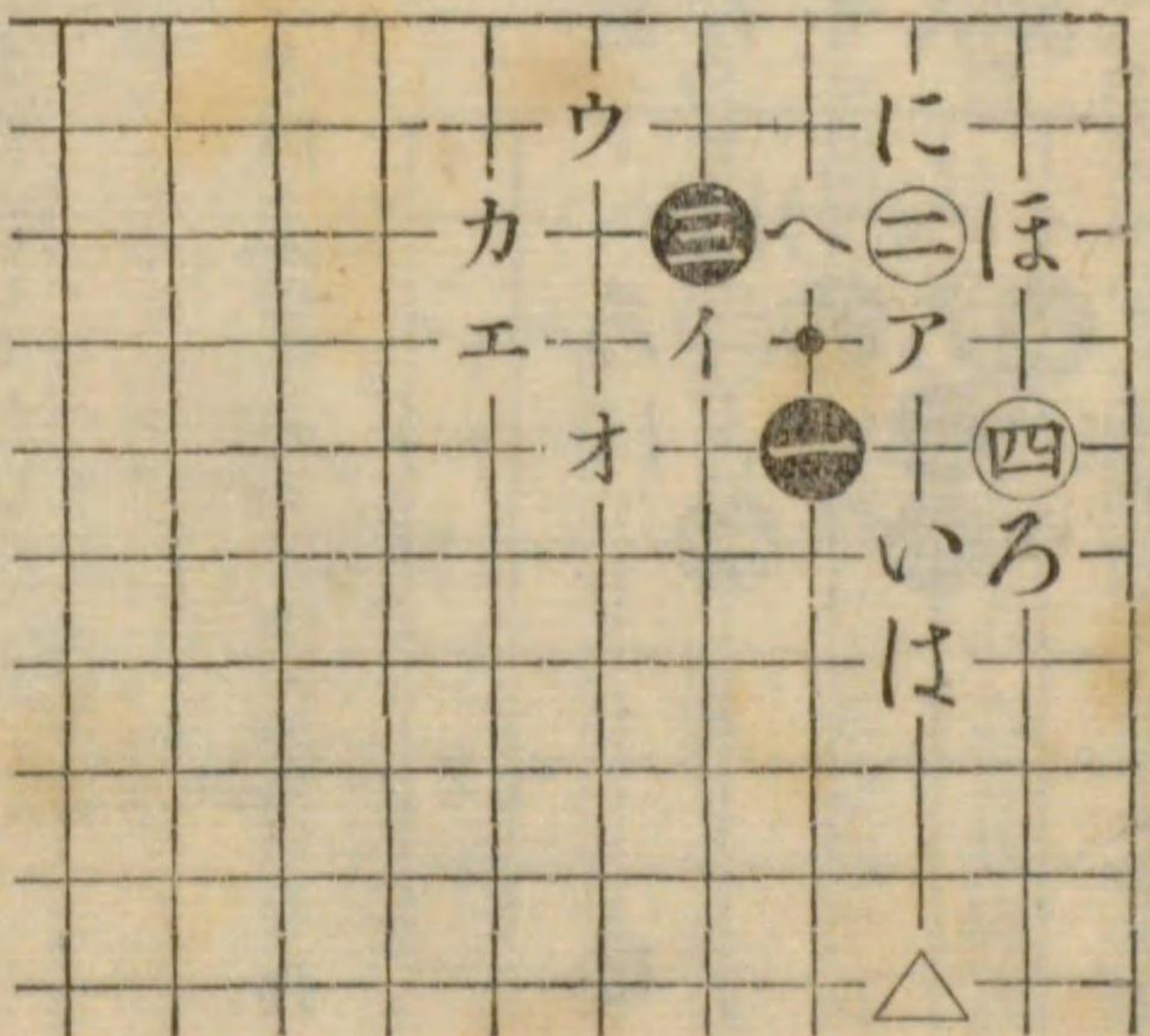
黒「エ」と打つ事がある又黒「イ」に尖む手で「オ」に飛び白「カ」に

二拆となる打方もある之は黒が△印の石を働かせやうとするの

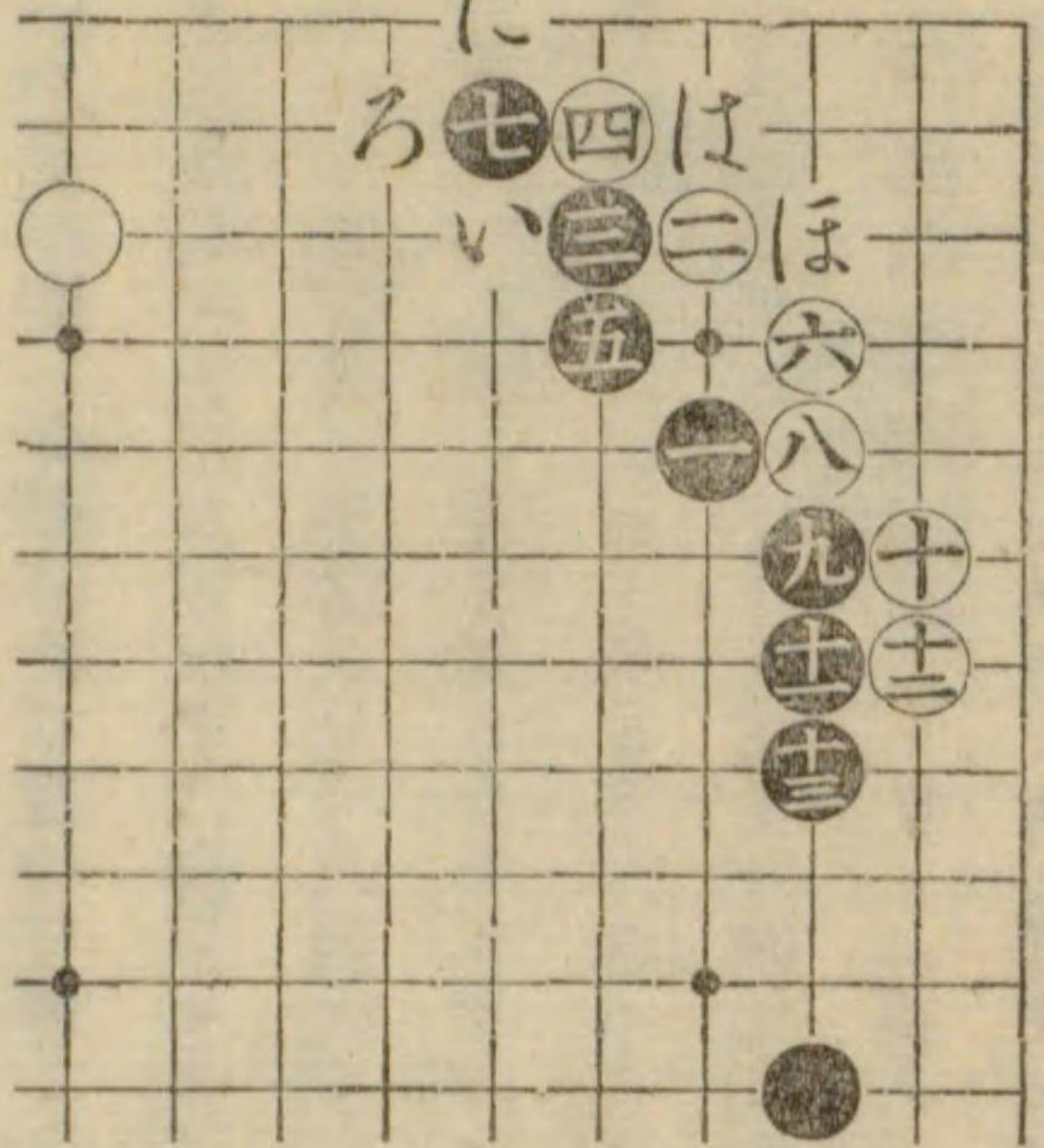
打方の場合に因りて面白き事となれば心得置べきである

○白六の手はよく場合を見計ふべし (第百二十圖)

第百十九圖



第百二十圖



○白六の尖みは通常打たぬ手だが圖の如く左方目下に白石ある場合などには稀に用ふることがある其

の場合は通形の如く白「い」に縛れば黒より七に切られて白

「ろ」黒「は」白「に」黒「ほ」となつて目下の白石少しく働きを

殺される姿となる時か或は右方目脇に黒石ある時などに圖

の如く十三までの運びとなれば白は黒の目脇の石と九、十

一、十三と連行の石とが重複するだけ白の利であれば斯く

打つこともある

●黒九の曲りは悪し (第百二十一圖)

●黒九と曲る手は通常宜しくな

い即ち十四までとなつて此劫を仕掛ける事は至難である若、黒より△印に

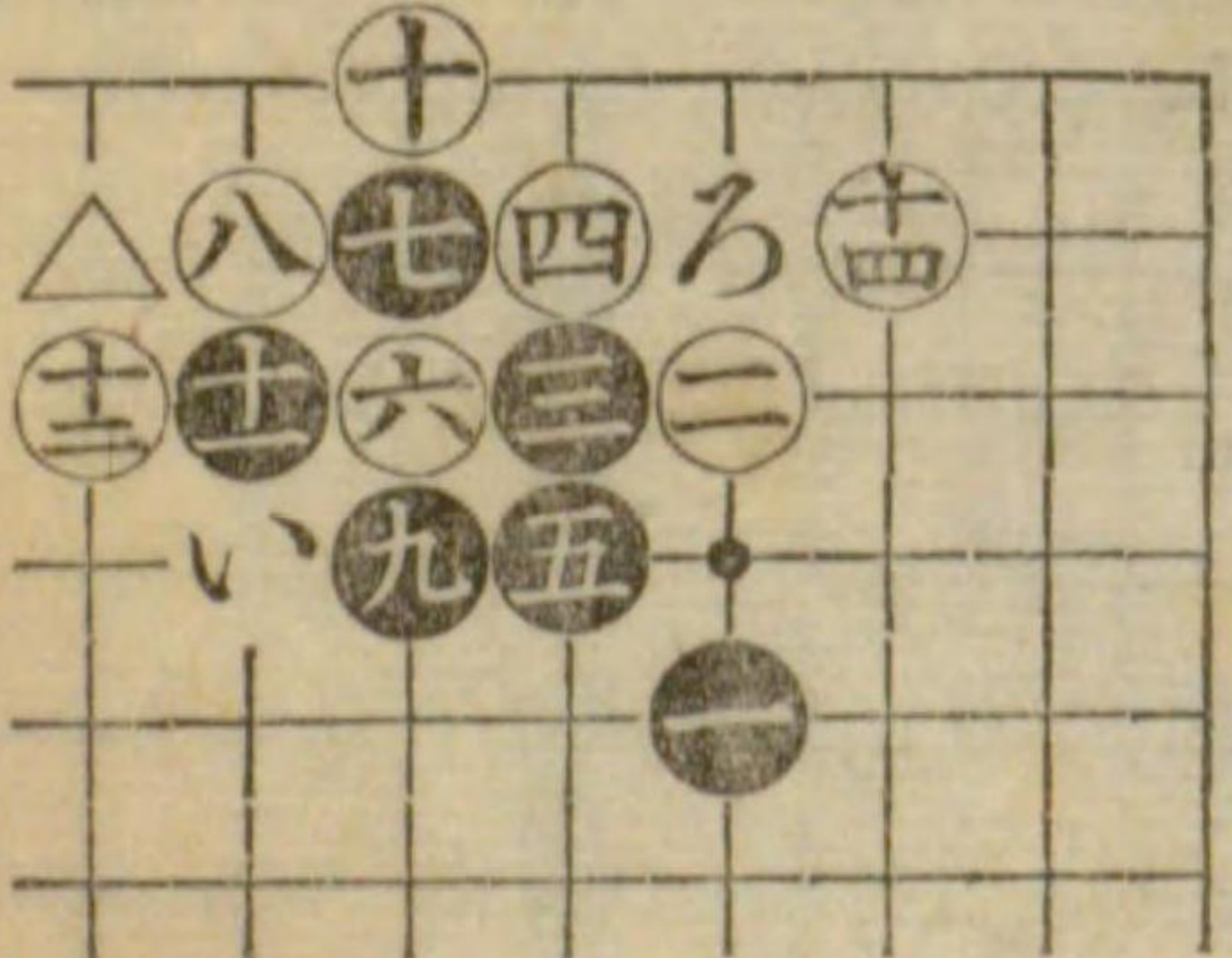
切りて劫争をしても最初の事なれば白は劫立にも應じないで「い」に打抜く

因つて黒は劫を争ふことも出来ないとするれば普通の定石の如く二の白も獲

れず且白に十二と外面へも出でられて稍や上部を糊塗するに過ぎない割合

の悪いことと言ふまでもない又白の手にて十一の處に粘れば黒より「ろ」に

第百二十一圖





切り白十黒「は」となつてこれは九の曲と十一の粘との交換あるだけ白の不利である

●黒七の曲も通常良しからず (第百二十二圖)

本圖十四までの運びは時として稀に打碁に見受けたことあれど割合は黒悪くあるこれ七の悪手に原づくもので白は一隅を確定せしに拘らず黒は外部に十四の截を蒙つて此後の捌きは容易でない白十の手で十二に打てば黒より十を切られて二の一子を取られることになる前圖に於て述べた如く白が悪い又黒十一のハナヅケは手筋として心得置べきである白十二の手を十三の處に出れば黒より十二の處に引き出されて腹背共に事急となつて面白くない結果を見る

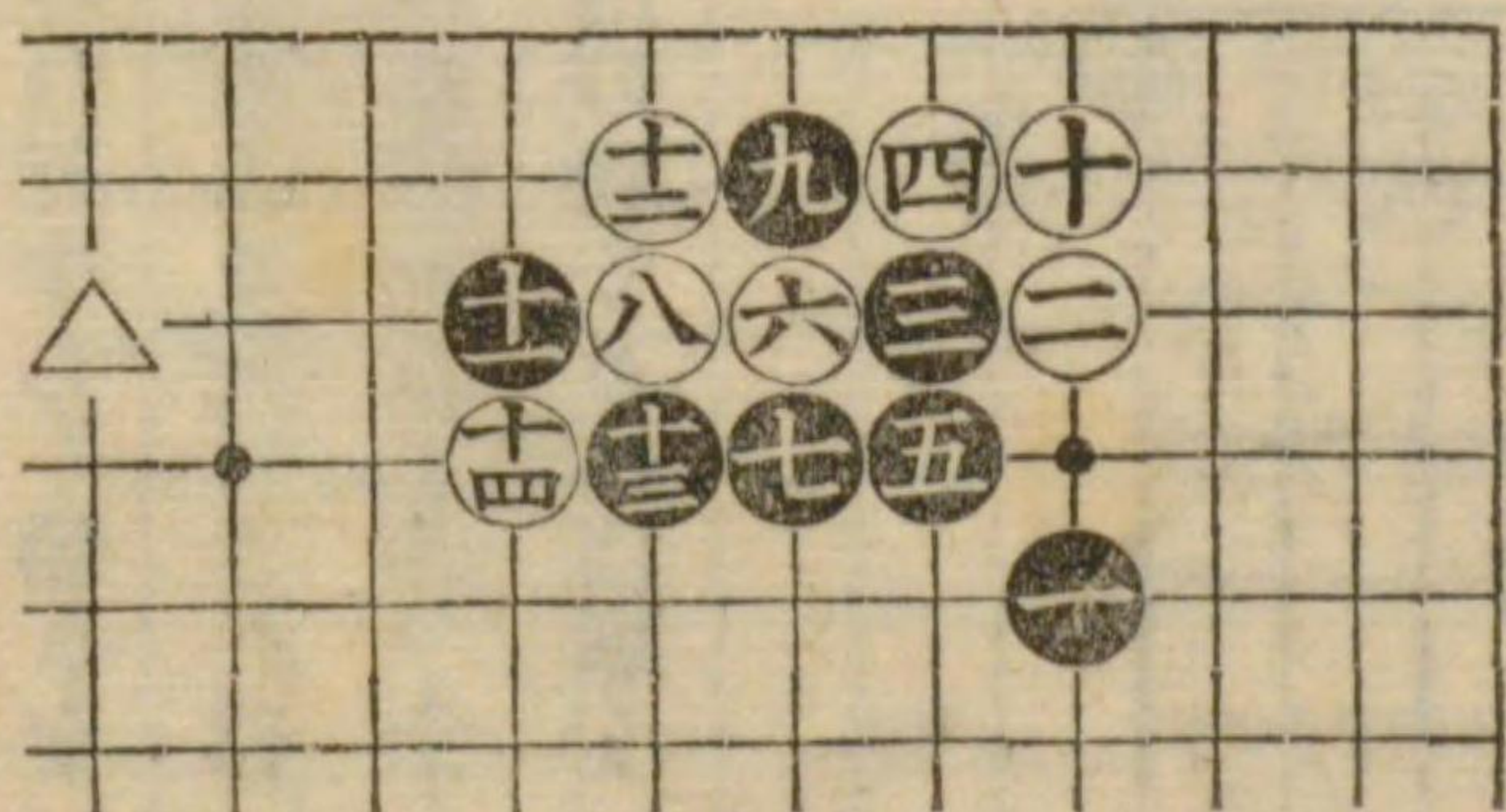
「注意」 △印の邊に黒ある時は十一の手で直ちに十二に引き出して打つが

善い此場合には七と曲る手が成功することがないでもない尤白も亦六の手で第百二十圖の打方に従ふの變化に出づる趣向もあらう

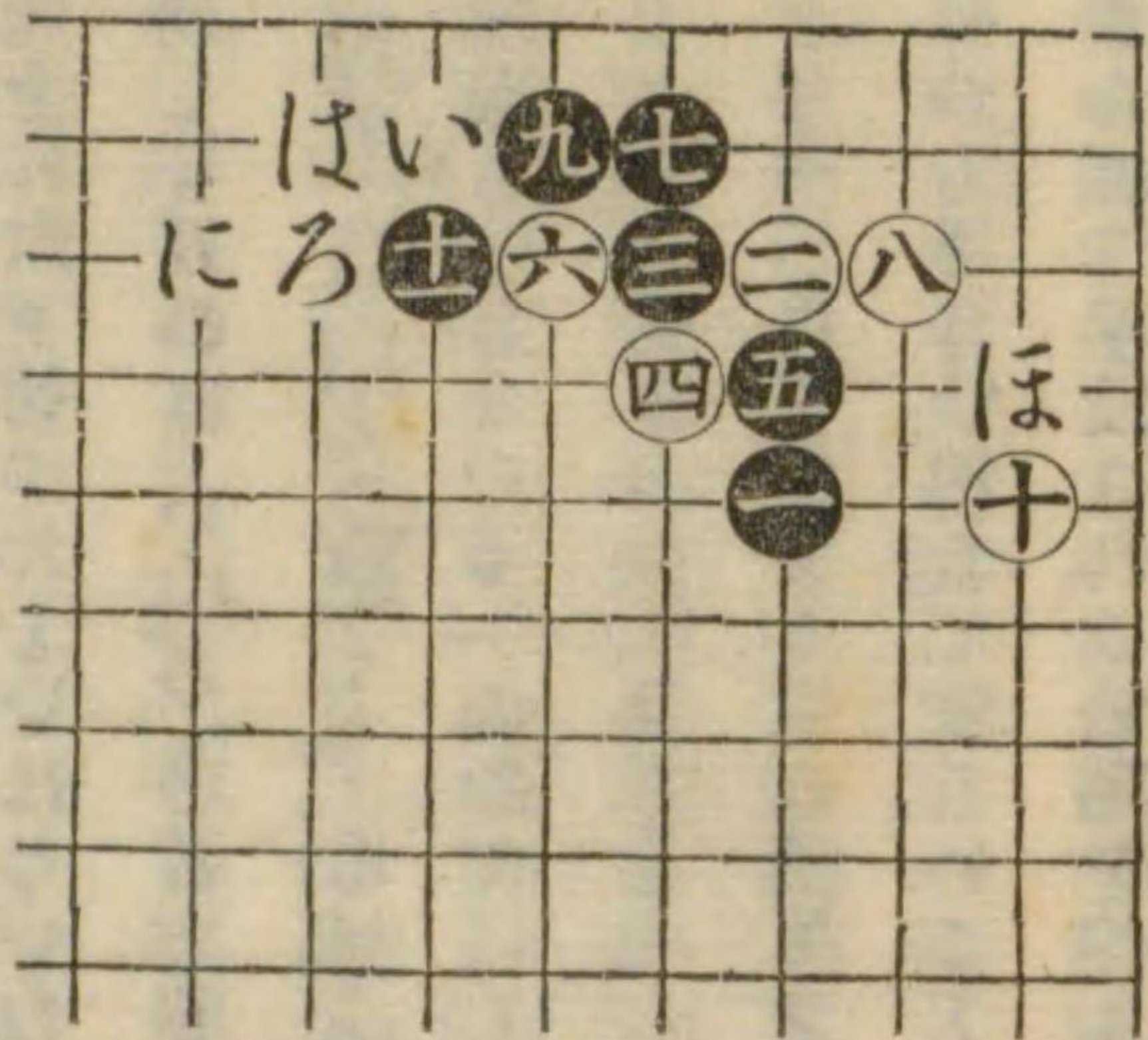
○白四の趣向無理なり (第百二十三圖)

○白四以下の趣向は無理である黒十一までとなつて割合甚悪い本圖は唯参考のために記したもので尙附け加へて説かうに白十の手で十一の處に行けば黒「い」に這ひ以下白「ろ」黒「は」白「に」の時黒「ほ」と

圖二十二百第



圖三十二百第



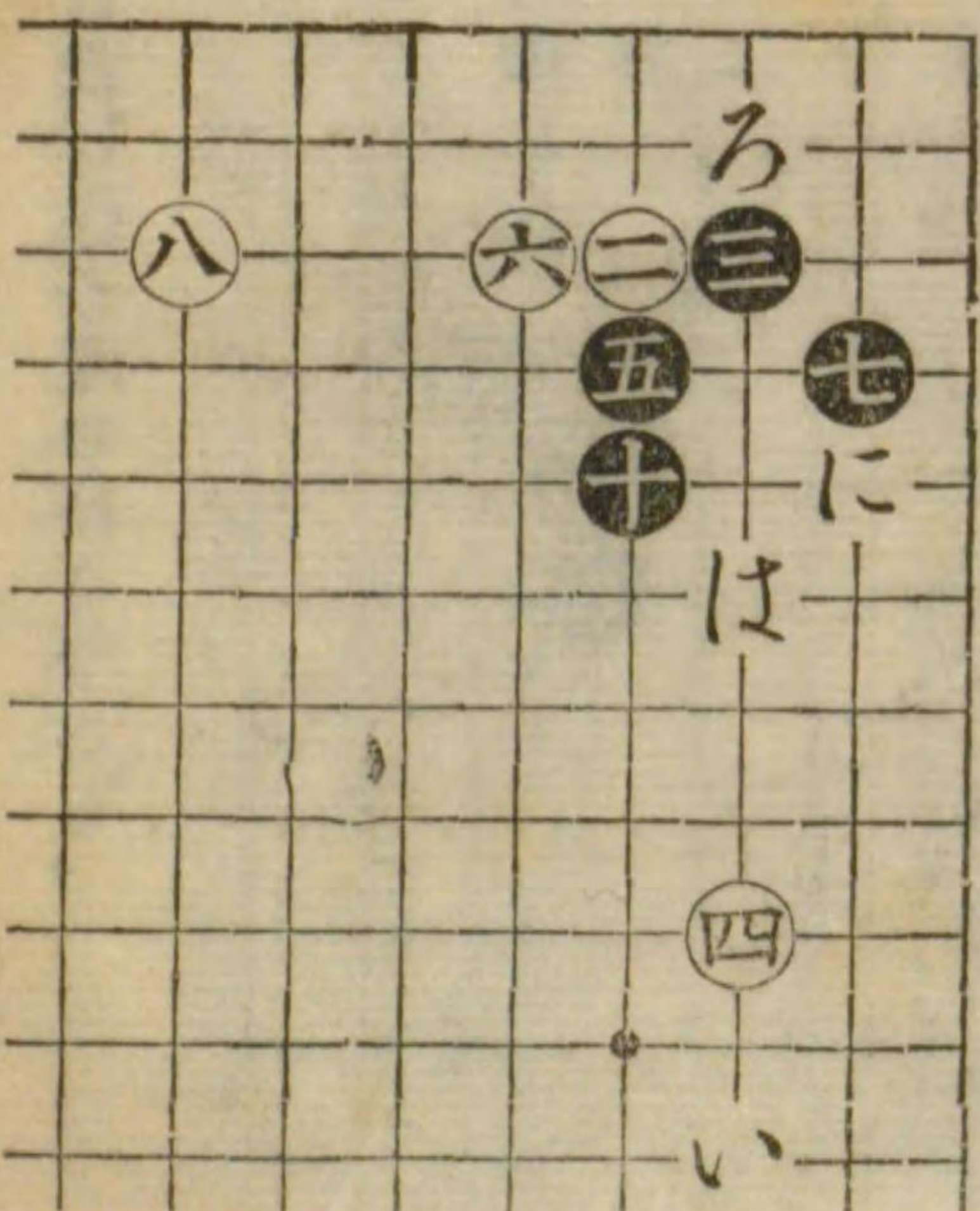
打てば黒の方勝である

○白四は布石上常用の手段なり (第百二十四圖)

○白四は轉換の一策にして常に此趣向を用ふるものである爾かして八までは通形とする斯くなつて其割合を見るに白は左右を打廻し軽くつて面白い尤此の四の手は全局の布石上打つのは勿論だが殊に下隅方面よりの權衡上來ることが多い黒は七までとなるが普通で別に致方がないも歩調少しくおくれるかの觀がある然し先づ己れを堅く守りおいて

後それを利用して償ふべきである直に一例を舉げば「い」に夾撃して敵を堅きに誘ふなどの趣向もある又黒七の良手なるを述べやう現に縮むが如きも後には今述べた如き利勢を含んで且眼形完全なり若し此手を「ろ」に下れば白より「は」或は「に」に來られて背面より攻撃を受ける假りに白四の手ない時は七とカケツグ事は考へものである其時こそ「ろ」に

圖四十二百第





下り白八に拆きたとき黒も四の處に展開する方利益であるこれ背後に敵子ないからである。

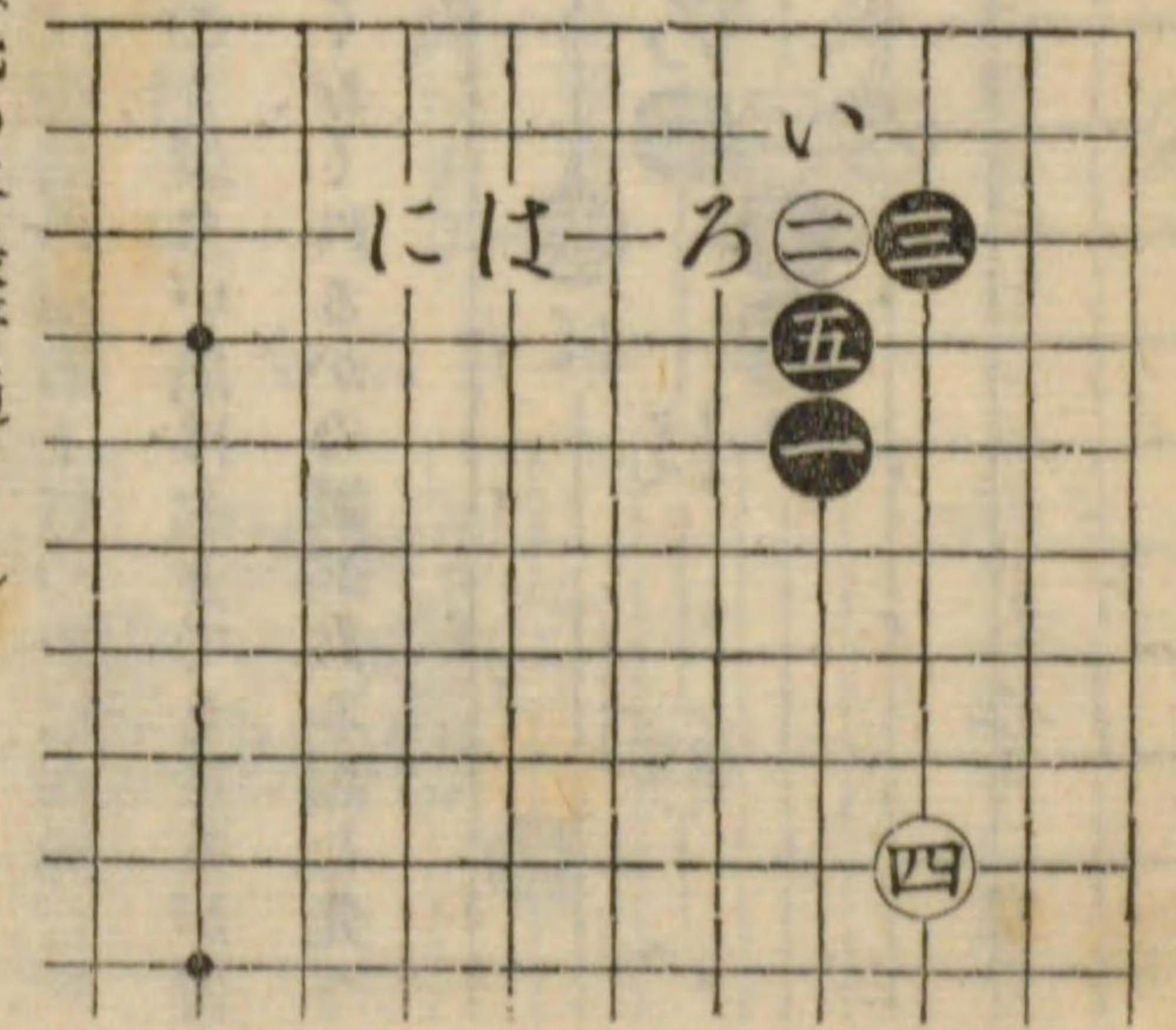
○白四に對する黒の應手は種々あり (第百二十五圖)

●黒五と突き當る手は極めて常用の應手で他には「い」に綽る手と「ろ」に頂ける手との二様がある而して此圖の如く五となりて白手を抜かば黒は「ろ」に一子を抱へ置くを最堅固なりとする其他には場合によつて「は」「に」の着點あるもこれは未だ二の一子を完全に切り切つたといはない白より「ろ」に引き出さるゝ事を豫期しなければ「い」「ろ」の打方等は次に詳説しやう。

●黒五は白を重くする手段なり (第百二十六圖)

●黒五と綽ねるのも一の趣向にして白を重くさせんとする意味があり即、通常の如く此手を七に突當らば第百二十四圖に示した型となつて白も治まる夫れ故黒之を嫌つて圖の様に打てば白の眼形は定らないで重き姿となる斯くして打つ方場合に因つて宜しいことがある之を見越して適當の場合に用ふるのて然し白に六の一子を利  
用さられて手段される缺點を伴ふは注意すべきことである又白が六と芻出す手を打たないで手抜きし

第百二十五圖

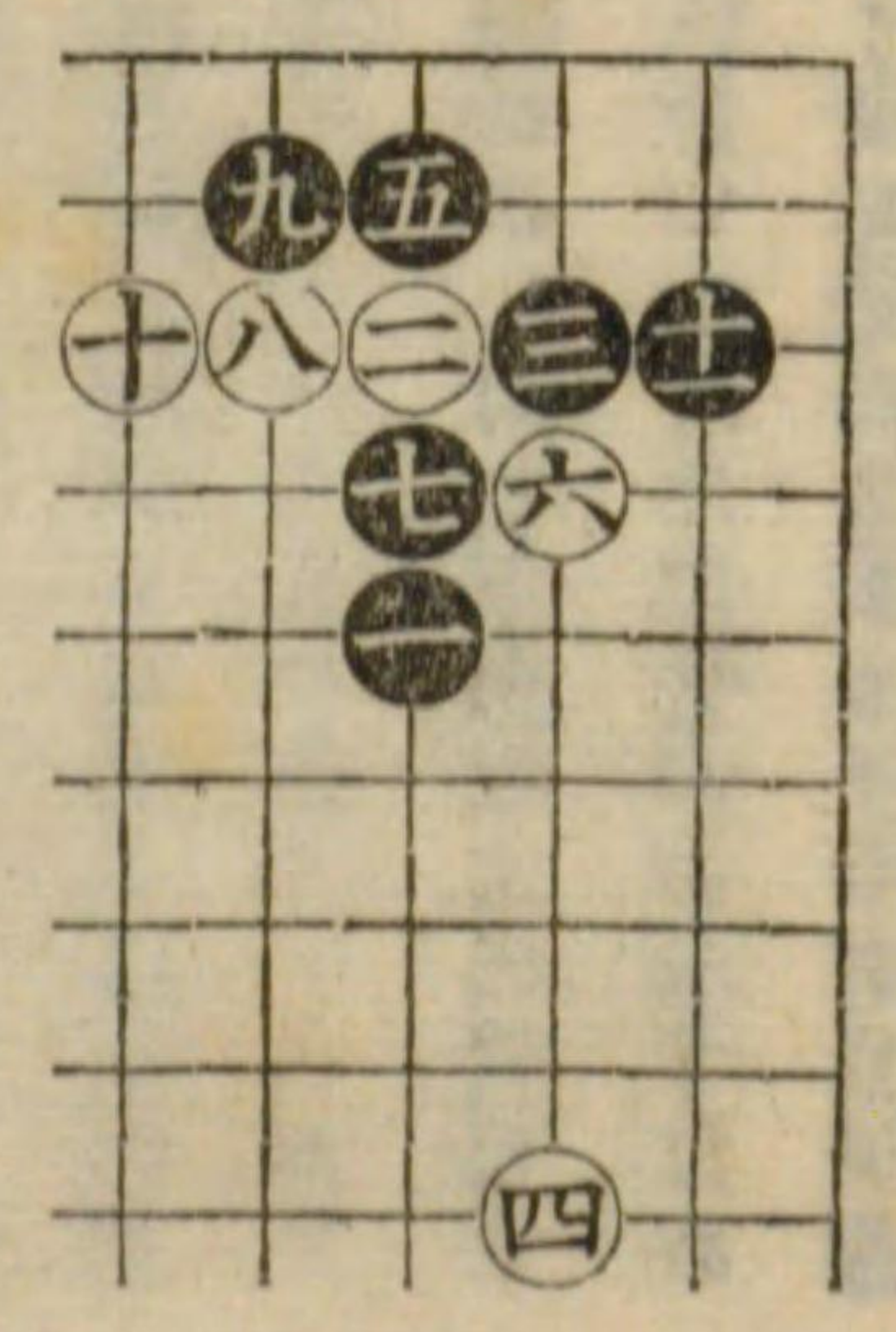


(此の手最普通なり)

て他に轉することがあるさすれば黒之を完全に切りきらうとする

には尙一手を八の處に要する而して其形を見よ黒が五及び八の處に手を費して二の一子を捕捉するが宜しいか或は七と八との處にある方が宜しいかといふにそれは無論七、八の二點に打ちある方後の患、殆なきともいふべきもので其の良き事は申すまでもなく分かるのであらう、して見れば白が二の一子を引き出すべき棋勢の時には此五の手は頗る面白けれど他に好所あつて二の一子を捨て、も白の差支ない時には此の芻は熟慮を要する次第で然る時は七に突當る方が無事といつてよい又白六の芻出をせずして單に八に引けば黒九、白十黒六の處に打つ姿勢となる。

第百二十六圖

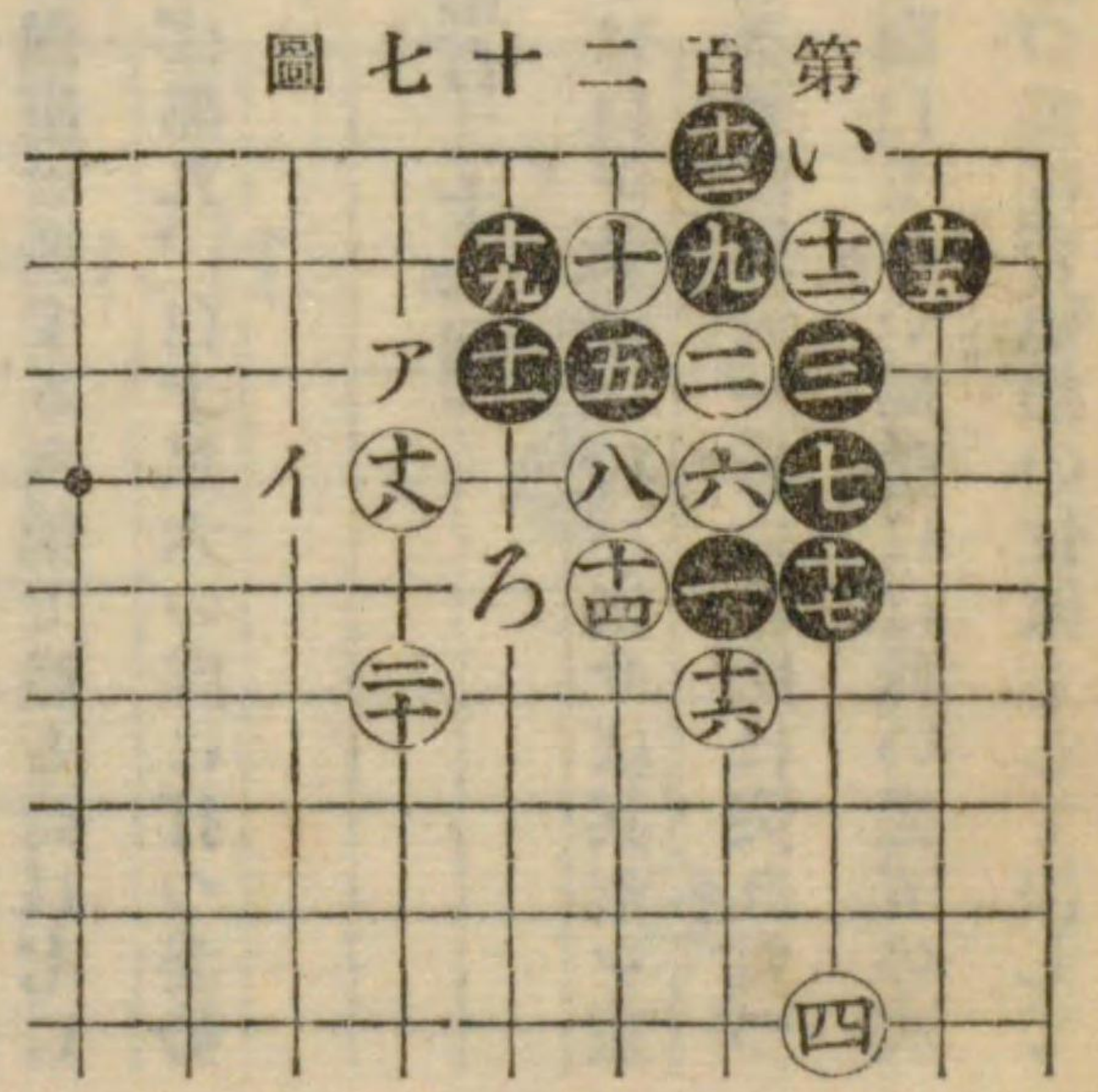


●黒五は白をして直ちに應接せしむる手段なり (第百二十六圖)

本圖は一の定石の如く打碁に見受るところの通形で黒五の夾みの手は白が斯様に行ひ出せば其形を重くさせて己れは隅に確定の地を占めて打たうとする趣向で白が手抜きせば黒尙一着六の處に突き當つて確に取りきる豫算の手である而して白が六と出で、此形となるも面白くない局勢には此の黒五の夾は既に前圖に示した六、九の兩手段に優るといつても然し此形となつては普通黒の位低くして決して



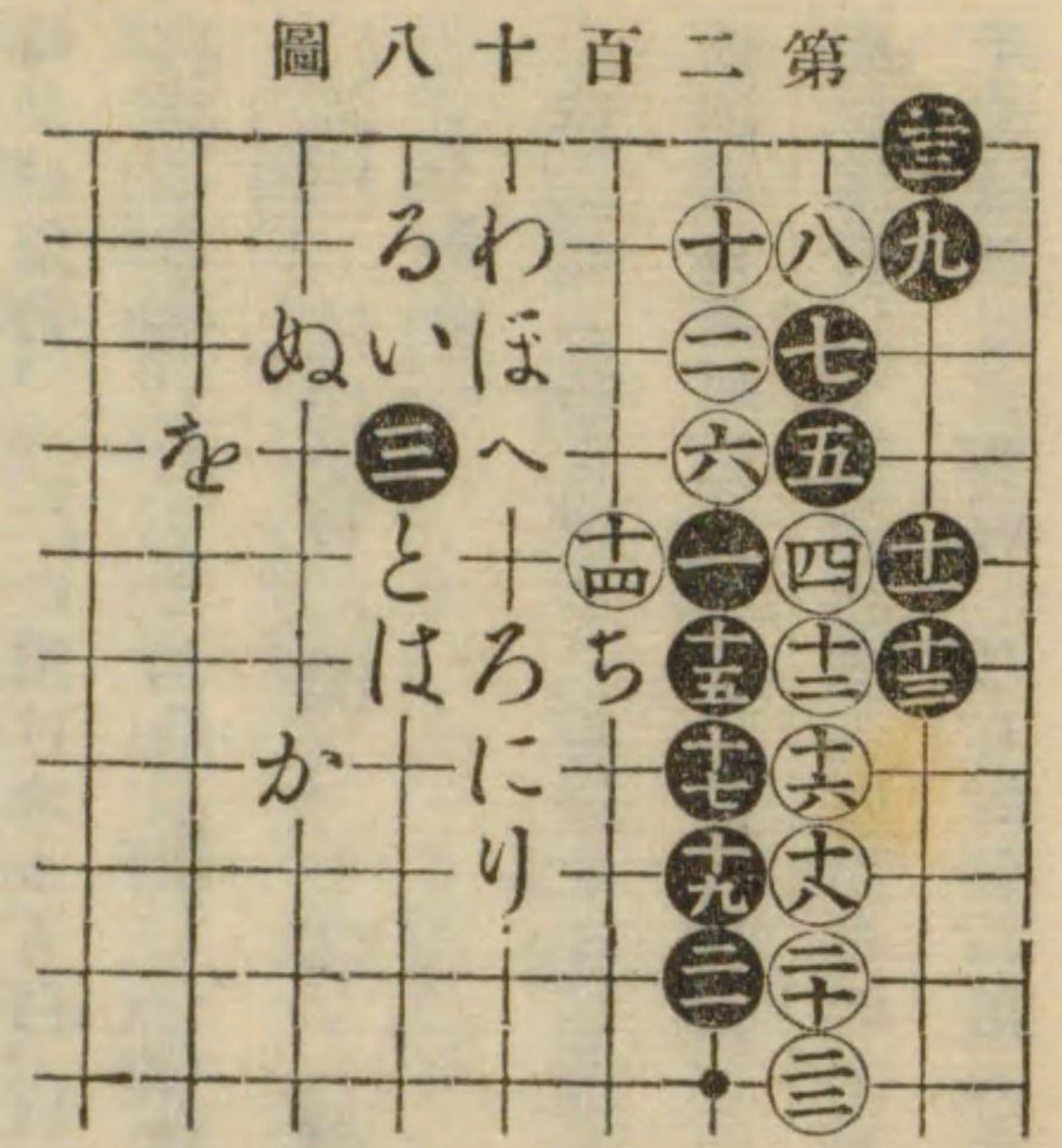
有利なりといふとは出来ない特に或る状態の外は白の勢中原に活働して局隅の損失を償つて餘りがあるれば五と夾むは善く這般の消息を豫測して打つべきものである。備其中の一に就いていへば白十四の手にて「い」に打てば黒より「ろ」に掛けられて假令隅の白は活きるとを得るも外部を黒に封鎖されて悪くなる又黒十三に一子を行び出す手で直ちに「ろ」に掛ける手段ないでもないこれは十三に行びをきかして後掛けるとは大に相違があつても又外部の状態によつては直に打つことないでもない故に白も十二と切る手はそれ等の事まで打算しおいて場谷によつては十二の手にて直ちに十四に曲る外はない黒十九の手は善い此手で「ア」に押すは却つて白に外勢を興ふることとなつて悪いから圖の如く曲がるに如くはない。



第百二十七圖

●黒二の大桂馬掛は漫りに打つべからず (第百二十八圖)  
 ●黒三と大桂馬に掛ける事は穩でないばかりか曩きに示した小桂馬に掛けるに比して白の二に對しても響き弱く且つ割合も面白くない結果となるので好んで打つべきでないこゝにはただ受方を示すために參考として掲げるのみ白四と頂けるは普通の應手で之に對し黒五、七の趣向不穩なれど外側より通

常に十二の處に約へては三の一子益々働かざる譯となるので斯くの如く勢ひ變化を試みるのである黒十三まで殆小桂馬掛と同形で白十四に至つては小桂馬の受方の



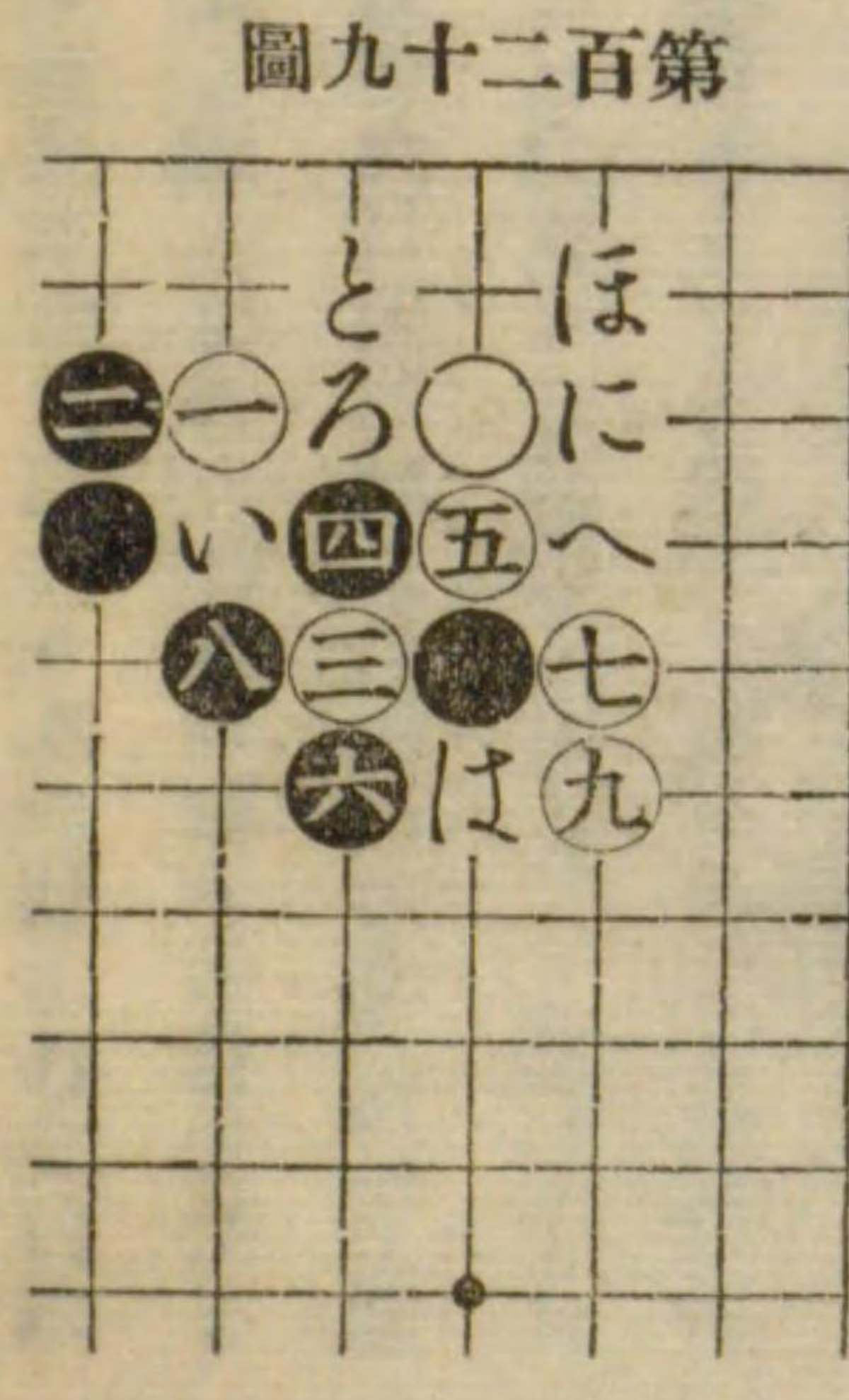
第百二十八圖

如くたゞ十六に行びるのは此場合面白くない這は黒より十四に引かれて「い」の處に打つことは出来ないのである因つて此際は十四と縛ねて次ぎに十六と出るのが順序である黒二三まで普通の應接にして此以後の打方は白「ろ」に尖むを宜しとする其時黒「は」に頂けて來たら白「に」に伸びカラミアヒて白は悪しくない又黒「は」に頂ける手で「ほ」に尖めば白「へ」にカケツギ黒「と」に行び白「ち」にツギ黒「り」

に飛び白「い」に切り黒「ぬ」白「る」黒「を」白「わ」黒「か」となるの一法もある何れにしても黒の方宜しくないし尙殘説あり。

○白一、三の趣向軽くして面白し (第百二十九圖)

本圖に於て前の殘説を述べやう今白簡單に此隅を捌かんとするに先、一と打ち而して三と頂げるのが宜しい黒四の手で若、六



第百二十九圖

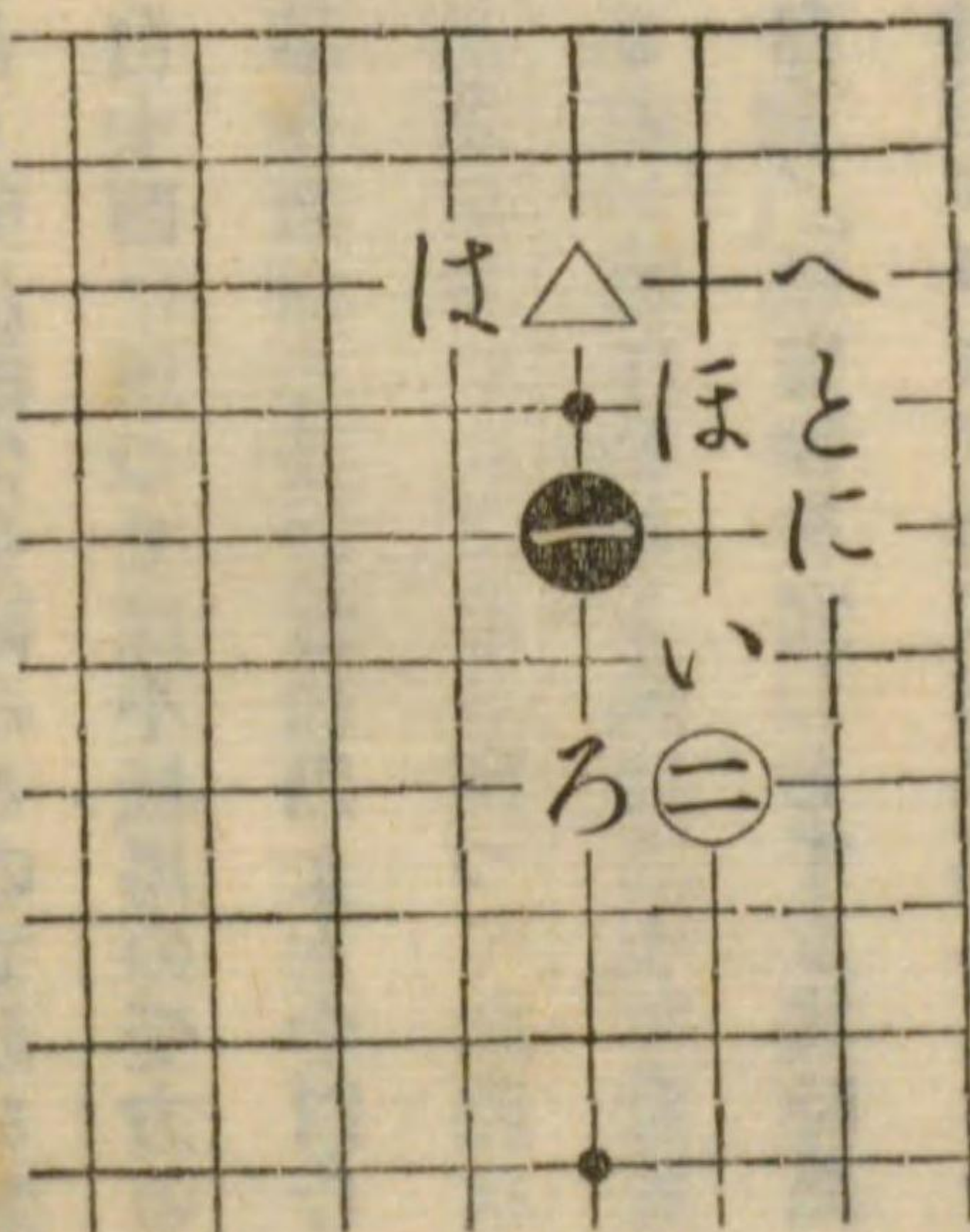


に縛なば白は八の處に行びて善い白五は直ちに「い」に出てはならぬ然る時は黒より八に切られて白六  
 黒「ろ」となつて白大悪となる故に白「い」に出つる手はない故に五に切り黒六の時圖の如く一目を捨て  
 九までの運びとなる方軽くつて割合も亦宜しい七の手で若、八の處に出れば黒「い」白七黒「は」とな  
 りて白重き形勢となるだけ譜に比べて悪い尙此大桂馬掛に對しては白直ちに應答しなくても善いそは  
 前にも述べた如く小桂馬掛よりは利目弱いので他に好處あれば手抜きしても決して悪くはない其時黒  
 時たけ頂若、「に」に頂け來るも白「ほ」黒「へ」白「黒」白「と」となつて姿勢整ふてあらう又黒「に」に  
 白尙手を抜いたとて割合上決して仔細はない。

○白二は場合に因つて斯く側面より打つこと  
 もあり

○白二は△印に懸るに普通なるは是迄屢々述べた如くである又  
 側面の釣合に因り殊更に斯く轉換して打つこともないではない  
 此一隅だけでは勿論損の打方なれどたゞ下方との關係上白二の  
 手が適切なる要所となる場合は用ふることかある之に對して黒  
 の受方は黒「い」にコスミツケ白「ろ」に伸び黒「は」に守備する

第百三十三圖

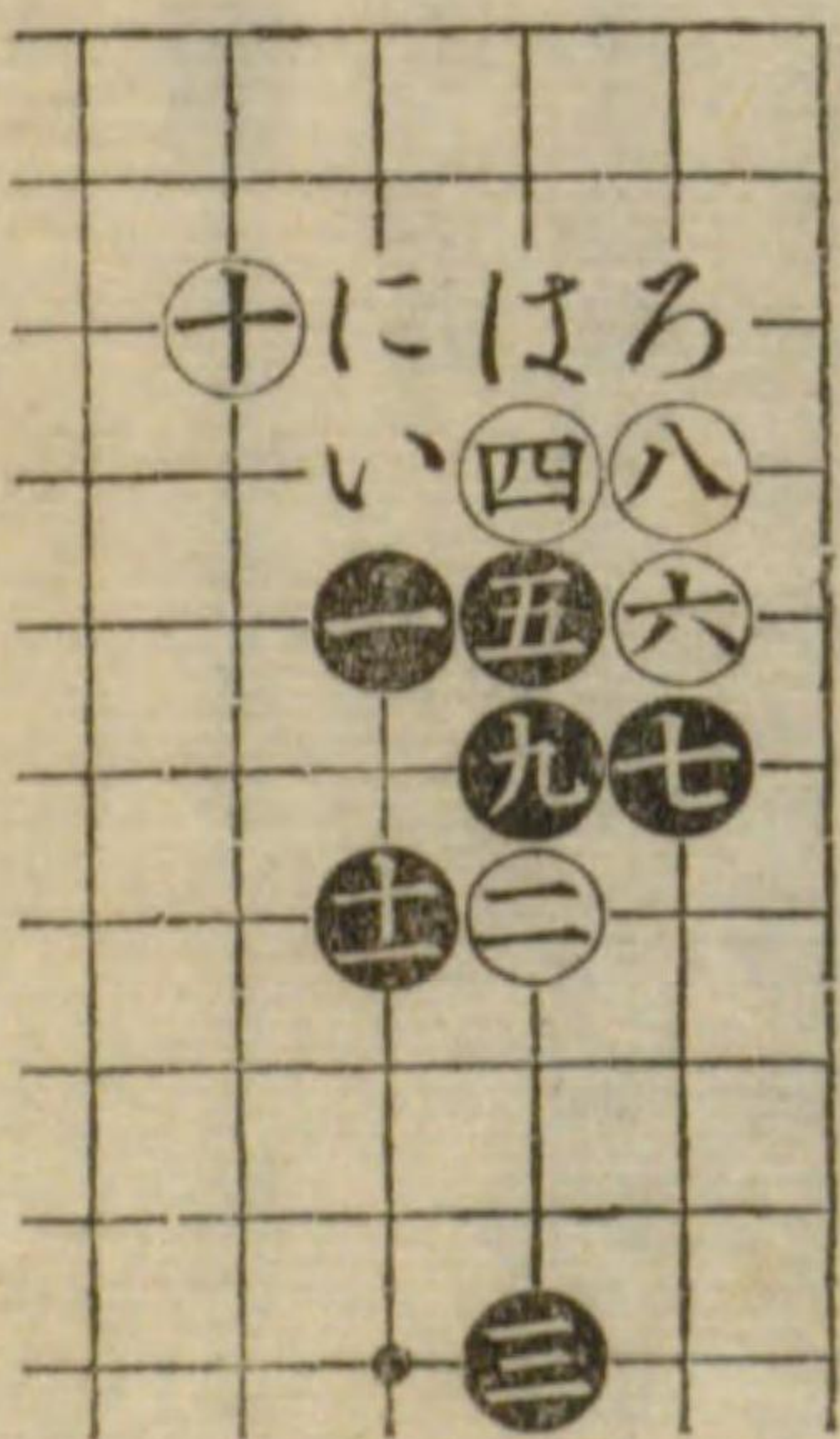


或は白をして「ろ」に立たせる事が其方面に不利を認る時は「い」のコスミツケをせずして單に「は」に打  
 つ事もある其時白「に」に打たば「ほ」若しくは「へ」に應ずる「ほ」に打ちて白「と」なれば黒「へ」と約へる  
 又黒最初「へ」に應じ白「は」に尖みなば黒△印に受ける説明初めに戻り白二の時黒「は」に應せずして△  
 印に締ることもないではない其時白「に」なれば黒「ほ」と受ける。

○白四と振替りの手段軽くて面白し (第百三十一圖)

●黒三は根據地ともいふべき隅を捨てて夾む手なれば通常の場合其悪しきは言ふまでもない下隅  
 との關係上特別の状態の時でなくてはならぬ之に對して白四と  
 打つは振替りの手段として軽く此處を捌き實利を得るを以て面  
 白い即、圖の如く十までとなつて黒十一に守りなば白は他に轉  
 すべきである單に地域の比較のみではこゝ双方略々互角ならん  
 も白の方先手なれば割合の善いのは明白である  
 何となれば黒が先着せる處なるにも拘らず以上の變化となつたのである尤、黒七の約へにて「い」に曲  
 る手段がある白は「ろ」にカケツギ黒「は」白八黒「に」となる之は圖に比して黒の不利はなだしくなると  
 も爾かも黒は隅地を失ひ同時に白をして多少の根據を作らしめた觀がある、さすれば最初三と夾んだ

第百三十一圖





手段も成功せざる次第なれば何れにしても黒三の手段は慎重に状態を査察した上に行ふべきものである。

### 高目の部補説

●黒七の趣向は好んで打つべきにあらず (第百三十二圖)

(附十一の手筋)

●黒七と曲げる事は普通なき手にして打碁にも餘り見かくる事少し人々の趣向にて斯く打つ場合も稀にはある其時は圖の如く十四までの運びとなる其中黒九と切つた時に白は黒七の曲げあるを以て十二に打つは宜しくない必、圖の如く十に續かなければならぬそれは若し十二に打てば黒より十の處に切られ白「い」に提つに時黒に「ろ」に抱へらるゝを以て黒七と白八の交換あるだけ普通の定石に比べては白の不利となるのである。

●黒十一の手は鼻ツケと稱して斯様な場合に多く用ふる手筋にして良手である之を十二に這へばいつまでも白に這はせられる又十三より押せば白に十一と行びられ黒は徒に上部を連行するのみで得るところがない反之白は實利を占めるを以て黒の損なるは明である故に此鼻ツケの手筋がある白若、十

三に出れば黒十二に盤つて白を兩断せば白は首尾とも救ふに違なくて損の結果を見るであらうされれば十二と下に曲がるのは不得已次第である白十四の切は宜しい斯かる處は截りて戦はなければならぬ此際若、切らないで「は」に這へば黒より「に」にノビられて白低くなつて黒に形勢を得られる斯く切らば隅の白は既に安全なるに黒石は重く他方十一の黒は孤弱にして白の截、大に働をなす此先き黒如何に此處を捌くかといふに△印に一間飛ぶは往々打碁に見るところだが「は」に押し白を「い」に提らして後△印に打つも手順上同理であるさすれば白は「は」に伸びとなり黒は五子の方面を掩護する策に出る儲其割合は白は兎に角一隅を治めたるに黒は外部に二個の重き石を生じたる譯にして紛れ易き傾向なるを以て決して宜しいといふを得ない故に鼻ツケの手筋あるも黒七と曲る趣向は其場合を見計らつて打つべきもので妄りにすべきものではない。

注意 本圖は第百二十二圖に出せしものなれば重複すれども参考のため補説せしなり

### ○白四の手段は概、悪しと知るべし

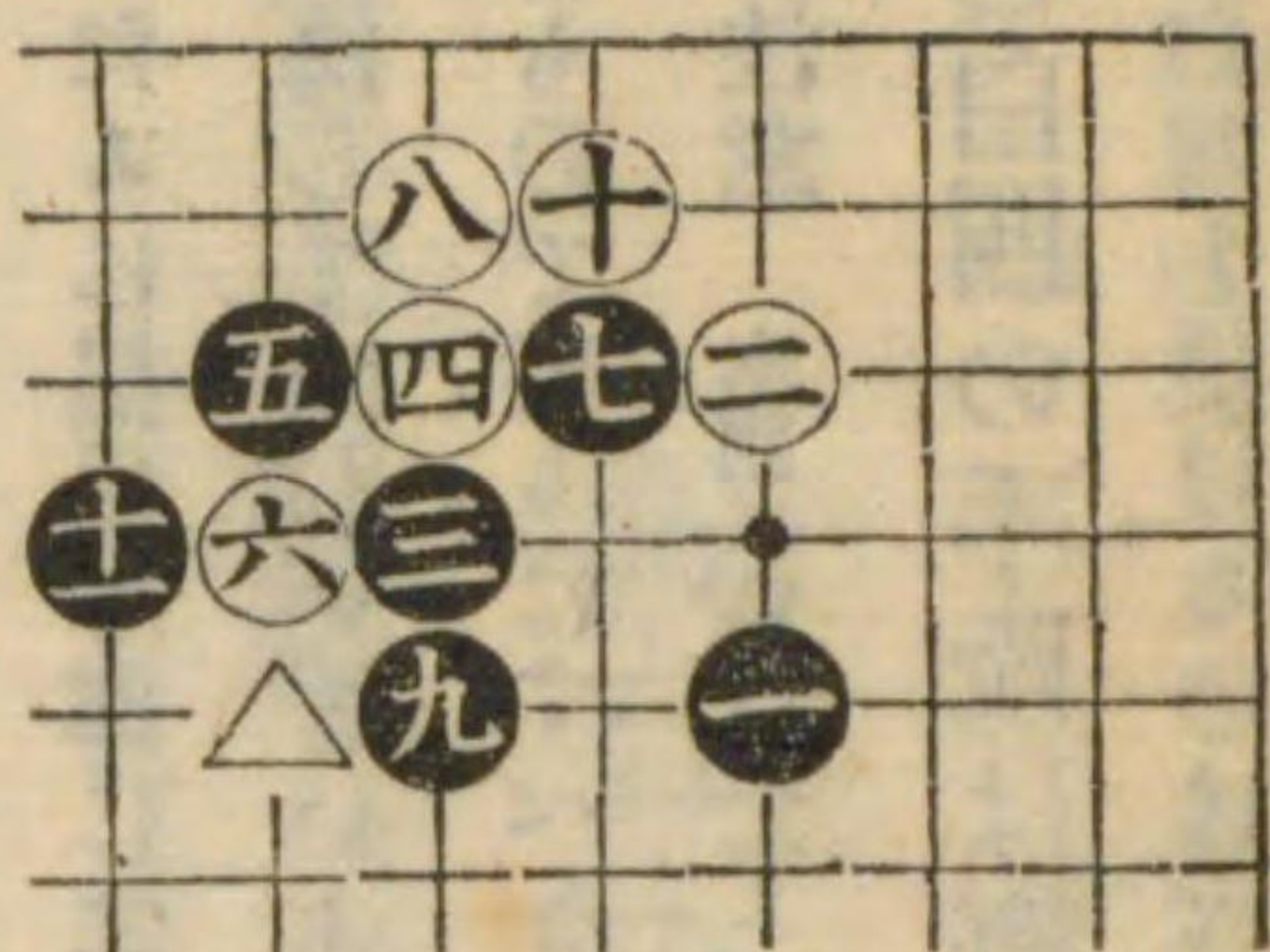
○白四と頂けるのは大抵の場合面白くないそは既に此手段に出たる二三の型をも示しおいたが何れも



第百三十二圖



圖三十三百第

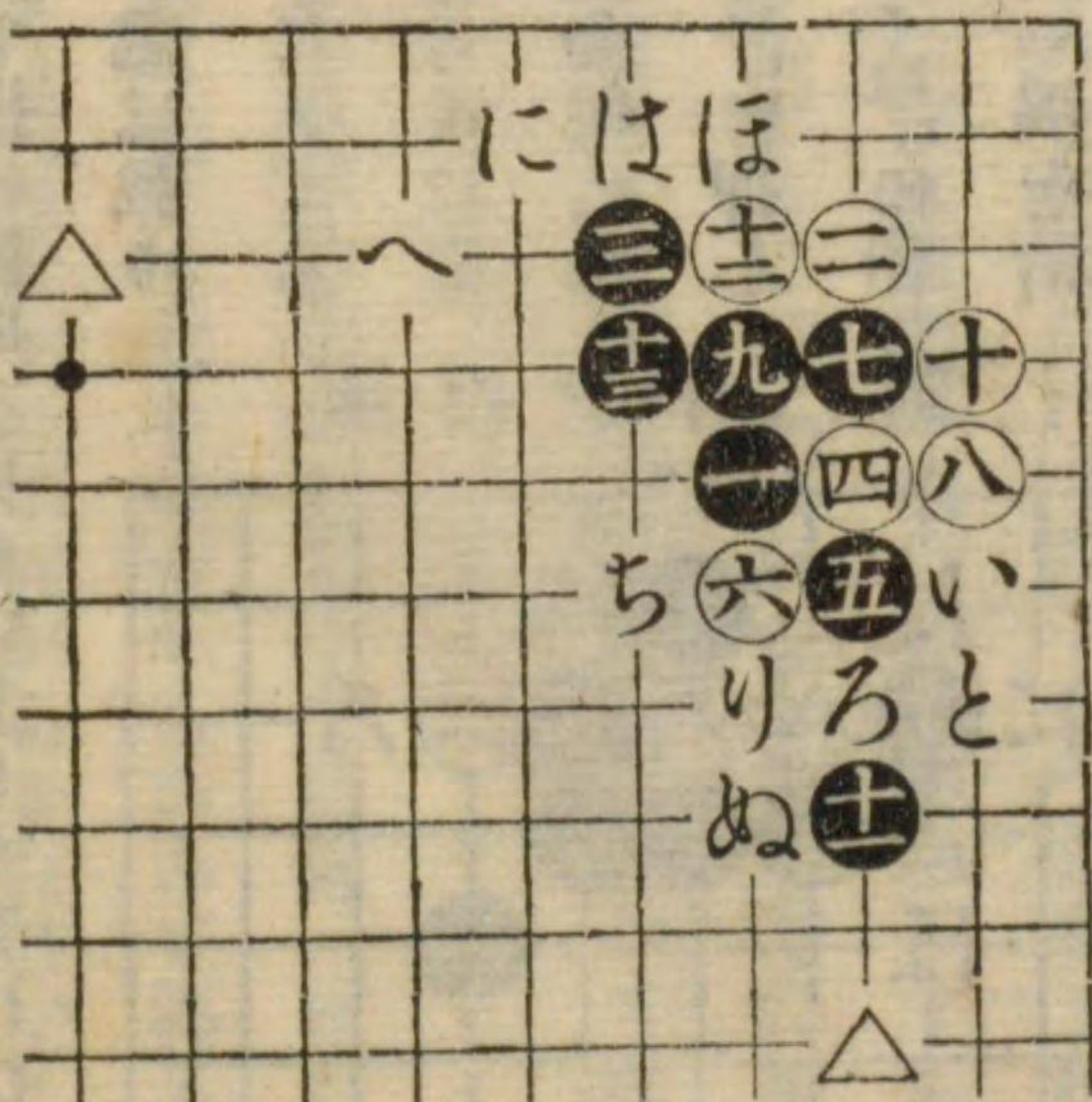


白の不利に歸した十一までの成行きは矢張位低くして白宜しくない此形に於ては黒△印に提ることを忘れてはならぬ譬、白か征のアタリを打たないにせよ此の提りは十分一手の働あれば間を見て提りおくは必要の事である萬一白より△印に出でられるが如きことあつては論外の失策といふべきである前に掲げたことあれば参照すべし。

●黒十一の飛びは軽くして面白し (第百三十四圖)

○白二、四と打つ趣向通常位低くて悪い之は或場合即ち△印の邊に黒あるが如き時普通に白十二と打ちては面白くないと認めたによつて二と打つたものである●黒三は普通である白四の手は八の處に打つこともあれど(前掲)四とツケ六と切ることもある手順は圖の如く運ぶが善い其中十一の手軽くして宜し之れを「い」に約へるか又は「ろ」に行ひるは共に悪い假に黒「い」に約へたとすれば白十二にアテ黒十三の時白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」の手順を了し而して白「ろ」に縛ね黒「と」に出でなば白十一

圖四十三百第





八白「へ」となる形は既に第一百七七圖に示したものと同型位置異なれども理合は同じ白悪るければ此手は打つまじき事である●黒九の手は「ろ」に行びて打つ場合によつては打つことないでもないが圖の如くして先手をとる場合が多い。

●黒十一とツケ次に十三と打つておく事は心得べきことである此十三なくて單に十五に引けば白は手抜きして△印に打つなど普通である然る後黒十三にオケば今度は白「と」にツギ黒十四白「ち」黒「り」白「ぬ」と盤りとなるので十一とツケヒキたる效力格別なる収益はない而して黒十三と一應打つておけば白十六を手抜きすれば「と」に切り白「ち」の時「る」に打つ利益残り且つ白の活形を奪ふ意味を含むもので前述の結果と大に異なる又白十四の手にて「と」にツガば黒十四の處に切り白「ち」黒「り」白「ぬ」となつて黒は十五には打たないで之を省略して他に轉ずることゝなる結果先手にて白を低くした利得がある故に十三とオク手順は必要である。

●黒四の手は通常用ひぬ手なり (第三百三十六圖)

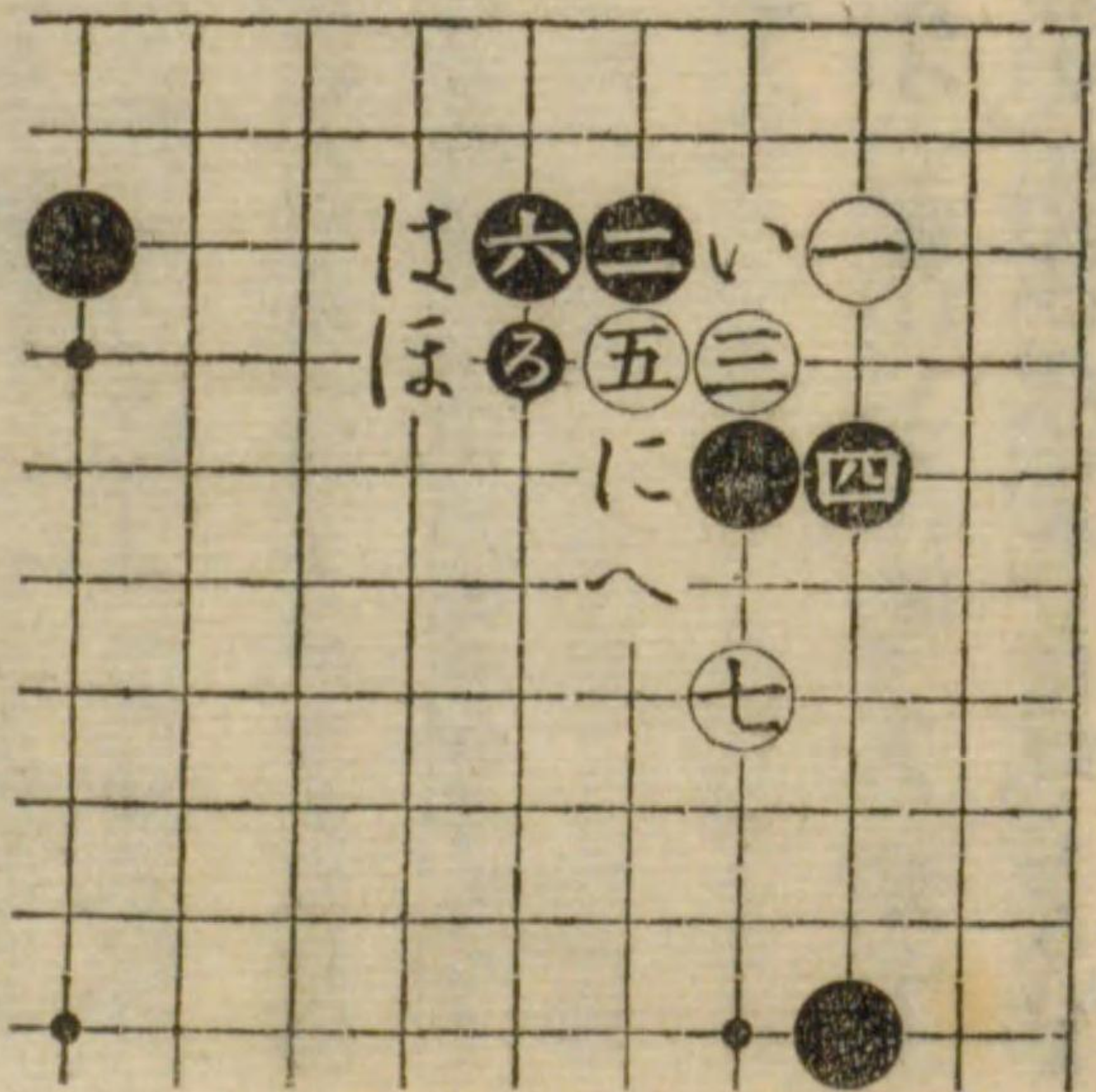
○白一は前にも述べておいた通り本圖の如く兩目下に黒ある時は普通に「い」に懸(入るとも云ふ)りては面白くないので斯かる時にこそ三ノ三に打つ場合である●黒二の應手普通である○白三に對し黒四の下りは敵の趣向を挫くつもりで打つた手だが白より五と突き出されるのは容易ならぬ事で到底穩良

る手段とはいひ難い特別の碁勢でなければ打てぬ手である○白七の手は手筋にして且黒を試みた面白い手である之を通常の如く「ろ」に押せば黒「は」に引く又白「ろ」に押さないで「に」に曲がれば黒七に備ひて何れも敵を安心させるのみで紛れを起すまでには至らぬであらう然るを圖の如く七に打てば如何其時黒「に」に押せば白「ろ」黒「は」の引きとならば白又「ほ」に連押し打たば兎に角七の一子が黒に妨げとなつて同じく上部に出るとしても斯様に打つを働きとはする此形に於て黒の應手としては「へ」に尖み位であらう之を要するに黒四の下りは良手といふことは出來ない。

●黒九の切は熟慮を要す (第三百三十六圖)

○白五と二段劬ねたる時黒六とツグは穩であるそれを八に切れば白十二の處に粘ぎ黒「い」に抱へ白六の處に切り黒「ろ」に粘いだ時白九に頂越して打てば黒の方悪くなる故に八に切る手はない又黒六の手にて十二に勿込まば白八の處に粘ぎ黒十一、白七、黒十五、白九黒「は」となりし時白には種々の趣向もあらうが先づ「に」に行ひ黒「ほ」なれば白十に約へて打つ黒「に」白「へ」黒「と」となつた後六の處に

第三百六十六圖





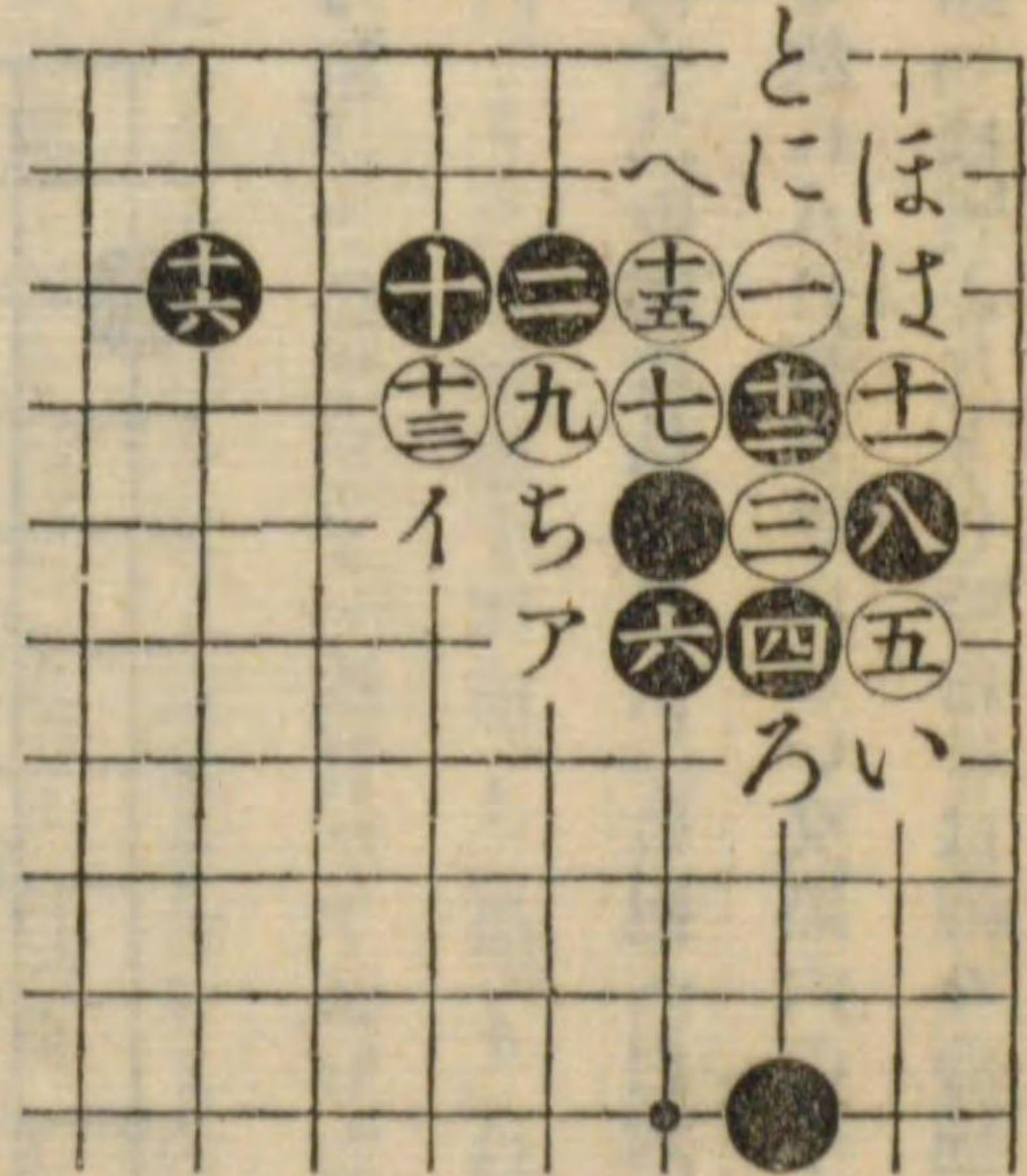
切つて打つか又は單に十三に續くかは其時の碁勢に因る尤以上の手順の中黒「ほ」に打つ手にて十三に縛ね白「ち」黒六と粘ぎ白「ほ」に打たば黒「ア」「イ」の何れにか白の三子を征する時には黒「ほ」の手にて斯く打つ事となつて白悪るければ白は「に」に下る時それらのことを豫測して思考しなければならぬ以上の如く黒十二に勿込んで紛れ多く白に趣向の餘地を與ふることゝなるので餘程の考へものである故に六と續くは最無難である●黒八の手にて九に受ければ白「い」に行ひ百三十五圖の形と同じくして無事である然るに圖の如き十六までの成行は多少白を攻める趣向なれど中央に出でられたるだけ局面廣くなつただけの得失あるので全局より打算しなければならぬ單に一局部にては善惡を評することは出来ない但し、黒としては好んで白を出すべきものでない。

●黒二の手は参考に示せしのみ

(第百三十八圖)

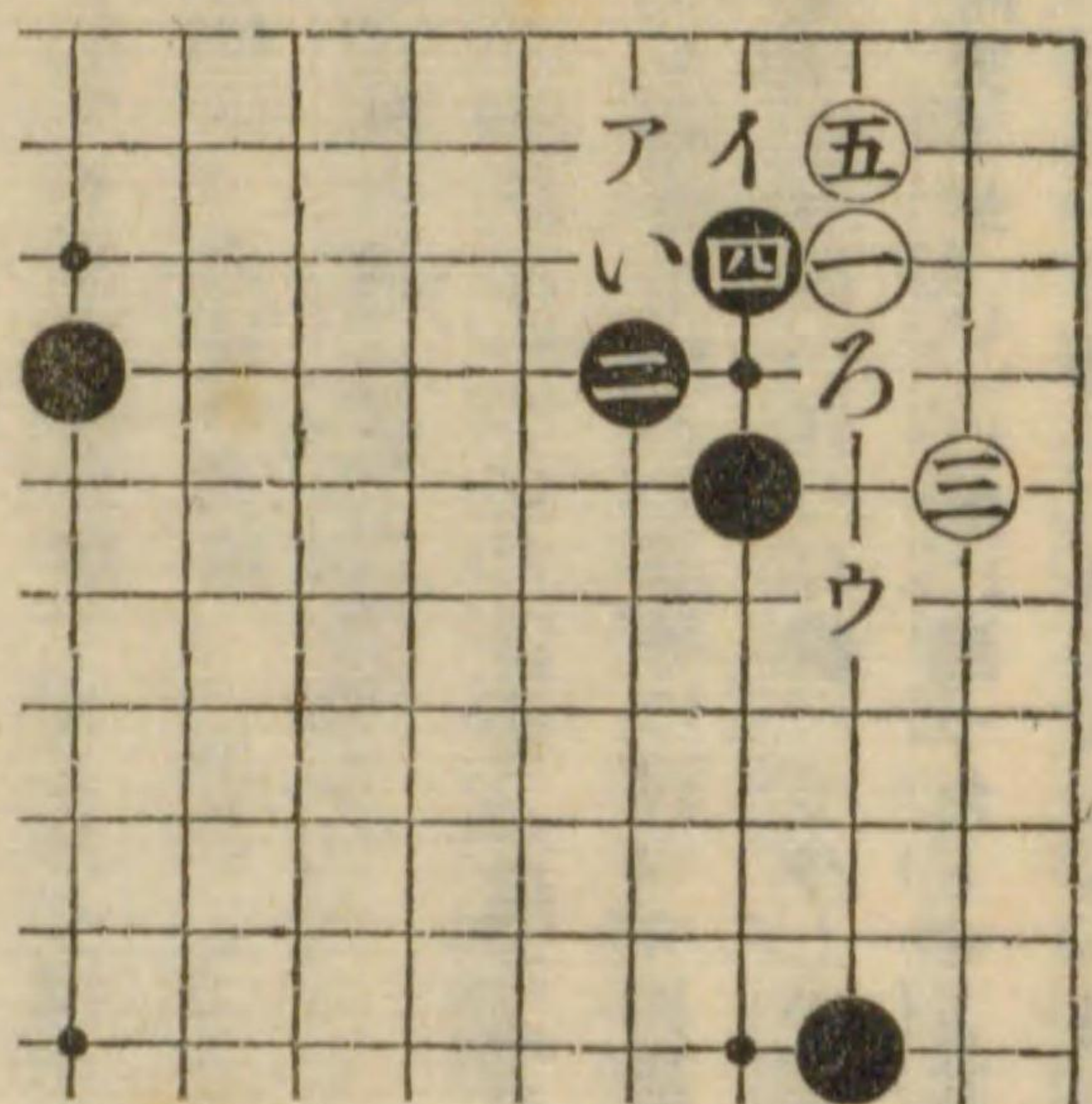
●黒二の尖みは時として見受けることあれど歩調何となく澁滯の姿あつて面白くない即、「ア」又は三の何れにても隨意に白より打たれるわけで宜しくないので矢張「い」か又は既に前に示した如く「ろ」よ

第百三十七圖



粘

第百三十八圖



り尖みツクル手段即、當方より白の打方を限定するを得策とする然るに圖の如く二と打ちては白の撰擇に任せる次第なれば此手は不可なりといふべきである○白三の手は「ア」に斜走するも勿論悪くはないが目下に石ある方へ三と打つ方其目下の石の働きを鈍からしめる理を伴ふので此場合には宜しい尤左方の星下に黒あれば「ア」にても同様の理なれば參酌すべきであるし●黒四は尖みツケて「ア」の斜走を凌ぐ理にして先手である之に對しては白は五と下る外はない若、四の手を「イ」に打てば白「ウ」に

●黒二は一手段なれど安りに用ふべからず(第百三十九圖)

●黒二と頂けるも一手段なれど良手ではない之に對し白三の頂は軽くして面白い手とある●黒四は斯く續く外はない強ひて五の處に下らば白四の處に勿込むのである其時黒「い」より切らば

第百三十九圖





白「ろ」にツギ黒十白「は」黒八に提れば白「に」に一子を征にかけて十分割合は善くとも或ひは「に」に征する手にて尙ほ強く「ほ」にアテ劫争するも始めのうちなれば黒に劫代りなくて白に利があらうされば黒劫を争はずして之を粘ぐとせば白「に」にカケて征に一子を取りて大に佳い又黒「い」よりしないで「ろ」より切れば白「い」に粘ぎ黒「へ」白「と」黒六白「に」となつて是亦黒の大損である故に黒は最初四の手で五の處に下る手はない倍黒六と切り十までの代りは普通であらう尤も此六の手で八より切れば白は「ち」黒六白「り」黒「へ」白「ぬ」と振替るわけで斯くの如く内外何れに振替つても黒の隨意なれど何れにしても黒の割合損である之を要するに黒二と打つた結果斯くの如くなつたとすれば其二の手は宜しくない。大目の部終 「注意」 第四百十圖以下は標題を省けり

第四百十圖(目外の説明)

一の處が目外で双方(目外の處は小目、大目と同じく二ヶ所ある)何れを打つても同型なれども碁勢に因つて其是非は大に差異があることもある目外に打つのは小目に打つに較べて少し平穩ならざる傾がある例ば一と目外に打つた時對手が「い」の處に懸つたとせよ其位置主位と客位の差がある即、小目に打つておけば敵より懸られても小目が主位となつて敵が客位となる然るに目外に打つて敵より「い」の處

第四百十圖

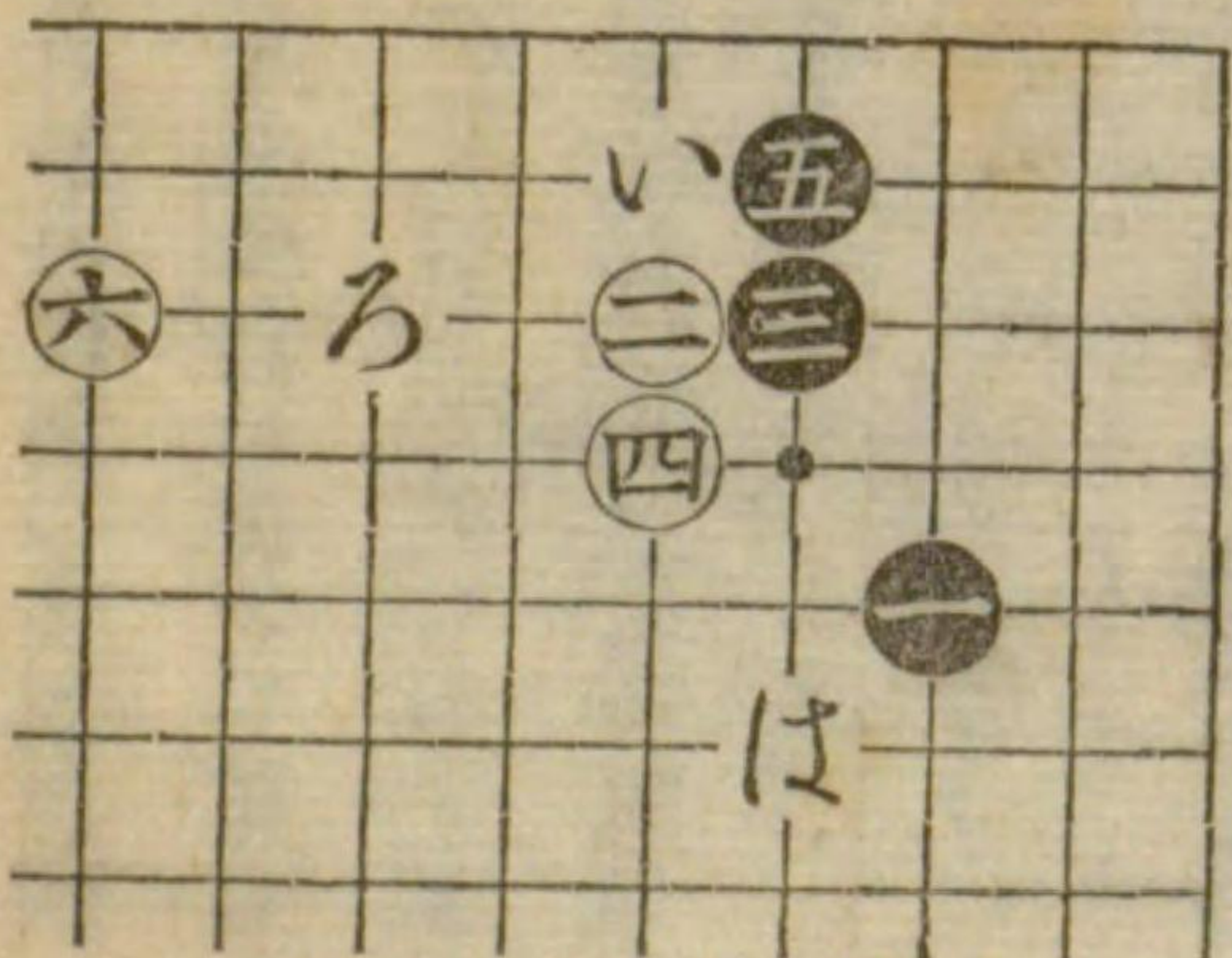


に打たれては「い」の方主となる換言すれば敵が小目にある處に己れより懸りたるやうな状態となる故に一隅に就てのみ之を言へば小目に打つのが着實穩當である以上は目外の缺點を挙げたものだが今其適處を擧げるなら小目に打つては碁勢位低くなつて打ちにくくなる場合或は敵が他の權衡上位低くなつて小目に懸るを不利とする時の外白を持つた際敵が小目に來たら之に向つて趣向を施さうとする場合は往々用ふるものである此理如何となれば小目に打つて敵より懸られたるよりも目外に打ちて敵に懸らした方手段を施す餘地が多いからで以上の如く用法に於て大に得失ある手なれば能く々々場合を見計つて打つべきことである又此目外に對して懸る法としては單に「い」の處のみでなく碁勢によつては「ろ」の處より懸つて敵の手段を避くることもある以下序に順ひ圖に就きて詳説しやう。

第四百十一圖 ● 黒一の目外に對し場合によつて白二と高く懸ることは只今

述べた通り ● 黒三より六まで通形とする斯くなれば黒は隅に確實なる地を有すれども之に反して白は側面に較々地域を定めた位で到底確定したる黒一の勢に比すべきでない然れども最初白二と打つ時に三の小目に入れば位低くなるか或は其他の不利ある場合なるがため二と高く懸つたとて此隅に

第四百十一圖

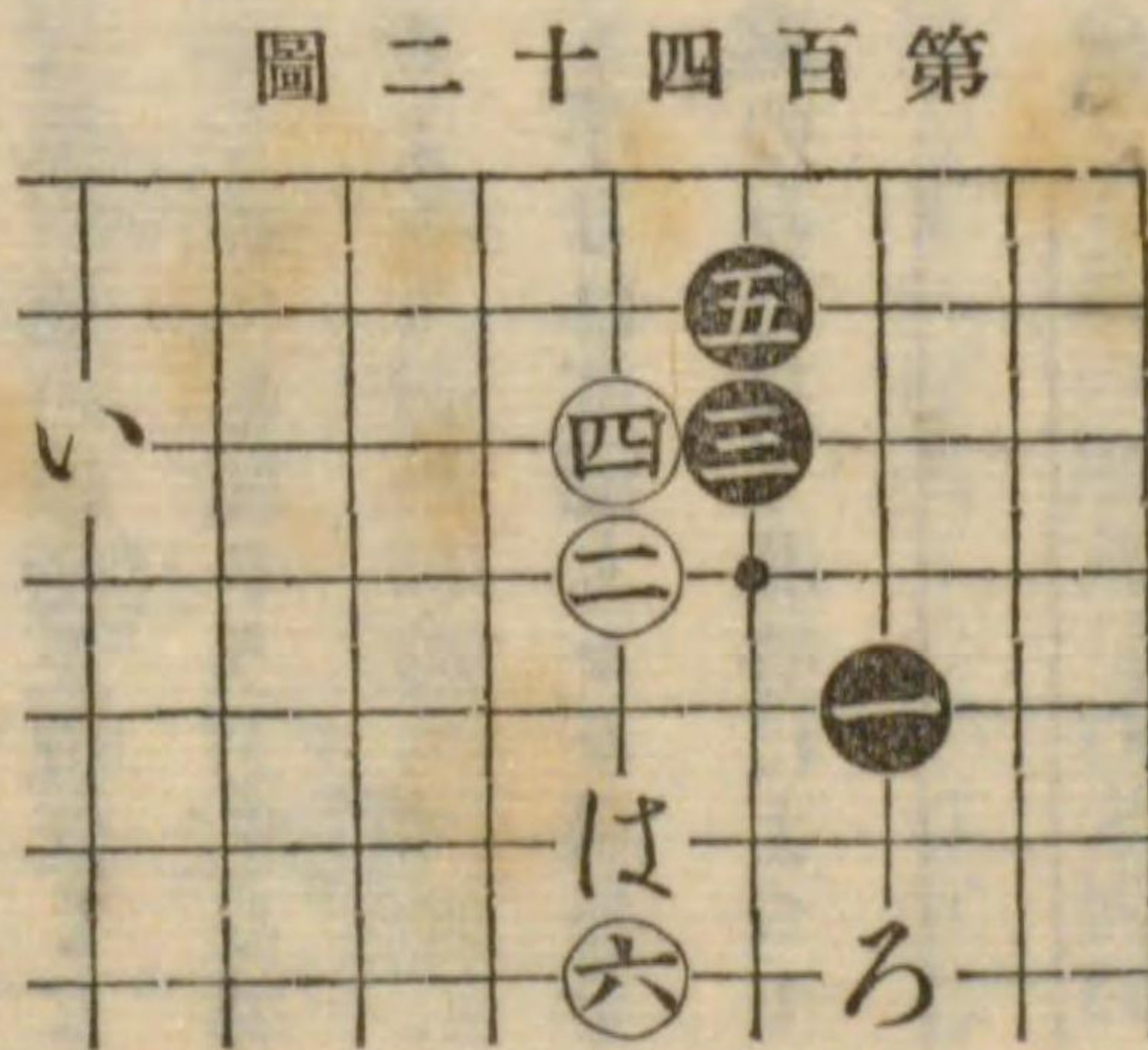




就ては白幾分の損を免れないけれども黒の趣向を挫いたと一方六と展開した、め左方に向つて多少便益となつたことがあれば之を以て隅の損失を償ふの意志あつて手段すべきである。此白の拆いた處は「い」と打たなければ未、完備しない若、黒より直ちに「い」に曲り來たらば白「ろ」に受けて可なれど或は手抜きする事もある故に黒も最初より「い」に曲るは宜しくない「は」に尖むのを大勢上利得とする尙殘説あり次圖に説かう。

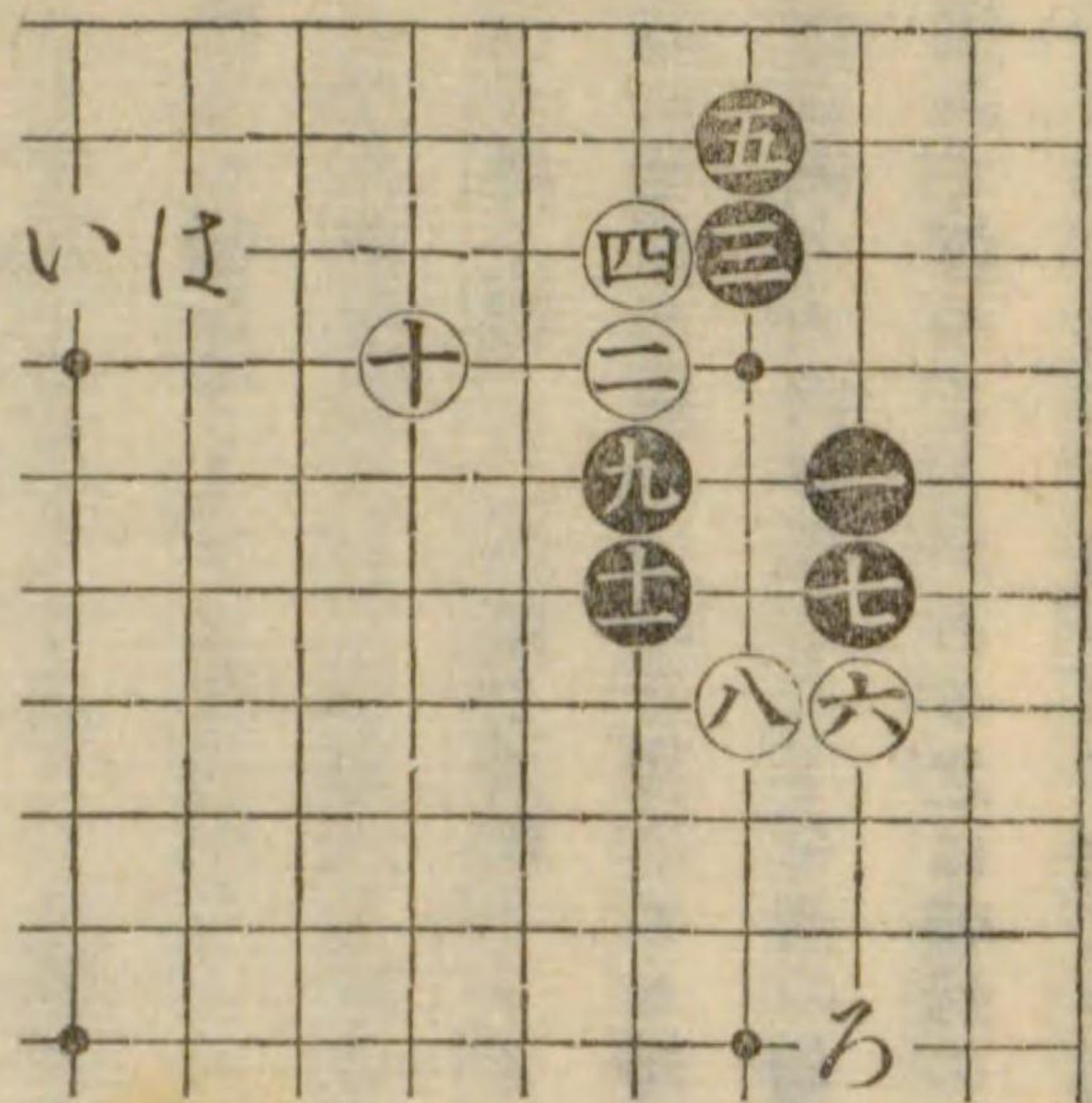
第百四十二圖○白六は二間に飛ぶこともあるこれは普通の手ではない場合に因りて往々用ふるのである其故は前圖の如く「い」に拆いて黒に手抜きされて他の好所に先着せらるゝを嫌ふ時か或は左上隅方面に味方の配置低くなつてゐる場合に通法の如く「い」と拆いては其「い」と隅の配置とが重複して益々低位となる時などに斯くの如く六と試るので之に對し黒は「ろ」に應ずることもある或は他に轉ずることがある其何れを選むべきかは單に此處のみにては斷ずることは出来ない。

第百四十三圖○白六と背面より來ることがある之に對して黒七以下十一までの運びとなるを穩當とする斯くなれば白は左右に薄弱なる石あれば決して働きたる打ち廻しといふことは出来ない即、白「い」



第百四十二圖

第百四十四圖



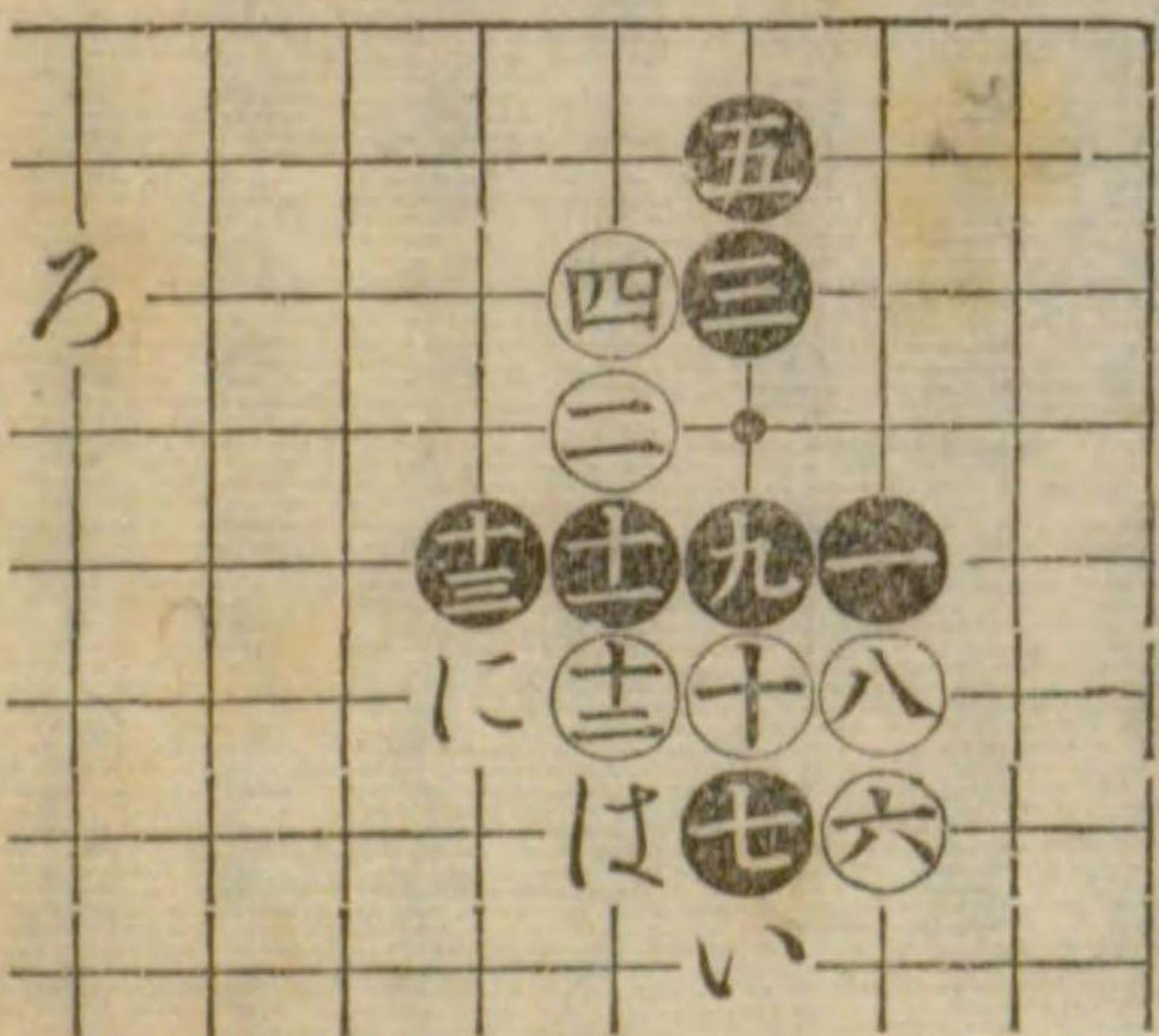
なれば黒「ろ」より攻撃し又白「ろ」なれば黒「は」に迫る然かも此隅の黒は確實なる相當の地積を保持するばかりか外部に向つて發展の路を有し如何にも其形勢整然たるものがある。

第百四十四圖●黒七と頂ける趣向もある其時白八に來らば黒九と運び以下十三までの運びとなつて此隅に於ては確實なるだけ黒の方割合が善い尤白八以下の手段は下方に向ひ此のアツミ(厚壯の勢の俗語)を利用して何等か計畫する基勢でなければならぬ漫りに八と打は損である若

普通の場合とすれば白は此八の手で「い」に縛ね黒十に引けば轉じて「ろ」に備ふべきである●黒七の手も圖の如くなつて不利と認る時は單に十の處に尖み白七に押さば黒十二白「は」黒「に」となる打方がある。

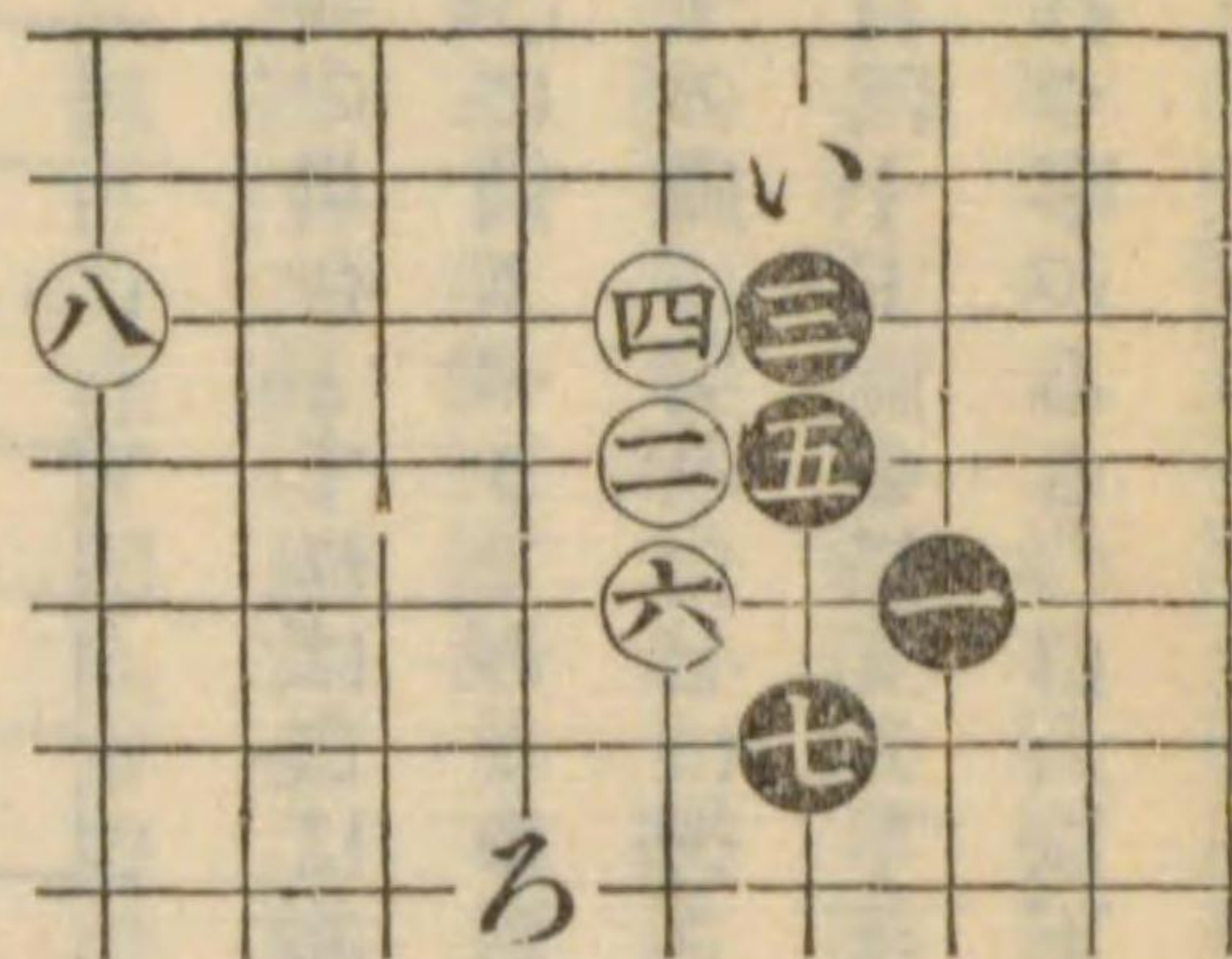
第百四十五圖●黒五の手は前示の如く「い」に下らずして斯く星に沿つて打つ事がある○白六以下八まで通形である此黒五の手は如何なる趣向にて打つかといふに前圖の如く「い」に下つては白幾分其形輕けれ

第百四十四圖



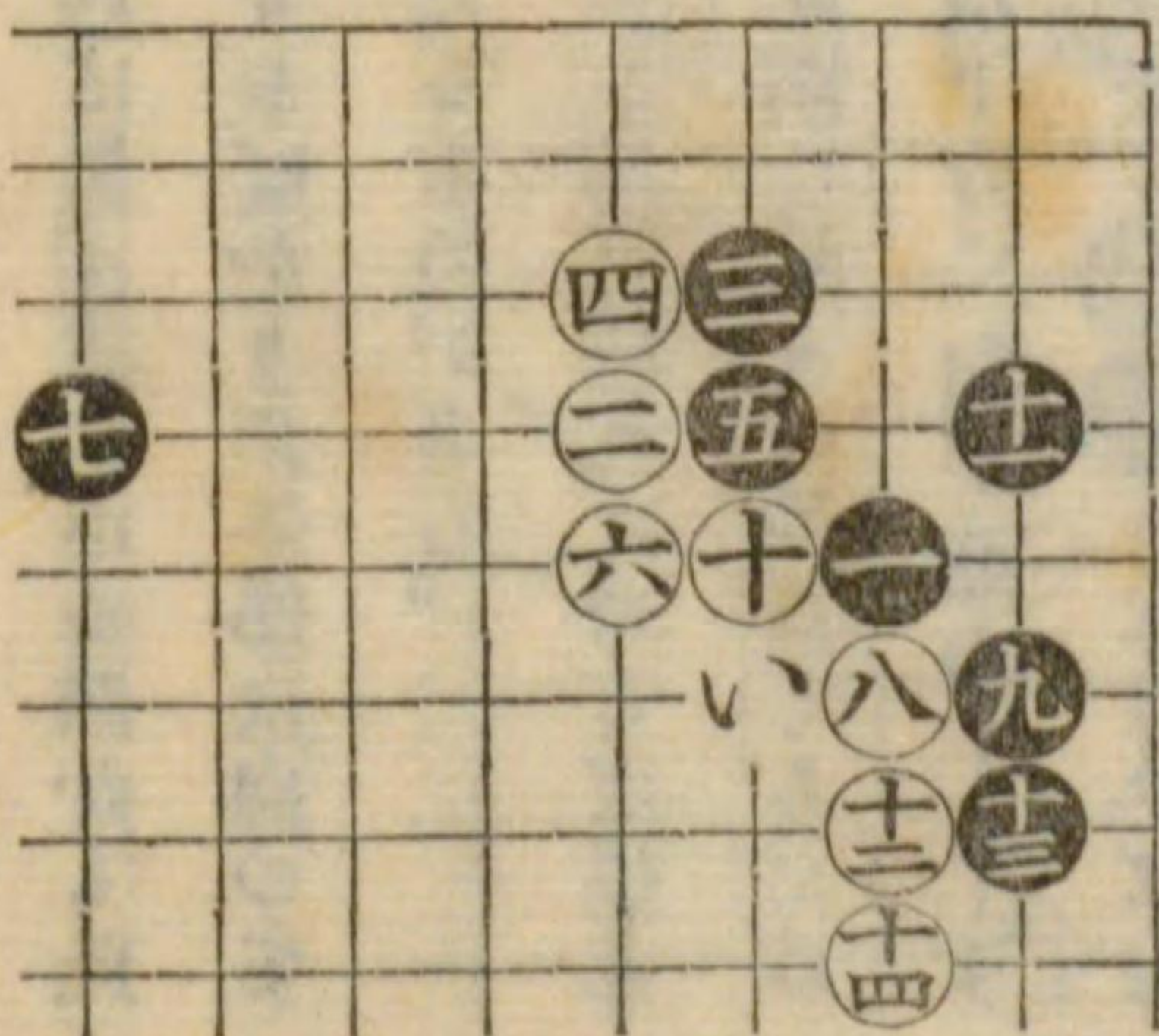


第百四十五圖



に於ても働ありとする故に此八「ろ」の何れを遊ぶかは場合に因つての事と知れ尙附記しておくは白八と拆いたとして彼我の配石此處に定り其後の碁勢上尙「ろ」の處を要點とする事もあるそは此處に着手したる方自己の地積を廣めて敵を狭ばめる譯ともなれば尙先鞭を争ふの要がある第百四十六圖●黒七の手を前の如く「い」に尖ますして斯く三間に高く尖みて打つことがある之は特殊の場合に用ふる手で白八より十四までとなれば黒は壓迫されて白より外部に強壁を築かれたわけなれば大

第百四十六圖



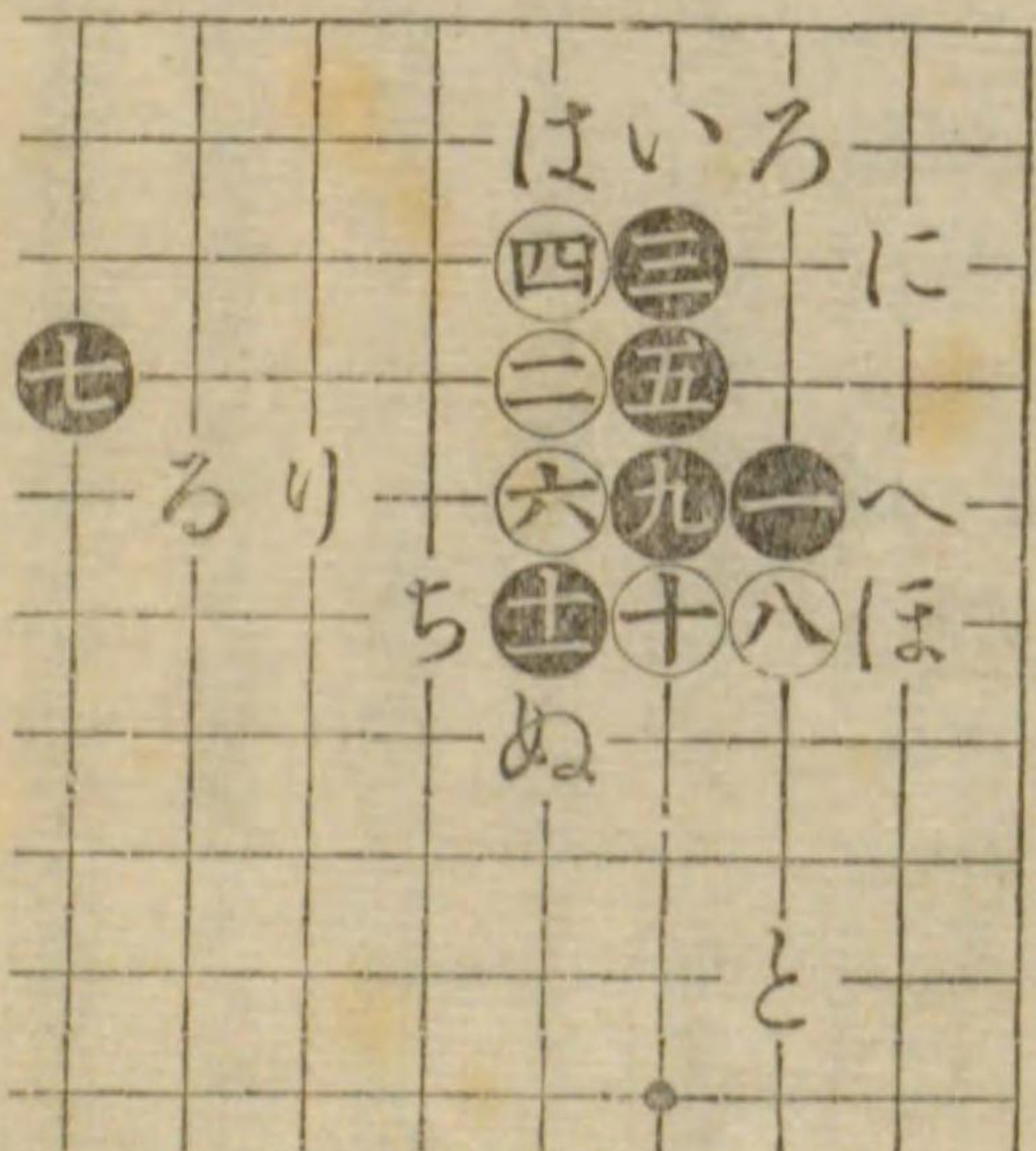
ば手抜きするのを恐れる場合などに斯くの如く沿ひて白を重く行ひさせ然かして七と己れを守て敵狀を窺ふのである○白八の手は強ひて手抜きが出来ぬ次第ではないけれど前圖と異り三子の形重ければ先づ八と地歩を占めて備ふる其代り八と三子との間は殆、敵より侵入の缺陷なければ地域とも看ることが出来る又八の手で「ろ」に斜走する事もないではないが此手段は左方の勢力地とは未だ成らぬとも其規模を壯にして左上隅との權衡上大に爲すところあらうとする一方右側の黒に對し牽制する意味

抵の場合黒の損失に歸する尤右邊下方との釣合上折角作つた白の外壁と下方所在の白とが重複して其働きを減殺するが如き場合には殊更に此七の手を撰んで打つことがある又黒七が左上隅との釣合上の可否も大關係あることで要するに此手は漫りに用ふべきでない然かも前説の外又次圖に示すが如き趣向に出やうとする策略のため殊更に打着することがある。

(第百四十七圖) 前百四十六圖に此趣向の爲に殊更に黒七と打つことがあると述べた通り白八と頂けた時黒九、十一と斯く切斷して來たら白「い」黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」となる又黒「ち」の時「ぬ」

なれば白「る」に打つべきである然して其結果をみれば黒は其考通り白を兩斷しても右方は既に其形整ひ左方も封鎖される思なく却つて切斷した黒石が弱き位で假に之を双方互角と見ても所謂持ち合ひて中央に出る碁勢となれば白は少しも悪くない故に黒七以下の此趣向は妄に打つべきでない能く他との關係上場合を見計つて打てば或は成功することもあるから心得置きて便宜用ひてよい殘説は次圖にある。

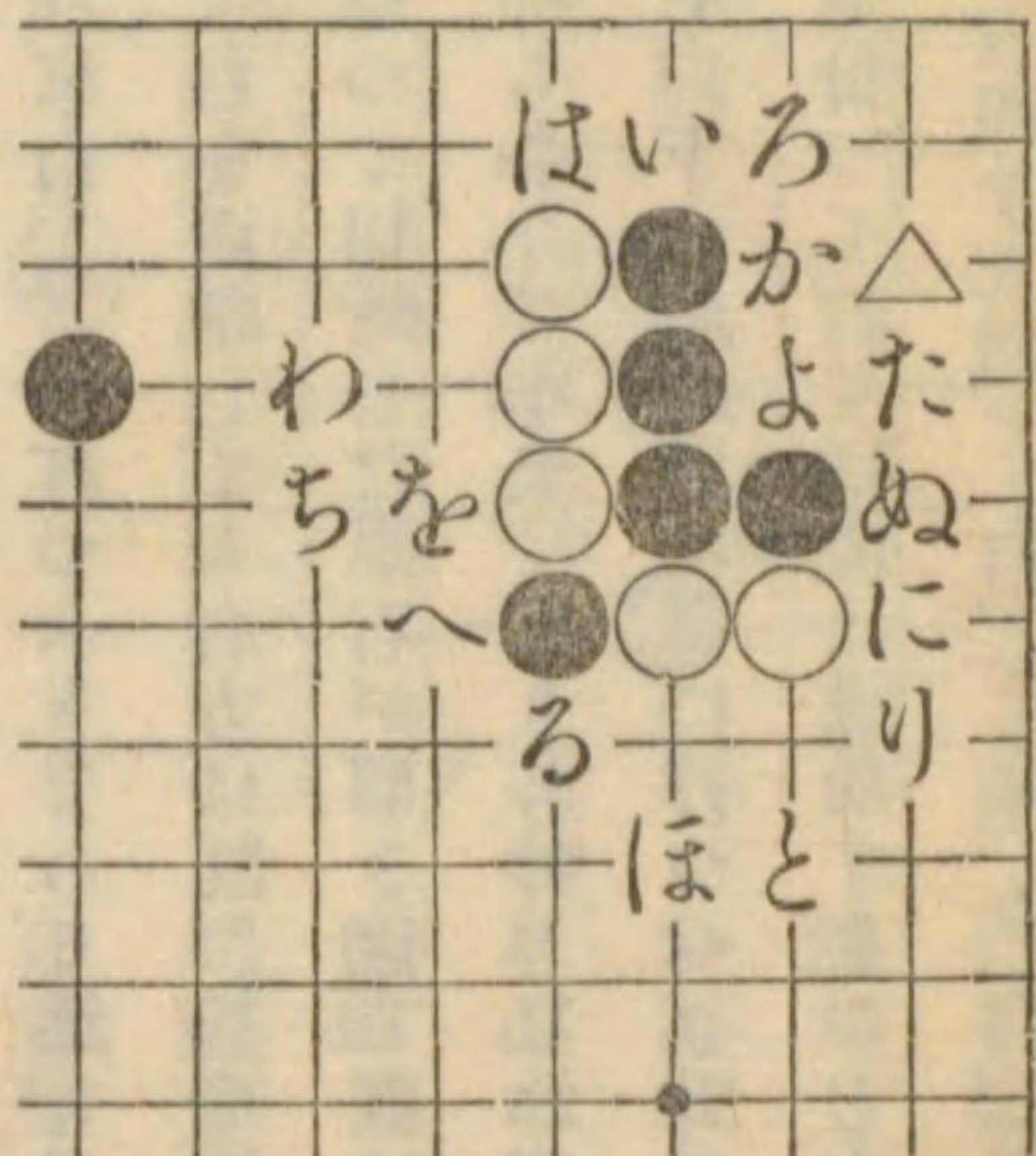
第百四十七圖



(第百四十八圖) 白「い」黒「ろ」白「は」の時前の如く黒△印にツガないで「に」に縛ねば白は「ほ」に打



第百四十八圖

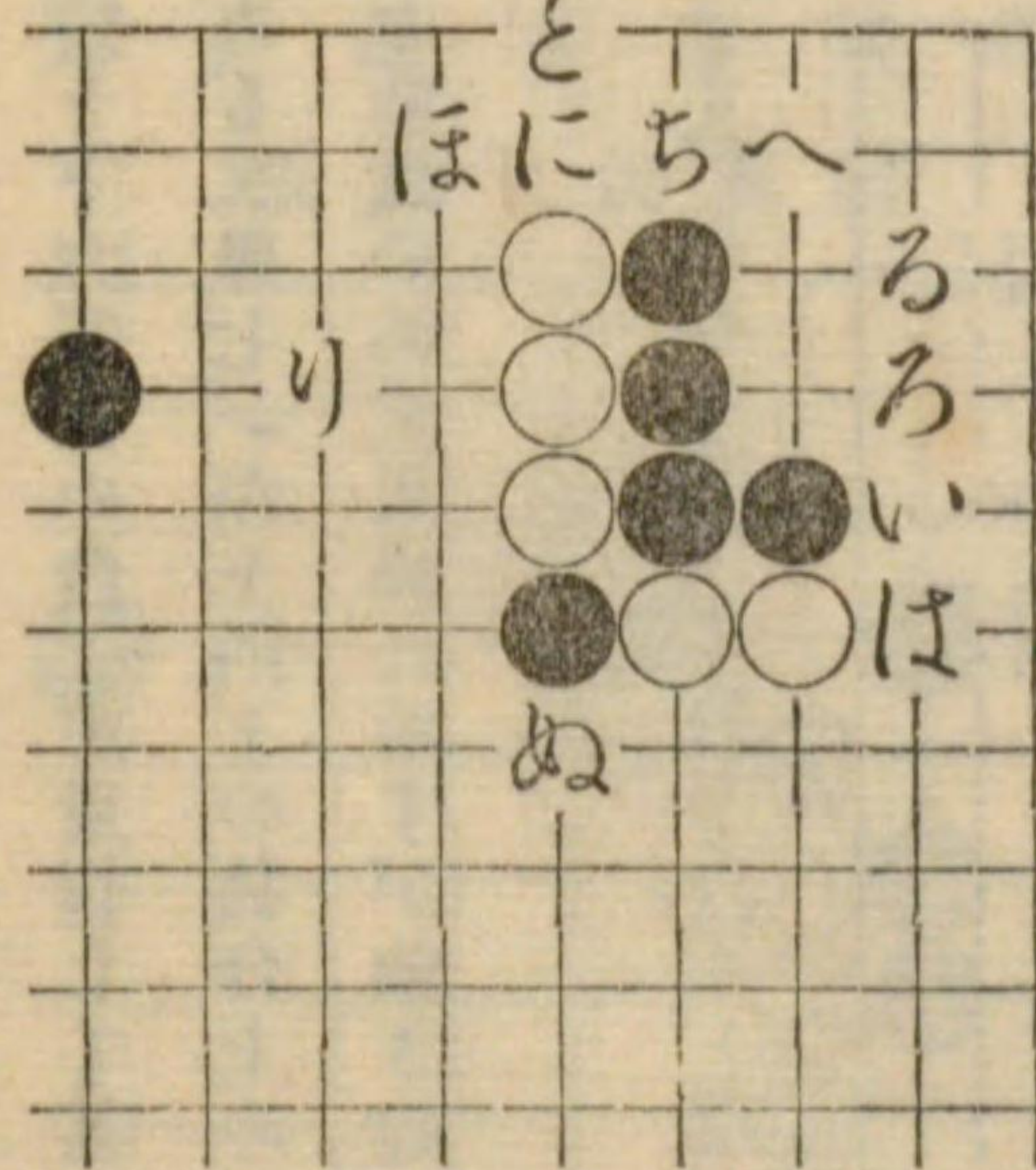


つ黒「へ」なれば白「と」黒△印白「ち」に飛び出して前説と大同小異である其中白「ほ」に飛ぶ手を「り」に約へれば黒「ぬ」にツギ其時白「ほ」に打つも黒「る」白「と」黒「を」に縛ねとなつて封鎖される虞がある又白「ほ」に飛ぶ手を「と」にカケツダば黒「る」にて「ほ」と「を」の兩要所が出来白は忙しくなつて悪い故に白は「り」に約へないで「ほ」と一間飛ぶ又本文に戻つて黒△印にカケツダ手で「る」に行び白「と」の時「を」に封鎖すれば白「か」に切り黒

△印白「ぬ」黒「よ」白「た」黒粘白「り」となりて黒の悪いは明白である故に黒は最初「に」に縛ねても白より「ほ」に受けられて列底△印に疵は残るから寧ろ初に△印にツダ方優つてゐる。

(第百四十九圖) 白「い」の方より勿ねツダは利害如何といふに黒「ろ」白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」となつて外勢は白勿忙の状勢となつて左右何れかを封鎖される患があるので此「い」より勿ねツダ事は白のため採らざるところで

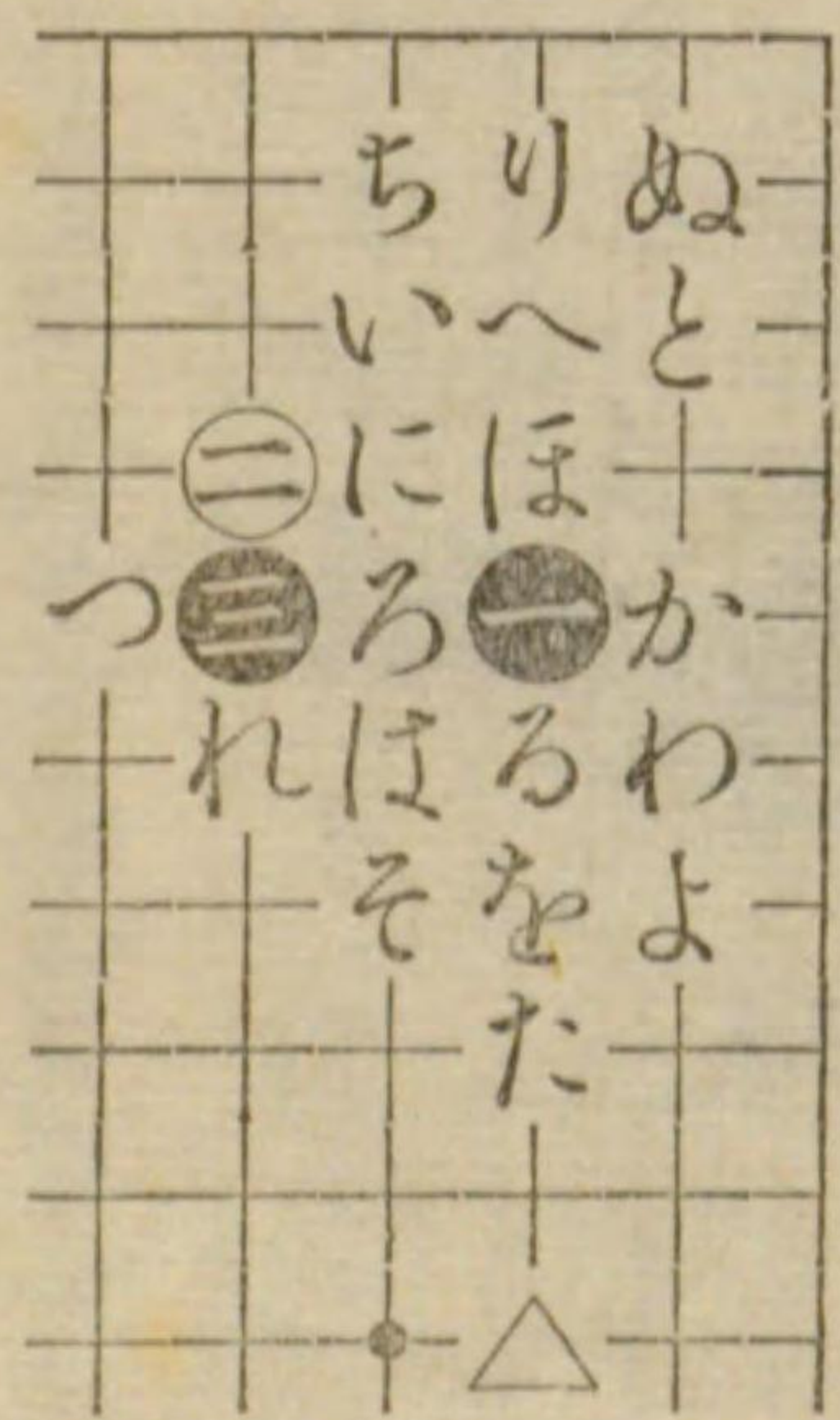
第百四十九圖



ある其中黒「へ」とカケツダは妙でないやうだが之を單に「ち」にツダと後に白より「る」に頂けられて此隅に手を生ずるおそれがあるゆゑ斯くの如く「へ」と打ちおくもので確實なることである。

(第百五十圖) 黒三と頂ることがある之は或る場合に用ふる手にして普通の場合には面白くないばかりか却つて割合悪くなることがある例へば黒△印方面に布置しある時などは前説の「い」に打つより三に頂る方此△印を働かせる意味に於て宜しとする此時白の受け方は「ろ」に縛ね込み黒「は」白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」白「ち」黒「り」白「い」黒「ぬ」白「る」黒「を」白「わ」黒「か」白「よ」黒「た」白「れ」黒「そ」白「つ」となつて白の方割合が善い尤此型は△印の邊にあるものとしての事である其中白「ろ」と勿込んだ時黒「は」に受けず「に」より切り白「は」黒「ほ」となれば如何にといふに白三の一子を「つ」に掛けて征にするが善い若、此征のアタリがあつて征さざれば甚だ不可である最初白「ろ」と勿ね込む時白は征のアタリの有無を見定め然る後にすべきもので一方黒よりいへば征のアタリなく三の一子を取られる場合に「に」より切るは是亦不可で「は」より受けるの外はない其「は」より受けることの結果は前述の如く黒多少の割合損なれば然る場合には三とツケる事の得失を熟慮しなければ最初より「い」に受る方宜しきことも

第百五十圖

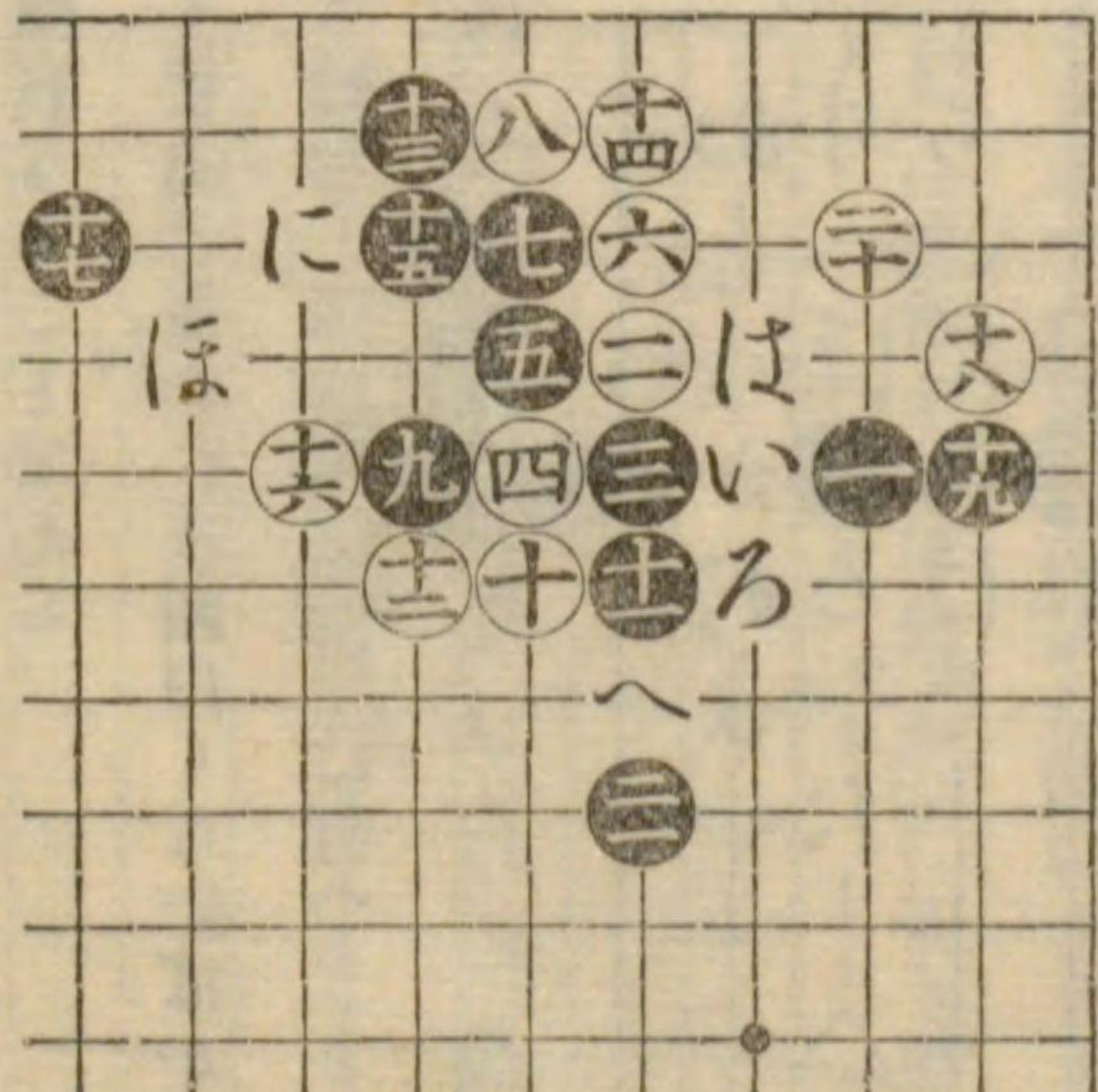




あるべく或は三と頂ヶ多少の事を忍びても大勢上より打算して其方をとる事もある此三と「い」と何れの方が宜しきかといふことは此一局部にては斷することはできない之より以下次圖に示すところにては征のアタリある場合として三と頂ヶ△印邊の黒を活動させたと假定せよさすれば白「ろ」に刎込むことは出来ない然らば如何に應ずるかは順次説くであらう。

(第百五十一圖) 白四と綽ね黒五と切り以下圖の如く二までの運びは往々起る型で割合大差のないものと見て善い其中白八の手で「い」に來らば黒十一白「ろ」黒「は」に切りて戦ふべきである其結果黒悪くない又黒九の手で十三に受けることもあらば白「い」黒十一白十四となつて黒は十五の處と「ろ」の處との二點の要所を生じ到底一方を白より打たれるの不利となれば最初十三と約へる手を九へ刎ねなければならぬ白十二の時若、征のアタリあれば「に」に打ちて甚宜しい尤黒に於ては五と切る前に此征の有無を見定めて然る後五と切るべきもので然らざれば割合黒悪い若白の征のアタリあつた場合には五と切る手で十一へ行て打つべきである其成行きは次圖に示す尙本圖に於て黒十七の手を「ほ」に受ける

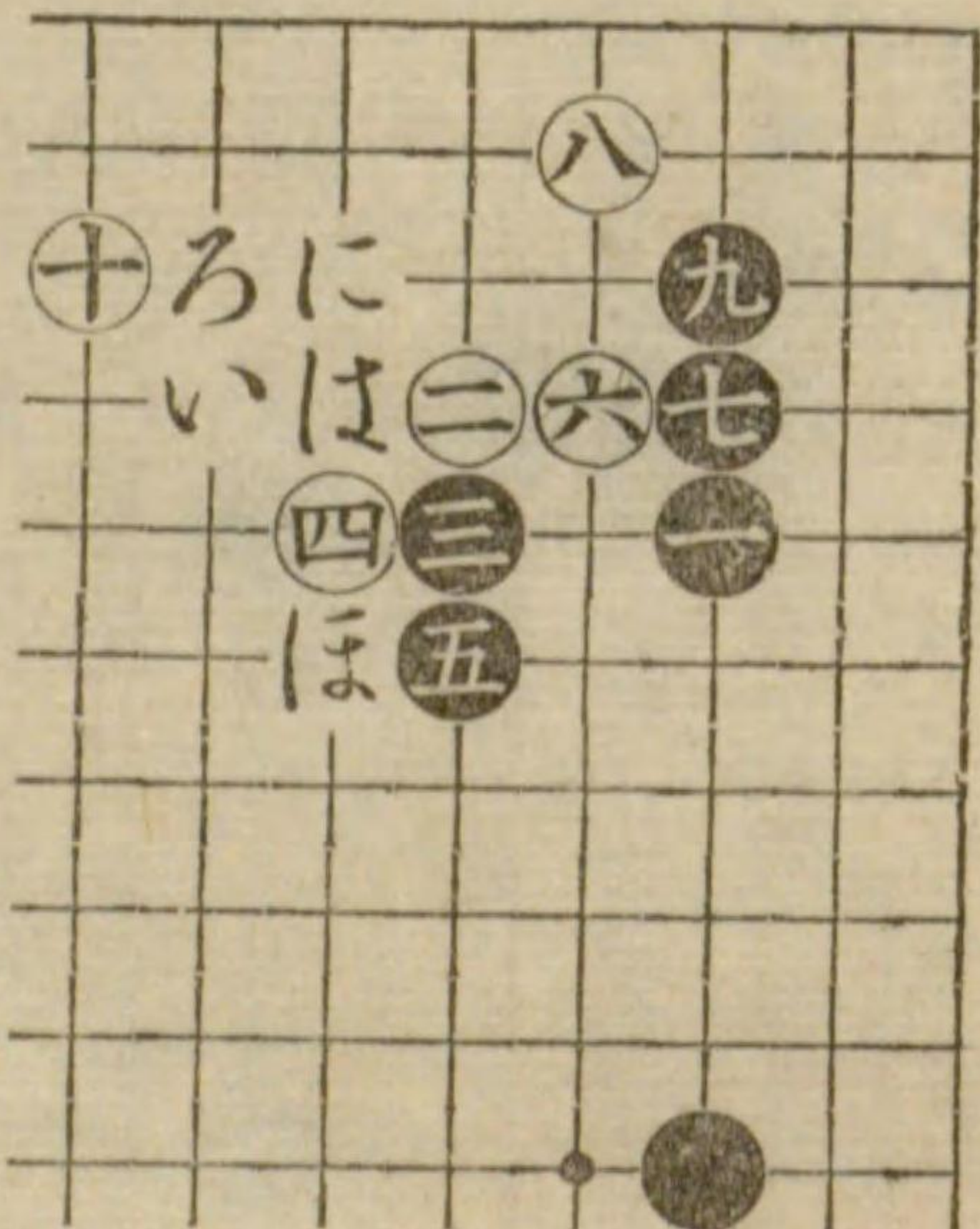
第百五十一圖



場合もないではない又黒二一の飛びは要所であるから忽にしてはならぬ若、怠つて白より「へ」に綽ねられる事もあらば大に悪い。

(第百五十二圖) 前述の如く白の征のアタリある時は黒五の手で本圖の如くノビ以下十までとなるが通形である斯くなれば右方の目下邊にある黒石働きとなる譯で三と頂ヶし趣向貫徹する此形となりて黒他に轉すべきである「い」の間あれど直に打つは宜しくない若、打てば其結果は白「ろ」黒「は」白「に」となれば黒何とか猶一手を費さなければならぬ假に四の一子を取つたとしても事小にして効果乏しく且後手となり故に手抜きして他に着手する方得策である若、此處を打つとしても「い」の間を衝くよりは「ほ」に曲がつて外勢を張るやうに打つ方面白いことが多い。

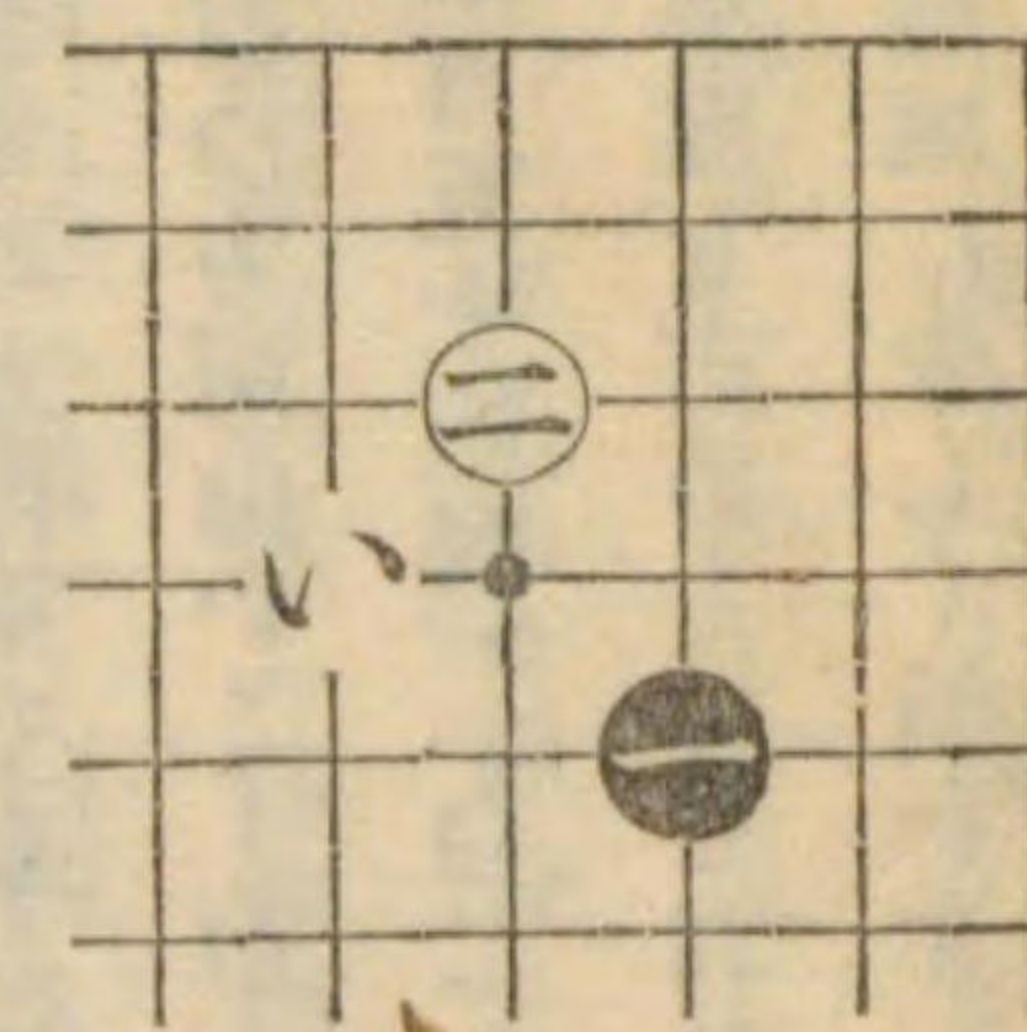
第百五十二圖



(第百五十三圖) 白二と懸るのは前に掲げた「い」の高懸りに比べて此隅に於ての得失をいへば此方深く要處を占めるので利なりとするそれゆゑ實戰に於ては之を用ふることが多い然し「い」と高く懸るのは此處に少しく損をするも全局の權衡上宜しき場合に用ふるもので其故は斯く二と深く懸れば黒より



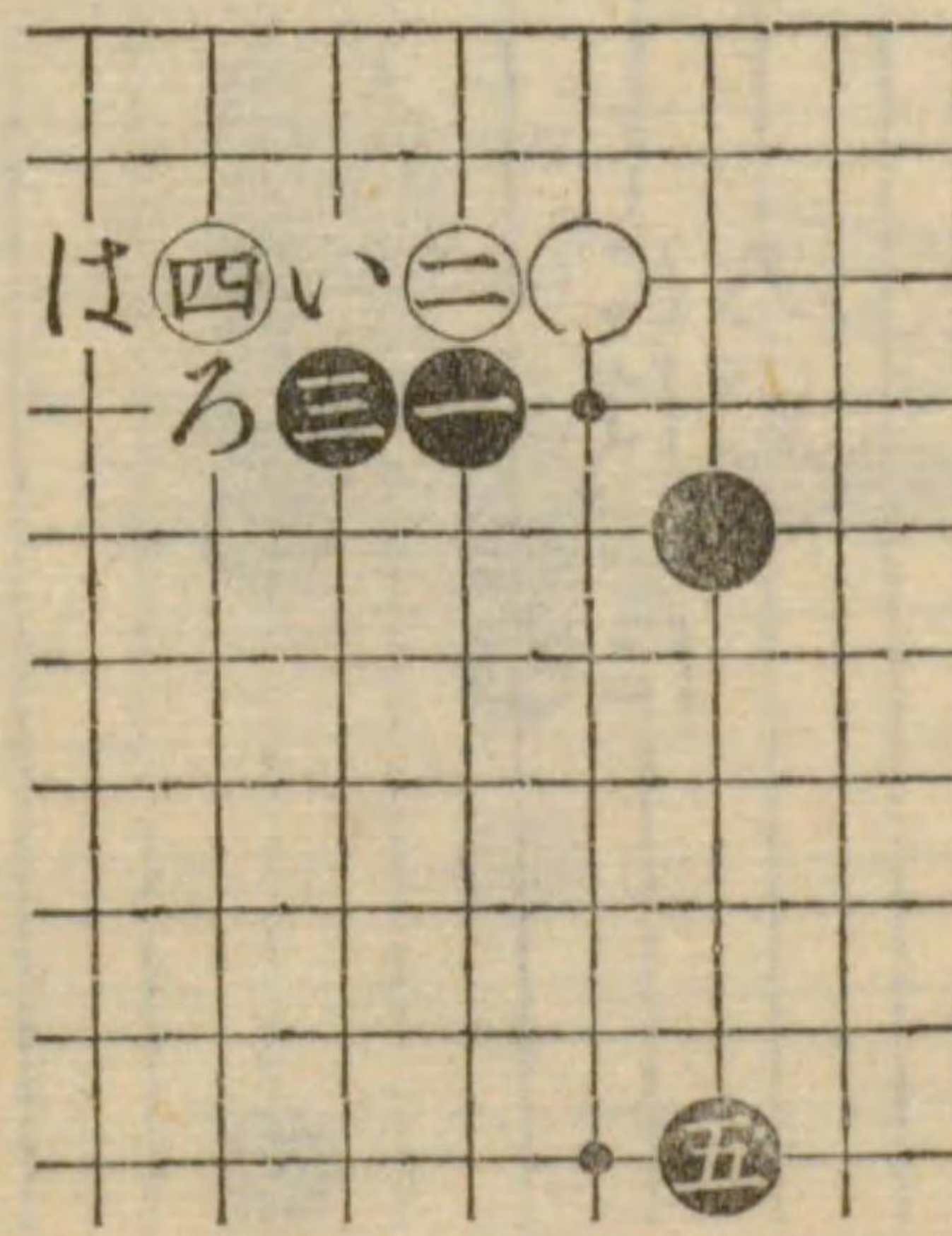
圖三十五百第



「い」の處か或は其他に壓迫を蒙つて悪しき時か又は他の一方の同線上に白石あつて二と懸るとき其石との釣合上同じく低位となつて黒より乗せらるゝ場合などには「い」の高懸りの方宜しい譯だ而して白より二と懸られた時黒は直ちに此處に應答せず手抜きするは常に見受けるところだが今黒より直ちに此處に着手するを要するものとして以下其手段得失を述べやう。

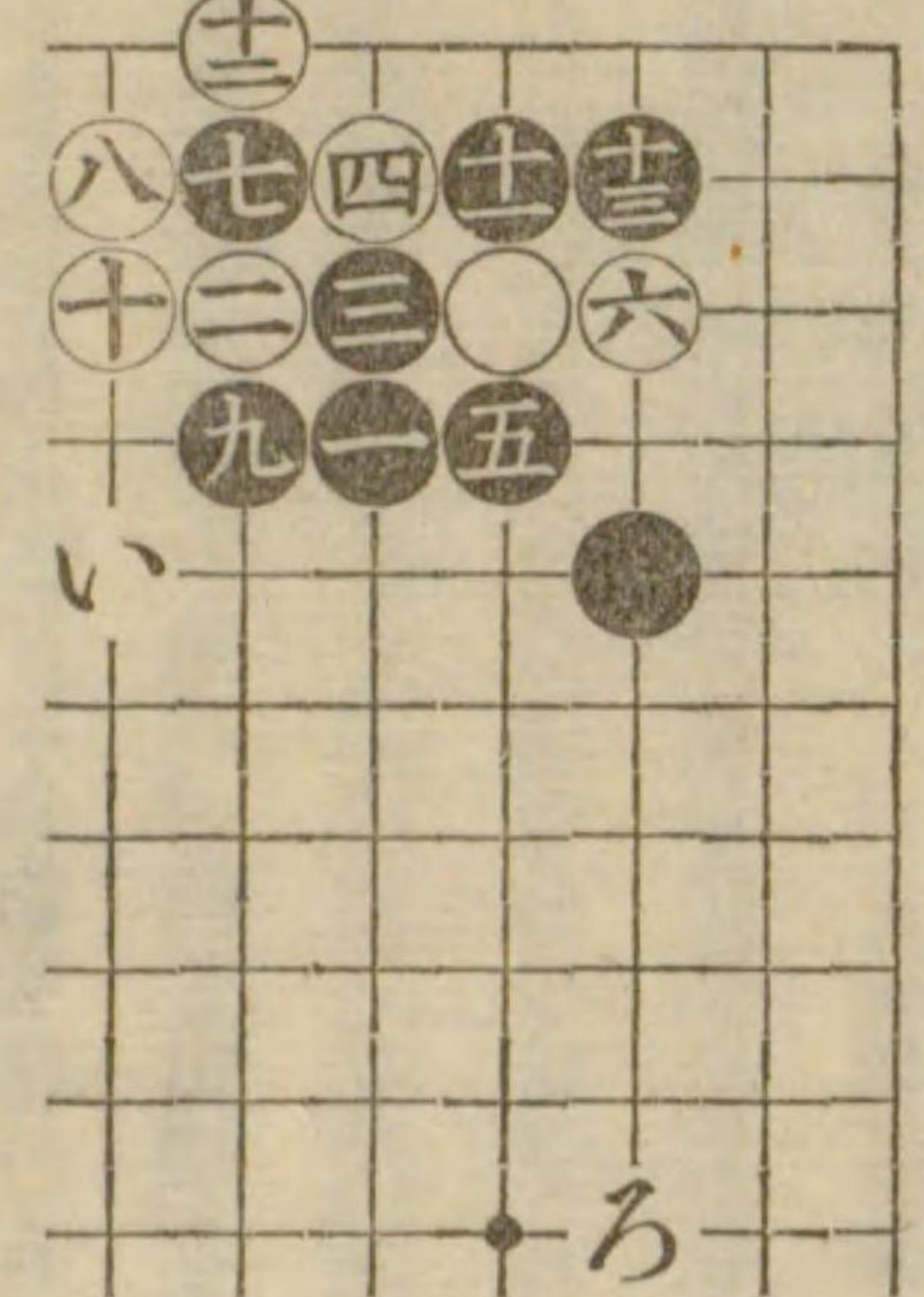
(第百五十四圖) 黒一と掛け三とノビて外勢を張り五と展開する手段は常用である白は二と受け四までの應答致方なきことその他に方法はない此得失は先づ互角といふべきである白の地位は低きが如きも先、堅實にして敵の侵略を受けることが少い之に反して黒は大模様なれど地域未だ確定せず後の打方によつては變化を生ずることあれば遽に豫測すること出来ない故に此形は概して互角といふを當れりとする白四の手で「い」に押し黒「ろ」白「は」に飛び打つことも稀にはある尙此處の打方に就ての變化の是非は順次に述べやう。(第百五十五圖) 白二は前圖の如く三に押して打つを至當とする然し此處にては假に白二と飛んだと

圖四十五百第



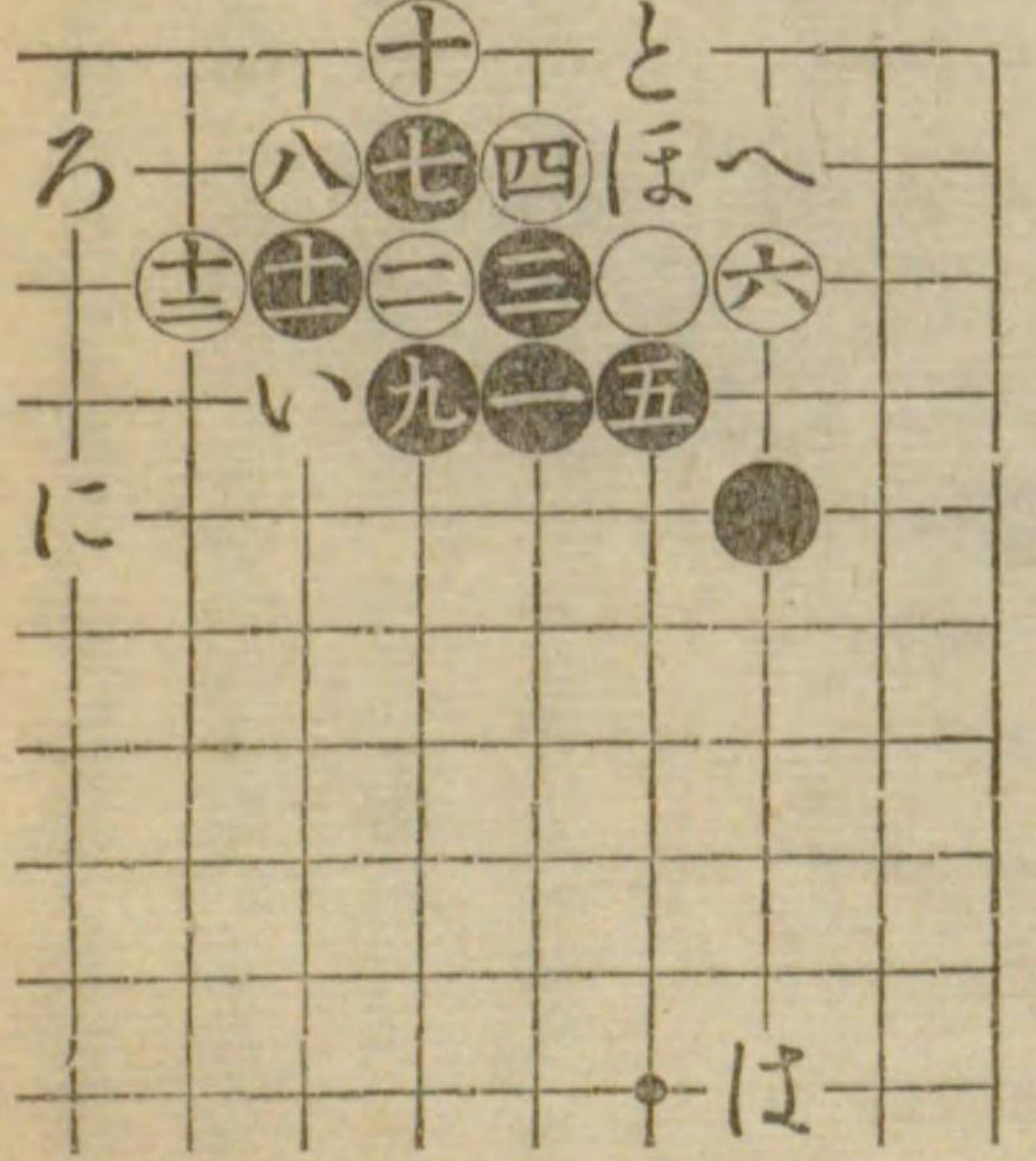
して黒の打方を示したもので何れにしても白の二は甚悪しくある黒三と出で五と曲がる手宜しい白六に行ければ斯くの如く十三までの運びとなつて白は二子を獲られ割合大に損である此手順の中白六の手を十三にカケツガば黒六にアテ白十一に粘ぎ黒「い」に斜走し白十に双べば黒「ろ」に轉じて宜しい又白十三にカケツガば十一にシツカリツガば黒「い」に斜走し白十黒「ろ」と前述の運びになる其中白十の手を備へずして他に着手せば黒は直に十に頂け益々此白を低くすることを計るべきである。

圖五十五百第



(第百五十六圖) 白十と一子を打抜いた時は黒直に十一にアテ而して白劫立をして此劫を提り返せば黒「い」に粘ぎおきてよいされば白は尙劫を粘ぐか或は「ろ」にカケツギて劫を凌ぎおかなければならない然して形勢を見れば白は如何にも位低く之に反して黒は厚壯なる長壁を築き「は」に展開するも或は尙「い」に壓迫を試みる場合もある何れにしても白の不利に歸

圖六十五百第 提劫



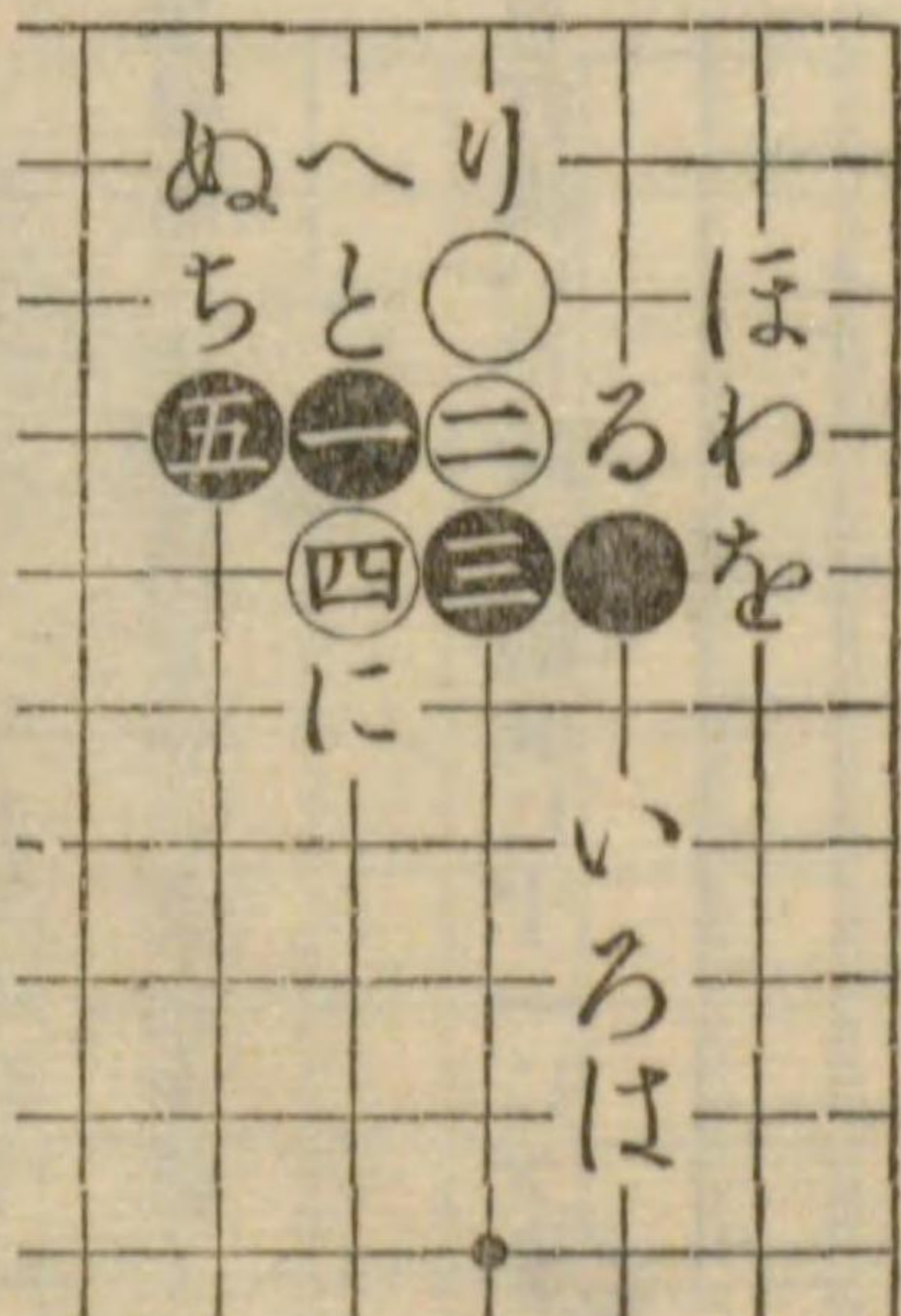


する就中斯く黒は外勢を得るも若し都合宜しくない局面と認める時は九の手で直に「ほ」に切り白十黒「へ」となりて二目を取つて可い尤も黒九と曲がり白を十一に粘がし置いて隅の二目を獲るなれば申分がない黒七の切りは碁勢により「ほ」よりする事がある其時白「へ」黒七白「と」黒十一に一子を征にカケる而して征の當りある場合は黒「ほ」より切るのは全然悪い但、黒「ほ」に切つた時白七にツグ事は先づなきもので勢ひ「へ」に切石を抱へるのを普通と心得よ。

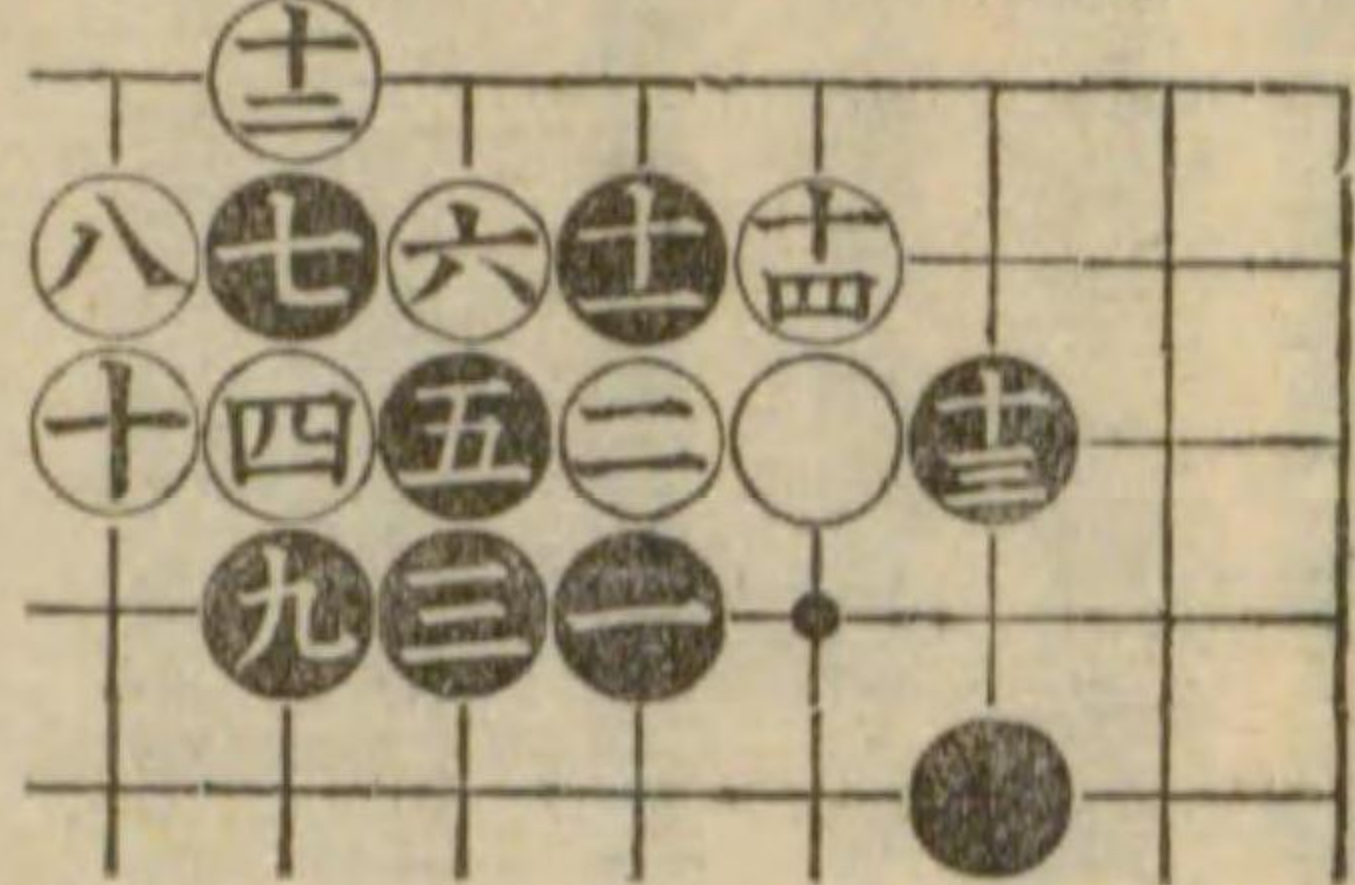
(第百五十七圖) 白二、四と出切る事は此場合甚だ無理にして到底好結果を得ない之は「い」「ろ」「は」の三個處の中の何れにか夾みある場合なれば時として此手段ないでもないがなき時は全然無謀といふの外はない試みに其の成り行きを示さうに白四の切りに對し黒は五とノビる通形に従つて可い其の時白「に」なれば黒「ほ」に打つが夾ある時の常手なれど此際は「へ」より攻めて可い其の時白「と」に出づれば黒「ち」白「り」黒「ぬ」白「る」黒「を」白「わ」黒「ろ」に二間拆となつて外勢黒に歸するばかりか隅は一合樹の型で未だ手残り何れにしても出切りの悪いのはいふまでもない。

(第百五十八圖) 黒五以下十四までの運びをなし置く事は古來定法として直に行つたものだが近世に

第百五十七圖



第百五十八圖

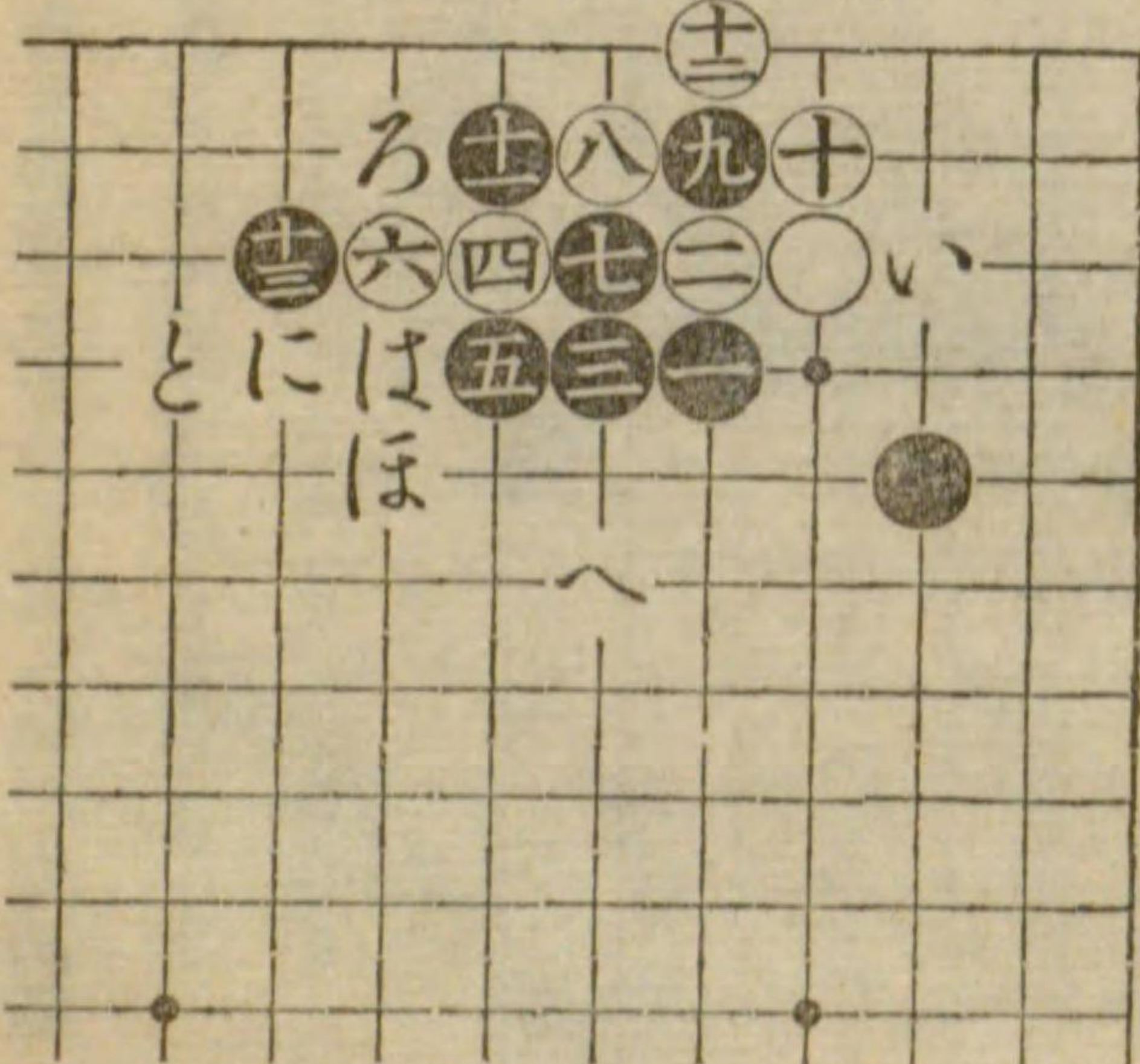


至つて斯くては餘りに敵を固定せしめて妙味のないのと外側に疵あつて其形重ければ之を避け五以下を直に打たないことゝなる尤、此手順は好機に乗じて打つのは妨なければ心得置くべきである其中白十に粘かないで直に十二に打抜けば黒十にアテ、可い其意味は第百五十六圖と對照すれば大同小異で黒の優利なることを發見するだらう。

(第百五十九圖) 黒五と押し七、九と出切るは或場合に於て用ふる手段で常には

打たぬ斯く打つは十三のツケが面白い手となる場合に用ふる之は白が十の手で十一なれば黒「い」に頂け白十と曲がりとなつた形を見れば前の百五十八圖に於て述べたと異り十一に黒の切なきだけ黒の方働ある次第である然らば白は勢ひ十に抱へざるを得ない故に十三までとなつて其時白「ろ」黒「は」白「に」と切りて戦ふも白は形勢堅固にして後顧の患なく黒は封鎖し得ても兩斷せられた姿で且、多少の瑕疵あれば必ずしも好結果を得るとは

第百五十九圖

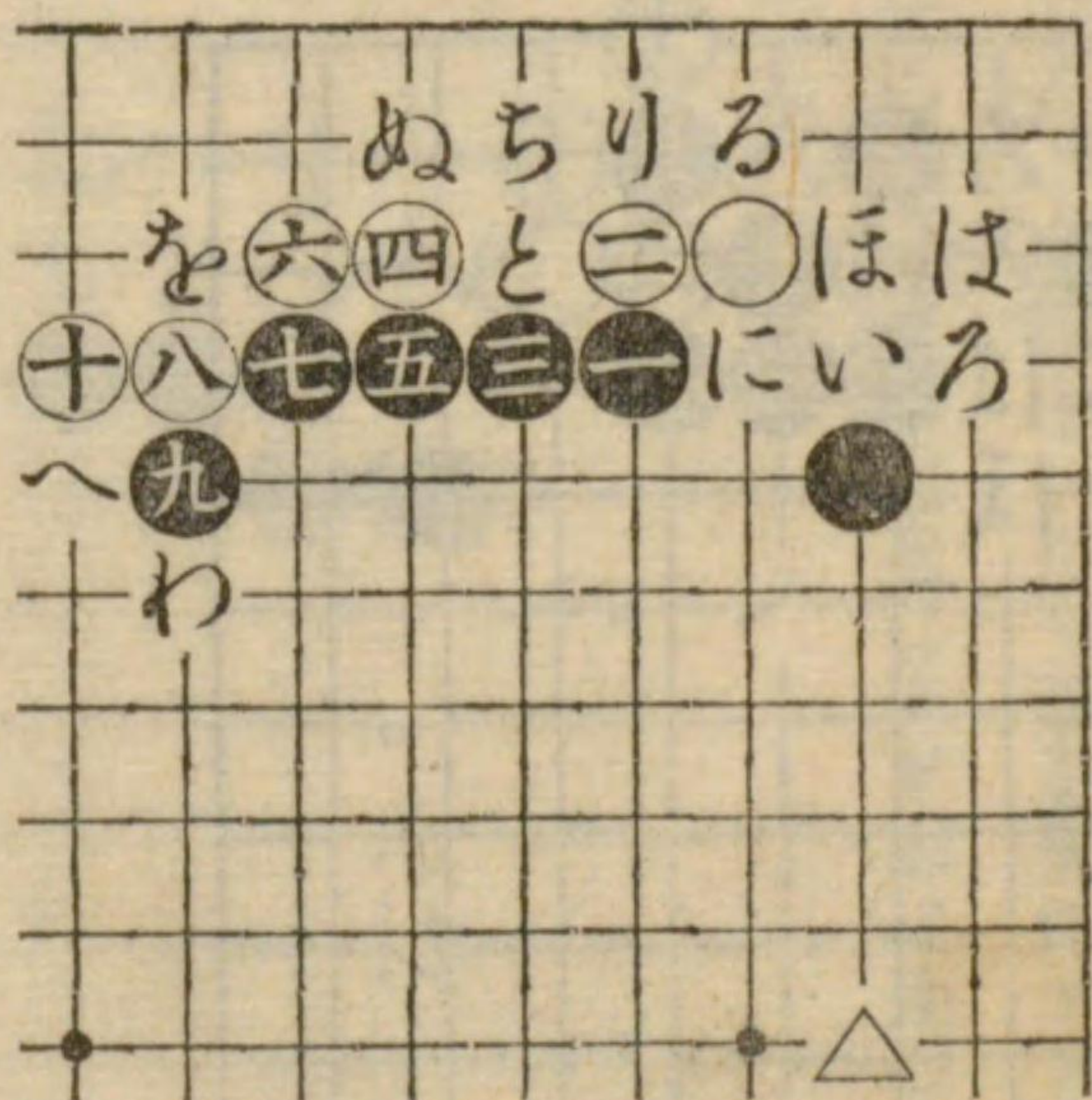




定らない又白「ろ」に曲らず「は」に出で黒「ろ」白「ほ」黒「へ」白「と」となる打方もあつて之も黒の方困難であらう故に最初五と押し七、九と出切るは漫りに試みてはならぬ能く々々考慮を要する事である。

(第百六十圖) ●黒一と掛け九までと連んで外勢を張る趣向間々あれどそれは△印邊に多くは我石の扣へあつて其上斯くの如く押し付ける手段に出るは宜しいこともあれど若、此扣へなく漫然此手段を行ふも好果は尠い、白には確實な地歩を與へ後より△印に拆きを打つ趣向にては權衡を計りつゝ此模様を削減せられ易いからである○白十の手穩當の着である尤場合に因りて

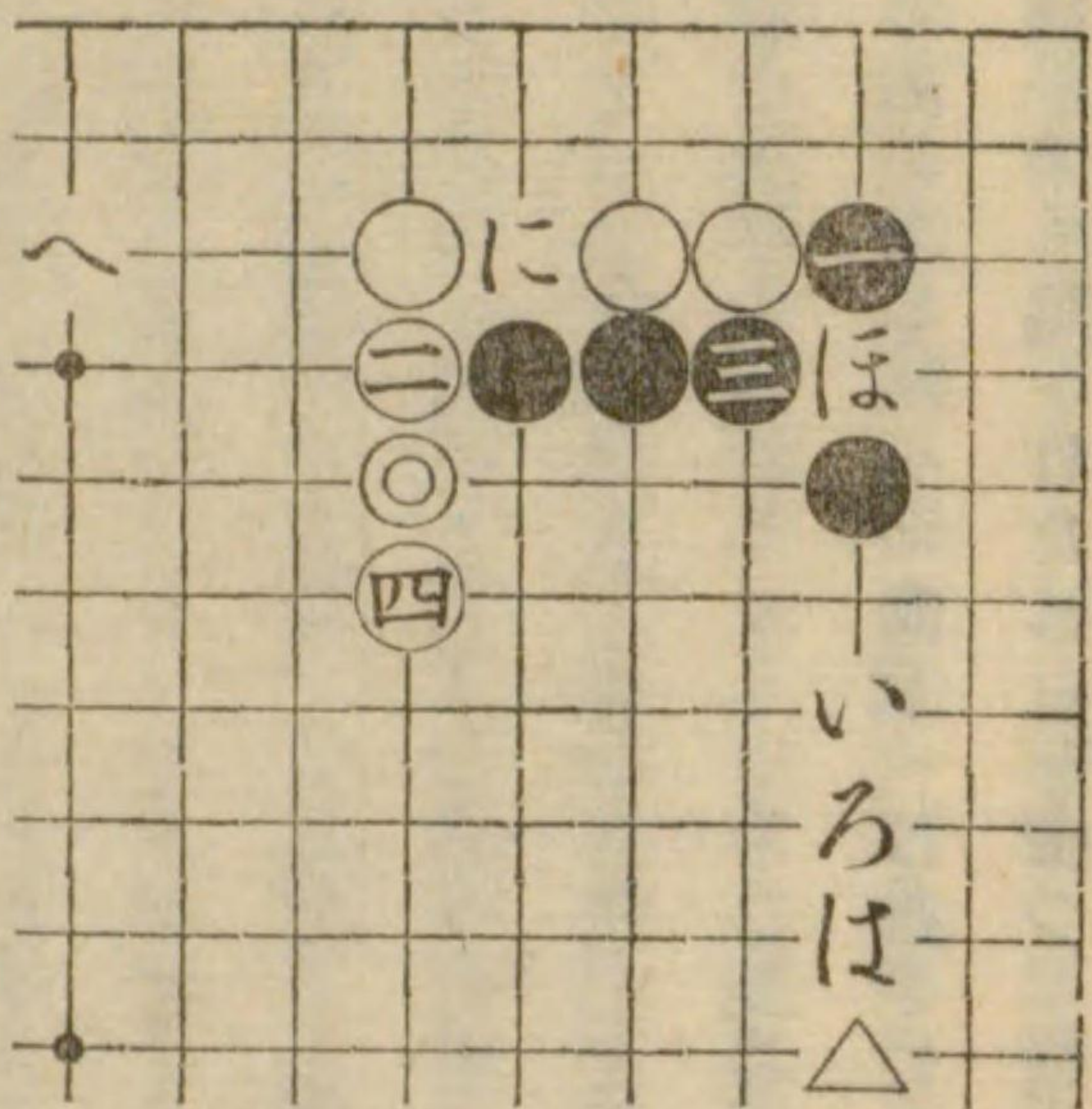
第百六十圖



「い」に尖ミツケ黒「ろ」白「ほ」黒「に」白「ほ」となる手段もある又「い」の手で「へ」に二段刻することあれど這是急激に過ぎる特別の場合でなければならぬ其時黒は「と」に出で白「ち」黒「り」白「ぬ」黒「ほ」白「る」黒「十」白「を」黒「わ」となつて割合白面白くない。

(第百六十一圖) ●黒一と頂ける手は此黒を治めやうとする手段で之に對し四までの運び普通である尤白四の手は○印に行びることもある全體黒一と頂ケル手は白に「い、ろ、は」の邊に夾みある時に打つ手

第百六十一圖



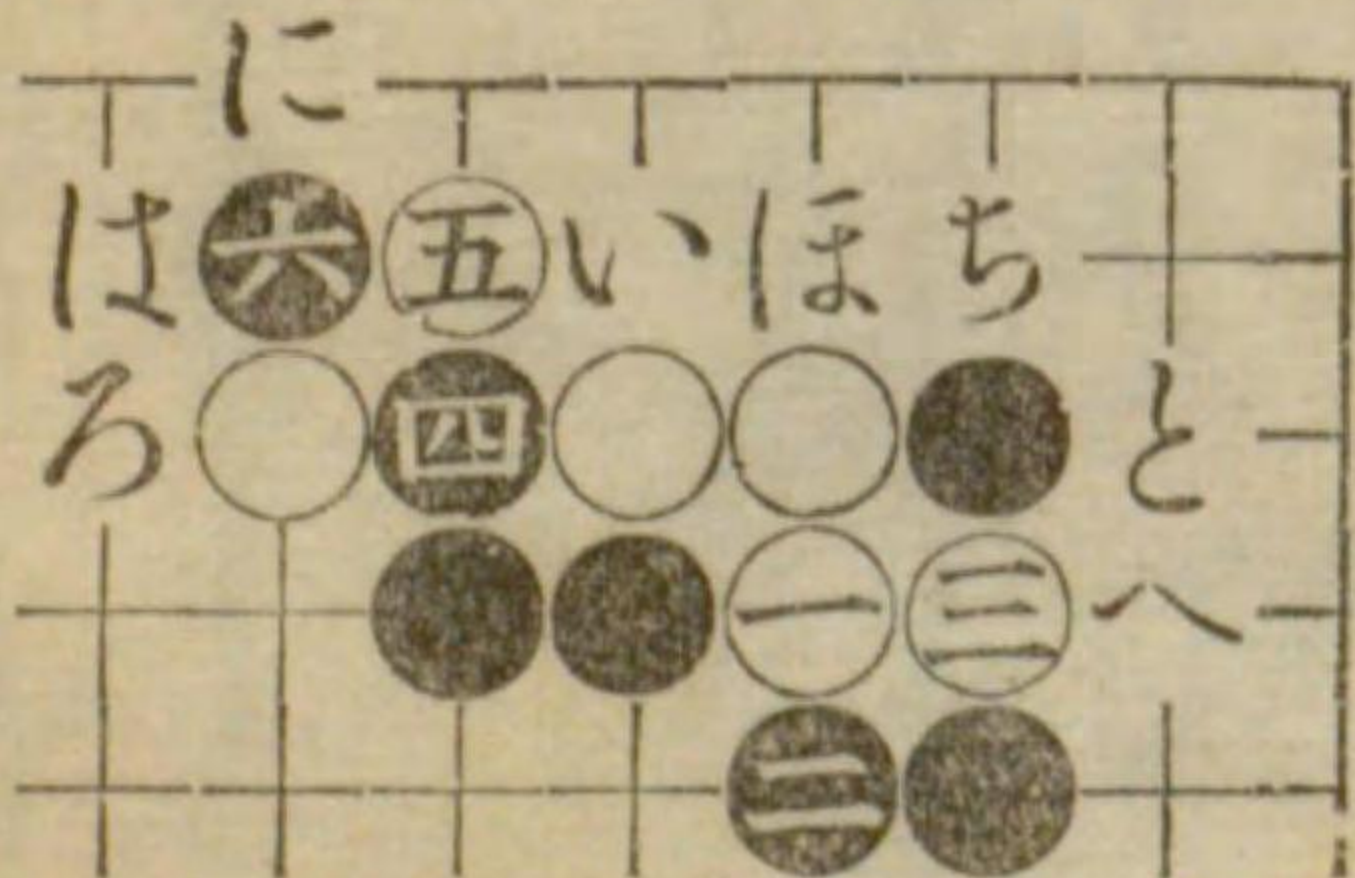
で何も無い時に打つは機を得なければ善くない寧△印の邊に拆く方得策である○白二の手を「に」にツガば黒も「ほ」にツギ白「へ」に二間拆きとなる此打ち方は一時用ひたことあれど近來は圖に示した方輕くて宜しければ採用することが多い尙殘説は次圖に示さう。

(第百六十二圖) ○白一、三の趣向無理にして悪いけれど參考の爲に記す●黒四と出で六と切らば白應手に窮する即ち白「い」にツガば黒「ろ」に白の一子を征にカケて宜

しい又白「い」の手にて「は」なれば黒「い」白「に」黒「ほ」白「へ」黒「と」となつて白隅を黒に奪はれる事となる因つて六と切られては何れにしても不可であるこれは白の一、三の手悪い爲で又白一の手にて「ち」に縛ることもあれば黒四に突き出し白五に受けた時黒六と切つて前同様黒大に善い。

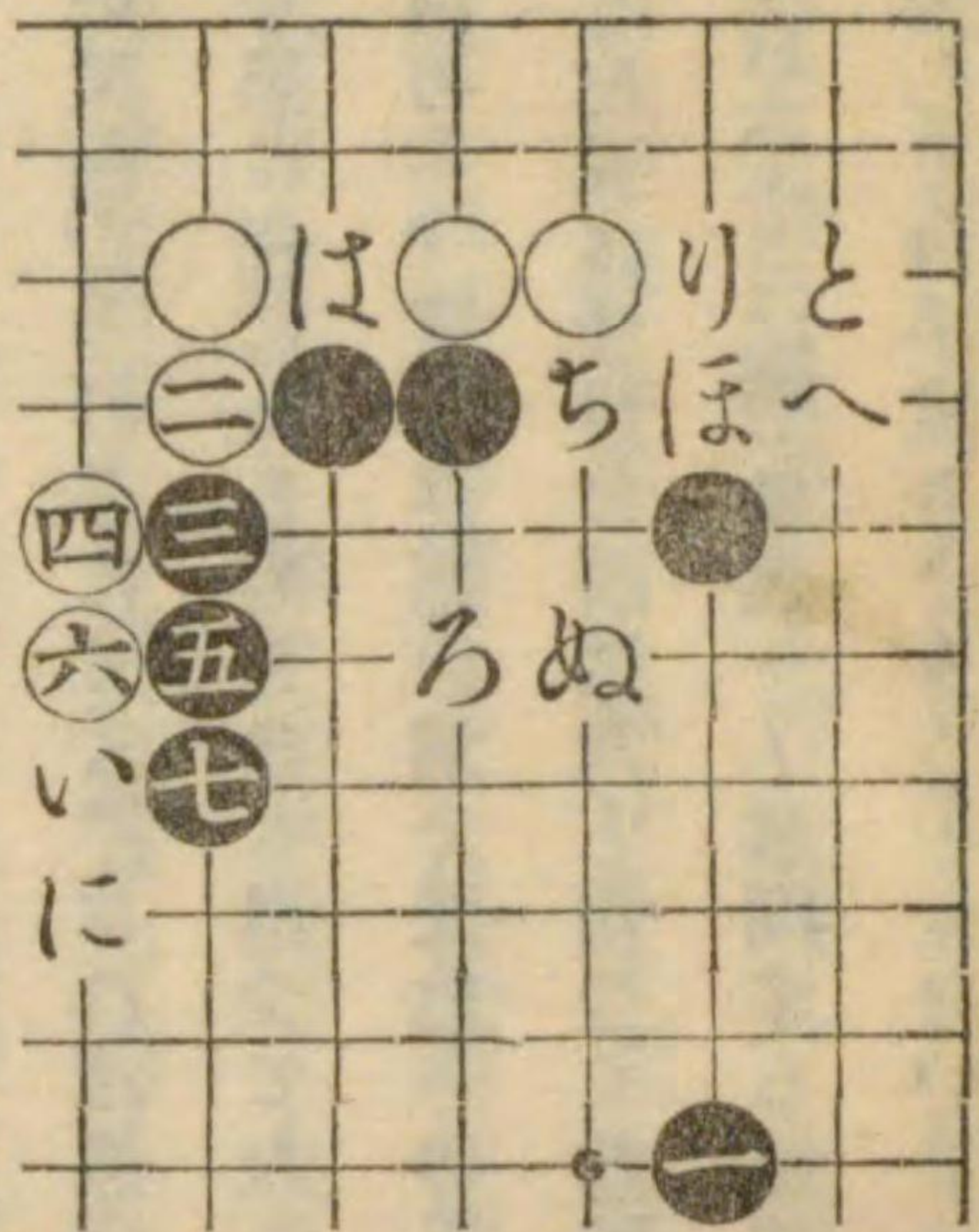
(第百六十三圖) ●黒一と展開するは地歩を占めて釣合の善い穩當の手である之に對して白手抜きすることも無いではない又打つとすれば圖の如く二と押し七

第百六十二圖





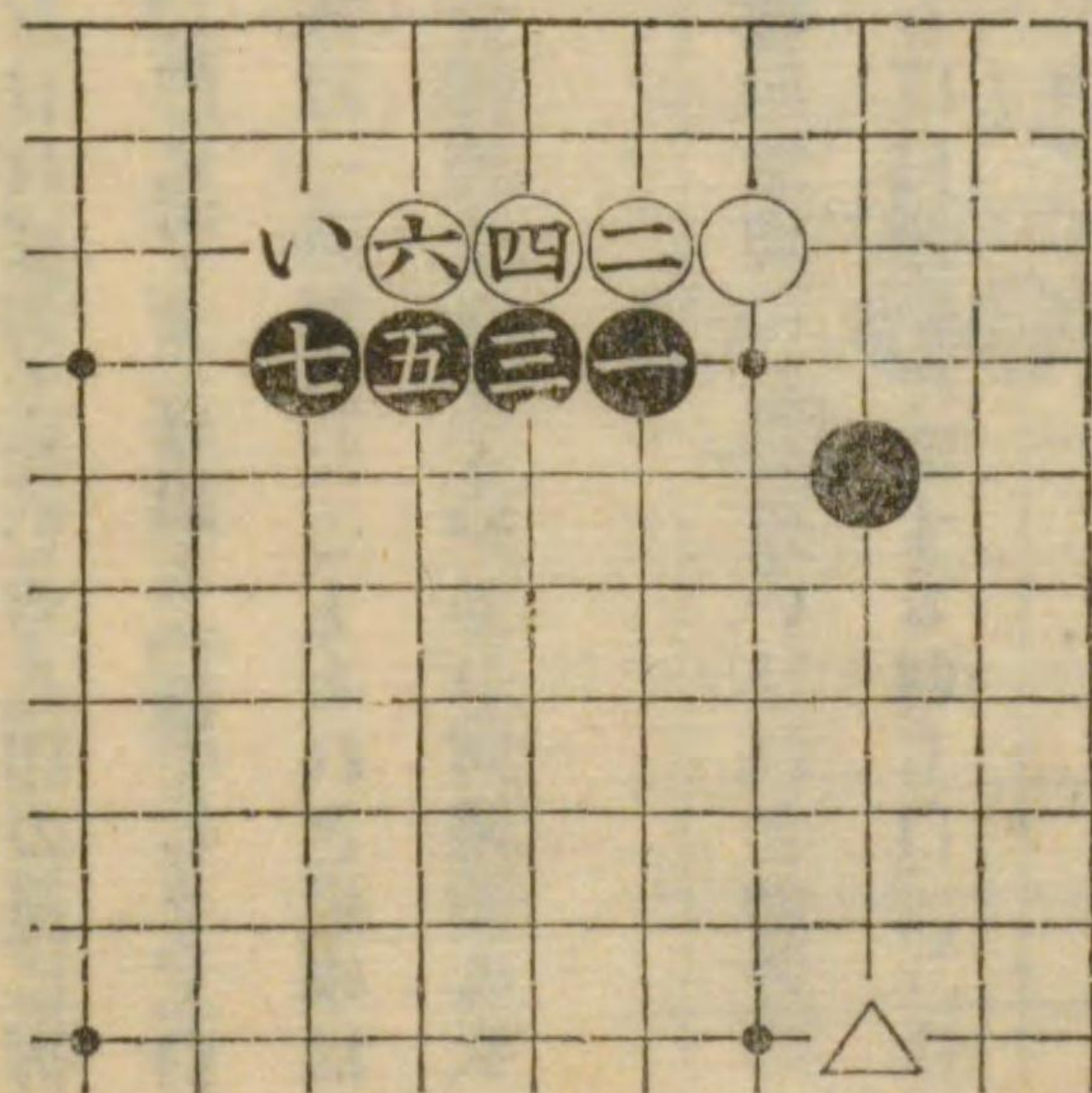
第百三十六圖



白二の手で「は」にコスミックル事がある然れば黒「へ」白「と」黒「ち」白「り」黒「ぬ」とカケツグを通形とする。

(第百六十四圖) ○白四、六と連行し來たらば黒も従つて五、七と並行する白は低きところを這へば這ふ程損になる何故に斯く打つやといふに或特別の場合に際して外部に先手を取つて打ちたい時に此手段を行つてその方に先着する趣向で即ち前圖までの如く四の手を六へ一間飛べば後手になるので黒より外部△印に先後を争ふ點を打たれるを嫌つて強ひて先手を取らうが爲四、

第百六十四圖

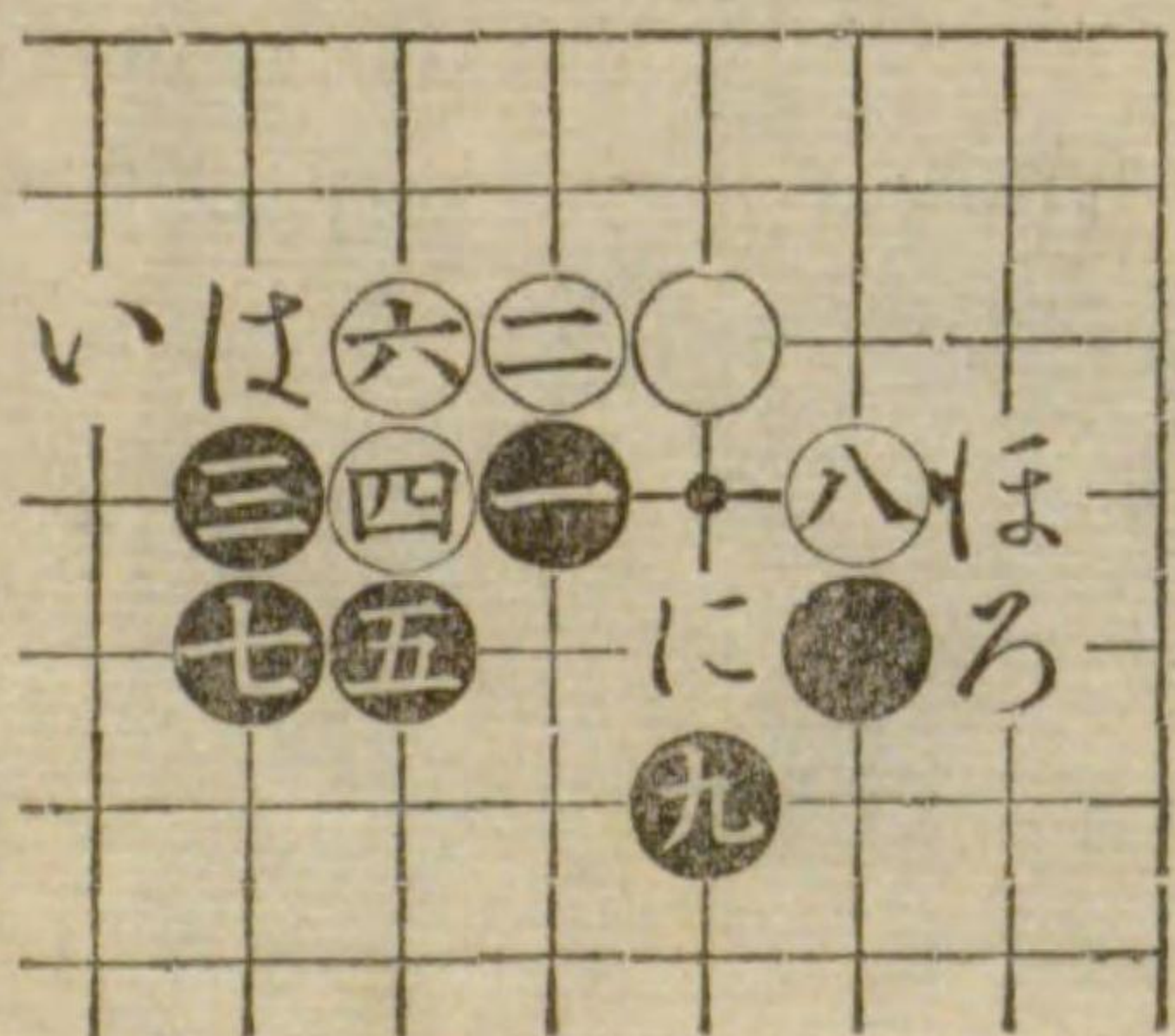


までの運びとなつて割合對等といふべきである白より二と押された時黒手を抜けば白より五の處に飛ばれて大方黒悪しきものである●黒七の手で「い」に縛ねれば白より七に切られて黒「ろ」に飛んでも白「は」にツギてダメヅマリなれば黒打ちにくくなつて頗悪い故に七と行びるは不得已次第である然し白第八着を尙「い」に連押せば其時こそ黒は「に」に縛ねて戦ふが善い又最初

六と這ふ次第である之に對して黒は五も七も共に手を抜くこと出来ない形勢とす假りに七を手抜きせば白より七の處に捲られてダメヅマリとなり形を損じ且つ白は上邊に確實な地域を占領することゝなれば七の要所を捨てゝまでも△印に先を争ふ程の價値は殆んど無いといつても可い況や五の時に手抜きするは一層甚しく苦痛を感ずれば這は絶無といふべきで白第八着にて注文通り△印に打たしても黒「い」に曲がり込んで打てば勢厚壯にして償ふところがある。

(第百六十五圖) ●黒三と一間飛ぶは時として用ふることがある定石の手で以下九まで通形である斯くなつて白手抜きすることもある又左方との釣合上「い」に一間飛びして大場である●黒九の手にて「ろ」に下れば白は直に「い」に飛ばなければならぬ若、これを手抜きすれば黒より「は」に約へられて白「に」に縛ね黒九に受けた時「は」に守るとしてさすれば「は」の要處を黒より先手にて徳せられる譯となれば割合白悪い故に「い」に一間飛ぶの必要ある所以で黒九の手で白「い」に打ちしまでの形を見る時は白は兎も角「い」の大場を占める之に反して黒は強ひて先手を取りても前説の如く九に尖みあるとは違つて外勢に多少の缺陷があるされば「ろ」に下つて先手を取るは考ひものである。

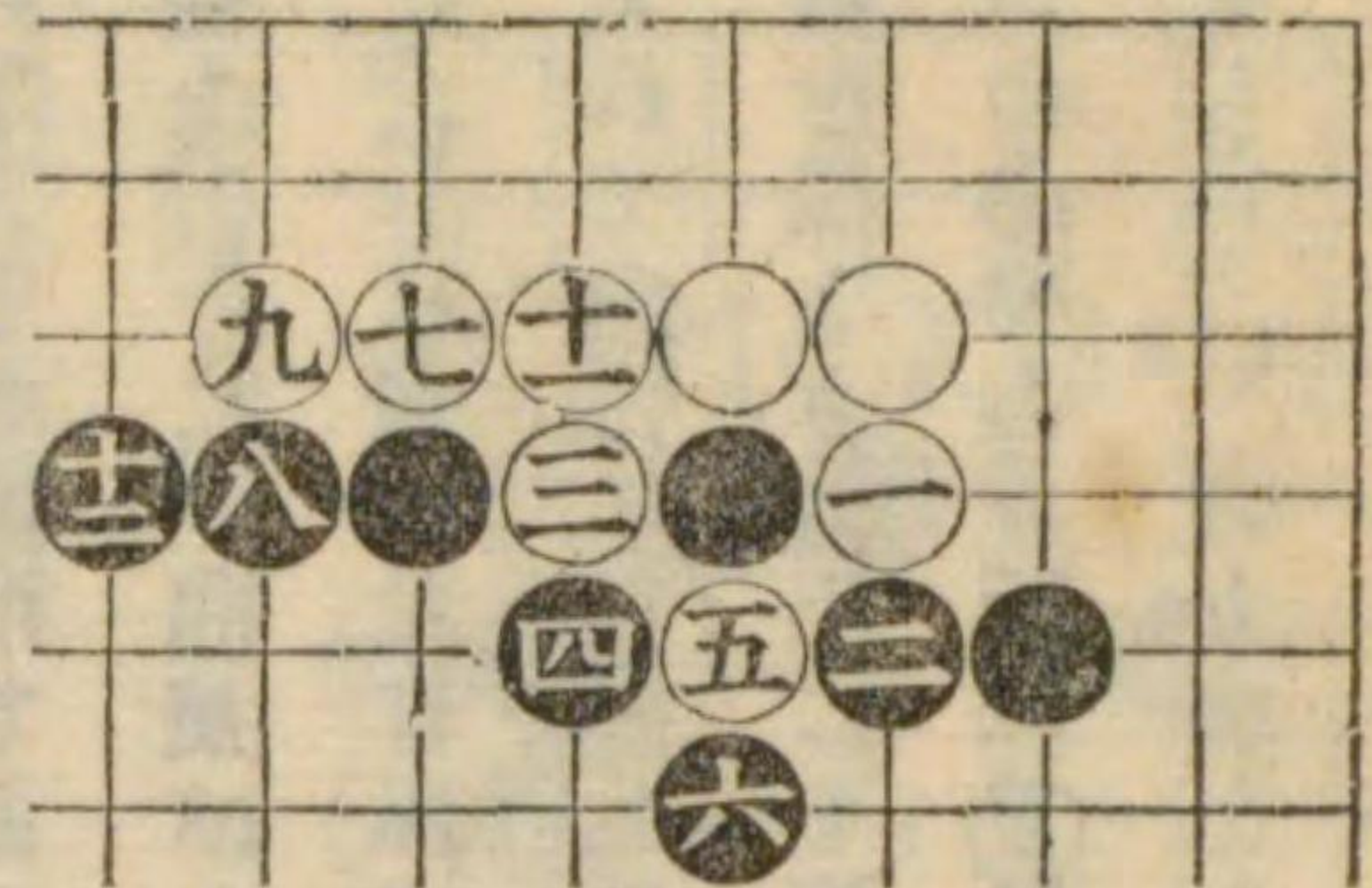
第百六十五圖





十劫提

第百六十六圖



(第百六十六圖)○白一、三の趣向大に悪い此時黒圖の如く十二まで運んで有利の形勢となる其中黒四と約へて一目を捨て白を抑止する手段最も良い之を五の處に粘れば白より四に出られて大に不可である斯かる處は一子を捨て、抑へ付ける手段肝要である總べて之と同様の型は往々出来るものなれば心得置くべきである之は白の一、三甚だ悪手で實際は打つべき手ではないたゞ初學參考のために掲げたのだ。

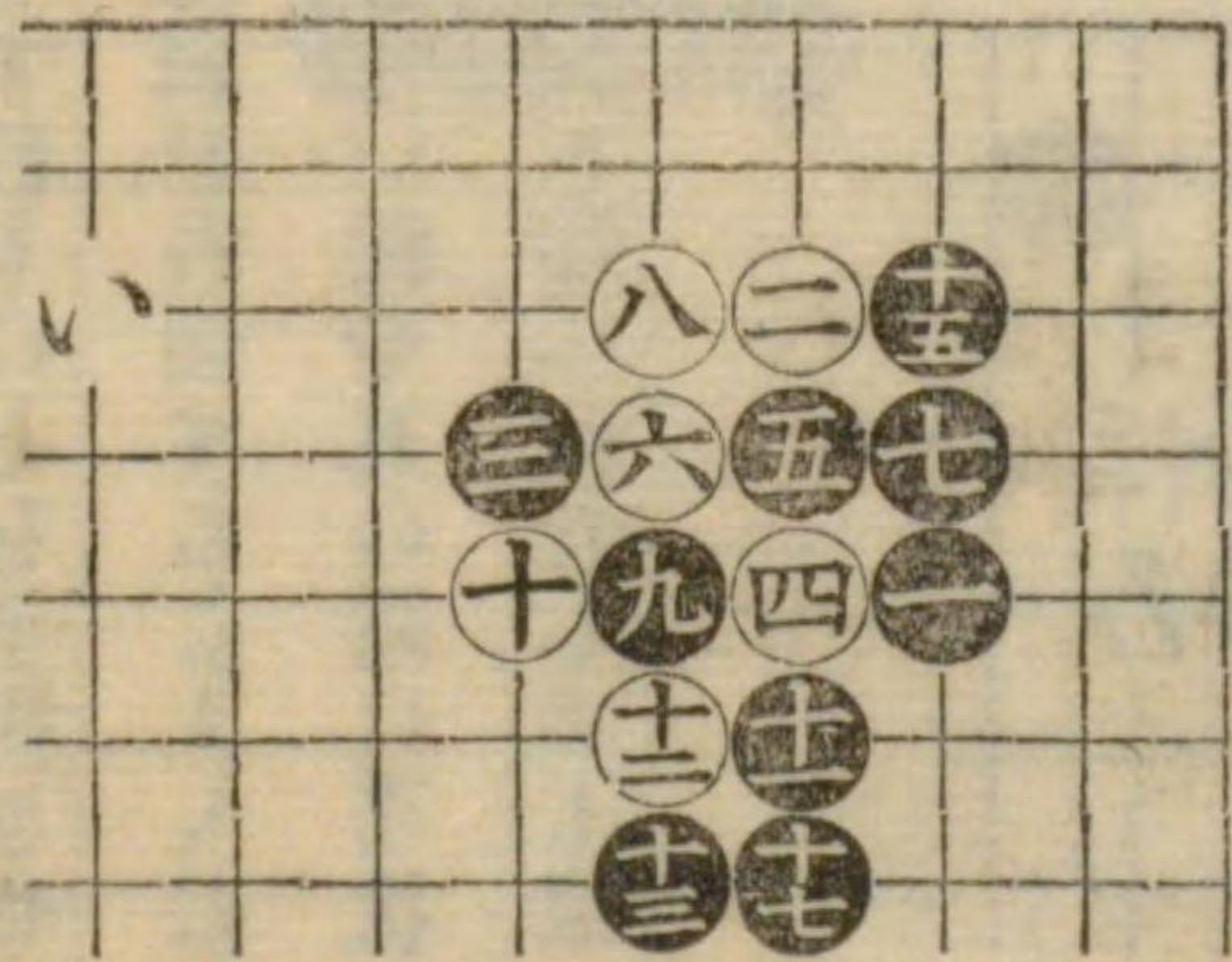
(第百六十七圖)●黒三と大桂馬に掛ける事は最複雑に陥り易いから熟慮の上に行ふべきもので

曩きに三間夾の時説明したことがあつたが之より此夾みのない形に就て示す次第なれば其心して研究せられたい尙一言すべきは此大桂馬掛は黒として前陳の理由により妄に用ふべからざるも白としては殊更に此趣向に出ることが少くない今此圖に於ては黒三と掛けたのもの之に對しては白斯くの如く應答するを平易なものとする而して次ぎに打つ手は何れにするを宜しいかとするに「い」に拆くを定石とする之にて略々互角の振替と

十四提

十六粘

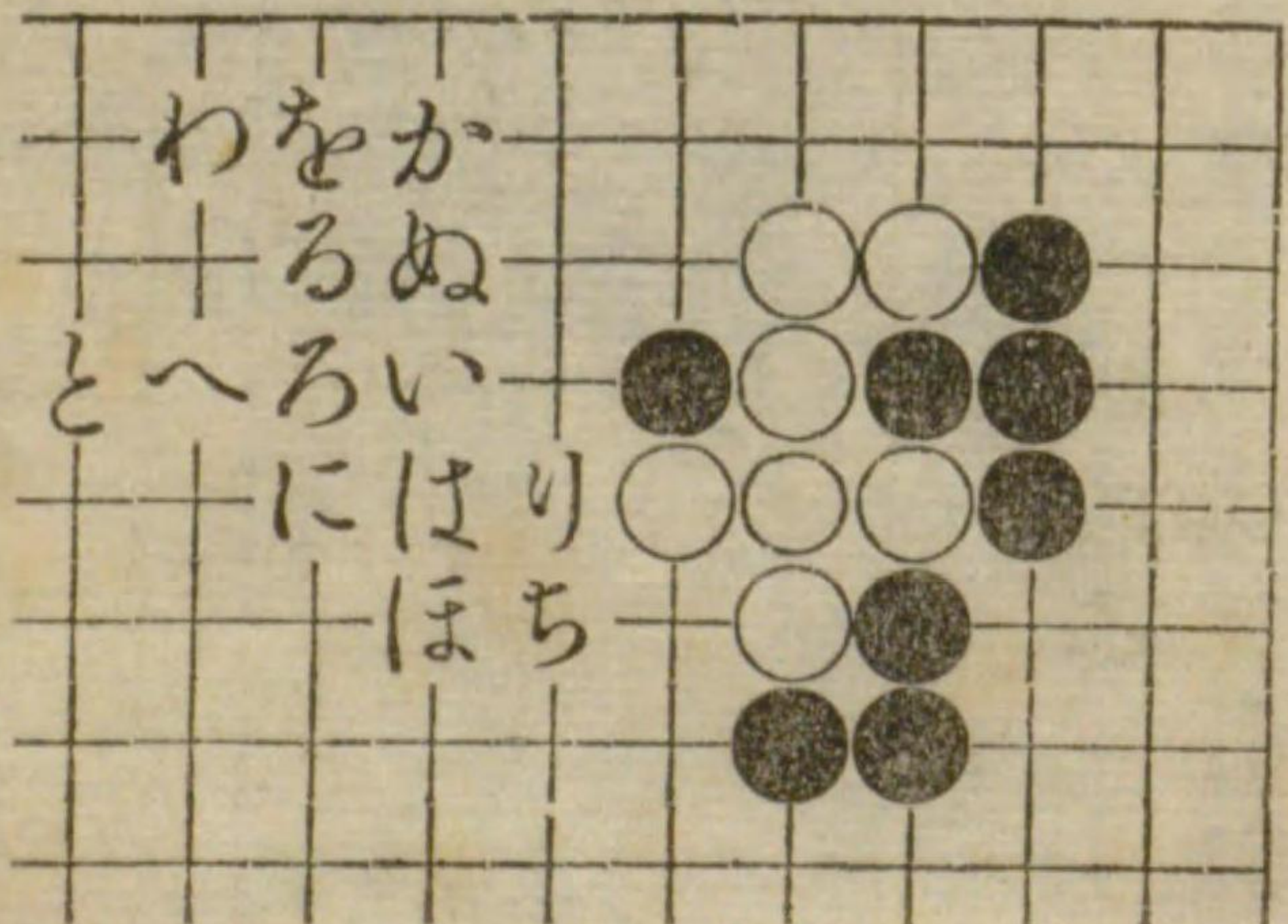
第百六十七圖



いふべきである尤「い」に拆くことは他に急場あれば手抜きしても善い儲茲に注意すべきは此形勢となるは白が大桂馬掛をなした時黒紛れを避けて振替に出た場合が多い若、白を持つた時は四の一子を捨てないで十一に行びる方が局勢廣くなる。

(第百六十八圖)本圖は前に示した姿形(手順は前圖の通り)で白若、此儘で手を抜いたとすれば黒は何れより着手するかといふに「い」「ろ」の二點がある然れども左隅との權衡上其位置を撰ぶに相違がある先づ「い」に打つた成行きは白「は」に頂け黒「に」に綽ね白「ほ」に伸びた時黒「へ」にカケツグは普通だが左隅との鈎合に因つては軽く「と」に打つか或は其他臨機の手段もある又は其儘手抜きしておく事もある又一方白の方よりいへば「は」に頂る手が此場合に悪いと認められた時は單に「ち」に尖み黒に調子を與へない様打つことがある又最初黒「ろ」に打つたとすれば白より却つて黒に響く手がないので猶手を抜くことがある因つて黒又「ち」に掛ければ白「り」黒「ほ」白「ぬ」黒「る」白「を」黒「わ」白「か」と白は治つて打つべきである然る時は黒は外勢を張る次第なれど這は元來白手抜きの處なれば已むを得ざることであらう白は此心して

第百六十八圖





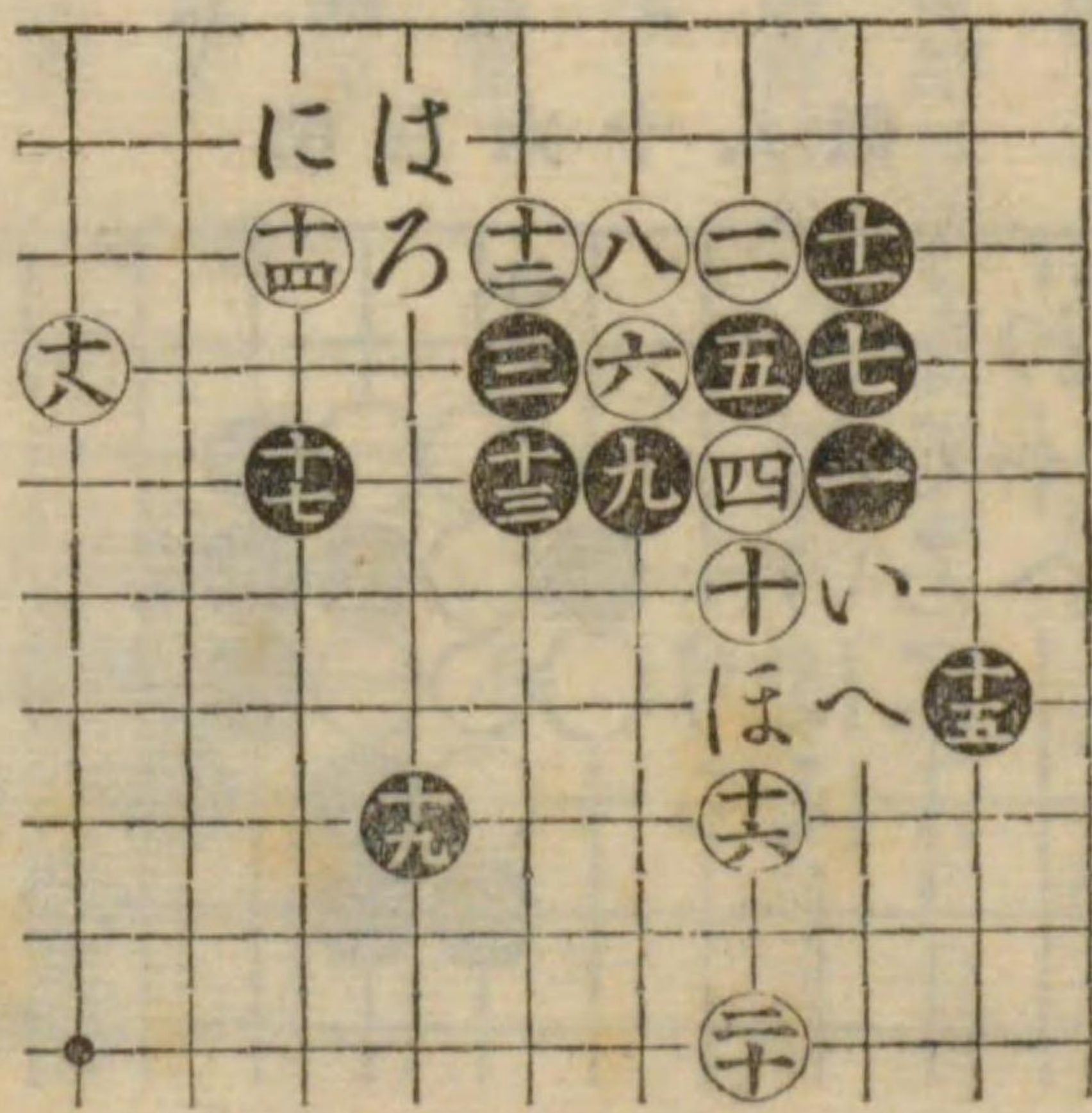
進退するを要する。

(第百六十九圖) 本圖は白十と出た形を示したもので二十までの打方は相當五角の勢である其中白十四の手で「い」に打てば黒は「ろ」に縛ね白「は」に應せば「に」に二段縛するが善い其結果は黒の方善い黒十五の斜走は本手である若、「い」に這へは白に「ほ」に伸びられて中央の三子のために悪い影響を與ふるので宜しくない又「へ」に飛ぶ手もないではないが特別の場合に限る黒十七、十九は善き運びで之にて形整ふ次に黒十三の手よりの變化を示さう。

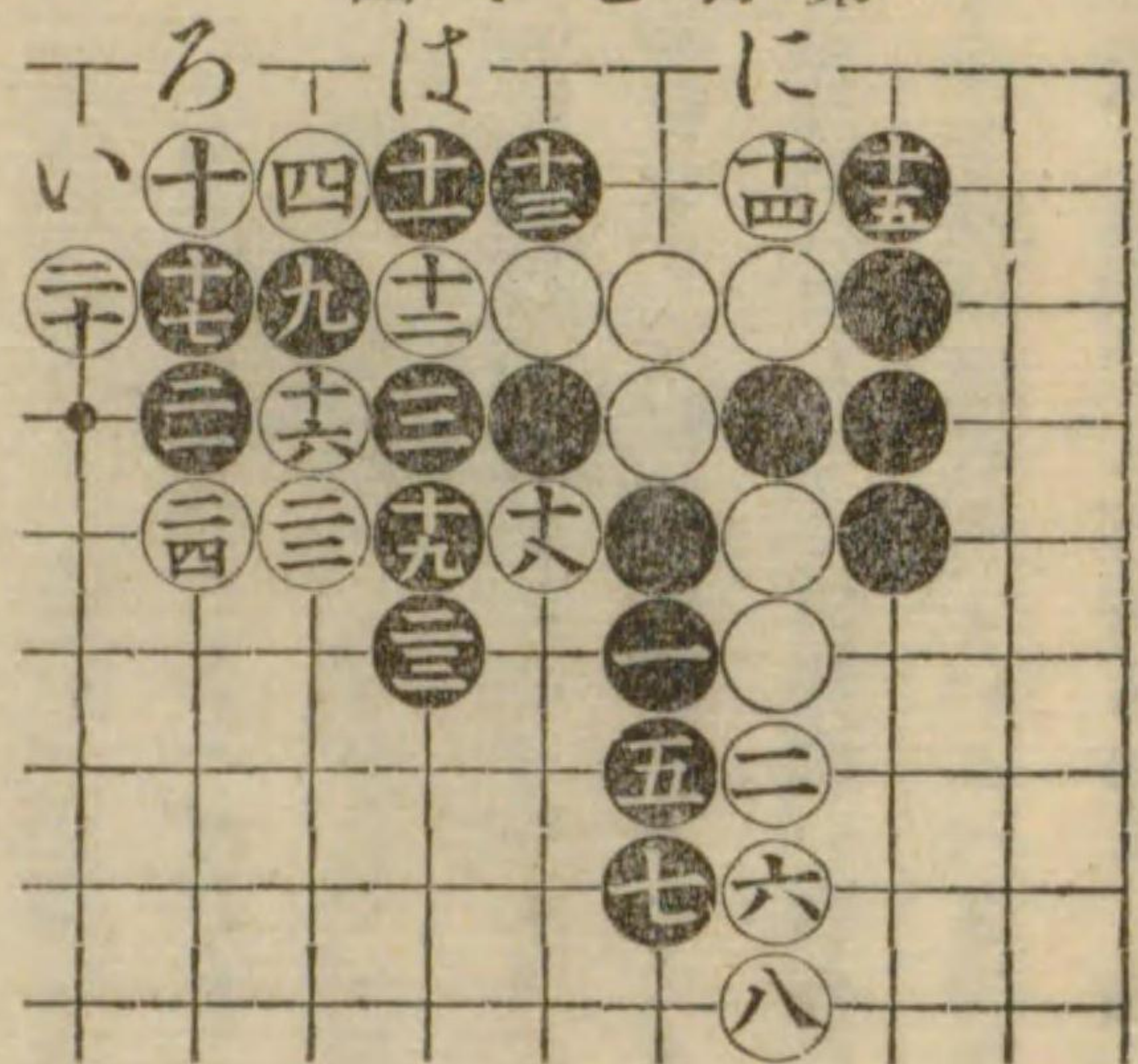
(第百七十圖) ●黒一の如く押して打ち十八の處に續かない手段もある白四の手は心得べき良手で若、此手を十二に押せば黒よ

り圖の如く七まで押されて白八に伸びた時九に縛ねられて白四と受ければ黒より十に二段縛される手がある而して白十七に切れば黒十六に粘ぎ白「い」黒十一白「ろ」黒十三となつて白の五子を取られて白悪い又白十七に切る手で「は」にカケツガば黒十七或は十六の何れにかツグであらう、さすれば隅の黒白とも活となつて白の割合悪く如何なる變化となるも白に不利である故に四を良手とはいふ圖の如く

第百六十九圖



第百七十七圖



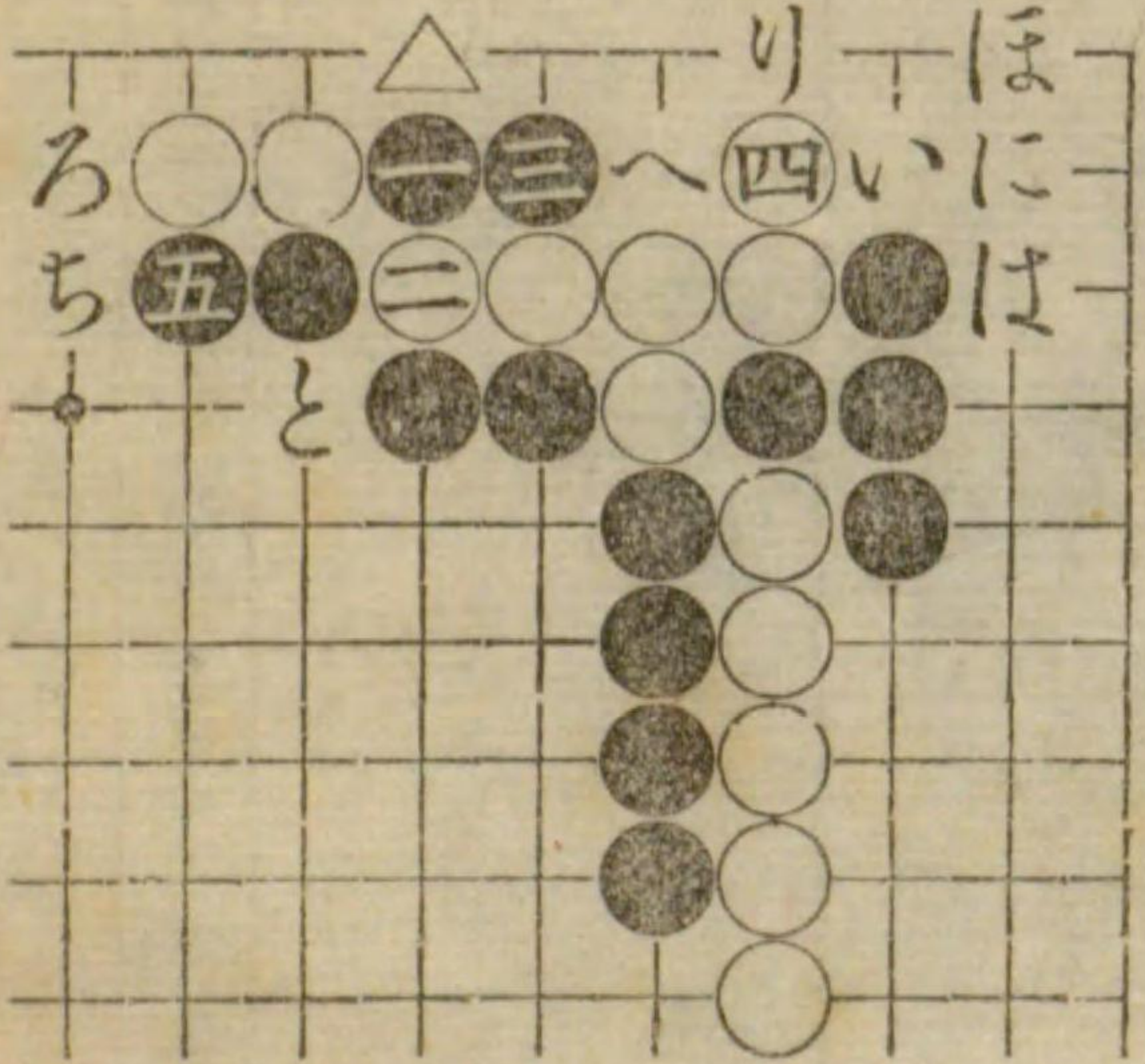
に適い。

なつて黒が九と尖みツケなば白單に十と行るが宜し之を十二にアテれば前述の如く黒より十の處に二段縛を蒙るは既知の通り白十とノビしに黒十三と打つたら無理即ち二四までとなつて三子を征に得られ(征のアタリある時は最初よりの計畫を替ゆべきである)大損である其中白十四に曲がる手良い之を若、直に十六に切れば黒より十四に縛ねて絞られ白悪い尤黒十七の手で「に」に打てば絞られざるにあらざれど既に十四の白石あるので其効果皆無

(第百七十一圖) (前圖黒十五の手よりの變化だが手順上十一の刻

出より運びを示した) 黒五と變化し來らば白「い」に曲り黒「ろ」なれば白「は」に縛ねて振替つて宜い又黒「ろ」の手で「に」なれば白「ほ」黒「は」白「へ」となつて宜しい要するに黒五と押した時白「い」に曲がるが肝心の手で之を若、「へ」に打つこともあれば黒より

第百七十一圖

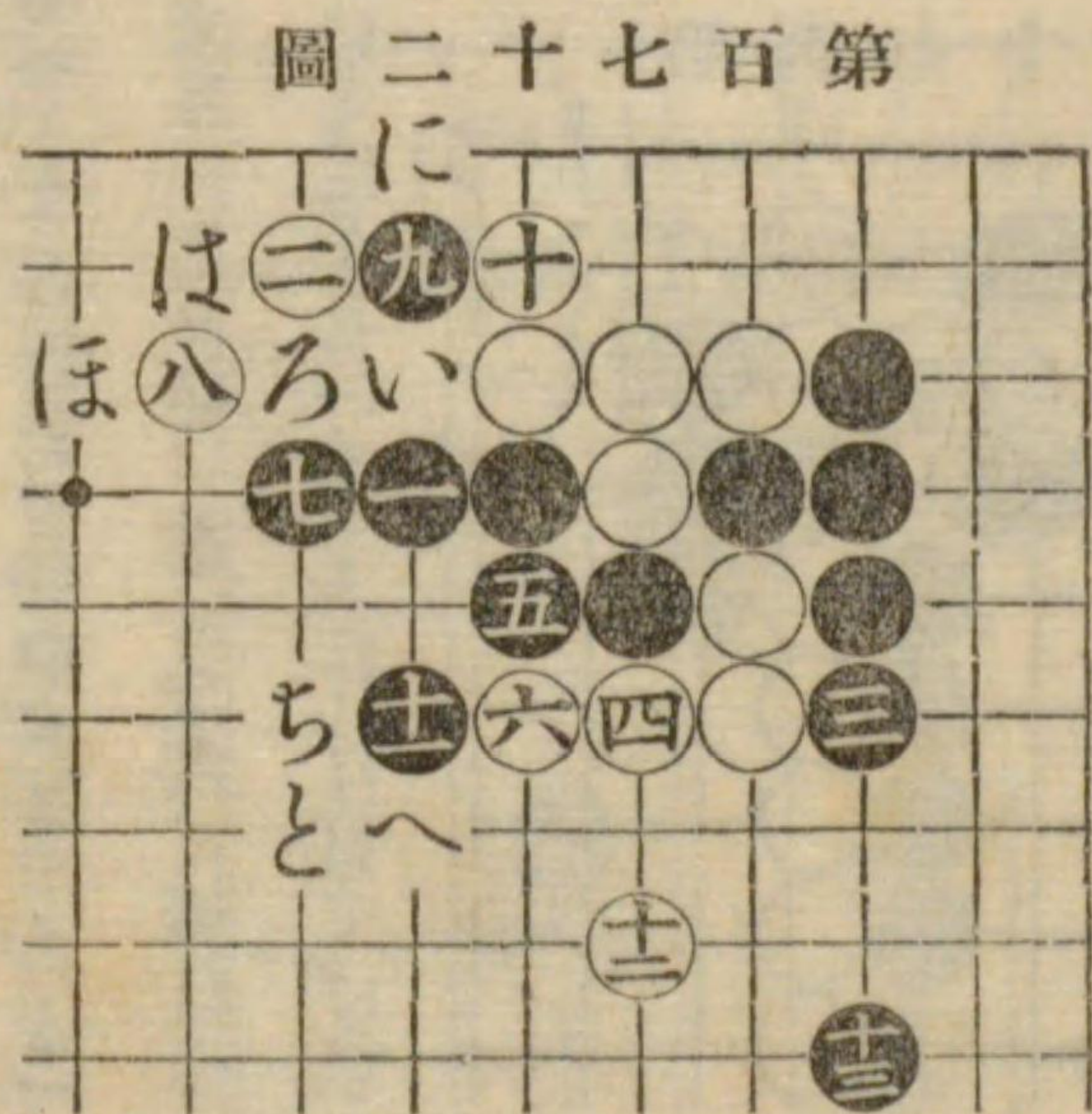




「い」に約へられて白△黒「ち」となつて割合白悪い又黒一、三と打たないで單に五へ押し來らば白「い」に綽ね黒「に」白「り」となつて宜しい此「い」「り」のハネツギを打たないで「ち」に綽れば黒より一に芻出されて白大に悪い。

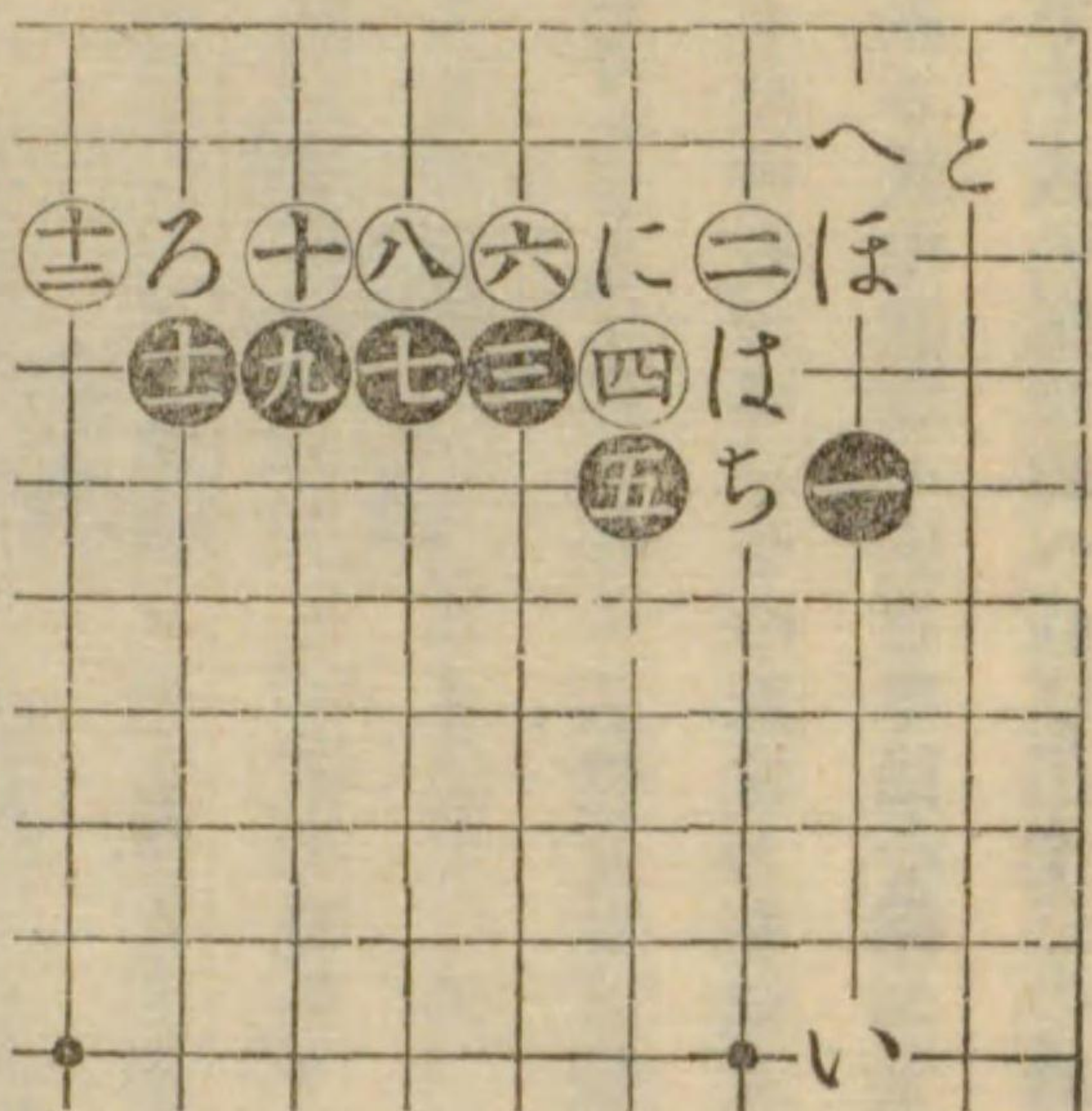
(第百七十二圖)黒一と變化し來て圖の如く十三までとなりて普通である其中七と双ぶは手筋にして若、之を打たないで白より此處に頂けられる事もあらば姿形を破壊するといふ程で白十の應手致方はない若、「い」に打たば黒より「ろ」に切られて白十黒「は」白「に」黒「ほ」となつて甚不可だ而して黒九と頂け徳をなしておいたので直に「い」に續くは見合すが善い白此後「へ」に綽れば黒も「と」に綽ね返すを定法の如くするも「ち」に行ひて差支ない。

(第百七十三圖)○白四以下十二までとなる定法もある之は前の如く切違ひになつて棋勢悪い場合に之を避けて打つ趣向で而して黒「い」の邊に拆くことあつて形勢壯大なので幾分黒有利といふべきである又白四の手で「に」に双ぶ手もある黒五なれば白八と飛び黒「い」の邊に展開する打方もある「白十を「ろ」に飛ぶ時は黒より種々趣向もあれど先づ「は」にアテ白「に」に



第百七十二圖

第百七十三圖

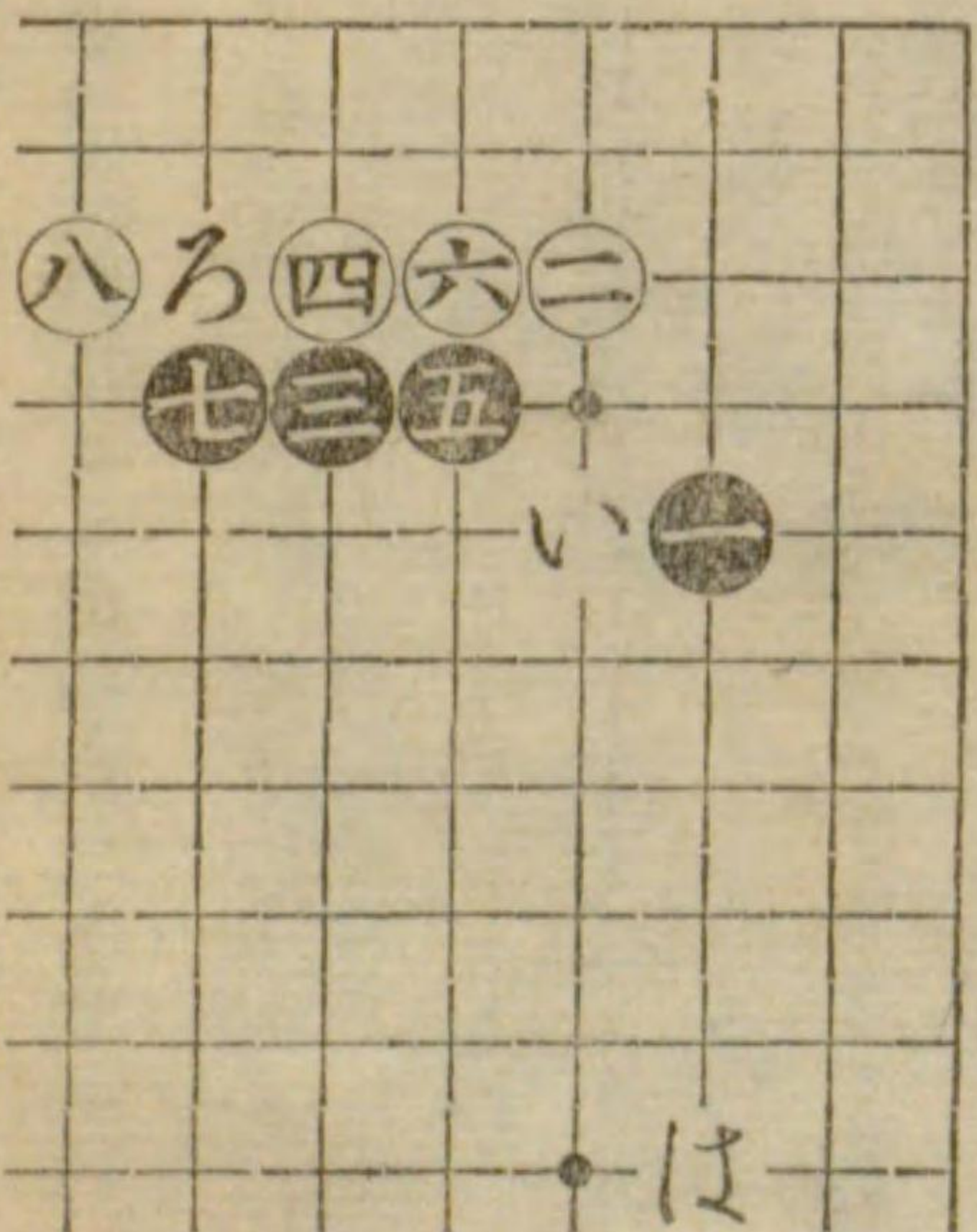


ツギ黒「ほ」白「へ」黒「と」と二段芻されて隅の石を切り提れば黒より十の處より突出して出切られる疵が残るので悪い故に十と必ず連行すべきもので圖の如く十三までとなつて黒は漫りに「は」のアテをしてはならぬそは徒らに白を固めるので白も亦「ち」に芻込むは矢張黒と同様敵を固めるので機會を見すべきものである。

(第百七十四圖)○白四と頂けるのは普通の如く「い」に頂越して面白くないと思つた時に變化して打つ趣向である或場合には面

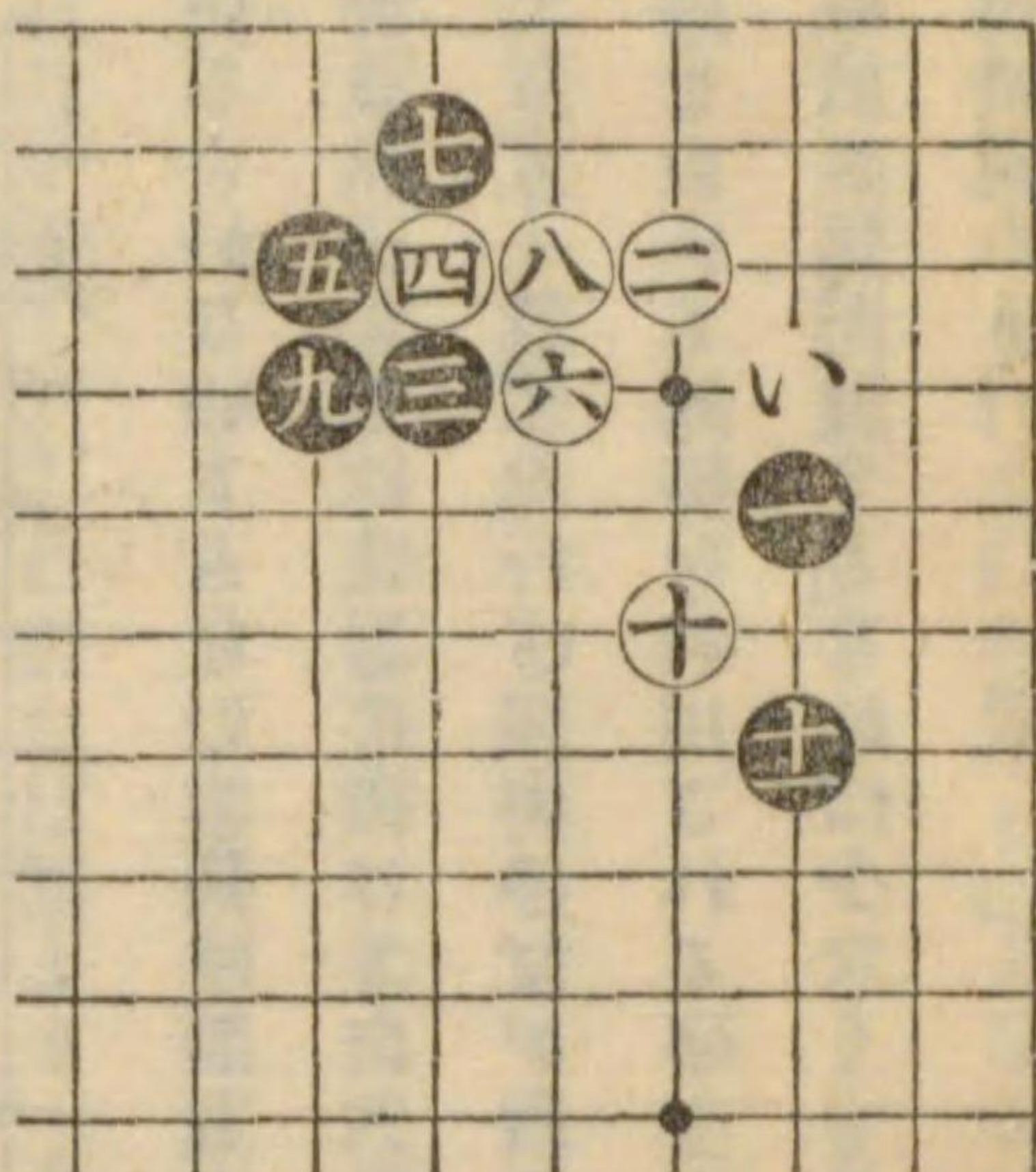
白いことがないでもないが其時黒五に行び以下八まで通形である普通黒三を五に挂馬に掛けて白六黒三白「ろ」と打つ定法に比べて双方一着多く行びた姿勢だが白は四と頂る時に是等の事を考慮しておいて外勢を利用される事少い場合を撰ぶべきである此形に於て黒開展するなれば少なくとも「は」まで廣く拆くを要する尙殘説あり。

第百七十四圖





第百七十五圖

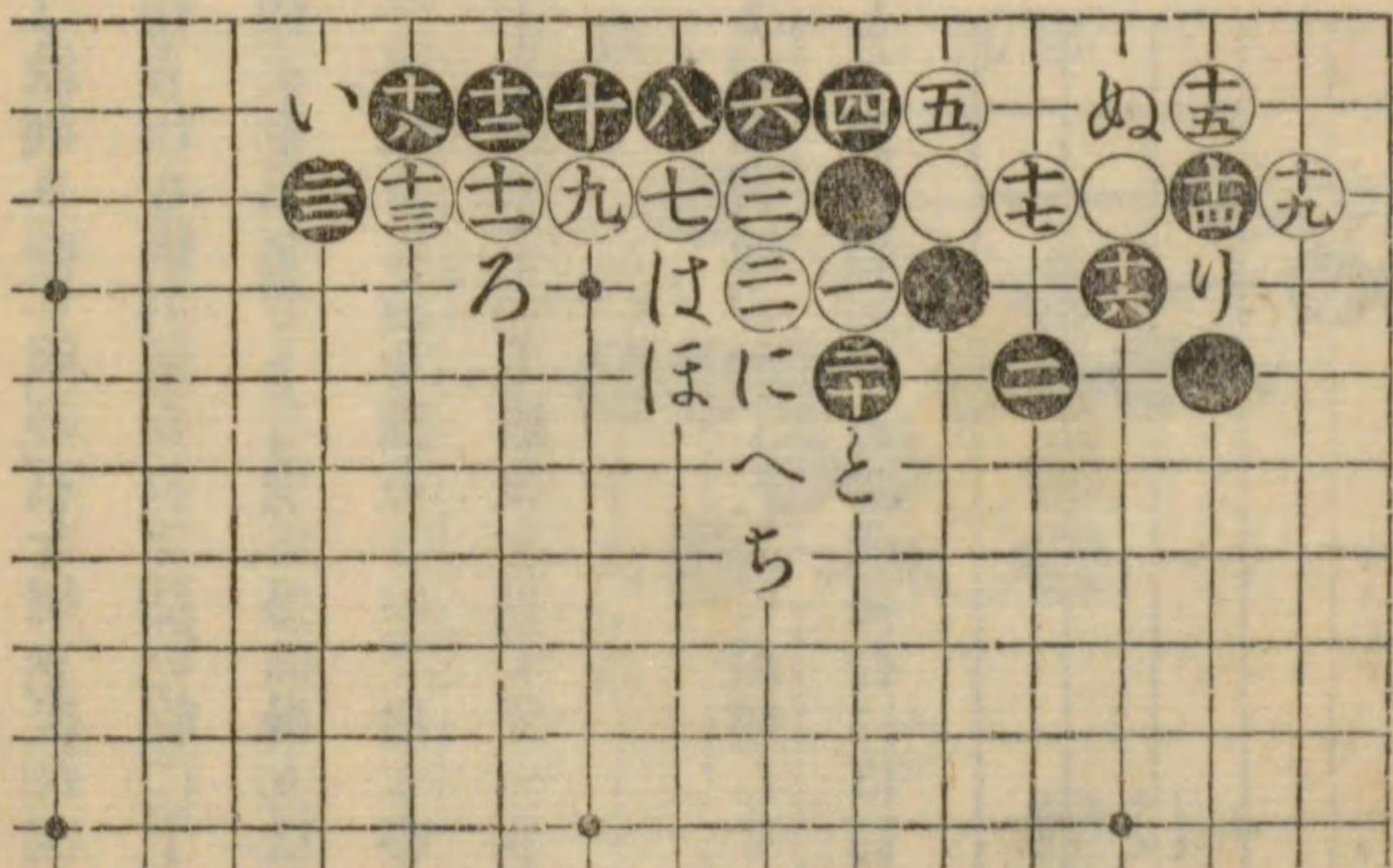


(第百七十五圖) ●黒五と受けるも亦一法なり其時白六と縛ね以下十一までとなるも定石だがこれは白の形少し重ければ或場合に於てすべきもので濫用するは宜しくない之に類似した形で○白四を六に尖みツケ黒四の處に下つた時白十に掛けて黒十一と受け白「い」に尖みツケとなるもある此方は本圖に比べて白の形軽ければ用ふることが較々多い。

數字なき型は前圖黒一より五までなり

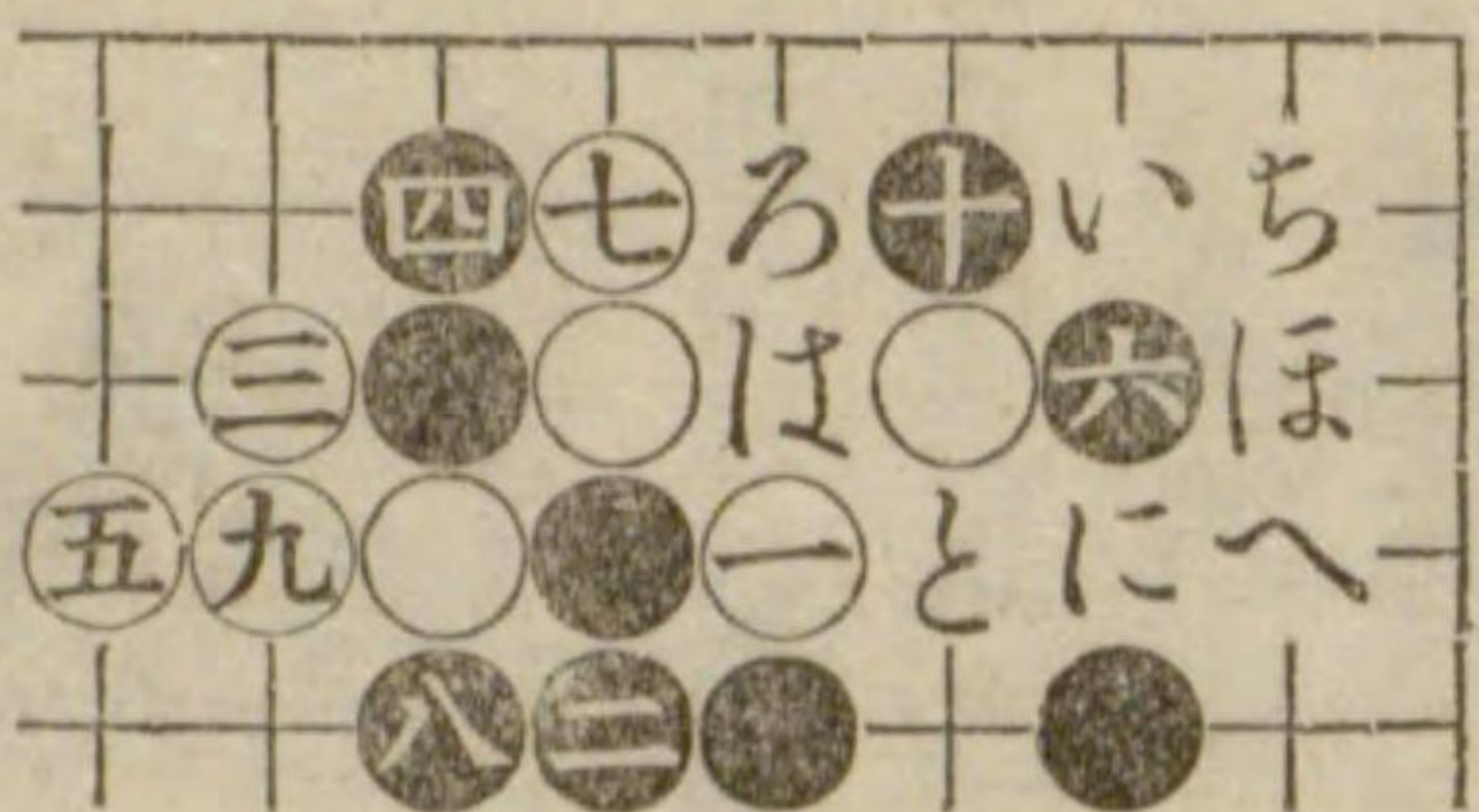
(第百七十六圖) ○白一と切るのは往々用ふる手で斯くの如く二二までの打方は一つの定法ともいふべきもので先づは互角の勢とみる其中黒二と尖む手筋心得べき事である○白十三と伸びる手で十八の處に約へれば黒十三の處に切り白「い」黒二一白二十

第百七十七圖



と切り白「い」に尖みツケとなるもある此方は本圖に比べて白の形軽ければ用ふることが較々多い。

第百七十七圖

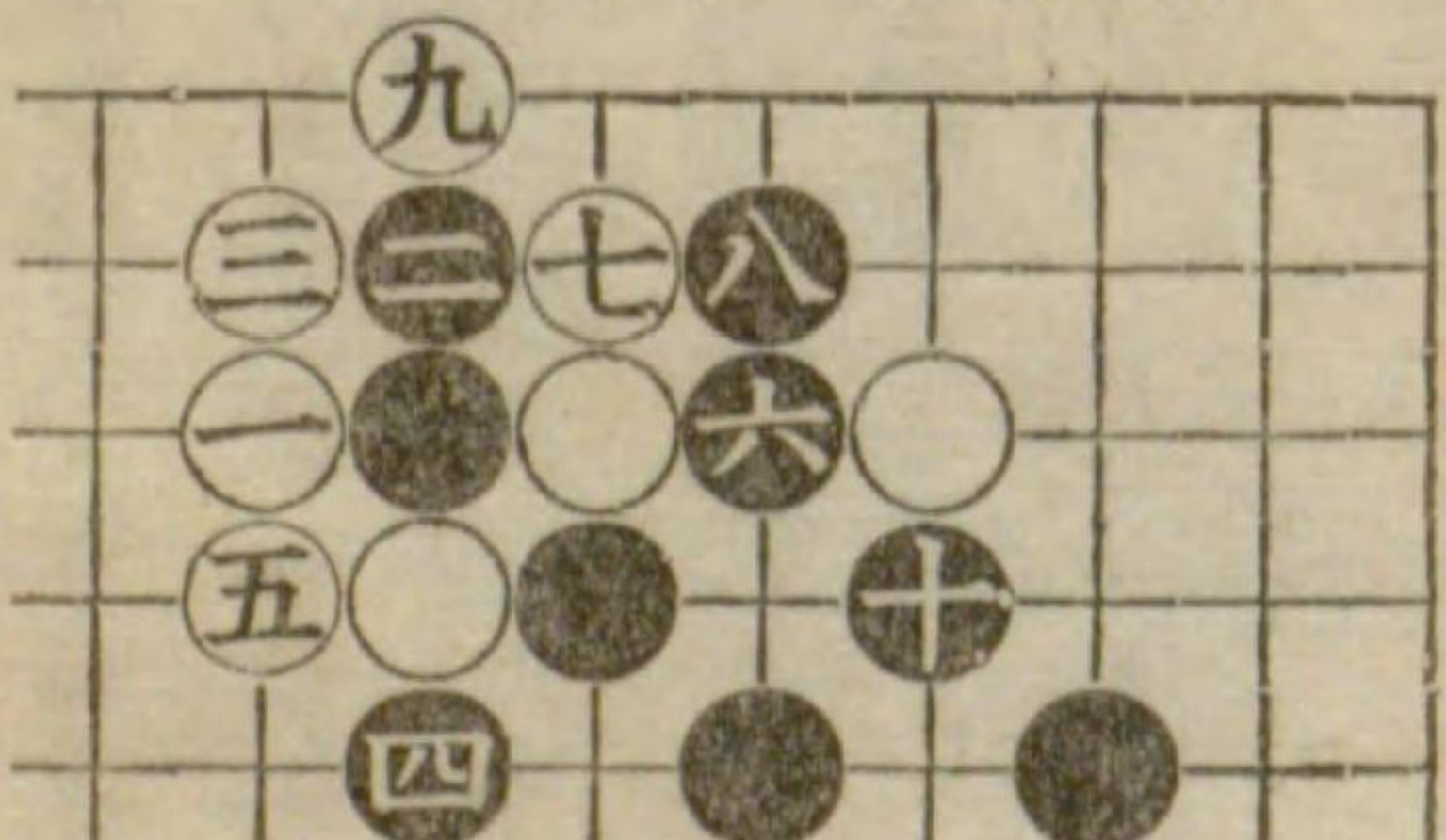


黒「ろ」白「は」黒「に」白「は」黒「へ」白「と」黒「ち」となりて左右の白は凌ぎ難くなる故に白十の手で十八へ約へるは無理である●黒十四は打ち徳の意味で打たなければ白より「り」に尖み頂けられる不利がある○白十五の手にて十八なれば黒「ぬ」に縛ねて勝である尙殘説は次圖に示さう。

(第百七十七圖) ○白一とアテ三と抱へる趣向は面白くない即、圖の如く十までとなつて黒二子を獲れども割合白大に損であるこれ一以下の趣向悪いため其  
中○白七の手にて「い」に縛ねれば黒「ろ」にオキ白「は」黒十白「に」黒「は」白「へ」  
黒七白「と」黒「ち」となつて白收拾すべからざる形勢に陥る。

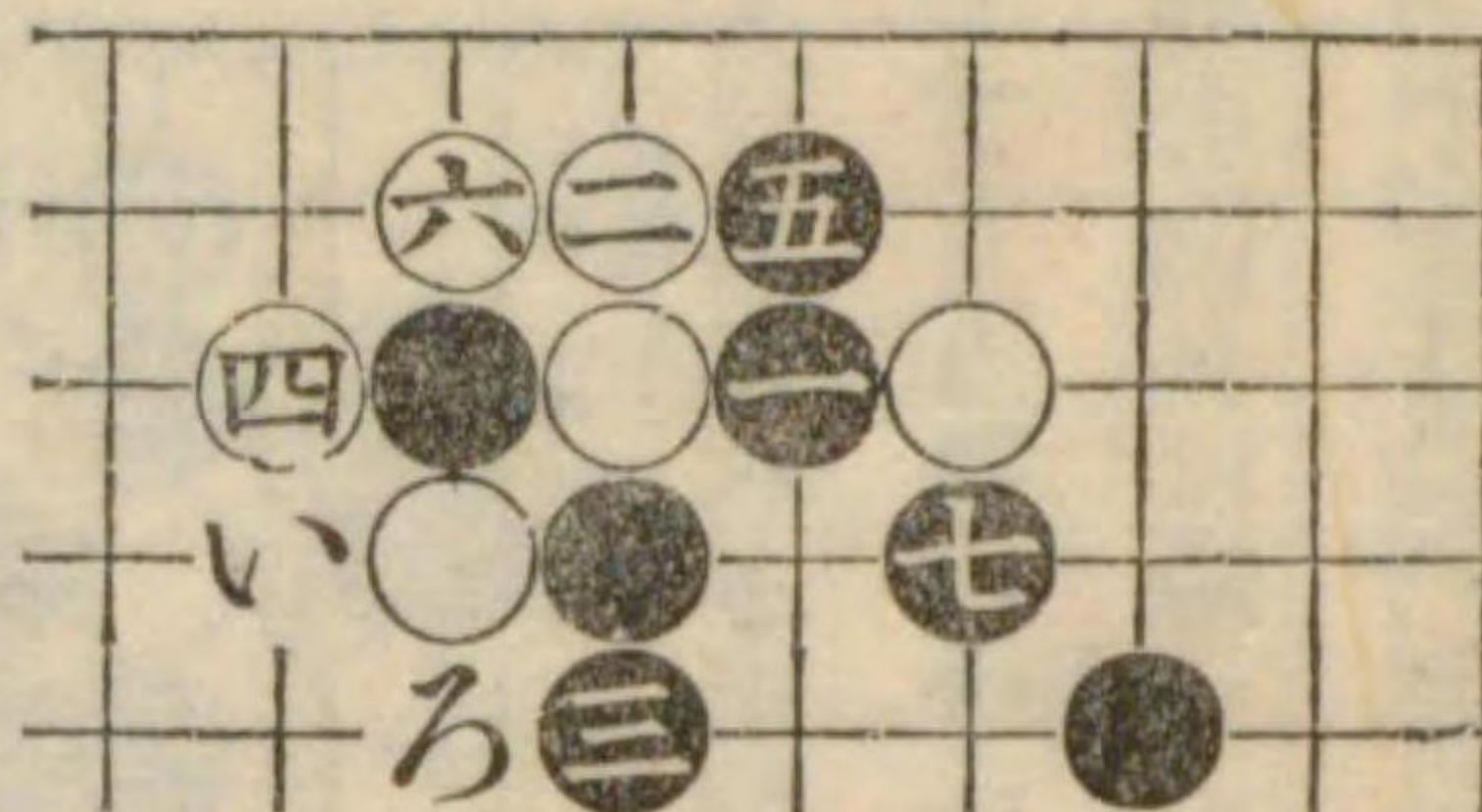
(第百七十八圖) ○白一と抱へ以下黒十までと振替つて二子を獲れども隅を黒に委することゝなれば割合損である  
これ三と取りに打つた悪手に原因する一應黒二と行びて捨るは心得べき事である若、此手で直に六に刎込めば白に二と打ち抜かれて黒八と下るも隅に十に覗かれる味残り居るゆゑ本圖に比べて甚不安の形勢なれば其優劣同日に論すべきでない

第百七十八圖





圖九十七百第



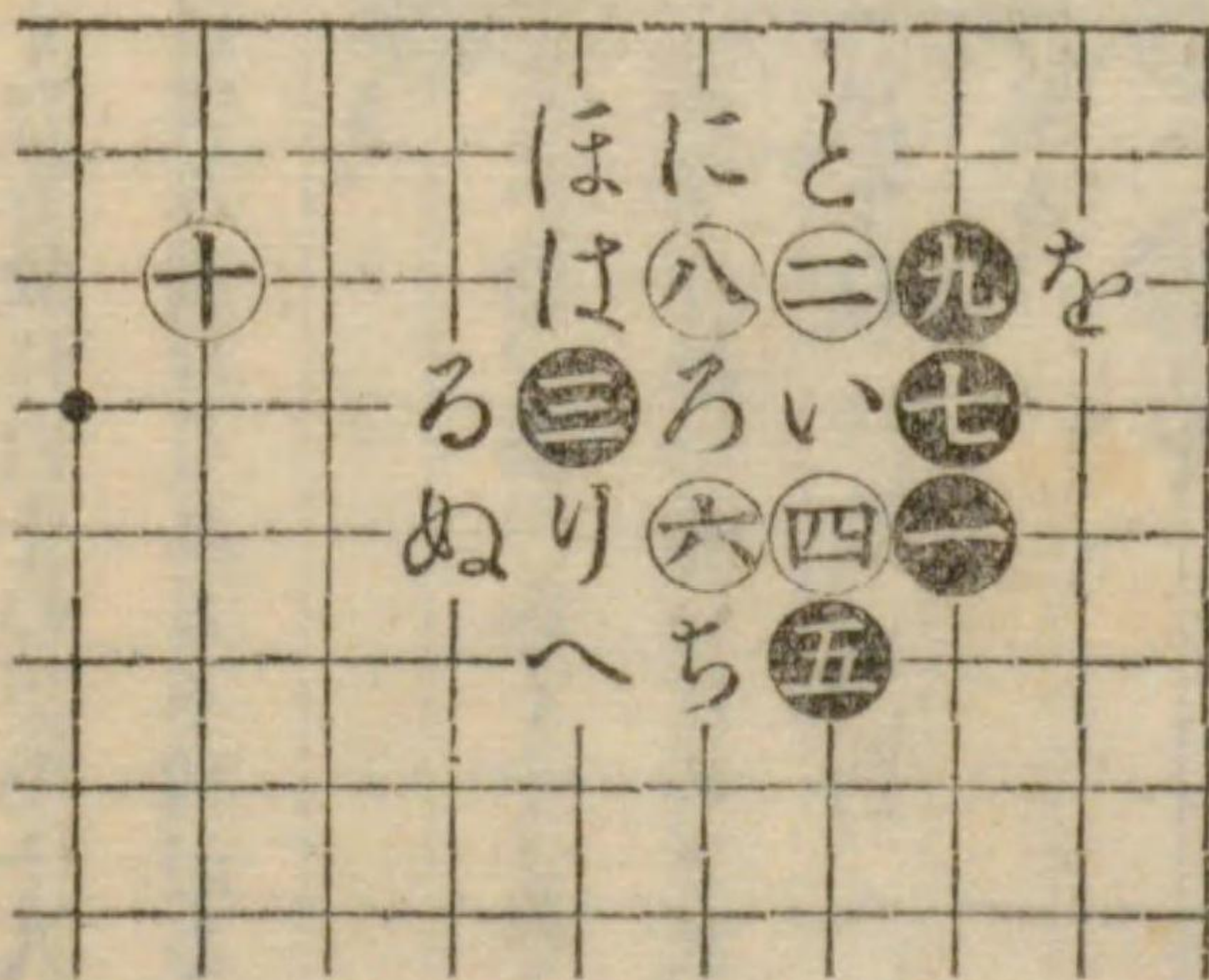
如く七までの替りとなつて黒大に善い尤○白四の手は五に盤るを普通とするさすれば黒「い」に掛け其一子を征にとる但、此一子征のアタリある時は黒一、三と打つ趣向より改めなければならぬ即、征にとれぬ時は黒大に悪きものである倍、征に掛ける事を得ても閑あらば「ろ」に打抜きおくが黒は安全である而して斯くなるとしても此打方は場合を見計つてすべき手段である。

(第百八十圖) ●黒五と縛ねて斯く替るのも亦一つの定法である○白八と双ぶ手は肝要である若、九の處に約へれば黒「い」白

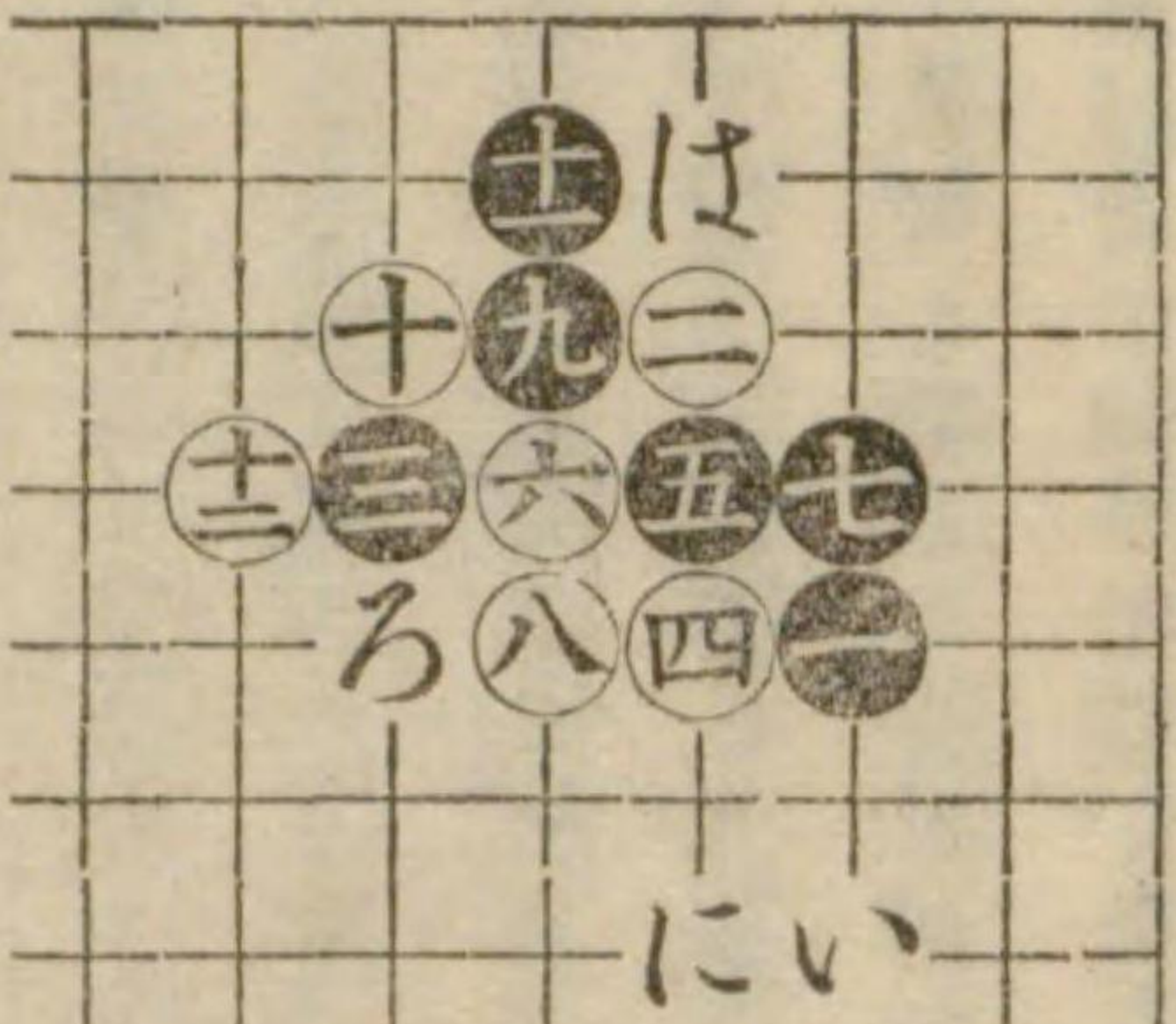
「ろ」黒八白「は」黒「に」白「ほ」黒「へ」(征にカケ得るときは論外)に掛けて白應手に窮する即、「と」に打てば黒より「ち」に塞がれ又白「り」に出れば黒「ぬ」白「る」黒「ち」白四目粘黒「を」と捲つて兩方より利かされる道理なれば白の割合悪い事いふまでもない。

(第百八十一圖) ○白八と外面に續きなば圖の如くなつて黒「い」白「ろ」黒「は」となるのが通形である此黒「い」の手は稀に「に」に斜走する事もある以下白「ろ」黒「は」と前に同じ一體白八と續いだのは外部

圖十八百第



圖一十八百第

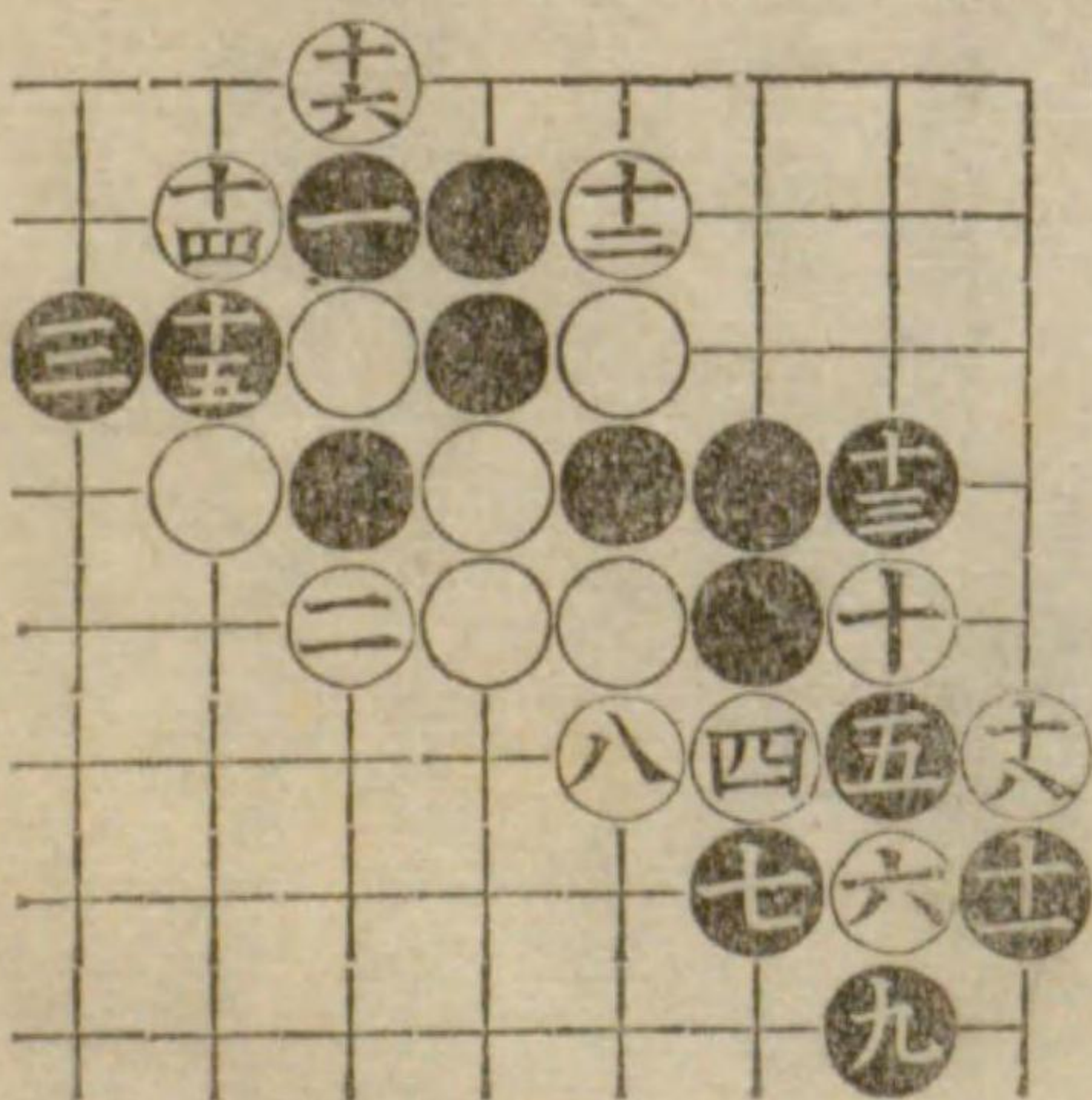


を厚くする意味の手段なれど斯く振り替りとなつて甚しい不利なれば特別の場合でない限りは宜しくない尙殘説あり。  
(第百八十二圖) ●黒一、三の趣向通常は悪る以下白より四、六と二段縛され切争にて振替られ割合面白くない故に前圖の穩當なるに及ばない然し左方に白の模様ある場合には或は此手段のないでもない其他は大抵不可と知れ。

(第百八十三圖) ●黒一より十四までと圖の如くなるは是まで前に述べた次第で通形なるは既に知れるところであらう此時黒「い」に斜走

するが常手なれど時として「ろ」に一間飛び來ることもある然れば白「は」に行び黒「に」に縛ね白「は」に出で黒「へ」に約へ白「い」に切り黒「と」に粘ぎ白「ち」に切り黒「り」に下り白「ぬ」に曲る此時黒「る」なれば白「を」黒「わ」白「か」黒「よ」白「た」となつて割合黒好ましくない又黒「る」の手にて「れ」なれば白「を」に縛ね黒「る」白「つ」にアテ黒「ぬ」に下りとなつた時白は模様を「を」に曲るか或は「な」に飛んで打

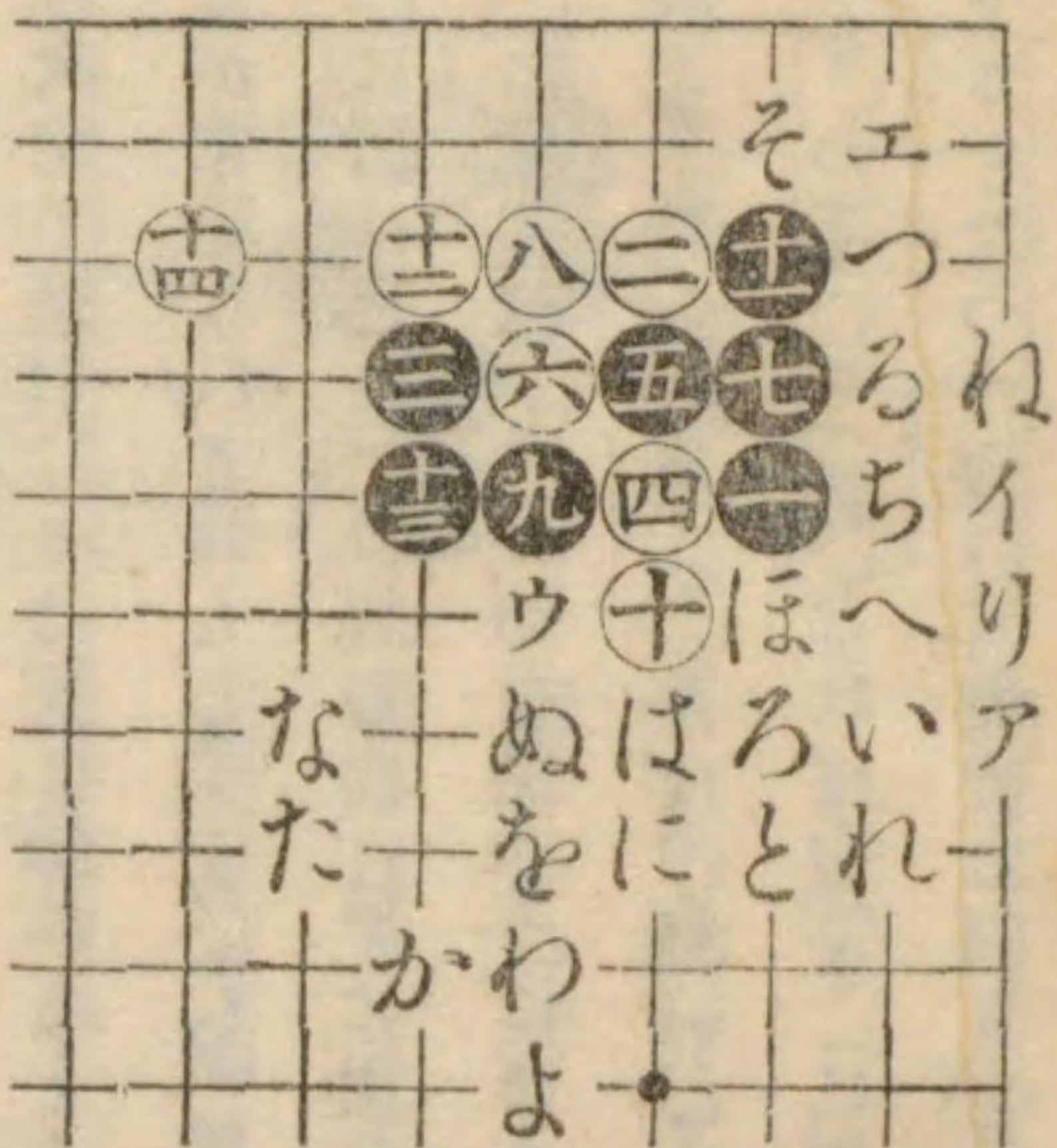
圖二十八百第



●切提  
●切提  
●二十六の處切提



第百八十三圖



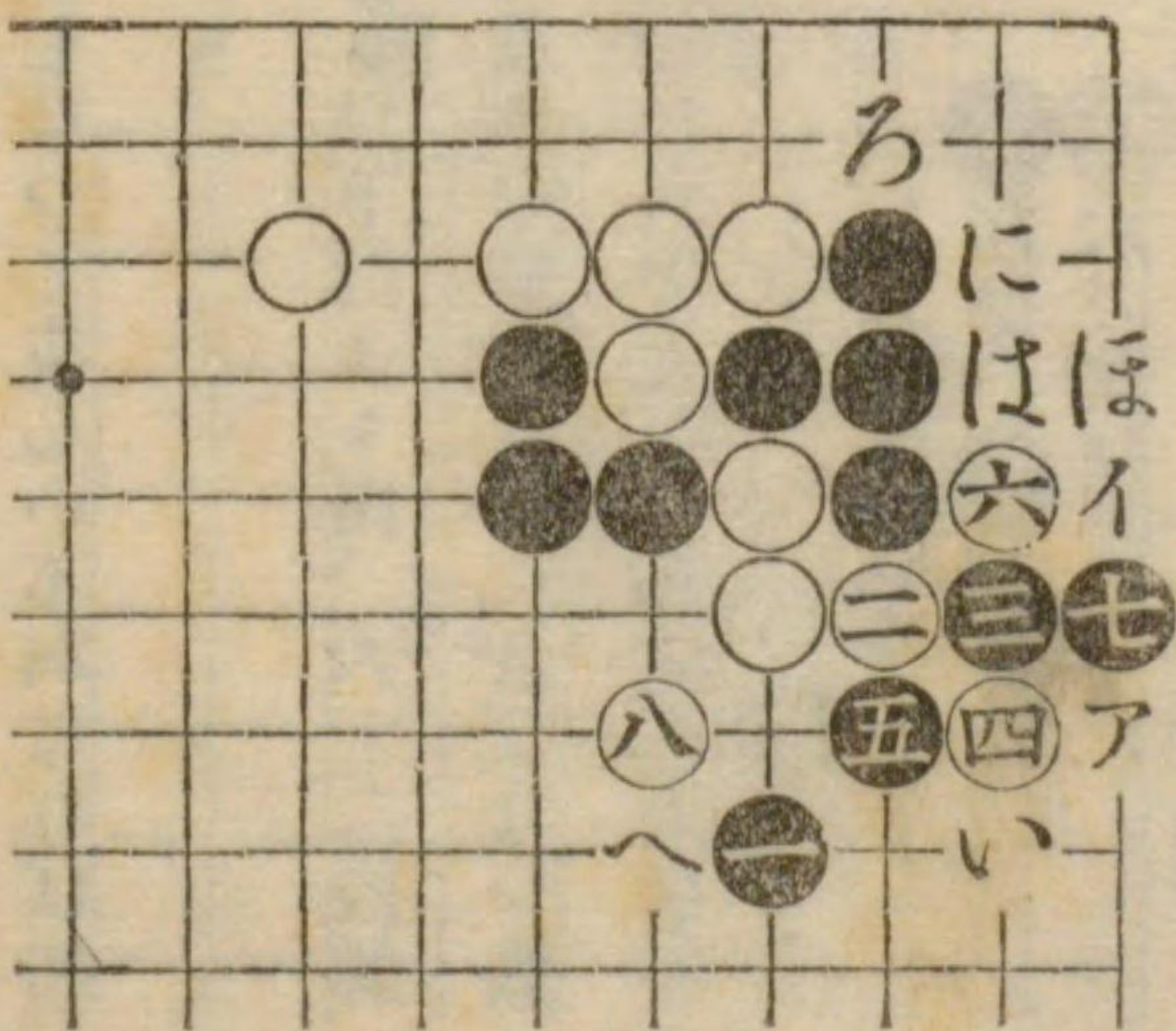
黒「つ」「白」「エ」「黒」「ね」にコスミツケて攻合白の敗に歸する故に「ぬ」に曲る外はない。

(第百八十四圖) ●黒一と打つことあり以下白は八までの運びをするを可とする其時黒「い」なれば白「ろ」黒「は」「白」に「黒」「ほ」「白」「へ」となりて割合白が善い又黒「い」の手にて「は」の方に約へれば白矢張「へ」に押し付けて善い何れにしても黒割合宜しくない畢竟黒一の手が好奇に傾いて穩かでないので此結果を來した尤白八の手にて

つこともあらう兎に角白は隅に「そ」「つ」の打ち得をなしてをれば前述の成行きに比べて中央に運び幾分讓歩しても仔細はない要するに黒が最初「ろ」に飛ぶ趣向は形勢を見計らつて打たなければならぬ。

「注意」白「ぬ」に曲る手を「ア」「イ」の何れにか打てば黒より「ぬ」に抑へられ白二子を提れば黒「へ」の處に刺き白一目提黒「ウ」にアテ白四目粘黒「れ」「白」「そ」

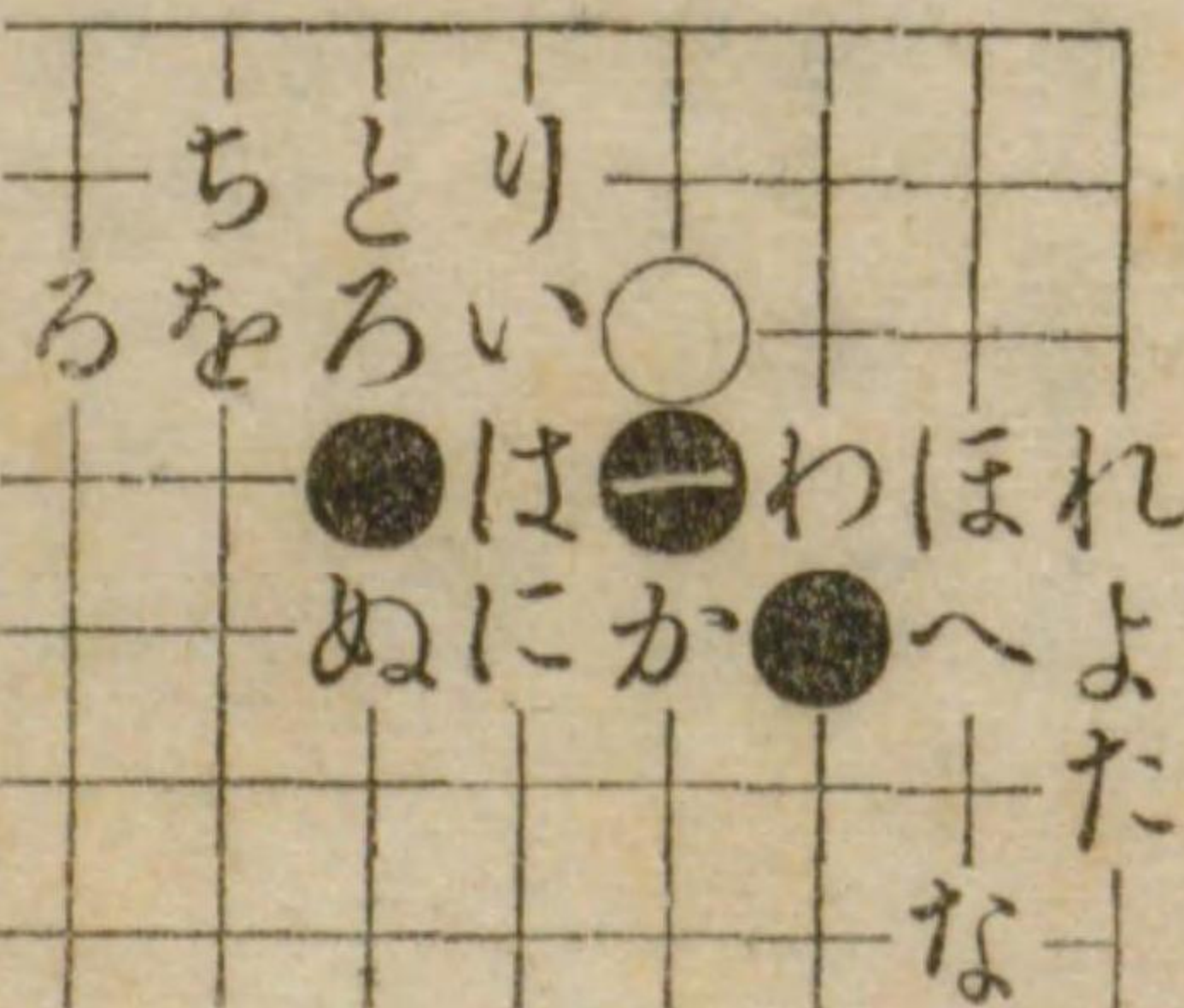
第百八十四圖



「ア」「イ」の何れより黒の二子を取るも前に述べたと同手段に陥る虞がある能く々々前圖と参照するを要する而して全體より論ずれば此形勢は一層黒の不利でそれは一、五と斜に尖ミある姿勢なれば「へ」の押の利目烈しいだけ外に附着した黒の三子が益々薄弱となりゆく結果をみるに至るであらう。

(第百八十五圖) 前圖までにて大挂馬掛は略々述べた筈なれば終りに白が尙ほ手抜きした時は如何に打つべきかといふに黒は一と嚴しく白を攻める尙白手抜きせば黒は「い」に約へて完全に此隅を占有することゝなる然し黒の一に應じ直ちに白が「い」に行びなば黒「ろ」に抑へ白「は」黒「に」「白」「ほ」「黒」「へ」「白」と「黒」「ち」「白」「り」「黒」「ぬ」「白」「ろ」「黒」を「白」「わ」「黒」「か」「白」「よ」「黒」「た」「白」「れ」「黒」「そ」となつて隅の白は活を得ても黒は厚壯なる外勢を得て割合大に善い一手抜きしたため斯くの如く黒を鞏固にして自然と大模様を現出せしめては其不利なること言ふまでもない大挂馬掛に對し手抜きするは大抵の場合悪るい又手抜きされたに對しては此の一の尖みつけが唯一の好點で他の處は皆面白くない。

第百八十五圖



互定石詳解終



圍碁十訣

不得貪勝	入界宜緩
攻彼顧我	棄子爭先
捨小就大	逢危須棄
慎勿輕速	動須相應
彼強自保	勢孤取和

大正四年八月七日印刷  
大正四年八月十日發行

定石詳解奧付

定價金七拾五錢

不許  
複製

著者 雁金準一

東京市本郷區駒込西片町十番地

編輯者兼 小林鍵太郎

東京市京橋區岡崎町一丁目十三番地

印刷者 平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

東京市本所區番場町四番地

東京市京橋區岡崎町一丁目十三番地

發行所 圍碁雜誌社

202  
375



